

令和元年度

博士論文（指導教員 河内利治）

秦漢簡牘文字の字形変遷の考察

大東文化大学大学院文学研究科

書道学専攻博士課程後期課程

(08215103)

陳信良

令和元年度博士論文

大東文化大学文学研究科書道学専攻博士課程後期課程

秦漢簡牘文字の字形変遷の考察

陳信良

目次

第一章 序論	1	一、十種版本の形状の相違	29
第一節 研究目的、内容と方法	1	二、十種版本の形状の一致	30
第二節 文字文献に関する研究	2	三、同一版本の前後の形状の相違	31
第三節 古代文字の材質と表現の特質	6	四、同一版本の前後の形状の一致	35
(一) 古文字分類の方法	8	五、小結	36
(二) 古文字分類の必要性	10	十種『説文解字』考察の結果	37
(三) 「甲類」古文字字表の整理	16	第二節 『説文』篆書体部首に関する考察	38
表 1. 3. 1 古文字分類示意表 a	19	凡例	38
表 1. 3. 2 古文字分類示意表 b	20	一、説文部首形状の正確性	40
表 1. 3. 3 「為」の変遷表	21	二、説文部首形状の規整化（美化）	40
表 1. 3. 4 秦漢墨跡文字字形表	24	三、説文部首構成の錯誤	42
表 1. 3. 5 秦楚墨跡文字（甲類）比較表	26	四、説文部首形状の錯誤と規整化	43
第二章 『説文解字』篆書体の考察	27	五、規整化（美化）の分類	44
第一節 『説文解字』の書体例と印刷の版本	27	第三節 『説文』小篆書体の考察	49
		一、「重複字」と「重文」	49
		二、間違った小篆の形状	51
		三、正確な小篆の形状	54

第四節 小篆書体の美化	55
1. 「人」字の規整化	55
2. 「規整化」の再検討の重要性	56
表 2. 1. 1 『説文解字』唐寫本と宋刻本	60
表 2. 1. 2 十種版本の形状の相違の字形表	66
表 2. 1. 3 十種版本の形状が一致する字形表	72
表 2. 1. 4 同じ版本、前、後の形状が相違する字形表	75
表 2. 2. 1 説文部首形状の正確性の字形表	84
表 2. 2. 2 説文部首形状の規整化の字形表	88
表 2. 2. 3 説文部首形状の錯誤の字形表	91
表 2. 2. 4 説文部首形状の錯誤と規整化の字形表	92
表 2. 2. 5 十種『説文』五四〇部首考察表	95
表 2. 2. 6 五四〇部首の数量順位 百字以上	132
表 2. 3. 1 重複字の字形表	133
表 2. 3. 2 重文の字形表	134
表 2. 3. 3 『蒼頡篇』の「曷」と五種『説文解字』字形表	135
表 2. 4. 1 陳氏一篆一行本の「行」の字形表	135

表 2. 4. 2 五種『説文解字』の「行」の字形表	136
第三章 東周時代の秦文字	141
第一節 春秋時代の秦文字	141
第二節 戦国時代の秦文字	150
一、商鞅三器 (BC346～343)	150
二、封宗邑瓦書 (BC334)	153
三、青川木牘 (BC309)	169
四、秦虎符 (BC337～221)	174
第三節 戦国時代の秦簡墨跡の篆書体考察	182
1. 「奪」字	182
2. 「奮」字	182
3. 「安」字	182
4. 「北」字	183
5. 「獲」字	183
6. 「水」字	184
7. 小結	184
表 3. 2. 1 説文と瓦書の形状の一致の字形表	185

表 3・2・2 説文と瓦書の形状の違いの字形表	186
表 3・2・3 説文筆跡の伝承における小異の字形表	187
表 3・2・4 『青川木牘』と『張家山漢簡』の字形表	187
図 3・2・1 青川木牘 デジタル模本	196
表 3・2・5 虎符の字形表	197

第四章 秦文字の篆書体考察

第一節 功績を称賛する秦代刻石篆書

一、秦代の刻石と拓本	201
二、秦代刻石文字書体の考察	204
説文部首比較表	206
秦簡構形比較表 1	207
秦簡構形比較表 2	207
(一) 「具」字	212
(二) 「興」字	213
(三) 「鬼」字	214
(四) 「于」字	218
(五) 「平」字	219

(六) 「戎」字	220
(七) 「并」字	222
(八) 「制」字	224
(九) 「達」字	225
(十) 「邊」字	226
(十一) 「章」字	228
(十二) 「審」字	229
(十三) 「貴、遺」字	232
(十四) 「惠、徳」	234
(十五) 「農」字	235
(十六) 「專(專)」字	237
(十七) 「惠」字	239
(十八) 「數」字	240
(十九) 「受」字	242
(二十) 「無」字	244
(二十一) 「量」字	246
(二十二) 「臨」字	246

三、秦代刻石と秦簡文字	247	表 4.3.5 『蒼頡篇』の「婁」と五種『説文解字』字形表	336
第二節 秦代墨跡文字篆書体の比較検証	253	表 4.3.6 『蒼頡篇』の「力」と五種『説文解字』字形表	337
許慎の視野	254	表 4.4.1 『阜陽漢簡・蒼頡篇』門、閉、開などの字例表	338
第三節 識字書『蒼頡篇』の考察	257	第五章 秦漢文字の変遷考察	341
一、前言	257	第一節 文字変遷の原因と基礎	341
二、デジタル模本の応用	259	一、古文字の種類と数量	341
三、『蒼頡篇』の釈文	261	二、篆変と隷変の字形進化	347
四、『蒼頡篇』の字形分析	265	第二節 字形変遷の考察	348
五、小結	272	一、「歩」字の考察	349
第四節 「小篆」について	272	二、「徙」字の考察	354
表 4.1.1 秦刻石と『説文』、商周、春秋戦国、秦漢文字比較表	283	三、「迹(跡)」字の考察	357
表 4.2.1 『説文』と宋代石刻比較表	308	四、「高(高)、京(京)、景、亭」字の考察	359
表 4.3.1 北京大学収蔵の『蒼頡篇』(七〇%に縮小)	310	第三節 「白」字部首の考察	365
表 4.3.2 『蒼頡篇』の『説文』未收字	330	表 5.2.1 歩字の字形表	367
表 4.3.3 『蒼頡篇』部首数量(トップ50)	332	表 5.2.2 徙字の字形表	368
表 4.3.4 『蒼頡篇』の「崑」と五種『説文解字』字形表	335	表 5.2.3 跡字の字形表	369
		表 5.2.4 高字の字形表	370

表 5・2・5 京字の字形表	371	五 おわりに	395
表 5・2・6 景字の字形表	371	参考文献	397
表 5・2・7 亭字の字形表	372	注訳	405
表 5・2・8 「年」字の墨跡と非墨跡文字の変遷	372		
表 5・3・1 白、日、目などの字数量表	374		
表 5・3・2 楷書部件「白」秦漢時期の構形考察表	375		
第六章 結論	381		
第一節 研究の総括	381		
第二節 研究の学術的な価値	386		
附録 『引得市』の紹介と研究への活用	389		
一 はじめに	389		
二 「引得市」の発展	390		
三 「古文字欠字データベース」	391		
四 『引得市』の基本的な操作	393		
I 使用の準備	394		
II 実際の検索	394		

秦漢簡牘文字の字形変遷の考察

第一章 序論

第一節 研究目的、内容と方法

本研究の目的は、秦漢簡牘文字の字形変遷の原因を整理することによって、一般に『説文解字』を引いて説明される、書写の字形が篆書から隸書に変化してきたという通説に再検討を加えるところにある。『説文解字』においては、小篆は秦の公式書体であり、書字の教育あるいは書字訓練の対象と説明されている。しかし、近年大量に出土している秦漢簡牘には、明らかに小篆を用いて書いたと言えるものはほぼ皆無である。

今日我々が秦篆として解釈する資料は、基本的には儀礼的な性

格が強い金石資料である。文字の利用状況が全く異なる金石資料と簡牘資料を直結させて、金石資料に見える篆書が次第に変化した隸書になったと説明することには、若干の飛躍があると言わざるを得ない。隸書以前に、より象形性が強い古文字が書写されていたという仮定説を採るとしても、それが金石資料に見える篆書字形であったと判断するのは危険であろう。実際には具体的に出土した文字資料によって、古文字から隸書に変化していく過程を明らかにし、『説文解字』と整合する状況としない状況、また、整合しない理由の検討を行う必要がある。

これまで多くの学者によって、商周代の文字資料から漢代の隸書までの文字の発展を説明するための様々な試みが為されてきた。たとえば『漢語古文字字形表』、『古文字類篇』のように、甲骨文、金文、古璽文、瓦當文などを採集して説文小篆に対応づけし、同一の説文小篆に結びつけたものを時代順に並べ、同一文字の字形の変遷を見ようという整理手法が、その代表的なものであろう。

しかし、上記の本研究の目的に述べたように、文字の利用状況が著しく異なる場合、単純に字形を比較することには困難がある。たとえば甲骨文と金文で字形差がある場合に、それが時代による変化なのか、亀甲獣骨の上に刻むのに適した字形と、青銅器に鑄込むのに適した字形の差なのか、それだけをとって見ても判断が難しいからである。実際問題、これらの説文小篆への対応づけによって整理した字形表では、簡牘資料から採集した字形が含まれることは決して多くない。これは利用状況が著しく異なり、字形差が、時代による変化とは言えないことが明らかだからである。本研究では、書写される字形の変遷に注目するため、新たに簡牘資料のデータベースを作り、金石資料は補助的な役割として使用する。

第二節 文字文献に関する研究

出土文献などの資料をめぐる最新の索引や札記類は、

「インデックス引得市」、やインターネット上のサイトにおいて発表されている。¹

まず、簡帛文献と文字学、国家文化と社会、書道の三つに分けて先行研究を整理してみる。

① 簡帛文献と文字学

黄文傑『秦漢文字的整理與研究』（社會科學文獻出版社、二〇一五年）

高村武幸『秦漢簡牘史料研究』（汲古書院、二〇一五年）

大野裕司『戦国秦漢出土術数文献の基礎的研究』（北海道大学出版会、二〇一四年）

舂山明・佐藤信『文献と遺物の境界－中国出土簡牘史料の生態的研究－』（六一書房、二〇一一年）

西林昭一著・陳松長譯『新中国出土書跡』（文物出版社、二〇〇九年）

黄文傑『秦至漢初簡帛文字研究』（商務印書館、二〇〇八年）

駢字騫・段書安『二十世紀出土簡帛綜述』（文物出版社、二〇〇六年）

池田知久『池田知久簡帛研究論集』（中華書局、二〇〇六年）

福田哲之『説文以前小学書の研究』（創文社、二〇〇四年）

大庭脩『漢簡の基礎的研究』（思文閣、一九九九年）

② 国家文化と社会
京都大學人文科學研究所簡牘研究班『漢簡語彙中国
古代木簡辭典』（岩波書店、二〇一五年）

榊山明『秦漢出土文字史料の研究』（創文社、二〇一五年）

中村未来『戦国秦漢簡牘の思想史的研究』（大阪大学

出版会、二〇一五年）

湯浅邦弘『竹簡学－中国古代思想の探究－』（大阪大学出版会、二〇一四年）

富谷至『文書行政の漢帝国』（名古屋大学出版会、二〇一〇年）

富谷至『漢字の中国文化』（昭和堂、二〇〇九年）

宮本徹・大西克也『アジアと漢字文化』（放送大学教育振興会、二〇〇九年）

藤田勝久『中国古代国家を社会システム－長江流域出土資料の研究－』（汲古書院、二〇〇九年）

富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代－書記の文化史』（岩波書店、二〇〇三年）

江村治樹『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』（汲古書院、二〇〇〇年）

工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』

(創文社、一九九八年)

③ 書道

杉村邦彦『書學叢考』(研文出版、二〇〇九年)

魚住和晃『筆跡鑑定ハンドブック』(三省堂、二〇〇七年)

杉村邦彦『中国書法史を学ぶ人のために』(世界思想社、二〇〇二年)

なお、例えば、『西周文字字形表』、『春秋文字字形表』、『秦文字字形表』といった最新の字形表もある。以上の文献は、稿者がその索引や目録をデジタル化しており、「引得市」に収録している。

李均明氏は

「直近30年の間、簡牘の出土数は日に日に増している。

今日、すでにおよそ30万枚に達している。」²⁾と述べている。

また何雙全氏は

「分析をまとめると、戦国から秦までは簡牘の発展期である。両漢から、三国までは鼎盛期である。晋以後は勢いが弱まり、徐々に紙に変わっていった。その他に辺鄙の民族地区では宋代まで使われていた。よって、春秋末期から晋までは文字を書く歴史の上では簡牘時代と言えよう。この時代は戦国時代、秦、前漢、新莽、後漢、三国、晋等の七つの時代、およそ千年以上を跨いで来た。³⁾」と述べている。数量上で言えば簡牘墨跡文字はやはり金石文字が多い、実際に用いられていた、墨跡文字は公文書や書籍に用いられていたもの、または日常生活の手紙等の文字を含んでおり、金石碑刻に用いられていた物と比べると広範囲である事がわかる。

文字の変遷は「動態」であり、固定不動ではない。「政權交代」によって、大規模な改変が行われたのではなく、多くの改変は文字が書かれていく過程の中で発生したものである。その中でも、「筆順」は字形に最も影響を及ぼす要素の一つで、これは稿者が古文字変遷の研究に於いて、かつて、「仮説」を立てたものは既に実際に文字考察で実証した。

たとえば「古隸」は戦国末期もしくは秦代であると言われたとしても、古隸の上には篆書が必ずあり、下には必ず隸書を連結させている。篆書と隸書の過渡期の文字であり、学界は「古隸」と呼んでいるが、隸書と楷書の間
の文字を誰も「古楷」と呼んでいないのがおかしな点である。

この他に、秦漢後、古人はどのように「篆」を書いていたのか、それは批評、判断する事は出来ない。その時

代の書き方と、近代の書法家の書き方は意識上の認識が基本的にはそれほど差はなく、実際の篆書研究として考察する事は出来ない。例えば、文字の線が太細の変化をしても「中鋒」の線を維持させている。○・六―○・八センチの竹簡上ではほとんど意味が無い。秦人がこの様に書けたとしても、実際はこの様な「技巧」を練習する必要がない。今のところ出土した秦漢の数万枚の漢牘の中に、僅かに比較的
文字を大きく書いているものがあり、無理やり「中鋒用筆」だと当てはめている。しかし比率的には少なく、特殊な字例であると言える。

千年以上かけ離れている唐宋人に言わせると、文字を書く媒体と机、道具の変化により、文字を書く者は比較的大きな紙に書く様になり、その何センチかの範囲の中で書く事で、芸術もしくは技術上の追求が自然と生まれる様になった。後漢の許慎は世の中の人は篆書が読めな

いたため、『説文解字』を編纂したと言うが、我々が今日使っているものは後世の人が翻刻再版したもので、許慎が当時、竹簡に書いた「第一手版本」とは大きな差があるはずである。よって「説文」の字例を全て信用してはならない。一握りの証拠では多くを証明する事は出来ない。

第三節 古代文字の材質と表現の特質

西周末期または春秋時期に至るまで、竹簡は既に大量に書籍を作成するために使われていた。官私の文書の記録、民間の日書、暦日の記録等の転写がなされて来た。これと同時に帛書もまた重要な文書や書籍の作成に使われていた。竹簡は紙が発明される前の中国古代の最も重要な文字を書くための媒体であり、その使用は広範で大きな影響をもたらした。

戦国文字は漢語古文字の末期の書写形式である。字体から見るに、戦国文字は既に筆画が円転を含んでいる篆

書であり、方筆の古隸の筆画も含んでいる。書写材料から見ると、戦国文字は既に金属、石器、陶器、木器、漆器も含んでおり、さらに、絹織物も含んでいる。外在的な形式に絞って観察すると、戦国文字は複雑な概念を持っている。よって、この古文字を紹介する前にその範疇を明瞭にする必要がある。⁴

李学勤氏は、次のように述べる。

「戦国文字の材料は異常なほどバラバラであり、学者は一生の時間をかけても、全てを揃えることができない。この様な状況は、学問の発展の妨害をしている。今、差し迫って必要としているのが、比較的完全に編纂されている戦国文字の単語集であり、金文、陶文、璽印、貨幣、簡帛、石刻などの文字を統一し字表を作ることである。」⁵

稿者は、仮に将来「材質」を文字の分類基礎として用いるとしたら、字表資料が完備され豊富であつても、研究中に常に遭遇する字形の識別や分析に於いて問題が解決できないかもしれない。

稿者は、次の何琳儀氏の見解に賛同したい。「古文字は通常書写物質と材料または器物の用途に基づいて分類し、この分類は科学的なものではなく、深刻な弊害がある。

戦国文字の最も理想とされる分類方法は、まず横に国

を分け、次に縦に時代を分ける。旧式の分類方法の境界線を打ち破らなければならない（もちろん違う分類の文字の特徴も考慮しなければならない）。その文字からその流動的な変化の傾向を反映させることができ、それぞれの地域による差異も反映させることができる。これにより、その科学的な価値を高めることができる。」⁶

古文字研究者の李零氏は「書写材料と書写工具」に

基づいて、中国古代文字の分類を行なった。

李零氏は、

「中国文字の書写材料は硬質の材料と軟質の材料に分けられ、書写工具も用筆用刀で分れる。よって、『銘刻』と『書籍』と大きく二つに分類することができる。」⁷

一、銘刻（ここでは毛筆で硬質の材料上に書かれた文字も含む）

（一）石器上の題銘（玉器上の題銘と長篇の石刻題銘も含む）

（二）陶器上の題銘（刻款、印款と毛筆で陶器に書かれた文字も含む）

（三）銅器上の題銘（璽印、貨幣、鏡鑑上の題銘も含む）

（四）甲骨上の題銘

二、書籍

- (一) 竹簡、木簡または木牘、竹牘上の文字
- (二) 縑帛上の文字
- (三) 紙巻または紙冊上の文字

この中で、「銘刻」の項目「(三) 銅器上の題銘」は「刻画」と「書写」、さらには「鑄銘」の三種の文字製作の方式や、この様な分類の仕方は、決して明確な文字特質を切断したものではなく、「軟質材料」及び「硬質材料」の分類の仕方は謹厳さが欠けている。まだ検討する余地がある。

(二) 古文字分類の方法

第一層はまず、文字を「墨跡」と「非墨跡」の二つに

分けた。ここで言う「墨跡」とは甲骨、陶、玉片等の材質を含み、「筆」によって書かれた朱書または墨跡文字、この類の文字は文字が持つ最古の書の姿を備えており、日本語で言うところの、「肉筆」(にくひつ)と同じである。その意味と林進忠氏が提示している四大種類の「(一) 毛筆書法」の意味と通じている。



信榮尉都掖張

筆で書かれた墨跡文字は如何なる材質を含むことができるが、稿者は日常的に筆で書かれる文字以外のものは外し、そのような文字は文字変遷に起こった特別な例としか言うことができない。もし、文字変遷の字例表に組み込むとしたら、特別に註釈をつける必要がある。例えば『張掖都尉棨信』（『張掖都尉棨信』）の赤色の織物は一九七三年甘肅居延考古隊が居延肩關遺跡にて発見されたもので、烽燧守衛長官が使用する為の軍事通行用の証明の狼煙である。幅は16センチ高さ21センチで、報告書によると前漢末期のものである。前漢中期以後八分隸書は盛んになり、この織物は筆文字と雖も、既に実用的な文字ではなくなっていた。一つの文字が幅5センチ高さ9センチで、篆書の文字を応用している。曾て学者はこれを「蟲書」⁸⁾であるとしていたが、稿者はその文字は「蟲書」ではないと考えている。使用されている筆は小さく、

絹の上に大きく文字を書くには適しておらず、その線質は揺れがある事などが疑問点である。陳昭容氏は「筆画が湾曲しているのは出土した状況と関係がある」と考えている。書写の面積がA5の用紙に近く、当時よく使用されていた書写媒体の簡牘と比べると、「大きな面積」である。漢代の人から言わせると人の目を引くために書かれたもので、現代で言うところの看板のようなものを指しているのかもしれない。

「非墨跡」文字の部分で、第二層では「鳥蟲文字」と「非鳥蟲文字」に分けることができる。「第一層」と「第三層」はどちらも明確な特性を標準として分別している。分別上はそれほど困難ではなかったが、第二層は研究者に明確かつ主観的な判断が必要となり、学界の出版した鳥蟲文字に関連する文献に基づいている。

このような鳥蟲文字について、林素清氏は

「これらの字体は純粹に言語の機能を記録したもので、文字が徐々に変遷していく途中で飾りを付け加えた芸術品である。」¹⁰と述べている。

東周は重要な転変期であり、郭沫若は一九七二年にそれらの変化に気づいた。彼は『古代文字之辯證的發展』で、

「もともと中国の文字は殷代には芸術の特色を兼ね備えていた。…しかし、意識的に文字を芸術品として作っていたか、または文字そのものが芸術化し、装飾化し始めたのは春秋時代の末期である。これは文字が書法へと発展、意識的な段階に進んだことを意味している。書法芸術の文字と工具文字の応用は、多かれ少なかれそれぞれその規律がある。」¹¹と述べている。

(二) 古文字分類¹²の必要性

「甲類」文字（墨跡文字）は書を書く者が、文字に対する最も直接的な表現方法であり、「墨跡」には「筆跡」と同じ意味を含んでいる。

「筆跡」について、魚住和晃は『筆跡鑑定ハンドブック』で

「筆跡とは文字を形づくることを目的として、筆記用具を動かした跡である。文字は判を押すように一挙に書くことはできないもので、必ず何本かの線を引き、規則にしたがって組み立て形づくらなくてはならない。」¹³と述べている。

筆跡は文字符号の書写形態である。それは書写工具を運用したもので、書写の動作を通して、作られた特殊な痕跡である。その特徴は書を書く者の書写習慣が反映されており、例えば字体の大小、角度、配列、筆画の組み

合わせ及び誤字と当て字、句読点の有無等である。筆跡は人によって異なり、特定性と、安定性を備えている。書を書く者がいくら装うとしても、完全に変えることは難しい。

造形に対する美的センス等の美意識の有無に関わらず、これらの純粹と単純性は、字表の整理を通して、文字が人力よって書かれ自然に変遷していく中でその道理と規則を理解する事が出来る。学界が過去の文字整理において、本表のように先に文字を分類したものはない。文字を時代の前後に基づいて配置しただけの表に、このような先に選別し字表を並べたものは無く、その対比から得られる効果は限界がある。特に、戦国時代早期に各種文字の造形は多種多様で、まだ整理されておらず、そこから正確な文字の変遷を見出すのは非常に難しい。

古文字の分類の前に、字形のみに基づいて「甲類」(墨

跡文字)と「乙1類」(鳥蟲文字)を分析比較した。考察して得た内容は客観的なものではなく、文字の「誤った変化」を述べるより、文字を書く個人の「設計美意識」の問題を述べた方がよく、「設計」してこのような文字が生まれたのはおそらくならかの「理由がある」わけで、その軌跡の道理に従うべきだが、「理由」が無い可能性があり、ただ文字の製作者個人の造形の経験からくるものかもしれない。非常に重要な差異の1項目として、「甲類」以外の文字類型は人にわかりやすく書く必要性がほとんどない。例えば剣兵器の上にある鳥蟲篆は、もし専門の職人によるものでなければ、一般人では絶対に識読出来ない内容である。このような文字の類型は、「文字変遷の伝承」と絶対的な関係があるというふうにこじつけるのは問題がある。文字学者の陳夢家氏は曾て「字体変異の原因」について述べている。

文字を応用する際に形態上の差異が起こるかどうかはわからない。その変異の原因は、段階的变化なのか、突然的变化なのか、段階的变化とは自然に変化する事で、突然の変化は人的、強制的なものである。文字学を研究する時は、必ずその変異の予兆を留意する必要がある、段階的变化は文字変化の源流をたどる事が出来る。突然の変化は時代の特徴を考察することができる。しかし、文字の変異は、自然に起こる段階的变化は常に強力な突然の変化よりも多い。歴史上秦の始皇帝の文字統一を強力な突然の変化とみなせる。六国合併以前の秦文と小篆を比較すると、ほとんど共通しており、まだ合併していない六国以前の列国の金文と小篆を比較すると、共通するものはやはり少ない。文字は人力で変えることは非常に難しく、なぜなら、習わしが次第に広まって一般的に認められるように生まれる産物であり、同一文字はた

だ情勢の流れによって導かれてきたものに過ぎない。王国維は史籀篇疏証序で『変化するものから観察すると、文字は時代によって異なるだけでなく、時間によっても異なるので、一篇の書も前後で文字が異なり、一人が器蓋を書いても文字が異なる。変化しないものから観察すると、文字の形と勢はともにだんだんと変化していき、文字の国である以上、これまで一人の力で一体を創造できる者はいなかったのである。』¹⁴と述べている。

同様のことで文字の変遷について文字文学者唐蘭は「一般人は文字一つ一つに歴史がある事を知らず、先入観にとらわれている。ある一時期だけ見る事が出来る文字だけを見て（ある人の一生のうちの三、四年の様子のみを見ているかのような）、自然にそれらは改変している文字だと気づかないのはこのような間違った観念を引き起こしやすい。これらの文字史上、よく見受けられる微妙な差と、変更の過程を我々は「演化」

と呼んでいる。「演化」と「分化」は異なる。「分化」は新しい文字が生まれるもので、「演化」の結果、ある

時「分化」に変わる時がある。しかし、それ自体には目的が無く、ただ改変し続けるだけである。「演化」は次第に変化するもので、知らず知らずのうちに古いものを捨てて新しいものを生み出していき、ある一定の程度までいくと、または環境の関係でよく唐突的で、激しい変化を引き起こす。これはこの後の章で述べる「変革」のことである。「変革」は突然で、目立って、誰が見てもわかるものである。しかし、最も重要な演化は、却って見落としがちなものである。漢字は形体を主としている。しかし一つの漢字には二、三通りの書き方がある。仮にこのような違いが発生した同じ時期、同一種の字体に、常に「演化」の原因があり、「演化」が分からなければ、文字学を研究する事はできな

い。特に、中国文字学がそうである。¹⁵と述べている。

林素清は「文字使用は、しばしば変遷の状況により、商周以来、繁体、簡体が入り混じり、変化は少ない。しかし、基本的にはやはり継承されてきた形で、定型になりつつある。¹⁶」と述べている。

上述のように、学者達は期せずして、文字の演化または変遷は必ず緩慢でそれには道筋があると言う事の論述が一致している。

稿者のデータベースを元に整理考察したところ、「甲類」（墨跡文字）以外の「乙類」文字は比較的、陳夢家氏が述べている「突然の変化」と唐蘭氏が提起する「変革」の類に属しており、製作者が文字の字形に対する絶対的な主導があり、字形はある時、単純に個人の主観的美意識からなされ、よってこのような文字は直接的に前後の

伝承の「演化」の関係とは限らない。「単純」と雖も、実は「複雑」で、個人の主観意識から製作された文字であるため、その内容はバラバラ且つ署名がなく、我々が伝世された文字材料を利用して分析するのは容易では無い。

歴史上に存在する「字体」は一人の力だけでは創り上げることは不可能であり、人的な力ではなく自然に形成したものである。

そのほか陳氏が提起した四種の文字異変の原因がある。「一つ目の原因は時代の違いによって異変が起きた、二つ目は、地域の違いによって起きた、三つ目は書写の仕方、材料と工具の違いにより起きた、四つ目は書を書く者の身分の違いによって起きたもの。」

この三つ目の「書写の仕方、材料と工具により起きた」¹⁷は本論文で強調していることである。

文字の発展変遷は緩慢且つ次第に変わっていくもので

あることは、上述の学者の研究または本文の図表などからはつきりと分かるだろう。仮に我々が前漢または後漢の当時の人であったら、ひよっとすると一、二百年間、文字の字形はみな理解できる範囲の中にある。しかし、時間が少しでも長くなると、文字の識別は却って難しくなる。もし正確な文字の変遷の状況を再現するとしたら、「甲類」文字の早、中、末期を分ける事で、各々の分析ができる。文字の資料が不足しているならまたその他の二種類の対比をすることができる。さらに、「乙1類」（鳥蟲文字）に至っては「文字演化」の研究において、参考にできるものが限られている。

その他に、稿者が相関する文献の考察に基づくと、文字研究者がよく文字の「外形」のみに専心して研究して、文字の背景にある製作者がその外形に及ぼす影響の変数（変化）を軽視しており、その中の「乙2-1類」（鑿刻劃文

字」が文字の製作時に影響を及ぼし、「フィードバック」する問題は、材質が刻者に対して抵抗を与える、この抵抗が強くなり、一般人が自然に処理できる度を超えると、それは製作の方法を変えざるを得なくなる。

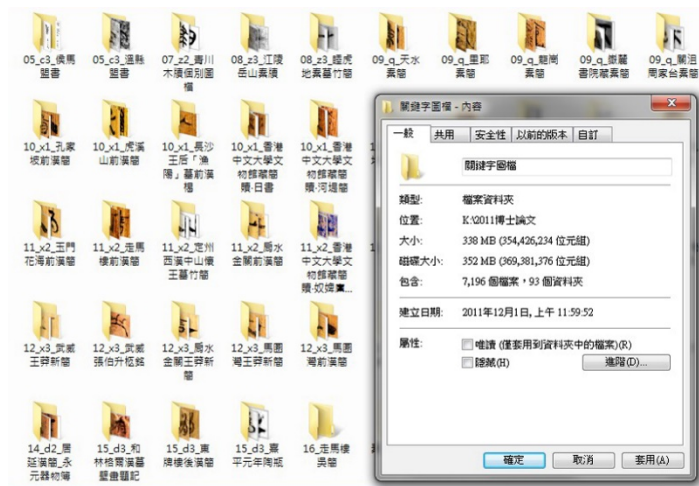
「フィードバック」この言葉は、簡単に解釈すると、「コントロールされる過程がコントロールシステムに対する反作用である。」¹⁸ 例えば、陶瓦を焼く前、鋭利で硬いもので「刻した」文字は通常は文字の淵に型押しによる突起ができ、それを「湿刻」と呼ぶ。もし、焼き終ったあとにさらにそこを刻そうとすると、その文字は「割れた」線質ができる、例えば、戦国中期の『秦封宗邑瓦書』は典型的な「湿刻」である。

全体的言うと、「甲類」と「乙²⁻¹類」の字形は非常に近いが、文字の製作の完成の仕方が既に大きく改変しており、例えば後者が既に「鑿」もしくは「劃」、「刻」な

どを用いている。

ある「乙²⁻²類」と「乙¹類」の形体は近い、しかし、「乙²⁻²類」のある文字は元々の自然な大きさを保っていない。(例えば、「之」字は形体の関係で書いた時に「扁形」になる)、それから一定の方形の範囲内に収めようとして字の比率が調整される、このような字形は皆この類である。

元々の自然の大きさを保っているかどうか、それは同時代の「甲類」(墨跡文字)を対比する必要がある、またはその器物の元々の拓本から、その「字相」を観察し、その他の「標準」の銘文を対比しない。「甲類」以外の文字は所謂「標準字」と言われるものはないと考えているため、「標準字」を用いて他の銘文と比較するというのは非常に大きな問題である。特に、学界では多く後世の模



データベース図例

刻再製された「説文小篆」の字形を戦国末期から秦漢の間の篆書の「標準字」としている、しかしこれは確実に客観的ではない。

(三)「甲類」古文字字表の整理

本研究の字例は春秋末期の『侯馬盟書』から始まり後漢末期の『東牌楼漢簡』等の墨跡文字に至るまでを収録している。七百年あまり、期間は四十余种の簡牘字跡、七千字以上の字例を集約している（データベース図例）。稿者は造形研究の手法を用いて文献のデジタル化の処理の方法を結びつけた。古文字が七百年余年（B. C 552 ～ A. D 220）の伝承変化である事を考察した。これは現代の科学技術ソフトを合わせて作り上げた研究である。

このデータベースの利点はファイルの名前をソートすることができる。検索はオペレーティングシステム本体の「檔案總管」を利用し、余分なプログラムなしでも指定したキーワードを検索することができる。¹⁾なぜならファイルの名前を付ける際に既に明確な規範を決めているからである。よって、「丨為丨」と入力するだけで、「為」

字を確実に検索することができ、その他の関係のない内容は出てこない。

本表の収録する文字の時間が七百年余に亘っているため、いくつかの王朝を跨いでいる。特定のキーワードを用いる事で四十種を超える墨跡文字の中から、文字の変遷、演化の過程の真相を整理する事ができる。文章内容の長さに妨げられ、本文の後ろに「為」字の変遷表をリストアップしている。使用者が仮に「精確に」戦国末期の「不」字を探すとしたら検索の枠に「08_23*_「不」」と打ち込むだけででき、全く特別な書式を覚える必要はない。²⁰最も直接的な操作を用いて、研究のスピードを上げる事ができる。(「不」検索結果)



「不」検索結果

本表で収録している春秋末期の文字は『侯馬盟書』、『温縣盟書』、戦国中期は『青川木牘』、²¹、戦国末期は『江陵岳山秦牘』、『睡虎地秦墓竹簡』、秦『天水秦簡』、『里耶秦簡』、『周家台秦簡』、『龍崗秦簡』等である。

『孔家坡前漢簡』、『虎溪山前漢簡』、『長沙王后「漁陽」墓前漢牘』、『香港中文大學文物館藏簡牘・日書』、『香港中文大學文物館藏簡牘・河隄簡』、『馬王堆簡帛文字』、『高台前漢簡』、『張家山漢墓竹簡』、『銀雀山漢簡』、『鳳凰山

前漢簡』等は前漢早期である。

『玉門花海前漢簡』、『走馬樓前漢簡』、『定州前漢中山懷王墓竹簡』、『肩水金關前漢簡』、『香港中文大學文物館藏簡牘・奴婢廩食粟出入簿』、『馬圈灣漢簡』、『額濟納居延前漢簡』、『懸泉置前漢簡』、『懸泉置前漢帛書』等は前漢中期をなす。

『尹湾漢墓簡牘』、『武威王莽新簡』、『武威張伯升柩銘』、『肩水金關王莽新簡』、『馬圈灣王莽新簡』、『馬圈灣前漢簡』は前漢末期をなす。『武威後漢簡』、『香港中文大學文物館藏簡牘・序寧簡』、『額濟納居延後漢簡』は後漢早期をなす。

後漢中期は『甘谷漢簡』、『居延漢簡・永元器物簿』、『永壽二年陶瓶』、『後漢末期は『熹平元年陶瓶』、『和林格爾漢墓壁面題記』、『東牌樓後漢簡』等である。後漢中期末期の字例は少ないため、後に新たに文物が出土し資料を補

うことを期待している。

字表凡例

一、収録する古文字は稿者が制定した分類方式を用いている。秦系文字「甲類」（墨跡文字）を主としており、年代は東周春秋時代（B. C 770）から後漢（A. D 220）までである。

二、本表は「書」、「以」、「群」、「出」、「言」、「重」、「往」、「無」、「道」、「之」、「大」、「有」、「為」、「行」、「不」、「可」、「命」合計 17 字を基礎として収録している。

三、本表は出版した中で最も鮮明な画像の図版を採用した。パソコンのソフトで採用した図版を編集する際に、文字の角度を調節し、元々書かれた文字の角度を保持した。

四、部分の字例は図版の下部に出典を列挙し、各文字とその略称を別の表にリストアップした。

五、前後の年代の連結を分断させないように、鮮明な字例の図版が無ければ、模写本で代用した。

それ以外、論文に関する図録や表などは本章の最後に付してある。番号は下に表した通りである。表 4・2・1（四章の二節の一の表）、図 4・2・1（四章の二節の一の図に表）。

表 1・3・1 古文字分類示意表 a




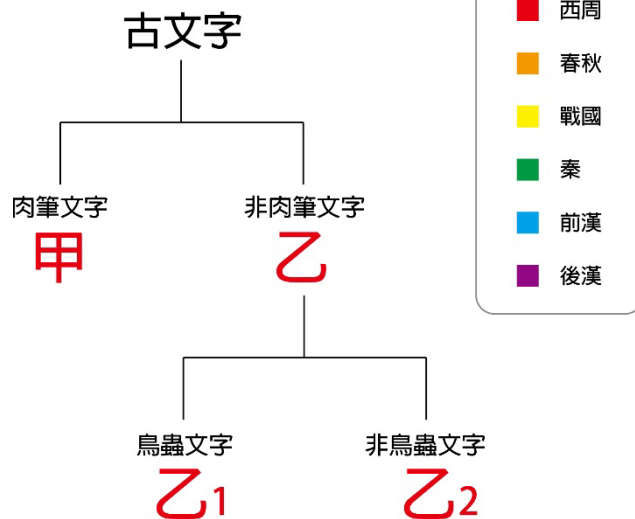
類別	甲類 (墨跡文字)	乙類(非墨跡文字)			備註
		乙 1 類 (鳥蟲文字)	乙 2 (非鳥蟲文字)		
			乙 2-1 類 (鑿刻劃文字)	乙 2-2 類 (非鑿刻劃文字)	
圖例	 曾侯乙墓竹簡 124  曾侯乙墓竹簡 151	 11544_1 越王太子矛 大(太)	 曾侯乙墓-爬虎  曾侯乙磬	 09700 陳喜壺	戰國早期
主要材質	木、簡、帛、玉、骨、陶等の材質	主に青銅	青銅、石等の類材質。	青銅、石等の類材質。	
對應分類	(一) 毛筆書法	(四) 文字造形藝術表現	(二) 硬筆書法	(三) 複製書跡	

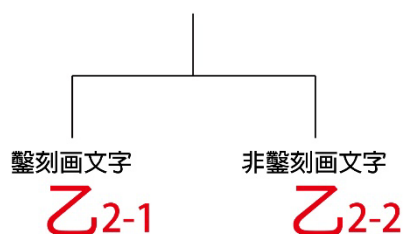
表 1.3.2 古文字分類示意表 b

古文字分類表



応用例：

後漢時代の肉筆文字



肉筆文字



鑿刻画文字



非鑿刻画文字

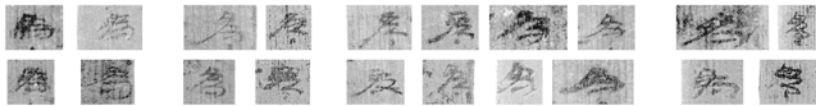


鳥蟲文字

表 1. 3. 3 「為」の変遷表

 温縣盟書 侯馬盟書 ▲春秋晚期 (B.C. 552~476) 代號: 05_c3
 青川木牘 ▲戰國中期 (B.C. 375~287) 代號: 07_x2
 睡虎地秦墓竹簡 ▲戰國晚期 (B.C. 286~222) 代號: 07_x2
 天水秦簡 里耶秦簡 龍崗秦簡 ▲秦 (B.C. 221~207) 代號: 09_q

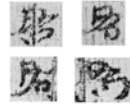
 張家山漢墓竹簡 ▲西漢早期 (B.C. 206~141) 代號: 10_x1	 陰陽五行甲篇 胎產書 養生方
 香港中文大學文物館藏簡牘_日書 河隄簡 春秋事語 陰陽五行乙篇 雜療方 要 五星占	 高台前漢簡 虎溪山前漢簡 戰國縱橫家書 合陰陽 卻谷食氣 刑德內篇 鳳凰山前漢簡
 孔家坡前漢簡	 銀雀山漢簡



香港中文大學文物館藏簡牘
奴婢廩食粟出入簿



馬園漢簡



肩水金關前漢簡·丞相御史律令



定州西漢竹簡



懸泉置前漢簡·奏書

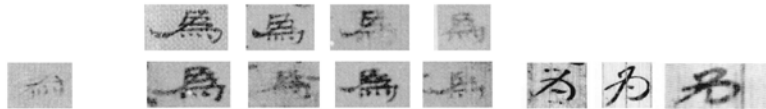


額濟納居延前漢簡·甲渠候官文書



玉門花海前漢簡 走馬樓前漢簡

▲西漢中期 (B.C. 140~49) 代號: 11_x2



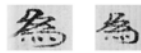
尹灣漢簡·元延元年曆譜

尹灣漢簡·神龜占·六甲占兩

尹灣漢簡·神鳥傳



馬園漢簡



武威王孫新簡·儀禮·甲本·士相見之禮

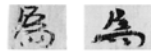
▲西漢晚期 (B.C. 48~A.D. 24) 代號: 12_x3



香港中文大學文物館藏面額·序亭面



額濟納居延後漢簡·候粟君所責寇恩事



額濟納居延後漢簡
·官府文書



額濟納居延後漢簡
·建武六年



額濟納居延後漢簡
·死胸劾狀

▲東漢早期 (A.D. 25~88) 代號: 13_d1



永壽二年陶瓶

▲東漢中期 (A.D. 89~167) 代號: 14_d2



熹平元年陶瓶




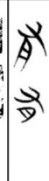


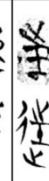
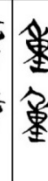


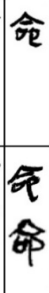
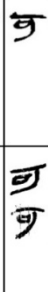
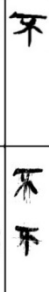
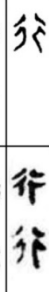
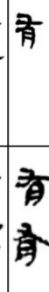
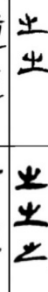


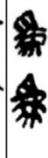
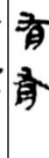
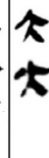
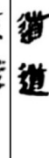
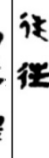
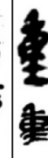



東碑樓後漢簡

▲東漢晚期 (A.D. 168~220) 代號: 15_d3



走馬樓吳簡

表 1. 3. 4 秦漢墨跡文字字形表

三晉 春秋晚期																
	命	可	行	為	有	大	之	道	無	往	重	言	出	群	以	書
戰國中期																
戰國晚期																

秦																
西漢早期																
西漢中期																

分期	書	以	群	出	言	重	往	無	道	之	大	有	為	行	不	可	命
	書	以	群	出	言	重	往	無	道	之	大	有	為	行	不	可	命
	書	以	群	出	言	重	往	無	道	之	大	有	為	行	不	可	命
西漢晚期	書書書書書書	以以以以	群群	出出出出	言言言言	重重重重	往往	無無無無	道道道道	之之之之	大大大大	有有有有	為為為為	行行行行	不不不不	可可可可	命命命命

東漢早期	書書書書書書	以以以以	字例未見	出出出出	言言言言	字例未見	字例未見	無無無無	道道道道	之之之之	大大大大	有有有有	為為為為	行行行行	不不不不	可可可可	命命命命
東漢中期	書書書書	以以以以	字例未見	出出出出	言言言言	字例未見	字例未見	無無無無	道道道道	之之之之	大大大大	有有有有	為為為為	行行行行	不不不不	可可可可	命命命命
東漢晚期	書書書書書書	以以以以	字例未見	出出出出	言言言言	字例未見	字例未見	無無無無	道道道道	之之之之	大大大大	有有有有	為為為為	行行行行	不不不不	可可可可	命命命命

表 1·3·5 秦楚墨跡文字（甲類）比較表

分期	道(道)		大(大)		有(有)		為(為)		行(行)		命(命)	
	秦	楚	秦	楚	秦	楚	秦	楚	秦	楚	秦	楚
春秋晚期 B.C 552-476												
	侯馬盟書		侯馬盟書		侯馬盟書		侯馬盟書		侯馬盟書		侯馬盟書	
戰國早期 B.C 475-376												

戰國中期 B.C 375-287												
戰國晚期 B.286-222												
秦 B.C 221-207												

第二章 『説文解字』篆書体の考察

第一節 『説文解字』の書体例と印刷の版本

篆書は、漢字の中で最も早い書体であり、広義には秦朝より前に使用されていた書体全てを指す。古代の簡牘は材質が腐敗しやすく保存が難しいため、秦朝より前の篆書は殆ど伝承されず、その原始書跡が非常に少なかった。幸いなことに、紙が広く使用された時代には、古代文字は模写を通じて広がってきた。特に青銅や刻まれた石などの石刷りへの応用には、紙は大きな役割を果たした。

青銅器銘文の大きさは文字の配置により制限されていた。青銅器で最も多い文字数の『毛公鼎』でさえも五百文字余りに過ぎない。大規模に篆書を知りたいなら、『説文解字』を通じてしか体系的に理解できない。

漢許慎『説文解字』叙に次のようにある。

「蒼頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文。其後形聲相益即謂之字、字者、言孳乳而浸多也。著於竹帛謂之書、書者、如也。」

また、『爾雅』釋器に次のようにある。

「象謂之鵠、角謂之鬻、犀謂之割、木謂之剡、玉謂之雕。金謂之鏤、木謂之刻、骨謂之切、象謂之磋、玉謂之琢、石謂之磨。」

後漢時代の許慎によつて書かれた『説文解字』（以下、『説文』という。）は、秦朝の小篆の書体の様相を記録し、最も早く体系的に形・音・義より漢字を分析する書物であり、歴代の学者に研究されてきた。清朝にはその研究結果が特に豊富であり、段玉裁、桂馥、王筠、朱駿聲は、学术界に大きな影響を与えた四人の学者である。

秦朝から三百年以上経た『説文』は、時間・空間・材料などの制限によつて、漢民族の「篆」への理解度に深い影響を与えていた。魏（三国時代）の『三体石經』の書体からも、当時の篆書への認識と想像を十分に表すことができる。その影響力は唐時代の作品

蒼頡篇			090 皮
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

にも見られる。すでに先秦時代の篆書体の本来の姿ではないが、篆書体の文化の継承に対しても『説文』と同じように多大な貢献をしている。『説文』の書体は小篆、籀文、古文を含み、古代文字の解釈や書体分析などに大いに役立つため、常に言語学、文字学では研究しなければならない科目の一つである。

ここで特に注視したいのは、『説文』唐寫本の櫛(櫛)の(櫛)の(櫛)の字形は正しく、「陳氏一篆一行本」の櫛(櫛)の(櫛)の(櫛)が錯誤である点である。(表2・1・1『説文』唐寫本と宋刻本を参照)

『説文』は、文字の構造的要素として、五四〇部の部首を建てている。そして九三三三字を、それぞれの意符の部首に属させている。稿者は『説文』の小篆の字形を考察する上で、中華書局から影印された「陳氏一篆一行本」(陳昌治本)を使用した。五四〇部首を分析し、小篆の字形の微妙な変化を照合した。具体的には考察の範囲を十種に拡大して照合した。その結果、同じ版本であっても、前後の部首の形状にも大きな差異が現れていることが判明した。

十種の『説文』は、各文字にそれぞれ番号を a から j まで設定し、対比の検索に利用している。なお「商周文字」と「秦簡文字」は、表中では「商周」と「秦簡」と略記している。

a 北師 中国北京師範大學の説文小篆
b 小徐 『校勘巾箱本説文繫傳』祁寯藻刻本
c 段注 『説文解字注』段玉裁撰經韵樓臧版
d 小徐 『説文解字繫傳』(四部叢刊に影印された述古堂本)

e 大徐 『景宋本説文解字』景日本靜嘉堂藏宋本、續古逸叢書

f 大徐 『説文解字』汪中藏丁晏跋宋刻元修本

g 大徐 『仿北宋刻大字本説文解字』日本文政九年（二八二六）

昌平校據汲古閣本重刊昌平叢書本

h 大徐 『仿宋刻改中字本説文解字』嘉慶十二年（二八〇七）

藤花樹本

i 大徐 『仿宋小字本説文解字』嘉慶十四年（二八〇九）孫星

衍本

j 大徐 『陳氏一篆一行本説文解字』同治十二年（二八七三）

陳昌治本

一、十種版本の形状の相違

稿者は十種の『説文』を照合した。

その結果、字形構造は似ているが、完全に一致するものは少ないことが判明した。例えば、「气、八、采、走、步、走、彳、夂、

蒼頡篇			008 气
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

延、行、句、リ、我、習、羽、刀、刃、豈、豊、鬯、入、旱、齋、弟、才、之、出、月、有、𠂔、夕、齊、米、嵩、疒、白、尢、滂、人、匕、从、北、丘、衣、舟、欠、次、𠂔、鬼、由、𠂔、犬、黑、𠂔、大、𠂔、𠂔、夫、𠂔、心、く、谷、𠂔、雨、燕、𠂔、戸、門、曲、𠂔、瓦、虫、龜、𠂔、卵、力、金、勺、斗、矛、亞」等である。

以下に、いくつかの字例を表に示す。残りの字例は、本章の最後に付してある。

蒼頡篇			016 八
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

二、十種版本の形状の一致


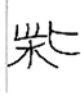












考察を通して、形状が一致する字例は、「上、夂、此、牙、疋、龠、谷、卅、異、農、鬲、彌、畫、皮、鬻、眉、鼻、鳥、鳥、么、絲、冎、豐、倉、矢、高、臺、京、高、富、回、來、白、赤、宮、呂、兩、帛、百、面、髟、長、而、天、亢、泉、非、卅、几、宀」等である。

以下に、いくつかの字例を表に示す。残りの字例は、本章の最

蒼頡篇			028 夂
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			002 上
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

後に付してある。













蒼頡篇			030 此
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

三、同一版本の前後の形状の相違

前項において『説文』十種の部首の形状の相違について照合したが、同じ版本でもその前・中・後の形状も同じではないことが分かった。そこで次に、「e 大徐」、「f 大徐」、「g 大徐」、「h 大徐」、「i 大徐」、「j 大徐」の四種の部首を例に挙げて考察する。四種には、二種の初期の宋本説文、「日本文政九年本」、「陳氏一篆一行本」が含まれている。

るので、最も古く、流通性のあるという選択肢を持つ。

表には、上記の説文の四種の前・中・後の形状に加え、「b 小徐」、「偏旁字源」及び「汗簡古文」も追加した。「汗簡古文」即ち『汗簡古文偏旁五百四十部』は呉照南（清）によって書かれた『四説文字原考略』に収録されているが、「偏旁字源」すなわち『説文偏旁字源』は夢英（宋の僧侶）によって書かれた作品である。二つの字例を表に入れることにより、宋人・清人の篆書体への理解度を示すことができると考えたからである。

単純に形状をみると、『説文偏旁字源』では、鬲はに作り、習はに作り、羽はに作り、于是に作り、鸞はに作り、に作り、華はに作り、齊はに作り、米はに作り、欠はに作り、兪はに作り、亢はに作り、非はに作る。

これらの字例から、宋人の篆字に対する理解は正確であるといえる。これは「規整化」の現象であろうか。

「規整化」とは、文字が発展変化する中で、固定化や規律化による字形の調整・配置が、時々本来の形状を変更して錯誤を招くことを指す。「規整化」の有無の判定基準としては、同一時期、やや早い時期、又は最も早い原始文字の形状を対照する。

「規整化」又は「美化」と呼んでいる。ここで言う「美」は個人が認識している美学・美感の「美」ではなく、構成分類を研究するための一つの定義である。

汗簡 古文	偏旁 字源	b 小徐

そのほか、四種の『説文』版本に、三つの部首の表に表した。

例えば、「j 大徐」の「皮」字は、三つの形状が一致するが、「e 大徐」の「齊」字のように、一致しない場合もある。「前、後」の意味は『説文』部首の目録である。

j 大徐		
前	中	後
e 大徐		
前	中	後

四種の『説文』前、中、後の形状の相違は多い。いくつか字例をあげてみる。

「j 大徐」 「026 走」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「e 大徐」 「026 走」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「g 大徐」 「026 走」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「f 大徐」 「026 走」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「j 大徐」 「039 牙」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「e 大徐」 「039 牙」 前・中・後 「𠂔、𠂔、𠂔」。

「g 大徐」 「039 牙」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「f 大徐」 「039 牙」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「j 大徐」 「241 夕」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「e 大徐」 「241 夕」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「g 大徐」 「241 夕」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「f 大徐」 「241 夕」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「j 大徐」 「247 齊」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「e 大徐」 「247 齊」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「g 大徐」 「247 齊」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「f 大徐」 「247 齊」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「j 大徐」 「435 鹵」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「e 大徐」 「435 鹵」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「g 大徐」 「435 鹵」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「f 大徐」 「435 鹵」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「j 大徐」 「506 亞」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「e 大徐」 「506 亞」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「g 大徐」 「506 亞」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

「f 大徐」 「506 亞」 前・中・後 「𠄎、𠄎、𠄎」。

以下に、いくつかの字例を表に示す。残りの字例は、本章の最

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			016 八
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			017 采
采	采	采	采	采	采	采	采	采	
			g 大徐			f 大徐			
			采	采	采	采	采	采	

後に付してある。「小、八、采、走、步、走、步、走、彳、行、牙、句、𠂔、言、𠂔、革、鬲、爪、𠂔、几、放、肉、乃、豈、豐、豐、鬯、入、才、之、出、月、有、𠂔、夕、齊、𠂔、人、尾、履、几、𠂔、先、見、欠、次、𠂔、色、卯、辟、由、豸、𠂔、能、熊、矢、亢、本、瀕、泉、𠂔、谷、雨、雲、鹵、鹽、戶、氏、虫、男、力、勺、斗、亞、七、巴、庚、子、寅、卯、酉、曾、戊、亥」等である。

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			033 走
走	走	走	走	走	走	走	走	走	
			g 大徐			f 大徐			
			走	走	走	走	走	走	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			026 走
走	走	走	走	走	走	走	走	走	
			g 大徐			f 大徐			
			走	走	走	走	走	走	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			034 彳
彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	
			g 大徐			f 大徐			
			彳	彳	彳	彳	彳	彳	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			029 步
步	步	步	步	步	步	步	步	步	
			g 大徐			f 大徐			
			步	步	步	步	步	步	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐	e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	051 句		
			g 大徐			f 大徐	
			𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎			

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐	e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	037 行		
			g 大徐			f 大徐	
			𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎			

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐	e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	052 𠄎		
			g 大徐			f 大徐	
			𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎			

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐	e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	039 牙		
			g 大徐			f 大徐	
			𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎 𠄎			

四、同一版本の前後の形状の一致

三種類の同じ『説文』版本の、前、中、後の形状が一致するものは少ない。例えば「非」字である。

「j 大徐」「429 非」前・中・後各は「**非**、**非**、**非**」。

「e 大徐」「429 非」前・中・後各は「**非**、**非**、**非**」。

「g 大徐」「429 非」前・中・後各は「**非**、**非**、**非**」。

「f 大徐」「429 非」前・中・後各は「**非**、**非**、**非**」。

他の字例に、「气、皮、鬼、夫、非、矛」等がある。残りの字例は、本章の最後に付してある。

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			346 鬼
			g 大徐			f 大徐			
鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	
			g 大徐			f 大徐			
			鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			008 气
			g 大徐			f 大徐			
气	气	气	气	气	气	气	气	气	
			g 大徐			f 大徐			
			气	气	气	气	气	气	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			403 夫
			g 大徐			f 大徐			
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	
			g 大徐			f 大徐			
			夫	夫	夫	夫	夫	夫	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			090 皮
			g 大徐			f 大徐			
皮	皮	皮	皮	皮	皮	皮	皮	皮	
			g 大徐			f 大徐			
			皮	皮	皮	皮	皮	皮	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			429 非
			g 大徐			f 大徐			
非	非	非	非	非	非	非	非	非	
			g 大徐			f 大徐			
			非	非	非	非	非	非	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			497 矛
			g 大徐			f 大徐			
矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	
			g 大徐			f 大徐			
			矛	矛	矛	矛	矛	矛	

五、小結

字形を照合した結果から見れば、同じ版本でも前・中・後で形状がそれぞれ異なるというのが一般的な現象であり、特定の版本に限定されていないと言える。

純粹に形状を論じるならば、正確には最大二〇四種類の形状がある。「e 大徐」と「g 大徐」はそれぞれ『景宋本説文解字』と『倣北宋刻大字本説文解字』である。また、「c 段注」の正確な部

首は一七八種類しかなく、説文の十種の版本で最も少なく、規整化の数が一六八種類と最も高い。データから見れば、段氏の理念による篆書体修正（規整化）比率がかなり高いことが分かった。

データから、構形錯誤の数が七〇〜七四の間にあり各版本の差が限られていることも分かった。篆書体「規整化（美化）」の有無は最終的に統計比率に影響を与える最大な要因となっている。説文の版本が早ければ早いほどその構成が必ずしも正しいとは限らないが、規整化の割合についてとても少なくなった。

十種『説文解字』考察の結果

e 大徐	d 小徐	c 段注	b 小徐	a 北師	説文版本 分類
204	203	178	200	197	構形正確
145	147	168	148	146	規整化（美化）
73	72	70	72	74	構形錯誤
118	118	124	120	123	構形錯誤+規整化（美化）
349	350	346	348	343	整體正確數量
64.6	64.8	64.1	64.4	63.5	整體正確%

j 大徐	i 大徐	h 大徐	g 大徐	f 大徐	説文版本
					分類
197	201	203	204	203	構形正確
150	145	143	144	144	規整化(美化)
73	74	71	70	73	構形錯誤
120	120	123	122	120	構形錯誤+規整化(美化)
347	346	346	348	347	整體正確數量
64.3	64.1	64.1	64.4	64.3	整體正確%

第二節 『説文』篆書体部首に関する考察

前節では説文の十種版本の部首の字形の差を照合したが、本節では『陳氏一篆一行本』という単一版本の字形を詳しく分析し、考察する。

凡例

- ・『陳氏一篆一行本』同治十二年(一八七三)陳昌治本にて『説文』部首の字形を考察する。
- ・表は「商周文字」、「秦簡」、「蒼頡篇」、「摹本」、「説文」などからなる。当該欄に当該文字がない場合、又は「秦簡」や「蒼頡篇」などの内容ではない場合に「*」マークをつける。
- ・「商周文字」は、主に商から西周までの甲骨文字または金文である。
- ・「秦簡」は、『青川木牘』、戦国後期の『睡虎地秦簡』、『嶽麓書院藏秦簡』、『里耶秦簡』などを含む秦朝の簡牘である。
- ・「蒼頡篇」は、北京大学に保存された前漢竹書『蒼頡篇』を指す。

また、より明確で正確に対照するため、明確に構成が参照できる「摹本」も加えてある。

・対照できる文字例がない場合、説明できるように関連する又は類似の「部件」文字例に取替える。

「字形変遷の規則性」に合致する字には「○」、合致しない字には「×」を付す。考察条件をより厳格にすると、字形の合致率は36%である。その原因は、合致しない字の大半が規整化の文字（美化文字）「b」であるためで、「b」（一百五十種）の部首を合致する字に含むと、合致率は64%になる。全部の版本の考察の結果から、どの時代の『説文』の版本を比較しても大体「合致率」は近い。e 大徐本とg大徐本の合致率は比較的高く、c段注本の美化の字例が多い。このことは、簡牘文字の変遷の過程を研究する上で、大きな参考となると考えられる。

『説文解字』（陳昌治本）五四〇部首構形考察結果



分類	数量	説明
○	197	一、形状同じ
×b	150	二、規整化（美化）
×a	73	三、形状異なる
×ab	120	四、形状異なると規整化（美化）

説文の部首を基にして各時代の文字を比較すると、秦簡と説文小篆との形状の差によって下記の四種類に分けることができる。






- 一、説文部首形状の正確性。
- 二、説文部首形状の規整化（美化）。
- 三、説文部首形状の錯誤。
- 四、説文部首形状の錯誤かつ規整化（美化）。







一、説文部首形状の正確性







正確な部首の形状の字「〇」は一九七字ある。








卷七上穀部、穀（)と卷九下岫部、岫（)の二つは字例がない。





以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表2・2・1)

卷二上牛部、「牛」、『説文』はに作り、西周早期の『叔簋』はに作り、秦簡はに作り、秦印は、に作り、字例と形状が共通している。

卷二上此部、「此」、『説文』はに作り、西周晩期の『此簋』はに作り、戦国晩期の『安邑下官壺』はに作り、秦簡はに作る。「訾」、秦印はに作る。「柴」、戦国晩期の『柴内又戈』はに作る。他の字例及び説文の形状と同じである。

卷二下是部、「是」、『説文』はに作り、西周早期の『毛公鞶方鼎』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、秦簡はに作り、秦印はに作り、「提」、秦印はに作る。字例と形状が共通している。








卷三上言部、「言」、『説文』はに作り、西周晩期の『辭从盥』はに作り、秦簡はに作り、秦印は、に作る。以上の分析を通じて、「言」の、などの形状は正しい構形である。


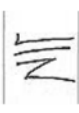



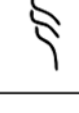
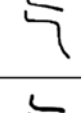
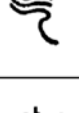
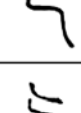
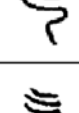
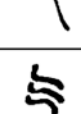
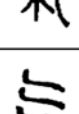
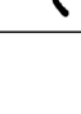

卷三上共部、「共」、『説文』はに作り、西周中期の『善鼎』はに作り、秦簡はに作り、秦封泥はに作る。『説文』小篆の形状が正確であると考えらる。








二、説文部首形状の規整化(美化)









規整化(美化)の字「×」は一五〇字ある。

以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表2・2・2)









卷一上気部、「气」、「説文」はに作り、西周早期の『天亡簋』はに作り、秦簡はに作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、北宋の『夢英篆書千字文』はに作り、気の上はに作り、字体の規整化がはつきり見える。表中、「d 小徐」がに作るの特別な字例である。




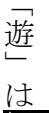


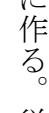

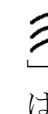
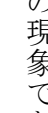
蒼頡篇			008 气
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐





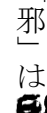





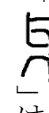

卷二上走部、「走」、「説文」はに作り、西周中期の『虎簋蓋』はに作り、秦簡はに作り、秦封泥は、に作る。北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り。宋の『説文偏旁字源』はに作る。








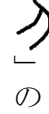

に作る。「起」、秦簡は、に作り、秦印はに作る。なお、唐の『三墳記碑』はに作る。「趙」、秦印は、、に作る。「越」、秦印はに作る。以上の字例では、走字の上部は「火、火、火」に作る。ただ、「火」の様な形状ならば、規整化の現象である。右上の屈折は不必要なものである。

蒼頡篇			026 走
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

卷二下走部、「走」、「説文」はに作り、秦簡はに作る。「過」、西周早期の『過伯簋』はに作り。「遇」、秦印はに作る。「連」、秦印は、に作る。「道」、秦印は、に作る。

る。「遏」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作る。「進」、唐の『三墳記碑』はに作る。「遊」はに作る。「遺」、唐の『摛先瑩記碑』はに作る。「道」はに作る。「遇」はに作る。「造」はに作る。従って、「」形状が正確なものであると考えている。「」は規整化の現象である。

卷二下牙部、「牙」、『説文』はに作り、西周晩期の『展敖簋蓋』はに作り、春秋早期の『弔牙父鬲』はに作る。「穿」、秦簡はに作る。「邪」はに作る。「穿」、秦印は、、「」に作り、「邪」、秦封泥はに作る。「穿」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作る。「」は規整化の現象であり、「」の形状が正確であると考えられる。









卷四下刀部、「刀」、『説文』はに作り、甲骨(合22376)はに作り、秦簡はに作る。「利」、春秋晩期の『利戈』はに作り、秦印は、に作る。「剛」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作る。刀字「」の形状が正確であると考えられる。「」は規




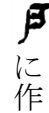

整化の現象である。

三、説文部首構成の錯誤

形状錯誤の字「x_a」は七十三字ある。

以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表2・2・3)




卷三上異部、「異」、『説文』はに作り、西周早期の『作冊大方鼎』はに作り、『石鼓文』はに作り、秦簡はに作り、秦印はに作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、唐の『摛先瑩記碑』はに作り、北宋の『夢英篆書千字文』はに作る。これらによって、「異」の中の「大」の形状は正確であると考えられる。



卷十二上戸部、「戸」、『説文』はに作り、商の『肆作父乙簋』はに作り、戦国晩期の『右嗣鼎』はに作り、秦簡はに作り、唐の『三墳記碑』はに作る。「篇」、唐の『摛先



瑩記碑』はに作り、「遍」はに作る。李陽冰の石刻文字、



秦簡文字形状が正確であると考えられる。










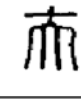


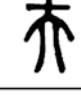

卷十下夫部、「夫」、「説文」はに作り、西周早期の『大盂鼎』

はに作り、秦簡はに作り、秦印はに作り、漢の『筭少

夫鼎』はに作り、漢の『二年酒鎗』はに作る。唐の『栖先

瑩記碑』はに作り、宋の『夢英篆書千字文』はに作り、




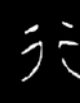
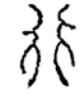





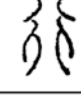
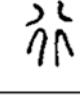
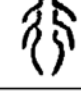
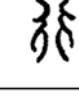
宋の『夫子廟碑』はに作り、宋の『太夫人陳氏墓誌銘』はに作る。宋時代から「夫」の形状が誤っている事がわかる。

蒼頡篇			403 夫
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐



四、説文部首形状の錯誤と規整化

形状の錯誤と規整化（美化）の字「X_{ab}」は一二〇字ある。





以下に、摘録した字例の解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。（表2・2・4）














蒼頡篇			037 行
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐







卷二下行部、「行」、「説文」はに作り、西周早期の『呂行壺』

はに作り、西周中期の『史牆盤』はに作り、春秋早期の『黃

君孟鑑』はに作り、秦簡はに作り、戦国晩期の『新郢虎符』

は  に作る。唐の『三墳記碑』は  に作る。「b 小徐」と「d 小徐」は  と  に作る。二つの形状が正確であると考えられる。他の版本は形状間に違いがあり、規整化（美化）の現象である。

卷四上習部、「習」、『説文』は  に作り、甲骨文は  に作り、秦簡は  に作り、戦国璽印は  に作り、『易經殘石』は  に作る。『五一廣場後漢簡（壹）』は  に作り、宋の『夢英篆書千字文』は  に作る。さらにほかの「羽」の形状から見ると、「翟」、秦印は 、 に作り、「翁」は 、 に作る。「翦」は  に作る。「曜」、唐の『三墳記碑』は  に作る。以上の多くの字例から「羽」の形状が正確であると考えられる。

卷十下非部、「非」、『説文』は  に作り、西周中期の『習鼎』は  に作り、秦簡は  に作り、漢の『熹平石經『易』殘石』は  に作り、漢の『正始石經』は  に作り、唐の『拓先絜記碑』は  に作る。宋時代から「非」の形状は誤っている事がわかる。

五、規整化（美化）の分類

白川靜氏は次のようにいう。

文字の形象は、構造的にはほとんど變ることなく今日にまで傳えられてきたが、説文の字形研究が今もなお不朽の生命をもちうるのは、やはりその方法が正しかったからであるとしなければならない。説文ののちにも、説文の範圍の外に字形學を試みるものが、なかったわけではない。²²

現在のところ、『説文』小篆の形状間の違いが占める割合について統計を取った人はいない。本稿で、『説文』小篆の字形を考察する上で、近年中華書局から影印された「一字一行本」（陳昌治本）を使用し、五四〇部首と單字

の二段階で考察した。(特に、「篆文」だけで表し、「籀文」、「古文」は、字形考察の範囲には入れていない)

I 第一段階(五四〇部首)

『説文』は、文字の構造的要素として、五四〇部を建てている。そして九三三三字が、それぞれ意符としての部首に属している。部首字には、それ以上に分析を加えがたい単位の文字、あるいはその形に繋属する文字があるとき、これを部首とする。牛・口は単體の字であり、告・哭は複體の字であるが、告・哭には譽・喪のように繋属すべき文字があるので、これを部首字とするのである。²³

数年かけて作成したデータベースを活用して統計を見ると、『説文』所収の字頭は九八三三字ある。五四〇部首

を考察するために、上述した対照の文字を表にして比較した。

すなわち、商周文字、『説文』、秦簡文字の三つに、近年大量に出土している秦漢墨跡文字を加えて、『説文』五四〇部首考察表²⁴と『説文』五四〇部首数量排行を編成した。それによって、

正確な部首の構形(一九九個)が、四〇四一字ある。間違った部首の構形(三四一個)が、五七九二字ある。ことが判明した。

「字形変遷の規則性」に合致するのは「〇」、合致しないのは「×^b」、「×^a」、「×^{ab}」。要するに、考察条件はより厳格であり、字形の合致率36%である。その原因は、合致しない字の大半は美化文字「b」であり、美化「b」(150種)の部首は合致に含まれていて、合致率64%であ

る。

II 第二段階（單字・部件）

第一階段で五四〇部首を考察した結果、間違った部首の構形は五七九五字があった。裘錫圭氏、李家浩氏、杜忠誥氏、林進忠氏などの学者の論考では、「卑」、「孝」、「畀」、「曹」、「巢」、「帶」、「斗」、「番」、「非」、「專」、「畐」、「高」、「行」、「曷」、「段」、「京」、「弓」、「留」、「龍」、「婁」、「麥」、「矛」、「卯」、「鼻」、「旁」、「皮」、「畏」、「升」、「畏」、「攸」、「酉」、「帚」、「耑」、「𠂔」などの字を再考察している。これらを加えた結果、間違った字形は四一七字増えて、總數六二〇九字になる。

字形を考察する過程において、美術化（美化）文字が発見されている。象形から幾何圖形への変化は、字体の変化の過程において、最も容易に見て取ることのできるものである。一部の「小篆」や「鳥蟲文字」の外形は美

術的のようだが、その性質は同じではないと考えられる。

林素清は『春秋戦国美術字體研究』で、

文字が使用されるのは、よく演變の状態にあり、商周からは繁雜なものと簡潔なものが入り乱れ、変化は多いが、基本的には一つの系統が受け継がれ、一つの定型になりつつある。春秋戦国時代になると、漢字の形体にまた大きな変化が起こる。それは伝統で、明らかに字体の美化が重視され始め、瘦長体、鳥蟲書など各形体に裝飾性が加味され、各類型の筆画に多くの変化が現れるなど、その裝飾と美化の趣は十分に濃くなっている。この類型の字体は純粹に言語を記録するという機能から、徐々に文飾の作用を兼ね備えた芸術品へと演變していったと言

と述べている。

美術的な性質をもった文字には、文字自体の構造とは関わりのない、単なる装飾にすぎない部分があるため、分析する時にはそれらをきちんと区別する必要がある。まず商周文字と対照し、次に他のすでに識別された秦簡文字と比較対照する必要がある。


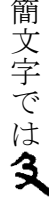

『説文』をみると、一部の文字は明らかに美術化の傾向が現れている。たとえば、ある篆文は字形が特に細長く、筆画はしばしば故意に曲げた形にしている。







筆画を故意に曲げた形にするのは、象形のために明らかに曲がりくねるのとは別のことなのである。

例えば、「于(于)」、「考(考)」、「夸(夸)」、「刀(刀)」、「斤(斤)」、「六(六)」、「戊(戊)」、「氏(氏)」、「西(西)」

などの字がそうある。

III 規整化の字形分類

真つ先に解決すべき問題は、美化文字の評価基準が何なのかである。例えば「及」は、西周金文では (保貞) に作り、秦簡文字では (睡虎地秦簡) に作り、説文小篆では に作る。

「初」は、西周金文では (御正衛簋) に作り、秦簡文字では 「初」は、西周(睡虎地秦簡) に作り、説文小篆では に作る。「斤」は、西周金文では (征人鼎) に作り、秦簡文字では (睡虎地秦簡) に作り、説文小篆では に作る。

古文字の形状中、文字を書く上で不必要な筆画や湾曲があるとするならば、商周文字などの変遷の過程を参考にした後に、異なる形状のものを判断する必要がある。例えば、戈字の右上の屈折は不必要なものであり、刀、斤の上部の湾曲も不必要なものである。上に挙げた字形の対照から、そのことがはっきりと見て取れる。

先に挙げた三つの考察表を根拠にして、以下に十五種

類に分けて、美化文字の変遷状況を確認する。

- ① 「㇀」形、于(㇁)、考(𠄎)、夸(夸)などの字。
- ② 「㇂」、「㇃」形、木(木)、竹(竹)などの。
- ③ 「㇄」、「㇅」形、甲(甲)、卑(卑)、凶(凶)、甸(甸)、敬(敬)、有(有)、夕(夕)などの字。
- ④ 「㇆」形、人(人)、身(身)、及(及)、死(死)、魚(魚)、女(女)などの字。
- ⑤ 「㇇」、「㇈」、「㇉」形、刀(刀)、斤(斤)、六(六)、戊(戊)、氏(氏)、西(西)などの字。
- ⑥ 「㇊」形、衣(衣)などの字。
- ⑦ 「㇋」、「㇌」形、走(走)、行(行)、建(建)、欠(欠)、无(无)、斗(斗)、升(升)などの字。
- ⑧ 「㇍」、「㇎」形、卯(卯)、留(留)、坐(坐)、などの字。

- ⑨ 「㇏」、「㇐」、「㇑」形、方(方)、走(走)、非(非)、師(師)、心(心)、戈(戈)などの字。

- ⑩ 「㇒」形、雲(雲)、鬼(鬼)などの字。
- ⑪ 「㇓」形、呂(呂)、糸(糸)、系(系)、樂(樂)などの字。

- ⑫ 「㇔」形、羽(羽)などの字。

- ⑬ 「㇕」形、龍(龍)、與(與)などの字。

- ⑭ 「㇖」、「㇗」形、門(門)、戸(戸)、阜(阜)などの字。

- ⑮ 「㇘」形、没(没)、宣(宣)、垣(垣)などの字。

なお、この十五種類以外に、「構形」の間違いがあるのは、央(央)、大(大)、夫(夫)、昇(昇)、異(異)、高(高)、畱(畱)、京(京)、并(并)、奪(奪)、奮(奮)、専(専)、扈(扈)などの字である。

従って、目下、『説文』に見える字形違いの総数は六一九八字前後であると述べている。つまり、さらに考察に

多くの時間を費やす必要がある。これまで述べたことに基づけば、一歩進めて、『説文』（陳昌治本）は後世に伝わって刊刻された字書であるため、単字の明確な間違いの総数は多く、やはり秦漢時代の状況を反映していないと言えよう。










第三節 『説文』小篆書体の考察

一、「重複字」と「重文」

本節では、小篆体の考察と検討範囲は原則的に「篆文」とし、籀文と古文を含まない。小篆体を考察する前に、まず『説文』の「重複字」と「重文」を考察する。

「重複字」とは、字頭の重複を指し、同一字頭を別の場所に配置することである。「重文」とは、一つの文字が違う書体又は字形を持つことを指し、七種類ある。例えば、「古文」、「奇字」、「籀文」、「篆文」、「或體」、「俗字」、「今文」である。

『説文』（陳昌治本）中で、同じ構形であったり、「古文」や「籀文」の名称の可能性もある。

例えば、卷二上口部、「嘯」、篆文は  に作り、籀文は  に作る。卷八下欠部、「歎」、篆文は  に作る。卷二下彳部、「得」、篆文は  に作り、古文は  に作る。卷八下見部、「得」、篆文は  に作る。卷十二下女部、「嬀（嬀）」、篆文は  に作り、籀文は  に作る。卷十二下女部、「嬀」、篆文は  に作る。以上の字例を証明することができると考えている。

5526 歎	0866 嘯(歎)	字頭
卷八下 欠部	卷二上 口部籀文	卷部首
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

重複字は、吹、右、否、𠵽(吁)、述、誤、誑、白、敖、竈(竈)
 (窮)、愷、大、塗の十三字がある。

8225 變	8161 孀(變)	字頭
卷十二下 女部	卷十二下 女部 <small>籀文</small>	卷部首
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

5459 尋(得)	1253 得	字頭
卷八下 見部	卷二下 彳部 <small>古文</small>	卷部首
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

5501 吹	0828 吹	字頭
卷八下 欠部	卷二上 口部	卷部首
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

そのうち、卷六下邑部、「竈」は竈に作る。卷七下穴部、「竈」は竈に作り、秦簡は竈に作り、『泰山刻石』は竈に作る。稿者は、「竈」と「竈」とは同じ字であると考えている。

「重文」の中で、形状が同じ字例は、難、𡗗、𡗘、尋、𡗙、劇、𡗚、梃、椶、院、輟、沿、變、蛾、蠶(螫)、螫など十五字ある。

その他の字例は、本章の最後に付してある。(表 2・3・2 重文の字形表を参照)

1896 右	0873 右	字頭
卷三下 又部	卷二上 口部	卷部首
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

二、間違った小篆の形状

すでに『説文』部首の形状の差を対照したが、ここでは小篆の形状を詳しく分析する。

例えば、「同」は、『石鼓文』はに作り、『説文』はに作り、秦簡はに作る。「桐」は、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、「興」はに作る。

「同」の形状の字例は、迴()、衎()、詞()、興()、眀()、筒()、桐()、駟()、恫()、洞()、鯛()、恫()、嬭()、恫()、










銅(銅)など十五字ある。



以下に、いくつかの文字を摘録し、その他は字形表として本章の最後に付してある。



卷九上卯部、「卿」、『説文』はに作り、西周晩期の『毛公鼎』はに作り、春秋の『曾伯陔壺』はに作り、戦国中期の『鞅方升』はに作り、戦国中期の『秦封宗邑瓦書』はに作り、秦簡はに作り、唐の『三墳記碑』はに作る。




以上から、卿のなかの「貞」は、の形状が正しい。




蒼頡篇			506 亞
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐
















卷十四下亞部、「亞」、『説文』は  に作り、西周中期の『史牆盤』は  に作り、宋の『説文偏旁字源』は  に作る。「惡」、秦簡は 、 に作り、「晉」、は  に作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は  に作る。「惡」、宋の『夢英篆書千字文』は  に作り、『説文』は  に作る。字例を配列して見れば、理解することができる。

「j 大徐」「506 亞」字前中後各作「、、」。




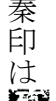






「e 大徐」「506 亞」字前中後各作「、、」。



「g 大徐」「506 亞」字前中後各作「、、」。

「f 大徐」「506 亞」字前中後各作「、、」。

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			506 亞
									
			g 大徐			f 大徐			
									










卷三下鬲部、「鬲」、『説文』は  に作り、西周晩期の『呂王鬲』






はに作る。「漱」、秦簡はに作り、「黼」はに作る。「鬲」、秦印はに作る。「鬻」はに作る。「黼」はに作る。「融」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作る。「獻」はに作る。「鬻」はに作る。「鬲」、宋の『説文偏旁字源』はに作る。従って、「鬲」の形状が正確であり、「鬲」の形状は錯誤と考えられる。





卷五上曰部、「曷」、「説文』はに作る。「偈」、西周早期の『弔偈父觶』はに作る。「謁」、秦簡はに作る。「謁」はに作る。「謁」、秦印はに作り、「謁」はに作り、「謁」はに作る。「謁」、秦封泥は、に作る。「謁」、『馬王堆簡帛』はに作る。「謁」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、「謁」はに作り、「謁」はに作り、「謁」はに作り、「謁」はに作る。(表 2.3.3 『蒼頡篇』の「曷」と五種『説文』字形表を参照)

「曷」について、説文の形状は西周文字や秦簡の形と明らかに

異なることがわかる。字例に基づく、次のように変遷したと考えられる。「𠂔、𠂕、𠂖、𠂗、𠂘、𠂙」。「曷」の上は「𠂔」に作り、下は「𠂕」に作る。これは正確の可能性が非常に低いと考えられる。














卷三下皮部、「皮」、「説文』はに作り、西周中期の『九年衛鼎』はに作り、春秋の『者盞鐘』はに作り、秦簡はに作る。「坡」、春秋晚期の『工尹坡盞』はに作る。「被」、戦国晚期の『新郢虎符』はに作る。「頗」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、「波」はに作り、「陂」はに作る。以上の分析を通じて、「皮」は、「𠂔、皮、皮」などの形状は正しい構形である。『説文』小篆の形状が錯誤であると考えている。









卷十四下丑部、「羞」、「説文』はに作り、商の『羞方鼎』はに作り、西周中期の『羞鼎』はに作り、西周晚期の『不異簋蓋』はに作り、春秋晚期の『鄭弔夔父鬲』はに作る。

秦簡はに作り、秦印はに作り、秦封泥は、に作り

り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は𠄎（誤）に作る。「丑」は、『説文』以外の字例は見えず、「又」が多い。よって、『説文』小篆の形状は錯誤であると考えられる。




「篆」に対する理解の殆どは、宋、明、清代の学者たちの論点から来ている。従って、当時の学者の篆書体への認識程度の証として『説文』の各版本も分析してきた。同じ文字でも、「小徐本」或は「宋本」の『説文』では形状が正確であったものを、清代学者による『説文』では形状を誤ったことが分かった。

例えば、「子」は「d小徐」はに作り、「e大徐」はに作り、「f大徐」はに作り、「j大徐」はに作る。「弄」は「b小徐」はに作り、「d小徐」はに作り、「e大徐」はに作り、「f大徐」はに作り、「j大徐」はに作る。「亞」は「b小徐」はに作り、「d小徐」はに作り、「j大徐」はに作り、「行」は「b小徐」はに作り、「d小

徐」はに作り、「j大徐」はに作る。「米」は「e大徐」はに作り、「j大徐」はに作る。「欠」は「d小徐」はに作り、「j大徐」はに作る。「齊」は「b小徐」はに作り、「j大徐」はに作る。

三、正確な小篆の形状

部首の形状は正しいが、ほかの部分（部件）が間違った可能性がある字、例えば、「示」は、部首は正しいが、「福（福）」「留（留）」「襍（襍）」は、部首（襍）などの字は、錯誤の形状である。錯誤の部分は、畐（畐）、「留（留）」、「會（會）」、「周（周）」である。また、「丑」は、部首は正しいが、羞（羞）の形状は錯誤である。「宀」は、部首は正しいが、宜（宜）の形状は錯誤である。このような字例は四百字ぐらいある。

卷五下韋部、「韋」、『説文』はに作り、甲骨（合4476）はに作り、秦簡はに作る。「韞」は、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は

𦉳に作る。「𦉳」は𦉳に作る。「𦉳」は𦉳に作る。以上の字例を証明することができると考えている。

卷十二下氏部、「氏」、「説文」は𦉳に作り、西周中期の『平簋』は𦉳に作り、秦簡は𦉳に作り、秦印は𦉳、𦉳、𦉳に作る。「氏」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は𦉳に作る。「説文」小篆の形状が正確であると考えられる。

卷十四上金部、「金」、「説文」は𦉳に作り、西周早期の『過伯簋』は𦉳に作り、西周晩期の『史頌簋』は𦉳に作り、『毛公鼎』は𦉳に作り、秦簡は𦉳に作り、秦印は𦉳、𦉳に作る。「鑄」、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は𦉳に作る。「鋏」は𦉳に作る。「鑲」は𦉳に作る。以上は正確な形状であると考えられる。

卷十四下寅部、「寅」、「説文」は𦉳に作り、西周晩期の『元年師旋簋』は𦉳に作り、秦簡は𦉳に作り、秦印は𦉳、𦉳に作る。これも『説文』小篆の形状が正確であると考えられる。

第四節 小篆書体の美化



字形の分析研究では、書体が明確かつ規律的に配置又は調整されることを、「規整化」又は「美化」と呼んでいる。

蒼頡篇			287 人
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐



1. 「人」字の規整化


例えば、「人」字の「c 段注」と「j 大徐」（陳氏一篆一行本）の規整化（美化）は最も明らかである。それ以外の説文の版本全ての形状と一致して規整化もなく、小篆書体の本来の様相を保持している。

「人」の規整化について、「夾」字から見るができる。卷十




下大部「夾」、『説文』はに作り、西周早期の『大盂鼎』は

に作り、西周早期の『夾作彝壺』はに作り、西周晚期『禹鼎』

はに作り、西周晚期の『四十二年逯鼎丙』はに作る。秦簡

はに作る。「頰」、秦印はに作る。「嫉」、北大藏前漢竹書『蒼

頡篇』はに作る。「慝」はに作り、「歾」はに作り、「挾」

はに作り、「篋」はに作り、「缺」はに作る。秦簡から前漢

の『蒼頡篇』に至るまで、夾の人形の形状は同じである。

『説文』に、夾形を含む字例は、莢(莢)、啖(啖)、鞞(鞞)、

𦉳(𦉳)、翬(翬)、𦉴(𦉴)、邲(邲)、痲(痲)、俠

(俠)、頰(頰)、頰(頰)、𦉵(𦉵)、夾(夾)、慝(慝)、

瘞(瘞)、𦉶(𦉶)、𦉷(𦉷)、𦉸(𦉸)、挾(挾)、𦉹(𦉹)、

(挾)、𦉺(𦉺)、篋(篋)、𦉻(𦉻)、𦉼(𦉼)、瘞(瘞)、瘞(瘞)、

歾(歾)、缺(缺)、𦉽(𦉽)、𦉾(𦉾)、𦉿(𦉿)等二十九字ある。

人形のもとには「𦉿、𦉿」に作り、『説文』は「𦉿」に作る。この


様な形状ならば、規整化の現象である。

2. 「規整化」の再検討の重要性

稿者は、『説文』全体の「規整化」の分析をすれば、『説文』の

小篆の正確な字形を解明することができる事を発見した。「𦉿」と

「𦉿」を用いて証明してみたい。

『説文』の「𦉿」はに作る。例えば、歾(歾)、沒(沒)、

𦉿(𦉿)、玃(玃)、頰(頰)など五字ある。

『説文』の「𦉿」はに作る。例えば、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、

𦉿(𦉿)、宣(宣)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、










𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)、

𦉿(𦉿)、𦉿(𦉿)など十六字ある。

右のように、「𦉿」と「𦉿」の字形の一部が同化していることが

はっきりと見える。「𦉿」の起源については、宣と𦉿二つの字を見

れば、理解することができる。

卷七下、亼部「宣」は、西周晩期の『邠簋』はに作り、西周晩期の『虢季子白盤』はに作り、西周晩期の『虢宣公子白鼎』はに作り、『石鼓文』はに作り、秦簡は、に作り、秦印は、に作り、『張遷碑』はに作る。

卷二上、走部「超」は、商の『亞宣(罍)』父丁簋』はに作り、西周中期の『史牆盤』はに作り、西周中期の『癉鐘』はに作り、西周晩期の『虢季子白盤』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、戦国の『曾姬無卣壺』はに作り、戦国晩期の『陳侯因咨敦』はに作る。

以上の字例に基づく「亼」の字の演変の軌跡を見て取ることができ、次のように推測する事ができる。






それでは、後漢許慎の『説文』が、西周文字を採用する可能性があるのか。稿者はその可能性は低いと考える。根拠は二つあり、

第一に、西周から後漢まで文字を傳抄したため、本来の姿を保存することはできないこと。第二に、秦の簡牘と印章の「亼」は「亼」に作っていること。よって、『説文』の字形と西周の字形が似ている理由は、後漢以後の研究者が、青銅器銘文上の文字を採用したためであり、本来の『説文』の字形ではないと判断した。

例えば『増廣鐘鼎篆韻』²⁶は次のように表している。








その他、『説文』の「亼」の部分(部件)については、卷九上、勺部に旬(旬)字を発見した。篆文はに作り、古文はに作る。古文の亼はではない。ある文字の小徐本と汲古閣本は規整化していない。「陳氏一篆一行本」は規整化する例が

c 類（準、衡、懲）のみが正しい形状である事が分かり（「行」については第二章第二節四を参照）、^c 以外の他の種類はどれも「規整化」の現象がある。よって、『説文』小篆の形状の研究から字形の「規整化」の有無が非常に重要である事が再度証明できる。

小篆書体の「規整化」の有無を知れば、文字の本来の形状の復元、そして原始文字がどのような変化をして「規整化」を形成したかを理解することができるので、このような分類は有意義であり、必要であると考ええる。

表 2 · 1 · 1 『說文解字』唐寫本と宋刻本

<p>05 櫟 去又ㄛ、</p>  <p>各他 夜行所擊者从木橐聲易曰重門擊橐</p>	<p>04 柶 一ノ</p>  <p>刀 落也從木 聲讀若池</p>	<p>03 柵 尸マ</p>  <p>又 編五木也從 木剛省聲</p>	<p>02 楔 丁一セ</p>  <p>先結 楔也從 木契聲</p>	<p>01 繼 ㄩ一マ</p>  <p>子 楔也從 木戴聲</p>
--	---	--	--	--

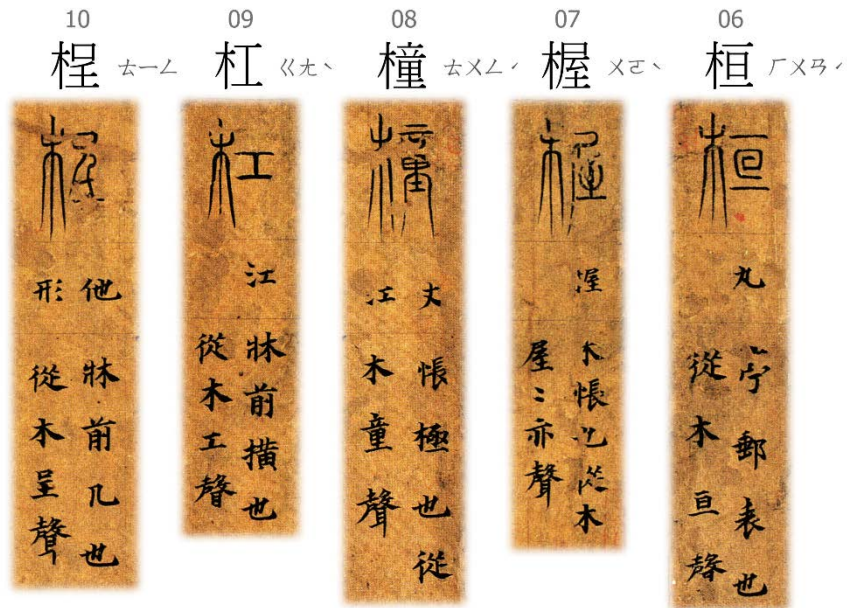
繼 楔也从木戴聲子廉切

楔 楔也从木契聲先結切

柵 編樹木也从木从冊冊亦聲楚革切

柶 落也从木也聲讀若池余切

櫟 夜行所擊者从木橐聲易曰重門擊橐他各切



程 程 狀前几从木呈聲他丁切

杠 杠 狀前橫木也从木工聲古雙切

橦 橦 帳極也从木童聲宅江切

握 握 木帳也从木屋聲於角切

桓 桓 亭郵表也从木巨聲胡官切








牀 安身之坐者从木月聲徐緒曰左傳遠子馮註病榻席也故从月月則牀之省象人衾身有所倚箸至於牀莊嚴之屬並當从牀省聲李陽冰言木右爲片其書亦異故知其妄任莊切

枕 臥所薦首者从木兂聲章社切

械 械箭囊器也从木威聲於非切

櫛 匱也從木賣聲一曰木名又曰大椀也徒谷切

櫛 梳比之總名也从木節聲阻瑟切

20 𦉰 <small>くロ</small>	19 鐻 <small>ヲヌ、</small>	18 榼 <small>ヲヌ、</small>	17 枹 <small>フセ、</small>	16 梳 <small>フメ</small>
				
于几 木象形 目聲	從金 擗或	豆奴 木辱聲	洽江 木合聲	疏 木疏省聲

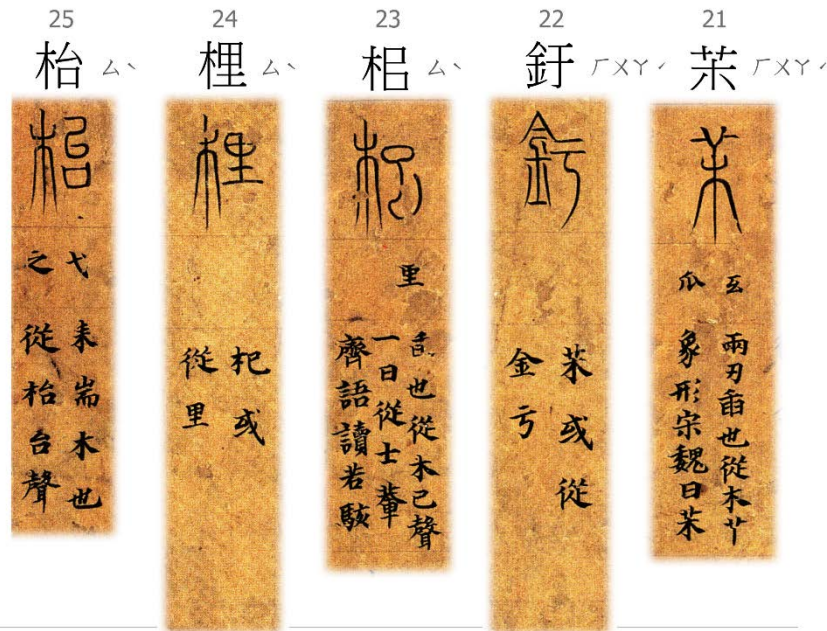
𦉰 𦉰 菜甬也从木入象形目聲舉朱切

鐻 鐻 或从金

榼 榼 樽器也从木辱聲奴豆切

枹 枹 劔柙也从木合聲胡甲切

梳 梳 理髮也从木疏省聲所蒞切



枱
枱 枱 末 前 也 从 木 台 聲 弋 之 切

裡
裡 或 从 里

枱
枱 枱 雨 也 从 木 旨 聲 一曰 從 土 齊 聲 人 語 也 俗 作 裡 詳 里 切

鈎
鈎 或 从 金 从 于

茱
茱 茱 兩 刃 雨 也 从 木 艹 象 形 宋 魏 曰 茱 也 互 瓜 切

𣎵 △、



𣎵
𣎵 或从金 𣎵 籀文从𣎵

表 2・1・2 十種版本の形状の相違の字形表

高麗篇			036	延
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			029	步
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			017	采
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			026	走
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			033	走
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			037	行
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			035	律
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			138	刃
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			108	羽
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			137	刀
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			107	習
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			051	句
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			052	句
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	
高麗篇			162	豈
秦簡			西周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蒼頡篇			209 才
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			195 齋
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			184 入
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			164 豐
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			211 之
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			202 弟
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			192 早
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			179 豐
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			257 米
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			241 夕
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			238 有
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			213 出
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			265 齊
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			247 齊
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			239 明
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蒼頡篇			237 月
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

蓋頭篇			290	从
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			287	人
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			285	附
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			274	广
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			292	北
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			289	匕
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			286	𠂇
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			284	白
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			346	鬼
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			322	次
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			309	舟
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			293	丘
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			347	由
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			323	无
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			320	欠
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭篇			300	衣
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

蓋頭編		401	齊
秦簡		商周	
f 大徐		齊	a 北師
g 大徐		齊	b 小徐
h 大徐		齊	c 段注
i 大徐		齊	d 小徐
j 大徐		齊	e 大徐

蓋頭編		389	大
秦簡		商周	
f 大徐		大	a 北師
g 大徐		大	b 小徐
h 大徐		大	c 段注
i 大徐		大	d 小徐
j 大徐		大	e 大徐

蓋頭編		384	黑
秦簡		商周	
f 大徐		黑	a 北師
g 大徐		黑	b 小徐
h 大徐		黑	c 段注
i 大徐		黑	d 小徐
j 大徐		黑	e 大徐

蓋頭編		367	蜀
秦簡		商周	
f 大徐		蜀	a 北師
g 大徐		蜀	b 小徐
h 大徐		蜀	c 段注
i 大徐		蜀	d 小徐
j 大徐		蜀	e 大徐

蓋頭編		402	丁
秦簡		商周	
f 大徐		丁	a 北師
g 大徐		丁	b 小徐
h 大徐		丁	c 段注
i 大徐		丁	d 小徐
j 大徐		丁	e 大徐

蓋頭編		397	幸
秦簡		商周	
f 大徐		幸	a 北師
g 大徐		幸	b 小徐
h 大徐		幸	c 段注
i 大徐		幸	d 小徐
j 大徐		幸	e 大徐

蓋頭編		385	囟
秦簡		商周	
f 大徐		囟	a 北師
g 大徐		囟	b 小徐
h 大徐		囟	c 段注
i 大徐		囟	d 小徐
j 大徐		囟	e 大徐

蓋頭編		377	犬
秦簡		商周	
f 大徐		犬	a 北師
g 大徐		犬	b 小徐
h 大徐		犬	c 段注
i 大徐		犬	d 小徐
j 大徐		犬	e 大徐

蓋頭編		422	雨
秦簡		商周	
f 大徐		雨	a 北師
g 大徐		雨	b 小徐
h 大徐		雨	c 段注
i 大徐		雨	d 小徐
j 大徐		雨	e 大徐

蓋頭編		420	谷
秦簡		商周	
f 大徐		谷	a 北師
g 大徐		谷	b 小徐
h 大徐		谷	c 段注
i 大徐		谷	d 小徐
j 大徐		谷	e 大徐

蓋頭編		408	心
秦簡		商周	
f 大徐		心	a 北師
g 大徐		心	b 小徐
h 大徐		心	c 段注
i 大徐		心	d 小徐
j 大徐		心	e 大徐

蓋頭編		403	夫
秦簡		商周	
f 大徐		夫	a 北師
g 大徐		夫	b 小徐
h 大徐		夫	c 段注
i 大徐		夫	d 小徐
j 大徐		夫	e 大徐

蓋頭編		426	燕
秦簡		商周	
f 大徐		燕	a 北師
g 大徐		燕	b 小徐
h 大徐		燕	c 段注
i 大徐		燕	d 小徐
j 大徐		燕	e 大徐

蓋頭編		421	夂
秦簡		商周	
f 大徐		夂	a 北師
g 大徐		夂	b 小徐
h 大徐		夂	c 段注
i 大徐		夂	d 小徐
j 大徐		夂	e 大徐

蓋頭編		413	夂
秦簡		商周	
f 大徐		夂	a 北師
g 大徐		夂	b 小徐
h 大徐		夂	c 段注
i 大徐		夂	d 小徐
j 大徐		夂	e 大徐

蓋頭編		406	囟
秦簡		商周	
f 大徐		囟	a 北師
g 大徐		囟	b 小徐
h 大徐		囟	c 段注
i 大徐		囟	d 小徐
j 大徐		囟	e 大徐

篆韻篇			471	虫
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			461	齒
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			438	門
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			435	齒
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			476	龜
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			462	瓦
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			460	曲
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			437	戶
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			497	矛
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			492	勺
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			488	力
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			477	龜
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			506	亞
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			496	斗
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			490	金
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			478	卯
秦簡				商周
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇		527	壽
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		530	賈
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		520	庚
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		526	了
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		516	丁
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		518	己
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		513	甲
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		515	丙
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		539	戌
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		540	亥
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		537	酉
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		538	酉
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		535	未
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

篆韻篇		536	申
秦簡		商周	
f 大徐		a 北師	
g 大徐		b 小徐	
h 大徐		c 段注	
i 大徐		d 小徐	
j 大徐		e 大徐	

表 2・1・3 十種版本の形状が一致する字形表

音韻篇			068 晨
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			055 卅
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			043 龠
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			039 牙
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			071 萬
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			065 異
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			048 谷
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			041 疋
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			119 鳥
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			101 眉
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			090 皮
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			072 鬻
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			120 鳥
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			105 鼻
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			091 鬻
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

音韻篇			082 畫
篆簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆隸篇			187	高
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			183	倉
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			133	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			123	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			189	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			186	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			165	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			124	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			264	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			196	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			193	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			190	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			270	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			259	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			194	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆隸篇			191	𠂔
委簡			商周	
f 大徐			a 北師	
g 大徐			b 小徐	
h 大徐			c 段注	
i 大徐			d 小徐	
j 大徐			e 大徐	

篆韻篇			358
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			361
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			502
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			326
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			334
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			491
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			493
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			283
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			325
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			416
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			429
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			271
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			280
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			392
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

篆韻篇			399
秦簡			商周
f 大徐			a 北師
g 大徐			b 小徐
h 大徐			c 段注
i 大徐			d 小徐
j 大徐			e 大徐

表 2・1・4 同じ版本、前、後の形状が相違する字形表

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
革	革	𠂔	革	革	革	革	革	革	070 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			革	革	革	革	革	革	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
音	音	𠂔	音	音	音	音	音	音	056 音
			g 大徐			f 大徐			
			音	音	音	音	音	音	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	071 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	063 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	088 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	073 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	128 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	074 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	160 𡗗
			g 大徐			f 大徐			
			𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	135 肉
			g 大徐			f 大徐			
			𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	164 豐
			g 大徐			f 大徐			
			豐	豐	豐	豐	豐	豐	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	152 乃
			g 大徐			f 大徐			
			𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
人	人	人	人	人	人	人	人	人	184 人
			g 大徐			f 大徐			
			人	人	人	人	人	人	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	豐	165 豐
			g 大徐			f 大徐			
			豐	豐	豐	豐	豐	豐	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
才	才	才	才	才	才	才	才	才	209 才
			g 大徐			f 大徐			
			才	才	才	才	才	才	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	179 𡗗
			g 大徐			f 大徐			
			𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	𡗗	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	237 月
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	211 之
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	238 有
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	213 出
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	247 齊
			g 大徐			f 大徐			
			齊	齊	齊	齊	齊	齊	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
明	明	明	明	明	明	明	明	明	239 明
			g 大徐			f 大徐			
			明	明	明	明	明	明	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	286 𠄎
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	241 夕
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
履	履	𧚲	履	履	履	履	履	履	308 履
			g 大徐			f 大徐			
			履	履	履	履	履	履	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
人	人	人	人	人	人	人	人	人	287 人
			g 大徐			f 大徐			
			人	人	人	人	人	人	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
儿	儿	儿	儿	儿	儿	儿	儿	儿	311 儿
			g 大徐			f 大徐			
			儿	儿	儿	儿	儿	儿	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
尾	尾	尾	尾	尾	尾	尾	尾	尾	307 尾
			g 大徐			f 大徐			
			尾	尾	尾	尾	尾	尾	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
見	見	見	見	見	見	見	見	見	318 見
			g 大徐			f 大徐			
			見	見	見	見	見	見	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	315 𧚲
			g 大徐			f 大徐			
			𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	320 𧚲
			g 大徐			f 大徐			
			𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	316 𧚲
			g 大徐			f 大徐			
			𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	𧚲	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	340 色
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	322 次
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	341 卯
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	323 无
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	366 豸
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	342 辟
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	367 𠃉
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	347 𠃉
			g 大徐			f 大徐			
			𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	𠃉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	391 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	380 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	399 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	381 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	416 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	400 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	417 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	412 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	云	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	423 雲
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	420 谷
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	435 鹵
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	422 雨
			g 大徐			f 大徐			
			雨	雨	雨	雨	雨	雨	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	450 𩇛
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	436 鹽
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	471 𩇛
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	437 𩇛
			g 大徐			f 大徐			
			𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	𩇛	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	492 勺
			g 大徐			f 大徐			
			勺	勺	勺	勺	勺	勺	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
男	男	男	男	男	男	男	男	男	487 男
			g 大徐			f 大徐			
			男	男	男	男	男	男	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	496 斗
			g 大徐			f 大徐			
			斗	斗	斗	斗	斗	斗	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
力	力	力	力	力	力	力	力	力	488 力
			g 大徐			f 大徐			
			力	力	力	力	力	力	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	519 巴
			g 大徐			f 大徐			
			巴	巴	巴	巴	巴	巴	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
亞	亞	亞	亞	亞	亞	亞	亞	亞	506 亞
			g 大徐			f 大徐			
			亞	亞	亞	亞	亞	亞	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	520 𠂔
			g 大徐			f 大徐			
			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
七	七	七	七	七	七	七	七	七	509 七
			g 大徐			f 大徐			
			七	七	七	七	七	七	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
甲	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	531 甲
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	525 子
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
酉	酉	酉	酉	酉	酉	酉	酉	酉	537 酉
			g 大徐			f 大徐			
			酉	酉	酉	酉	酉	酉	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	530 寅
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	540 亥
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	538 酉
			g 大徐			f 大徐			
			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	

b 小徐	偏旁 字源	汗簡 古文	j 大徐			e 大徐			
戌	戌	戌	戌	戌	戌	戌	戌	戌	539 戌
			g 大徐			f 大徐			
			戌	戌	戌	戌	戌	戌	

表2.2.1 説文部首形状の正確性の字形表

040 足	038 齒	032 是	031 正	030 止	027 止	024 止	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

054 十	053 古	050 尙	049 只	045 器	044 冊	042 品	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

009 士	007 珏	006 王	005 王	004 三	003 示	001 一	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

023 凵	022 凵	021 告	020 聲	019 牛	018 半	010 丨	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

084 取	083 叀	080 取	079 文	078 史	077 𠂔	076 又	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

093 取	092 女	089 寸	088 几	087 殿	086 女	085 臣	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

062 取	061 叀	060 幸	059 辛	058 音	057 誦	056 音	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

073 爪	070 革	069 麤	067 臼	066 冫	064 共	063 光	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

118 羴	117 𧠈	116 𧠉	115 羴	114 羊	113 𧠊	112 𧠋	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

140 𧠌	131 𧠍	130 𧠎	129 𧠏	127 𧠐	122 𧠑	121 𧠒	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

100 𧠓	099 目	098 𧠔	097 𧠕	096 𧠖	095 用	094 卜	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

111 𧠗	110 𧠘	109 𧠙	106 𧠚	104 白	103 目	102 𧠛	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

200 𧠜	199 𧠝	198 𧠞	197 𧠟	188 𧠠	185 𧠡	181 𧠢	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

226 𧠣	220 𧠤	217 𧠥	210 𧠦	204 𧠧	203 𧠨	201 𧠩	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

159 𧠪	150 𧠫	148 𧠬	147 工	146 𧠭	145 𧠮	144 𧠯	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

177 井	175 井	174 𧠰	172 去	171 𧠱	163 豆	160 豆	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

277 月	276 冂	275 冂	272 宀	269 冂	263 麻	262 林	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

291 比	286 帛	285 尚	282 市	281 巾	279 罔	278 罽	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

243 卣	240 卣	236 晶	232 旦	231 日	228 貝	227 貝	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

261 兂	260 凶	258 毀	249 片	246 雨	245 康	244 乃	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

388 赤	387 炎	386 焱	383 炎	382 火	370 馬	368 易	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

415 川	414 彳	411 彳	410 水	405 彳	404 立	390 亦	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

351 卣	350 山	347 卣	336 司	335 后	331 彡	305 尸	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

364 彳	362 冫	360 冫	357 石	354 厂	353 厂	352 尸	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

494 且	490 金	486 黃	485 畱	484 田	483 里	481 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

534 午	530 申	529 丑	523 壬	514 乙	507 五	498 車	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

447 卂	446 卂	442 卂	439 耳	431 卂	430 卂	422 雨	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

480 卂	479 二	459 卂	456 卂	454 卂	449 氏	448 卂	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

536 申	No.
	商周文字
	秦簡
	蒼頡篇
	摹本
	說文

表 2.2.2 説文部首形状の規整化の字形表

141 未	139 勹	138 刀	137 刀	132 死	128 攷	081 聿	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

156 号	155 号	154 可	153 写	151 日	143 竹	142 角	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

016 八	015 小	014 𠂔	013 𠂔	012 𠂔	011 𠂔	008 气	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

047 𠂔	046 𠂔	039 𠂔	033 𠂔	029 𠂔	026 𠂔	025 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

224 束	223 束	221 𠂔	216 𠂔	215 𠂔	214 𠂔	213 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

248 束	242 多	241 夕	238 夕	230 𠂔	229 𠂔	225 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

196 束	176 青	173 𠂔	170 𠂔	162 𠂔	161 𠂔	158 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

212 𠂔	211 𠂔	208 𠂔	207 束	206 𠂔	205 𠂔	202 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

303 毛	302 老	301 裘	300 衣	299 冎	298 身	297 臥	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

313 生	312 兒	311 儿	310 方	309 舟	307 尾	304 彙	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

287 人	266 非	256 香	255 非	254 秝	253 禾	250 鼎	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

296 重	295 王	294 夙	293 丘	292 北	290 从	289 匕	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

366 彘	365 豚	359 勿	356 彘	355 九	345 苟	342 辟	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

391 夬	389 大	379 夬	378 夬	377 夬	371 夬	369 象	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

327 可	324 頁	319 覞	318 見	317 亮	316 先	315 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

340 色	339 印	338 卬	337 卬	333 文	332 尪	330 須	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

453 我	452 戔	451 戔	450 氏	444 毋	443 女	441 手	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

505 叟	503 四	495 斤	492 勺	482 董	458 匚	457 亡	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

412 淵	409 澗	408 心	400 本	398 香	394 尢	393 文	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

440 既	433 至	432 不	421 火	420 谷	419 辰	418 水	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

522 辨	521 辛	518 巳	517 戌	511 內	510 九	509 七	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

540 亥	539 戌	535 兪	No.
			商周文字
			秦簡
			蒼頡篇
			摹本
			說文

表 2.2.3 説文部首形状の錯誤の字形表

183 倉	165 豐	164 豐	133 廂	120 廂	119 廂	105 鼻	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

193 富	192 阜	191 富	190 京	189 阜	187 高	186 矢	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

065 異	055 世	048 杏	043 龠	041 疋	028 屮	002 上	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

101 眉	091 蹇	090 皮	082 畫	072 蜀	071 眉	068 晨	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

399 尪	397 尪	392 天	385 囟	384 畢	367 尪	361 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

437 戶	426 燕	413 𠂔	406 囟	403 夫	402 𠂔	401 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

270 尪	264 尪	259 白	257 米	209 才	195 甫	194 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

326 尪	325 尪	284 白	283 尪	280 西	274 尪	271 尪	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							説文

538 酉	537 酉	527 酉	No.
			商周文字
			秦簡
			蒼頡篇
			摹本
			說文

478 卯	477 卯	476 卯	462 瓦	461 留	460 曲	438 門	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

526 丁	516 丁	515 丙	506 亞	502 亞	493 几	491 几	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

166 廔	152 乃	149 巫	136 筋	135 肉	134 骨	126 玄	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

052 卩	051 句	037 行	036 延	035 延	034 彳	017 采	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

184 人	182 會	180 食	179 胃	178 胃	169 饑	167 疋	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

125 采	124 采	123 采	108 羽	107 習	075 門	074 羽	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

表 2.2.4 說文部首形狀の錯誤と規整化の字形表

321 歛	320 欠	314 兂	308 隹	306 尺	288 匕	273 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

343 冂	341 卯	334 彫	329 頤	328 首	323 兂	322 次	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

237 月	235 冥	234 𠂔	233 𠂔	222 𠂔	219 𠂔	218 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

268 𠂔	267 瓜	265 𠂔	252 𠂔	251 𠂔	247 齊	239 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

425 𠂔	424 魚	423 𠂔	417 𠂔	416 泉	407 𠂔	396 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

445 𠂔	436 鹽	435 鹵	434 𠂔	429 非	428 𠂔	427 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

372 𠂔	363 𠂔	358 長	349 𠂔	348 𠂔	346 𠂔	344 包	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

395 𠂔	381 𠂔	380 能	376 𠂔	375 𠂔	374 𠂔	373 𠂔	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

500 隹	499 自	497 矛	496 𠄎	489 彘	488 力	487 男	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

520 庚	519 巴	513 甲	512 𠄎	508 六	504 𠄎	501 𠄎	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

468 𠄎	467 𠄎	466 𠄎	465 𠄎	464 𠄎	463 𠄎	455 𠄎	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

475 𠄎	474 𠄎	473 𠄎	472 𠄎	471 𠄎	470 𠄎	469 𠄎	No.
							商周文字
							秦簡
							蒼頡篇
							摹本
							說文

533 𠄎	532 𠄎	531 𠄎	528 𠄎	525 𠄎	524 𠄎	No.
						商周文字
						秦簡
						蒼頡篇
						摹本
						說文

表 2·2·5 十種『說文』五四〇部首考察表

十種『說文』五四〇部首考察表

部號	卷別	字頭	a 北師	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a字形構造 /b 美化	數量	
001	卷一上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	○	旅鼎(西周早期)	5	
002	卷一上	上(上)	上	上	二	上	上	上	上	上	上	上	下	下	上	二	×a	啟卣(西周早期)《蒼頡篇》以下替上	4
003	卷一上	示(示)	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	示	○	張家山漢簡代秦簡/商周文字「示」一式隸黨(西周中期)《蒼頡篇》以祝替示	67
004	卷一上	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	○	大孟鼎(西周早期)	1	
005	卷一上	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	○	王鼎(商代晚期)《蒼頡篇》以閏替王	3	
006	卷一上	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	○	亞麻作且丁簋(商)《蒼頡篇》以珣替玉	140	
007	卷一上	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	珽	○	以班替珽(秦印)/商周文字「珽」夾黨(西周中期)以瑟替珽《水泉子漢簡》暫35	3	

1

部號	卷別	字頭	a 北師	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a字形構造 /b 美化	數量
008	卷一上	气	气	气	气	气	气	气	气	气	气	气	气	气	气	×b	天亡簋(西周早期)	2
009	卷一上	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	士	○	殷簋甲(西周中期)《蒼頡篇》以莊替士	4
010	卷一上	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	丨	○	以中替丨/商周文字「丨」 觚(商)以中替丨《水泉子漢簡》暫3	3
011	卷一下	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	屮	×b	以毒替屮/商周文字「屮」作父戊簋(西周早期)《蒼頡篇》以毒(毒)替屮	7
012	卷一下	艸(艸)	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	×b	以草替艸/商周文字「艸」合6710《蒼頡篇》以荅(荅)替艸	458
013	卷一下	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	蓐	×b	合9493《蒼頡篇》以藹替蓐	2
014	卷一下	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	×b	以葬替艸/商周文字「葬」合18430《蒼頡篇》以葬替艸	4

2

部號	卷別	字頭	a 北胛	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量	
015	卷二上	小	川	水	水	水	水	水	水	水	水	水	小	小	小	小	x·b	農点(西周中期)	3
016	卷二上	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	x·b	作伯簋(西周早期)	12
017	卷二上	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	采	x·ab	以審替采/商周文字「采」作父乙貞(商)\《蒼頡篇》以悉替采	5
018	卷二上	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	半	○	商周文字無字例	3
019	卷二上	牛(牛)	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	○	叔簋(西周早期)\《蒼頡篇》以牝替牛	47
020	卷二上	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	犛	○	商周文字「犛」趨鼎(西周晚期)	3
021	卷二上	告(告)	告	告	告	告	告	告	告	告	告	告	告	告	告	告	○	班簋(西周中期)\《蒼頡篇》以造替告	2
022	卷二上	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	○	長子口尊(西周早期)\《蒼頡篇》以啗替口	190

3

部號	卷別	字頭	a 北胛	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量	
023	卷二上	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	凵	○	陶錄 4·45·3/商周文字「凵」(坎)合 20045 白	1
024	卷二上	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	以𠂔(𠂔)替𠂔/商周文字「𠂔(𠂔)」麗季雀父簋(西周早期)\《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	6
025	卷二上	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	x·b	合 39437\《居延新簡》EPT56.181A	2
026	卷二上	𠂔(走) (𠂔)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x·b	虎簋蓋(西周中期)	85
027	卷二上	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	止	○	蔡簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以歸替止	14
028	卷二上	址(ㄙ)	址	址	址	址	址	址	址	址	址	址	址	址	址	址	x·a	以𠂔替址(ㄙ)/商周文字「址」旅博 1298\《蒼頡篇》以登替ㄙ	3
029	卷二上	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	x·b	晉侯鉢鐘(西周晚期)	2
030	卷二上	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	○	此簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以𠂔替此	4

4

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
031	卷二下	正	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	師酉簋(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替正	2
032	卷二下	是	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	毛公鞶方鼎(西周早期)《蒼頡篇》以𠄎替是	3
033	卷二下	走(止)	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	x-b	商周文字「𠄎」𠄎伯簋(西周早期)《蒼頡篇》以𠄎替走	131
034	卷二下	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	彳	x-ab	以𠄎替彳/商周文字「後」小臣畢簋(西周早期)《蒼頡篇》以往替彳	37
035	卷二下	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	x-ab	以建替辵/商周文字「建」戎生編鐘(西周中晚期)《蒼頡篇》以建替辵	4
036	卷二下	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	辵	x-ab	以延替辵/商周文字「延」我方鼎(西周早期)《蒼頡篇》以延替辵	2
037	卷二下	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	x-ab	呂行壺(西周早期)	12
038	卷二下	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	○	合 17302《蒼頡篇》以𠄎替齒	45

5

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
039	卷二下	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	x-b	弔牙父鬲(春秋早期)/商周文字「牙」辰散簋蓋(西周晚期)《蒼頡篇》以穿替牙	3
040	卷二下	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	足	○	免簋(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替足	92
041	卷二下	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	疋	x-a	十年汧陽令戈(戰國)/商周文字「疋」合 17146《蒼頡篇》以𠄎替疋	3
042	卷二下	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	品	○	合 2811《蒼頡篇》以𠄎替品	3
043	卷二下	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	龠	x-a	龠作父丁簋(西周早期)《蒼頡篇》以龠替龠	5
044	卷二下	冊(冊) 籒(籒) (冊) (冊)	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	○	以典替冊/商周文字「冊」頤簋(西周晚期)《蒼頡篇》以𠄎替冊	3
045	卷三上	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	器	○	以器替器/商周文字「器」村中南 468	6

6

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
046	卷三上	舌														x b	合 23527《蒼頡篇》以舌替舌	3
047	卷三上	干														x b	成周邦父盃(西周)《蒼頡篇》以旱替干	3
048	卷三上	谷														x a	以卻替谷/九年衛鼎(西周中期)	2
049	卷三上	只														○	以狄替只(簡冊《春秋》)/商周文字「𠄎」H11-57(西周早期)《蒼頡篇》以𠄎替只	2
050	卷三上	尙														○	戰國古璽 2077/商周文字「尙」九年衛鼎(西周中期)《蒼頡篇》以尙替尙	3
051	卷三上	𠄎(句)														x ab	師器父鼎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替句	4
052	卷三上	𠄎(𠄎)														x ab	以𠄎替𠄎/變作父癸癸(西周早期)《蒼頡篇》以收替𠄎	3

7

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
053	卷三上	古														○	史籀盤(西周中期)《蒼頡篇》以居替古	2
054	卷三上	十														○	鄭饒仲簋(西周晚期)	9
055	卷三上	𠄎(卅)														x a	毛公鼎(西周晚期)	2
056	卷三上	𠄎(𠄎)														○	群從盟(西周晚期)《蒼頡篇》以讓替𠄎	257
057	卷三上	𠄎														○	曾子伯論鼎(春秋)/商周文字「𠄎(𠄎)」毛公鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以善替𠄎	4
058	卷三上	音														○	戎生編鐘(西周中晚期)《蒼頡篇》以章替音	7
059	卷三上	辛														○	以婁替辛/商周文字「辛」花東 481《蒼頡篇》以率替辛	3

8

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
060	卷三上	幸														○	以叢替幸/商周文字「對」小臣守簋(西周)\《蒼頡篇》以叢替幸	4
061	卷三上	業														○	以僕替業/商周文字「僕」逆鐘(西周晚期)\《蒼頡篇》以僕替業	3
062	卷三上	収														○	以兵替収/商周文字「収」収鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以弄替収	17
063	卷三上	𠄎 (純)(奴)(升)														○	以攀替𠄎(戰國古璽)/商周文字「亞𠄎」亞𠄎弓形器(商)\《蒼頡篇》以樊替𠄎	3
064	卷三上	共														○	善鼎(西周中期)\《蒼頡篇》以異替共	2
065	卷三上	異														×a	作冊大方鼎(西周早期)	2
066	卷三上	𠄎(昇)														○	以興替昇/商周文字「興」兩書興父鬲(西周晚期)\《蒼頡篇》以與替昇	4

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
067	卷七上	白(白)														○	以要替白/商周文字「要」合 18094\《蒼頡篇》以𠄎替白	2
068	卷三上	晨														×a	以晨替晨/商周文字「晨」伯晨鼎(西周中晚期)\《蒼頡篇》以晨替晨	2
069	卷三上	𠄎														○	商周文字無字例	3
070	卷三下	革														○	康鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以鞠替革	63
071	卷三下	𠄎														×a	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」呂王鬲(西周晚期)\《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	13
072	卷三下	𠄎														×a	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「𠄎」呂王鬲(西周晚期)\《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	13
073	卷三下	爪(𠄎)														○	以采替爪/商周文字「爪」節克盃蓋(西周晚期)\《蒼頡篇》以偽(偽)替爪	4

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
074	卷三下	夙(夙)														xab	以夙替乳(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「夙(乳)」班簋(西周中期)\《蒼頡篇》以夙替乳	8
075	卷三下	門														xab	亞宮門方彝(商晚)	11
076	卷三下	又														o	利簋(西周早期)\《蒼頡篇》以股替又	28
077	卷三下	ナ														o	以左替ナ/商周文字「ナ」史籒盤(西周中期)\《蒼頡篇》以麻替ナ	2
078	卷三下	史(史)														o	齊史道簋(西周中期)\《蒼頡篇》以兔替史	2
079	卷三下	支														o	商周文字無字例\《蒼頡篇》以趙替支	2
080	卷三下	聿														o	以肅替聿/商周文字「肅」孟鼎父簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以聿替聿	3
081	卷三下	聿														x-b	缺(西周早期)\《蒼頡篇》以聿替聿	4

11

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
082	卷三下	畫(畫)														xa	三年師兌簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以嬭替畫	2
083	卷三下	聿														o	密簋鐘(春秋晚期)/商周文字「聿」合 3515\《蒼頡篇》以聿(聿)(聿)替聿	3
084	卷三下	堅														o	以賢替堅/商周文字「堅」仲子解(西周早期)\《蒼頡篇》以堅替堅	4
085	卷三下	臣														o	頤簋蓋(西周晚期)	3
086	卷三下	夂														o	十五年趙曹鼎(西周中期)\《蒼頡篇》以毅替夂	20
087	卷三下	殺														o	合 31116	2
088	卷三下	几														o	以幾(几)替几(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「幾(几)」再簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以幾(几)(几)替几	3

12

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
089	卷三下	寸														○	商周文字「專」毛公鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以專替寸	7
090	卷三下	𠂔(皮)														×a	九年衛鼎(西周中期)《蒼頡篇》以類替皮	5
091	卷三下	𠂔														×a	以𠂔替𠂔(北大西漢竹書代秦簡)/商周文字無字例《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	2
092	卷三下	支(攴)														○	以攴替支/商周文字「支(攴)」英 1330《蒼頡篇》以 (攴)替支	77
093	卷三下	教(攴)														○	散氏盤(西周晚期)《居延新簡》EPT56.27A	2
094	卷三下	卜														○	卜孟蓋(西周早期)	8
095	卷三下	用														○	弔我鼎(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替用	5
096	卷三下	爻														○	陶新 279/爻父丁蓋(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔(𠂔)替爻	2

13

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
097	卷三下	𠂔														○	以爽替𠂔/商周文字「爽」散氏盤(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	3
098	卷四上	𠂔(夏)														○	以𠂔替夏/商周文字「夏」癸亥爵(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替夏	4
099	卷四上	目														○	𠂔目父癸爵(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替目	119
100	卷四上	𠂔														○	以爽替𠂔(張家山漢簡代秦簡)/商周文字「𠂔」𠂔爵(西周中期)《蒼頡篇》以爽(爽)替𠂔	3
101	卷四上	𠂔(眉)														×a	以省替眉/商周文字「眉」九年衛鼎(西周中期)《蒼頡篇》以𠂔替眉	2
102	卷四上	盾														○	五年師事簋(西周中期)以𠂔替盾《敦煌漢簡》玉門花海本 Y2855	3
103	卷四上	自														○	散氏盤(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替自	2
104	卷四上	𠂔(白)														○	以皇替𠂔(白)/商周文字「𠂔(白)(白)」甬陽簋(西	7

14

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量	
																	周晚期\《蒼頡篇》以魯替白		
105	卷四上	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	𪔐	𪔑	𪔒	𪔓	x a	合 8189\《蒼頡篇》以鼻替鼻	5
106	卷四上	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	𪔔	⊗	𪔕	𪔖	○	以爽替臣(秦陶 1594)/商周文字「爽」𪔖(𪔗)作父乙黨(商)	2	
107	卷四上	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	習	x ab	懷 1393\《蒼頡篇》以翟替習	2	
108	卷四上	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	羽	x ab	母丁解(商晚)	37	
109	卷四上	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	隹	○	銀雀山漢簡代秦簡/元年前旋黨(西周晚期)\《蒼頡篇》以隹替佳	39	
110	卷四上	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	○	以奪替雀/商周文字「雀」𪔘季雀父黨(西周早期)\《蒼頡篇》以奪替雀	3	

15

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
111	卷四上	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	雀	○	以奪替雀(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「雀」合 9598\《蒼頡篇》以雀替雀	4
112	卷四上	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	𪔙	⊗	𪔚	𪔛	○	以季替𪔙/商周文字「季」季叔鼎(西周早期)	3
113	卷四上	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	○	以晉替首/商周文字「巛」次尊(西周中期)\《蒼頡篇》以晉替首	4
114	卷四上	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	羊	○	留鼎(西周中期)\《蒼頡篇》以輪替羊	26
115	卷四上	羴	羴	羴	羴	羴	羴	羴	羴	羴	羴	羴	⊗	⊗	羴	○	未見字例/筆觚(商)	2
116	卷四上	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	○	銀雀山漢簡代秦簡/商周文字是毛公鼎(西周晚期)「瞿」字\《蒼頡篇》以瞿替瞿	2
117	卷四上	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	𪔜	○	以雙替𪔜(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「𪔜」𪔜父癸尊(商)\《蒼頡篇》以𪔜替𪔜	3

16

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
118	卷四上	麤														○	以麤替麤/商周文字「麤」合 27151	3
119	卷四上	鳥														x-a	鳥母鼎(商)	119
120	卷四上	烏														x-a	烏(於)/商周文字「烏」毛公鼎(西周晚期)	3
121	卷四下	華														○	以華替華/商周文字「華」北子華簠(西周早期)《蒼頡篇》以華替華	4
122	卷四下	蕒														○	以蕒替蕒/商周文字「蕒」侯弔父盤(西周)《蒼頡篇》以再替蕒	3
123	卷四下	么														x-ab	以幼替么/商周文字「么」耐工殘鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以斷替么	3
124	卷四下	茲														x-ab	以幾替茲/商周文字「茲」何尊(西周早期)《蒼頡篇》以爾替茲	3

17

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
125	卷四下	衷														x-ab	以惠替衷/商周文字「衷」蔡姑簠(西周晚期)《蒼頡篇》以惠(惠)替衷	3
126	卷四下	玄														x-ab	此簠(西周晚期)	3
127	卷四下	予														○	作予叔鳳高(西周晚期)《蒼頡篇》以序替予	3
128	卷四下	放														x-b	多友鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以放替放	3
129	卷四下	叟														○	以受替叟/商周文字「叟」受甗(商)《蒼頡篇》以亂替叟	9
130	卷四下	𠂔(歟)														○	以𠂔替歟(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「歟」秦方尊(西周早期)《蒼頡篇》以雍替夕	5
131	卷四下	𠂔(夕)(夕)(夕)(夕)														○	以巧(夕)替夕/商周文字「夕」合 18805《蒼頡篇》以𠂔替夕	32

18

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
132	卷四下	歺(死)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	追意(西周中期)《蒼頡篇》以歺(𠂔)替死	4
133	卷四下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-a	以別(𠂔)替𠂔/商周文字「𠂔」西馬戈 10880(商)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	3
134	卷四下	骨	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-ab	商周文字「𠂔」(合 3236)《蒼頡篇》以𠂔替骨	25
135	卷四下	肉(月)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-ab	合 22323《蒼頡篇》以𠂔替肉	145
136	卷四下	筋	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-ab	商周文字無字例	3
137	卷四下	刀(刂)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	合 22376《蒼頡篇》以𠂔替刀	68
138	卷四下	刃	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	合 19956《蒼頡篇》以𠂔替刃	3

19

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
139	卷四下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	未見字例/商周(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	3
140	卷四下	丰	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	未見字例/丰已觚(商)	2
141	卷四下	未	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	以𠂔替未/商周文字「未」未作寶彝(西周早期)	7
142	卷四下	角(角)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	𠂔(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替角	39
143	卷五上	竹	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x-b	合 32933	149
144	卷五上	箕	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	𠂔(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替箕	2
145	卷五上	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	𠂔(商周文字「𠂔」)𠂔(西周中期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	7

20

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
146	卷五上	左														○	師寰簋(西周晚期)	2
147	卷五上	工														○	揚簋(西周晚期)	4
148	卷五上	姪														○	以臧替姪/商周文字「姪(寔)」與姪(西周晚期)\《蒼頡篇》以寒替姪	2
149	卷五上	巫														xab	巫解(西周早期)\《蒼頡篇》以巫替巫	2
150	卷五上	甘														○	鄭甘壽鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以獻替甘	5
151	卷五上	日														x-b	大孟鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以查替日	7
152	卷五上	乃														xab	豆閉簋(西周中期)\《蒼頡篇》以與(尙)替乃	3
153	卷五上	丂														x-b	以寧替丂/商周文字「丂」仲相父簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以巧替丂	4

21

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
154	卷五上	可														x-b	美爵(西周早期)\《蒼頡篇》以歌替可	5
155	卷五上	兮														x-b	以乎替兮(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「兮」兮伯吉父簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以穆替兮	4
156	卷五上	号														x-b	以號替号/商周文字「號」十三年夙憲(西周中期)\《蒼頡篇》以鴉替号	2
157	卷五上	𠂔 (于)(𠂔)														xab	令鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以虧替于	5
158	卷五上	旨(旨)														x-b	以指替旨/商周文字「旨」屳侯旨鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以脂替旨	2
159	卷五上	喜														○	九年衛鼎(西周中期)\以嘉替喜《敦煌漢簡》玉門花海本 Y3380_嘉	3
160	卷五上	豈														○	以射替豈/商周文字「豈」合 17391\《蒼頡篇》以嘉替豈	5

22

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
161	卷五上	鼓														x-b	飾聲蓋(西周晚期)《蒼頡篇》鼓(鼓)	10
162	卷五上	豈														x-b	南 1047(參「豈」)《蒼頡篇》以禮替豈	3
163	卷五上	豆														o	豆閉蓋(西周中期)《蒼頡篇》以鄧替豆	6
164	卷五上	豐														x-a	以醴替豐/商周文字「豐」麥方聲(西周早期)	2
165	卷五上	豐														x-a	馬王堆簡帛代秦簡/王盞(西周晚期)《蒼頡篇》豐(豐)	2
166	卷五上	廡														x-ab	以戲替廡/商周文字「廡」H11-113(西周早期)《蒼頡篇》以戲替廡	3
167	卷五上	彪														x-ab	以虛替彪/商周文字「彪」合 10948 正《蒼頡篇》以標替彪	9
168	卷五上	虎														x-ab	吳方彝蓋(西周中期)《蒼頡篇》以鞞替虎	17

23

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
169	卷五上	戲														x-ab	以贊替戲(王作贊母兩(春秋)/商周文字「戲」即蓋(西周中期)《蒼頡篇》以戲替戲	3
170	卷五上	皿														x-b	以盞替皿/商周文字「皿」血厚蓋(西周早期)《蒼頡篇》以盞替皿	26
171	卷五上	△														o	以去替△/商周文字「去」合 5127	1
172	卷五上	去(去)														o	合 5127《蒼頡篇》以蓋替去	3
173	卷五上	血														x-b	合 34430《蒼頡篇》以流替血	15
174	卷五上	、														o	主庚爵(商)《蒼頡篇》以柱替、	3
175	卷五下	月(丹)														o	作公丹盞(西周早期)	3

24

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
176	卷五下	青	青	青	青	青	青	青	青	青	青	青	青	青	青	xab	吳方彝蓋(西周中期)	2
177	卷五下	井(井)	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	o	晉鼎(西周中期)\《蒼頡篇》以井替井	5
178	卷五下	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	xab	以卽(卽)替自/商周文字「自」作帛商簋(西周早期)\《蒼頡篇》以覓替自	4
179	卷五下	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	鬯	xab	以爵(爵)替鬯/商周文字「鬯」大孟鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以爵(爵)(爵)替鬯	5
180	卷五下	食(食)	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	食	xab	食仲走父盃(西周晚期)\《蒼頡篇》以餽替食	64
181	卷五下	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	o	以今替△/商周文字「今」師虎簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以論替△	6
182	卷五下	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	xab	會頌鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以噲替會	3

25

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
183	卷五下	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	倉	xa	書倉父盃(西周晚期)	2
184	卷五下	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	xab	小臣宅簋(西周早期)\《蒼頡篇》以內替入	6
185	卷五下	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	缶	o	以各替缶/商周文字「缶」鞉幼尊(西周早期)\《蒼頡篇》以覓替缶	22
186	卷五下	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	矢	xa	不斲簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以候(候)替矢	11
187	卷五下	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	xa	師高器(西周早期)\《蒼頡篇》以亨替高	4
188	卷五下	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	o	以市替門/商周文字「門」連作父乙卣(西周早期)\《蒼頡篇》以市替門	5

26

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
189	卷五下	審														x-a	以郭審審/商周文字「審」相伯章盤(西周晚期)	2
190	卷五下	京														x-a	師西簋(西周中期)	2
191	卷五下	高(亭)(享)(烹)														x-a	魯嗣徒仲齊卣(春秋)/商周文字「高」(亭)(享)(烹) 饗年王母殘簋(西周中期)《蒼頡篇》以致替高	4
192	卷五下	學(學)														x-a	以厚替學/商周文字「厚」史牆盤(西周中期)《蒼頡篇》以鍾替厚	3
193	卷五下	富(富)														x-a	士父鐘(西周晚期)《蒼頡篇》以幅替富	2
194	卷五下	商														x-a	以京替商/商周文字「商」大孟鼎(西周早期)	4
195	卷五下	審														x-a	史牆盤(西周中期)《蒼頡篇》以嚴替審	2

27

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
196	卷五下	來														x-b	旅鼎(西周早期)	2
197	卷五下	麥														o	麥方尊(西周早期)《蒼頡篇》以嚴替麥	13
198	卷五下	夂														o	以愛替夂/商周文字「夂」夂盞(西周早期)《蒼頡篇》以嚴(夂)替夂	16
199	卷五下	舛														o	以舞替舛(張家山漢簡代秦簡)/商周文字「舞」 應侯銅卣(西周早期)《蒼頡篇》以舞替舛	3
200	卷五下	彘(彘)														o	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字無字例	2
201	卷五下	韋														o	合 4476《蒼頡篇》以嚴替韋	17
202	卷五下	弟														x-b	應公鼎(西周早期)《蒼頡篇》以弟替弟	2
203	卷五下	夂														o	以致替夂/商周文字「致」伯致簋(西周中期)《蒼頡篇》以彘替夂	6

28

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
204	卷五下	久	𠂇	久	久	久	久	久	久	久	久	久	𠂇	久	久	○	商周文字無字例	1
205	卷五下	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	桀	x b	商周文字「桀」公茂鼎(西周中期)	3
206	卷六上	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	x b	戊木卣(商)(蒼頡篇)以柳替木	432
207	卷六上	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	x b	明公簋(西周早期)(蒼頡篇)以陳替東	2
208	卷六上	林	林	林	林	林	林	林	林	林	林	林	林	林	林	x b	尹姑鬲(西周中期)(蒼頡篇)以魏(無)替林	10
209	卷六上	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	x a	班簋(西周中期)(蒼頡篇)以材替才	1
210	卷六下	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	叒	○	以叒(叒)替叒/商周文字「叒」趙簋(西周中期)(蒼頡篇)以叒(叒)替叒	2
211	卷六下	𠂇(之)	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	x b	散氏盤(西周晚期)	2

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
212	卷六下	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	x b	師寶簋(西周晚期)(蒼頡篇)以師替市	2
213	卷六下	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	x b	永孟(西周中期)(蒼頡篇)以放替出	5
214	卷六下	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	x b	以南替米/商周文字「南」大孟鼎(西周早期)(蒼頡篇)以勃替米	6
215	卷六下	𠂇(生)	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	x b	史籒盤(西周中期)(蒼頡篇)以星替生	6
216	卷六下	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	x b	鄂王職壺(戰國晚期)/商周文字「毛」合 8280 正(蒼頡篇)以耗替毛	1
217	卷六下	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	○	以垂替𠂇/商周文字無字例	1
218	卷六下	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	x ab	龜公華鐘(春秋晚期)/商周文字「𠂇」不相方鼎(西周中期)(蒼頡篇)以華替𠂇	2
219	卷六下	𠂇(華)	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	x ab	商周文字無字例	2

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
220	卷六下	禾														○	古幣 62 刀/商周文字「禾」花 146	3
221	卷六下	稽														x-b	花東 266	3
222	卷六下	巢														x-ab	陵賈簋(西周中期)\《蒼頡篇》以勛替巢	2
223	卷六下	黍														x-b	商周文字無字例\《蒼頡篇》以漆替黍	3
224	卷六下	束														x-b	不娶簋(西周晚期)	4
225	卷六下	藁(藁)														x-b	以藁替藁/商周文字「藁」毛公鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以藁替藁	5
226	卷六下	口														○	以困替口/商周文字「口」口己觚(商)\《蒼頡篇》以灑替口	26

31

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
227	卷六下	員														○	堆弔簋(西周中期)\《蒼頡篇》以賈替員	2
228	卷六下	貝														○	六年琿生簋(西周中期)\《蒼頡篇》以賈替貝	68
229	卷六下	邑														x-b	散氏盤(西周晚期)	181
230	卷六下	罷														x-b	戰國古璽 2901/商周文字「鄴」鄴字鼎 1362(商)\《蒼頡篇》以巷(罷)替罷	3
231	卷七上	日														○	史籒盤(西周中期)	86
232	卷七上	旦														○	頌壺(西周晚期)\《蒼頡篇》以豎替旦	2
233	卷七上	軌														x-ab	曠光鐘(戰國早期)/商周文字「軌」戎生編鐘(西周晚期)\《蒼頡篇》以廟替軌	3

32

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
234	卷七上	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	夙	xab	以夙替夙/商周文字「夙」走馬休盤(西周中期)《蒼頡篇》以夙替夙	23
235	卷七上	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	冥	xab	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「冥」合 14009 正	2
236	卷七上	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	○	以晶(參)替晶/商周文字「晶」禁伯簋(西周)《蒼頡篇》以參替晶	5
237	卷七上	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	xab	伊簋(西周晚期)	10
238	卷七上	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	x	宥父鼎(西周早期)	3
239	卷七上	明(明)	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明	明	xab	克帶(西周早期)	2
240	卷七上	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	盟	○	以盟替盟/商周文字「盟」戈父辛鼎(西周早期)	2
241	卷七上	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	夕	x	大孟鼎(西周早期)《蒼頡篇》以宛替宛	9

33

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
242	卷七上	多	多	多	多	多	多	多	多	多	多	多	多	多	多	x	作伯簋(西周早期)《蒼頡篇》以零替多	4
243	卷七上	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	○	以實替毋/商周文字「毋」中方鼎(西周早期)	3
244	卷七上	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	○	以通替乃/商周文字「乃」甬父卣(西周晚期)《蒼頡篇》以通替乃	5
245	卷七上	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	○	制料盆蓋(春秋)/商周文字「東」合 14294	2
246	卷七上	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	鹵	○	以栗(參)替鹵/商周文字「鹵」號平旅鐘(西周晚期)《蒼頡篇》以栗替栗	3
247	卷七上	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	齊	xab	齊姜鼎(西周早期)《蒼頡篇》以齊替齊	2
248	卷七上	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	x	以棘替東/商周文字「東」東作父辛卣(西周早期)《蒼頡篇》以畫替東	3

34

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
249	卷七上	片	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以版替片/商周文字無字例 例《蒼頡篇》以版替片	8
250	卷七上	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	鼎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	久伯鼎(西周早期)	4
251	卷七上	克	克	克	克	克	克	克	克	克	克	克	𠄎	𠄎	𠄎	×ab	秦公鐘(春秋早期)/商周文字 字「克」令鼎(西周早期)	1
252	卷七上	彖	彖	彖	彖	彖	彖	彖	彖	彖	彖	彖	𠄎	𠄎	𠄎	×ab	以錄替彖/商周文字 「彖」頤蓋(西周晚期) 《蒼頡篇》以錄替彖	1
253	卷七上	禾	禾	禾	禾	禾	禾	禾	禾	禾	禾	禾	𠄎	𠄎	𠄎	×b	大禾方鼎(商) 《蒼頡篇》以稽替禾	89
254	卷七上	秝	秝	秝	秝	秝	秝	秝	秝	秝	秝	秝	𠄎	𠄎	𠄎	×b	以兼替秝/商周文字 「秝」毛公鼎(西周晚期) 《蒼頡篇》以兼替秝	2
255	卷七上	黍	黍	黍	黍	黍	黍	黍	黍	黍	黍	黍	𠄎	𠄎	𠄎	×b	黍尊(商晚) 《蒼頡篇》以黎替黍	8
256	卷七上	香(香)	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	𠄎	𠄎	𠄎	×b	未見字例/頤蓋(西周中期)	3

35

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
257	卷七上	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	𠄎	𠄎	𠄎	×a	合 33230A 《蒼頡篇》以權替米	42
258	卷七上	穀	穀	穀	穀	穀	穀	穀	穀	穀	穀	穀	𠄎	𠄎	𠄎	○	未見字例/商周文字無字例	2
259	卷七上	白	白	白	白	白	白	白	白	白	白	白	𠄎	𠄎	𠄎	×a	商周文字「春」作春 西(西周中期) 《蒼頡篇》以陷替白	6
260	卷七上	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	𠄎	𠄎	𠄎	○	商周文字無字例 《蒼頡篇》以離替凶	2
261	卷七下	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	𠄎	𠄎	𠄎	○	以泉替朮/商周文字 「朮」懷 988A 《蒼頡篇》以泉替朮	2
262	卷七下	棘	棘	棘	棘	棘	棘	棘	棘	棘	棘	棘	𠄎	𠄎	𠄎	○	未見字例/商周文字 「棘」棧車父簋(西周晚期) 《蒼頡篇》以麻替棘	3
263	卷七下	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	𠄎	𠄎	𠄎	○	節麻尊(西周晚期)	4
264	卷七下	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	朮	𠄎	𠄎	𠄎	×a	以叔替朮/商周文字 「朮」合 7932A 以戚替朮 《居延新簡》 EPT56.181A_戚	2

36

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
265	卷七下	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	崑	xab	以崑替崑/商周文字「崑」合 6844	1
266	卷七下	非	非	非	非	非	非	非	非	非	非	非	非	非	非	x	商周文字無字例\《蒼頡篇》以巖替非	6
267	卷七下	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	xab	商周文字無字例	7
268	卷七下	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	瓠	xab	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字無字例	2
269	卷七下	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	x	以家替宀/商周文字「宀」合 22293\《蒼頡篇》以壽替宀	74
270	卷七下	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	宮	x	欠令方隸(西周早期)	2
271	卷七下	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	x	班簋(西周中期)\《蒼頡篇》以閏替呂	2
272	卷七下	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	穴	x	商周文字「突」合 33568\《蒼頡篇》以窟替穴	51

37

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
273	卷七下	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	膠	xab	商周文字「夢」合 22145\《蒼頡篇》以嗣替膠	10
274	卷七下	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	x	以疾替疒/商周文字「疒」疒父乙(西周中期)\《蒼頡篇》以巖替疒	102
275	卷七下	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	o	以取(取)(取)替一/商周文字「一」大孟鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以取(取)(取)替一	4
276	卷七下	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	o	以同替月/商周文字「同」永孟(西周中期)\《蒼頡篇》以蒙替月	4
277	卷七下	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	o	貨系 422 布空/商周文字「月」九年衛鼎(西周中期)\《蒼頡篇》以取(取)(取)替月	5
278	卷七下	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	兩	o	以兩替兩/商周文字「兩」繁(西周中期)\《蒼頡篇》以巖替兩	3
279	卷七下	网(𦉳)	网	网	网	网	网	网	网	网	网	网	网	网	网	o	网(四)/商周文字「网」网鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以罪替网	37

38

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量	
280	卷七下	西	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	xa	以覆替西/商周文字無字例	4	
281	卷七下	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	〇	晉壺蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以幣替巾	71
282	卷七下	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	市	𠄎	𠄎	𠄎	〇	秦子戈(春秋早期)/商周文字「市」大盂鼎(西周早期)	2	
283	卷七下	帛	帛	帛	帛	帛	帛	帛	帛	帛	帛	帛	𠄎	𠄎	𠄎	xa	九年衛鼎(西周中期)	2	
284	卷四上	白	白	白	白	白	白	白	白	白	白	白	𠄎	𠄎	𠄎	xa	矢伯鬲(西周早期)	11	
285	卷七下	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	〇	以敝替𦉳/商周文字「敝」敝氏盤(西周晚期)\《蒼頡篇》以𦉳替𦉳	2	
286	卷七下	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	𦉴	〇	首伯鬲蓋(春秋早期)/商周文字「𦉴」即𦉴(西周中期)	6	
287	卷八上	人(亻)	亻	亻	亻	亻	亻	亻	亻	亻	亻	亻	𠄎	𠄎	𠄎	xb	大盂鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以𦉵替人	263	

39

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
288	卷八上	七	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	𠄎	𠄎	𠄎	xab	以化替七(中子化盃(春秋)/商周文字「化」化鼎(商)\《蒼頡篇》以𦉶替七	4
289	卷八上	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	𠄎	𠄎	𠄎	xb	伯多鬲(西周晚期)\《蒼頡篇》以印替匕	9
290	卷八上	从	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	xb	以從替从/商周文字「从」𦉶从𦉶(西周早期)\《蒼頡篇》以并替从	3
291	卷八上	比	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	𠄎	𠄎	𠄎	〇	堪鼎(西周晚期)	2
292	卷八上	北	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	匕	𠄎	𠄎	𠄎	xb	司筮(西周中期)	2
293	卷八上	𦉶(丘)	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𦉶	𠄎	𠄎	𠄎	xb	合 4248	3
294	卷八上	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𦉷	𠄎	𠄎	𠄎	xb	以眾替𦉷/商周文字「𦉷」作𦉷(西周早期)	4
295	卷八上	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	王	𠄎	𠄎	𠄎	xb	以廷替王/商周文字「王」𦉷(英 409)\《蒼頡篇》以聖(聖)替王	4

40

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
296	卷八上	重(重)														x+b	雙(突)(鐘)作周公簋(西周早期)	2
297	卷八上	臥														x+b	商周文字「監」頌壺(西周晚期)	4
298	卷八上	身														x+b	積侯簋蓋(西周早期)《水泉子漢簡》暫 43	2
299	卷八上	肩														x+b	以殷替焉/商周文字「殷」殷簋甲(西周中期)以殷替焉《敦煌漢簡》M639C	2
300	卷八上	衣(衤)														x+b	豆閉簋(西周中期)《蒼頡篇》以衤替衣	119
301	卷八上	裘														x+b	裘衛壺(西周中期)	2
302	卷八上	老														x+b	史季良父盃(西周晚期)《蒼頡篇》以耂替老	10

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
303	卷八上	毛														x+b	此蓋(西周晚期)	13
304	卷八上	毳														x+b	未見字例/魏蓋(西周晚期)《蒼頡篇》以毳替毳	2
305	卷八上	尸														o	大孟鼎(西周早期)《蒼頡篇》以屍替尸	24
306	卷八下	尺														x+ab	商周文字無字例c102	2
307	卷八下	尾														x+b	合 136 正	4
308	卷八下	履(履)														x+ab	鞮生簋(西周中期)《蒼頡篇》以履替履	6
309	卷八下	舟														x+b	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「舟」舟作寶鼎(西周中期)《蒼頡篇》以舩(舩)替舟	16

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
310	卷八下	方	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	x+b	大孟鼎(西周早期)	2
311	卷八下	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	x+b	以兒替儿/商周文字「兒」者兒聲(西周中期)\《蒼頡篇》以兒替儿	6
312	卷八下	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	x+b	史鐵敏尊(西周早期)\《蒼頡篇》以兒(兒)替兒	2
313	卷八下	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	x+b	以簪替先(梁家山漢簡代秦簡)/商周文字「𠄎」子姪鼎(商)\《蒼頡篇》以簪替先	2
314	卷八下	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	x+ab	兒聲(商)\《蒼頡篇》以兒替兒	2
315	卷八下	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	x+b	未見字例/合 27742	2
316	卷八下	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	先	x+b	沈子它簋蓋(西周早期)	2

43

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
317	卷八下	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	秃	x+b	商周文字無字例	2
318	卷八下	見	見	見	見	見	見	見	見	見	見	見	見	見	見	x+b	應侯見工簋(西周中期)\《蒼頡篇》以覺替見	46
319	卷八下	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	覡	x+b	未見字例/商周文字無字例	3
320	卷八下	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	x+ab	以欲替欠/商周文字「欠」合 7235\《蒼頡篇》以欲替欠	66
321	卷八下	飲(飲)	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	x+ab	長仲解(西周晚期)	2
322	卷八下	次	次	次	次	次	次	次	次	次	次	次	次	次	次	x+ab	以盜(盜)替次/商周文字「次」盜戒鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以盜替次	4
323	卷八下	无(兒)(元)	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	x+ab	以既替无/商周文字「无」合 18006\《蒼頡篇》以既替无	3

44

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構邊 /b 異化	數量
324	卷九上	頁														x-b	以頤替頁/商周文字「頁」即蓋蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以頤(頤)替頁	93
325	卷九上	首														x-a	百即首/商周文字無字例\以首替百(水泉子漢簡)暫 17	2
326	卷九上	面														x-a	花東 113	5
327	卷九上	𠂔														x-b	以𠂔替𠂔(石鼓文)/商周文字「𠂔」大𠂔蓋(商)\《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	1
328	卷九上	首														x-ab	頤蓋(西周晚期)\《蒼頡篇》以頤(首)替首	3
329	卷九上	𠂔														x-ab	以𠂔替𠂔/商周文字「𠂔」𠂔改蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	2
330	卷九上	須														x-b	伯濬其頤(西周晚期)	5

45

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構邊 /b 異化	數量
331	卷九上	𠂔														○	以𠂔替𠂔/商周文字「𠂔」合 2717B\《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	10
332	卷九上	𠂔														x-b	戰國玉印/商周文字無字例	2
333	卷九上	文														x-b	夔鐘(西周中期)	4
334	卷九上	𠂔														x-ab	以𠂔替𠂔/商周文字「𠂔」合 4559 反\《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	42
335	卷九上	后														○	合 23713	2
336	卷九上	司														○	史籀盤(西周中期)\《蒼頡篇》以𠂔替司	2
337	卷九上	𠂔														x-b	合 34525	3

46

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
338	卷九上	卩	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	卩	卩	卩	xab	戰國古璽 4826/商周文字「卩」合 22258\《蒼頡篇》以卩替卩	13
339	卷九上	印	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	印	印	印	xab	毛公鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以卩(卩)替印	2
340	卷九上	色	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	色	色	色	xab	仲壺父盃尊(西周早期)\《蒼頡篇》以絕(絕)替色	3
341	卷九上	卯	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	卯	卯	卯	xab	以卩替卯/商周文字「卯」甲盞(西周早期)	2
342	卷九上	辟	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	辟	辟	辟	xab	大克鼎(西周晚期)	3
343	卷九上	勺	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	勺	勺	勺	xab	戰國古璽 0361/商周文字「勺」合 14294\《蒼頡篇》以勺替勺	15
344	卷九上	包	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	包	包	包	xab	商周文字無字例	3

47

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
345	卷九上	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	苟	xab	以敬替苟/商周文字「苟」親薑(西周中期)\《蒼頡篇》以驚替苟	2
346	卷九上	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	鬼	xab	鬼作父丙盃(西周中期)\《蒼頡篇》以數替數	20
347	卷九上	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	由	o	以畏替由/商周文字「由」畏由(西周中期)\《蒼頡篇》以厲替由	3
348	卷九上	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	亼	xab	卅六年私官鼎蓋/商周文字無字例\《蒼頡篇》以私替私	3
349	卷九上	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	嵬	xab	北大西漢竹書代秦簡/商周文字無字例	2
350	卷九下	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	o	山爵(西周早期)\《蒼頡篇》以岑替山	65
351	卷九下	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	屾	o	未見字例/商周文字無字例	2
352	卷九下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	o	戰國古璽 2057/商周文字無字例	6

48

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
353	卷九下	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	○	以廔替广/商周文字「廔」毛公鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以廔替广	55
354	卷九下	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	廔	○	以廔替广(秦印)/散氏盤(西周晚期)《蒼頡篇》以廔替广	27
355	卷九下	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	x-b	商周文字「丸」合 1824 反	4
356	卷九下	危	危	危	危	危	危	危	危	危	危	危	危	危	危	x-b	危耳尊(商)《蒼頡篇》以危替危	2
357	卷九下	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	○	作冊監處(西周中期)《蒼頡篇》以研替石	58
358	卷九下	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	x-ab	史籀盤(西周中期)	4
359	卷九下	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	勿	x-b	師酉簋(西周中期)《蒼頡篇》以陽替勿	2
360	卷九下	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	毋	○	合 7434	1

49

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
361	卷九下	而	而	而	而	而	而	而	而	而	而	而	而	而	而	x-a	侯放簋蓋(西周晚期)《蒼頡篇》以耐替而	2
362	卷九下	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	○	漢皇父鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以毅替豕	22
363	卷九下	希	希	希	希	希	希	希	希	希	希	希	希	希	希	x-ab	以蒙替希/商周文字「希」作希商簋(西周早期)	5
364	卷九下	互	互	互	互	互	互	互	互	互	互	互	互	互	互	○	以虞替互/商周文字「虞」三年癸亥(西周中期)以錄替互《敦煌漢簡》玉門花海本 Y3538	5
365	卷九下	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	豚	x-b	豚虛(西周中期)	2
366	卷九下	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	x-b	克罍蓋銘(西周早期)《蒼頡篇》以豸替豸	21
367	卷九下	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	x-a	鷓(兗)/商周文字「鷓(兗)」合 10403	1

50

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	集韻	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
368	卷九下	易	易	易	易	易	易	易	易	易	易	易				○	毛公鼎(西周晚期)	1
369	卷九下	象	象	象	象	象	象	象	象	象	象	象				xab	師湯父鼎(西周中期)《蒼頡篇》以豫(預)替象	2
370	卷十上	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬				○	吳方鐘蓋(西周中期)《蒼頡篇》以駟替馬	120
371	卷十上	麋(麋)	麋	麋	麋	麋	麋	麋	麋	麋	麋	麋				xab	侯馬盟書/商周文字「麋(法)」師酉簋(西周中期)《蒼頡篇》以灑(法)替麋	4
372	卷十上	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿				xab	銘子卣(西周早期)	26
373	卷十上	麤	麤	麤	麤	麤	麤	麤	麤	麤	麤	麤				xab	合 21771《蒼頡篇》以麤(麤)替麤	2
374	卷十上	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔				xab	以兔替兔/商周文字「兔」叔孫簋(西周早期)《蒼頡篇》以兔替兔	4
375	卷十上	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔				xab	甬皇父鼎(西周晚期)	6

51

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	集韻	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
376	卷十上	覓	覓	覓	覓	覓	覓	覓	覓	覓	覓	覓				xab	以覓替覓/商周文字「覓」合 10777《蒼頡篇》以覓替覓	1
377	卷十上	犬(豸)	犬	犬	犬	犬	犬	犬	犬	犬	犬	犬				xab	員方鼎(西周中期)《蒼頡篇》以獻替犬	87
378	卷十上	狝	狝	狝	狝	狝	狝	狝	狝	狝	狝	狝				xab	陶錄 2.24.1/商周文字「狝」六年琕生簋(西周中期)《蒼頡篇》以狝替狝	3
379	卷十上	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠				xab	合 13960《蒼頡篇》以鼠替鼠	20
380	卷十上	能	能	能	能	能	能	能	能	能	能	能				xab	毛公鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以熊替能	1
381	卷十上	雙(熊)	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙	雙				xab	南 2169(參「能」)	2

52

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 說文	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
382	卷十上	火(㇀)	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	○	合 27317	118
383	卷十上	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	○	靈卣(西周早期)\《蒼頡篇》以𤇀(焱)替炎	8
384	卷十上	熨(黑)	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	熨	×a	廠伯匱(西周早期)\《蒼頡篇》以𤇀替黑	37
385	卷十下	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	×a	以𤇀替𤇀/商周文字「𤇀」垂生蓋(西周晚期)\《蒼頡篇》以𤇀(𤇀)替𤇀	2
386	卷十下	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	焱	○	以𤇀替焱(秦印)/商周文字「焱」合 22132\《蒼頡篇》以𤇀替焱	3
387	卷十下	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	○	商周文字無字例\《蒼頡篇》以𤇀替𤇀	3
388	卷十下	𤇀(赤)	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	○	此𤇀(西周晚期)	11

53

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 說文	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
389	卷十下	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	×b	叔簋(西周早期)	18
390	卷十下	𤇀(亦)	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	○	伯公父匱(西周晚期)\《蒼頡篇》以𤇀替亦	2
391	卷十下	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	𤇀	×b	以𤇀替𤇀/商周文字「𤇀」散氏盤(西周晚期)\《蒼頡篇》以𤇀替𤇀	4
392	卷十下	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	夭	×a	亞天饗尊(商)\《蒼頡篇》以𤇀替夭	4
393	卷十下	交	交	交	交	交	交	交	交	交	交	交	交	交	交	×b	交車戈(西周)\《蒼頡篇》以𤇀替交	3
394	卷十下	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	尗	×b	未見字例/史籀蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以𤇀(尗)替尗	12
395	卷十下	壺(壺)	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	×ab	鄧孟蓋(西周晚期)	2
396	卷十下	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	×ab	商周文字「壺(尗)」班簋(西周中期)	2

54

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
397	卷十下	幸(幸)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x _a	FQ3 西周\《蒼頡篇》以執替幸	7
398	卷十下	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	耆	x _b	陝出印 755/商周文字「耆」耆蓋(西周早期)	2
399	卷十下	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	亢	x _a	亢鼎(西周早期)	2
400	卷十下	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	x _b	以華替本/商周文字「華」吳方彝蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以華替本	6
401	卷十下	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	芥	x _a	以吳替芥(秦陶 2053)/商周文字「吳」史籒盤(西周中期)	5
402	卷十下	𠂔(大)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x _a	芥即大/商周文字「大」叔簋(西周早期)\《蒼頡篇》以與替芥	8
403	卷十下	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	x _a	大孟鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以與替夫	3
404	卷十下	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	○	吳方彝蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以端替立	19

55

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
405	卷十下	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	竝	○	竝(竝)替竝	2
406	卷十下	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	囟	x _a	以咻替囟/商周文字「囟」長函蓋(西周中期)\《蒼頡篇》以囟替囟	3
407	卷十下	思(思)	思	思	思	思	思	思	思	思	思	思	思	思	思	x _{ab}	英 2254(參「囟」)	2
408	卷十下	心(心)(心)	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	x _b	史籒盤(西周中期)\《蒼頡篇》以惡替心	276
409	卷十下	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	蕊	x _b	以彙替蕊(秦印編 213)/商周文字無字例\《蒼頡篇》以彙替蕊	2
410	卷十一上	水(水)	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	○	啟作且丁尊(西周早期)	487
411	卷十一下	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	淼	○	以流替淼/商周文字「淼」英 540\《蒼頡篇》以流替淼	3
412	卷十一下	類(類)	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	x _b	秦印/商周文字「類」鼓簋(西周晚期)	2

56

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
413	卷十一下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×a	古幣 295 布方/商周文字無字例	1
414	卷十一下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	以𠂔(𠂔)替𠂔/商周文字無字例	2
415	卷十一下	𠂔(C/D)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	宣紙文憲(西周早期)𠂔(蒼頡篇)以溼替川	10
416	卷十一下	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	泉	×ab	合 8371	2
417	卷十一下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×ab	以原替𠂔/商周文字「原」雍伯原鼎(西周晚期)𠂔(蒼頡篇)以泉替𠂔	2
418	卷十一下	永	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×b	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「永」史獸鼎(西周早期)𠂔(蒼頡篇)以兼替永	2
419	卷十一下	辰	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×b	以𠂔替辰(張家山漢簡代秦簡)/商周文字「辰」吳方彝蓋(西周中期)	3

57

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
420	卷十一下	谷	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×b	史獸鼎(西周早期)	8
421	卷十一下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×b	以冬替𠂔/商周文字「𠂔」殷 4875𠂔(蒼頡篇)以台替𠂔	17
422	卷十一下	雨(𠂔)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	○	子漸己鼎(簡)	51
423	卷十一下	雲	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×ab	雲(云)合 13649	2
424	卷十一下	𠂔(魚)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×ab	毛公鼎(西周晚期)	106
425	卷十一下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×ab	以漁替𠂔/商周文字「漁(𠂔)」合 10475𠂔(蒼頡篇)以𠂔替𠂔	2
426	卷十一下	燕	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	×a	合 5290	1

58

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
427	卷十一 下	龍														xab	作龍母尊(西周早期)	5
428	卷十一 下	飛														xab	商周文字「𩇛(翼)」合1075 正	2
429	卷十一 下	非														xab	富鼎(西周中期)《蒼頡篇》以非替非	5
430	卷十一 下	𠂔														○	𠂔伯簋(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	2
431	卷十二 上	𠂔														○	以孔替𠂔/商周文字「孔」𠂔季子白盤(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	3
432	卷十二 上	不														xb	不指方鼎(西周中期)	2
433	卷十二 上	至(至)														xb	矢令方彝(西周早期)《蒼頡篇》以室替至	6
434	卷十二 上	𠂔(西)														xab	師酉簋(西周中期)	2

59

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
435	卷十二 上	𠂔														xab	張家山漢簡代秦簡/商周文字「𠂔」免𠂔(西周中期)	3
436	卷十二 上	鹽														xab	商周文字無字例	3
437	卷十二 上	戶														xa	𠂔(𠂔)《𠂔》作父乙簋(商)	10
438	卷十二 上	門														xa	師誥簋蓋(西周中期)	62
439	卷十二 上	耳														○	耳尊(西周早中期)《蒼頡篇》以𠂔替耳	33
440	卷十二 上	𠂔														xb	以𠂔替𠂔(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「𠂔」魯伯愈父盤(西周晚期)《蒼頡篇》《敦煌漢簡》玉門花海本 Y1462	2
441	卷十二 上	手(手)														xb	卯簋蓋(西周中期)《蒼頡篇》以𠂔替手	278

60

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
442	卷十二上	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」子𠄎(商)	2
443	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	不𠄎(西周晚期)	245
444	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	師𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎(𠄎)替𠄎	2
445	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×ab	史𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎(𠄎)替𠄎	2
446	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」不𠄎(蓋)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	4
447	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」史𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎(𠄎)替𠄎	2
448	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」大𠄎(西周早期)《蒼頡篇》以𠄎(𠄎)替𠄎	2

61

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
449	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	乎𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2
450	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	𠄎(西周中期)	4
451	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	𠄎(西周早期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	26
452	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」史𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2
453	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×b	九年𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2
454	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	未見字例/商周文字「𠄎」合 9669 白	2
455	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	×ab	馬王堆簡用代秦簡/商周文字無字例《水泉子漢簡》暫 35	4
456	卷十二下	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	○	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2

62

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
457	卷十二下	𠂔(亡)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x b	妾方尊(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替亡	5
458	卷十二下	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	x b	以𠂔替匚/商周文字「匚」大盂鼎(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替匚	7
459	卷十二下	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	匚	o	以𠂔替匚/商周文字「匚」乃孫作且且鼎(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替匚	19
460	卷十二下	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	x a	曲父丁爵(商)	3
461	卷十二下	曲(甬)	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	曲	x a	甬作父己解(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔(甬)替甬	5
462	卷十二下	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	x a	商周文字「瓦」孟姬安甗(西周中期)	27
463	卷十二下	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	弓	x ab	司貞(西周中期)《蒼頡篇》以𠂔替弓	27

63

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商周	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
464	卷十二下	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x ab	以𠂔(𠂔)替𠂔(馬王堆簡帛代秦簡)/商周文字「𠂔」勞爵(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	2
465	卷十二下	𠂔(弦)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x ab	合 9410 正《蒼頡篇》以𠂔替𠂔	4
466	卷十二下	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	x ab	陶文圖錄 5·33·4-系/商周文字「系(𠂔)」𠂔(𠂔)方鼎(西周早期)《蒼頡篇》以𠂔替系	4
467	卷十三上	系(系)	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	系	x ab	子父癸鼎(商)《蒼頡篇》以𠂔替系	258
468	卷十三上	𠂔(素)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	x ab	張家山漢簡代秦簡/商周文字「素」輔師鐘(西周晚期)《蒼頡篇》以𠂔(𠂔)替素	6
469	卷十三上	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	絲	x ab	𠂔(𠂔)替絲	3

64

部號	部別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
470	卷十三上	率	率	率	率	率	率	率	率	率	率	率				xab	毛公鼎(西周晚期)	1
471	卷十三上	虫														xab	簠作旅鼎(西周早期)	160
472	卷十三下	蝻														xab	合 14700\《蒼頡篇》以蝻替蝻	25
473	卷十三下	蟲														xab	商周文字「蟲」合 201 正\《蒼頡篇》以蟲替蟲	6
474	卷十三下	風														xab	鳳(風)合 28673	16
475	卷十三下	它														xab	師遼方彝(西周中期)	1
476	卷十三下	龜														xa	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「龜」串龜且突龜(商)	3
477	卷十三下	龜														xa	秦印編 257/商周文字「龜」龜蓋蓋(西周晚期)\《蒼頡篇》以龜替龜	14

65

部號	部別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
478	卷十三下	卵														xa	商周文字無字例	2
479	卷十三下	二														o	大孟鼎(西周早期)	6
480	卷十三下	土														o	此簠(西周晚期)	144
481	卷十三下	堯														o	以堯替堯/商周文字「堯」堯盤(西周中期)\《蒼頡篇》以堯替堯	2
482	卷十三下	蕒(董)														xab	頌簠(西周晚期)\《蒼頡篇》以蕒替蕒	2
483	卷十三下	里														o	史頌簠(西周晚期)	3
484	卷十三下	田														o	令鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以畲替田	29

66

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
485	卷十三下	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	晶	○	深伯鼎(春秋)/商周文字「晶」英 744\《蒼頡篇》以晶替晶	2
486	卷十三下	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	○	伯公父卣(西周晚期)	6
487	卷十三下	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	xab	矢令方彝(西周早期)	3
488	卷十三下	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	力	xab	合 22268\《蒼頡篇》以勇替力	44
489	卷十三下	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	荔	xab	戰國古璽 4060/商周文字「荔」合 31009\《蒼頡篇》以荔替荔	4
490	卷十四上	金(鈔)	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	○	史頌簋(西周晚期)\《蒼頡篇》以鈔替金	204
491	卷十四上	开	开	开	开	开	开	开	开	开	开	开	开	开	开	xa	三晉 128/商周文字「开」幾父壺(西周中期)\《蒼頡篇》以志替开	1

67

部號	卷別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
492	卷十四上	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	勺	xb	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「勺」勺方鼎(商)\《蒼頡篇》以灼替勺	2
493	卷十四上	几	几	几	几	几	几	几	几	几	几	几	几	几	几	xa	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字「几」屯 9\《蒼頡篇》以抗替几	4
494	卷十四上	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	○	師酉簋(西周中期)\《蒼頡篇》以沮替且	3
495	卷十四上	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	xb	征人鼎(西周早期)\《蒼頡篇》以斯替斤	15
496	卷十四上	斗(斗)	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	斗	xab	合 21347	17
497	卷十四上	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	矛	xab	咸簋(西周中期)\《蒼頡篇》以擊替矛	6
498	卷十四上	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	○	同虛(西周中期)\《蒼頡篇》以軍替車	102
499	卷十四上	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	卬	xab	以鍾替卬/商周文字「卬」多友鼎(西周晚期)\《蒼頡篇》以管替卬	3

68

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
500	卷十 四下	𠄎 (阜)(𠄎)														xab	以陰替𠄎/商周文字「𠄎」合 19215《蒼頡篇》以陰替阜	94
501	卷十 四下	𠄎														xab	以𠄎(𠄎)替𠄎/商周文字無字例	4
502	卷十 四下	𠄎														xa	馬王堆簡帛代秦簡/商周文字無字例《蒼頡篇》以參替𠄎	3
503	卷十 四下	四 (𠄎)(三)														xb	友黨(西周中期)	1
504	卷十 四下	𠄎														xab	陶新 2823/商周文字「𠄎」告𠄎(商)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2
505	卷十 四下	𠄎														xb	交君子哀(西周晚期)《蒼頡篇》以𠄎替𠄎	2
506	卷十 四下	亞														xa	以惡替亞/商周文字「亞」史𠄎(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替亞	2

69

部號	卷別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
507	卷十 四下	五														o	小臣𠄎(西周早期)	1
508	卷十 四下	六														xab	宜侯𠄎(西周早期)	1
509	卷十 四下	七														xb	史𠄎父(西周早期)	1
510	卷十 四下	九														xb	𠄎方(西周中期)《蒼頡篇》以𠄎替九	2
511	卷十 四下	𠄎														xb	以𠄎替𠄎(陝陰金文(戰國晚期)/商周文字「𠄎」師𠄎(西周中期)《蒼頡篇》)以𠄎替𠄎	7
512	卷十 四下	𠄎														xab	以𠄎替𠄎/商周文字「𠄎」小𠄎(西周早期)	2
513	卷十 四下	甲														xab	𠄎方(西周中期)《蒼頡篇》英藏本 Y3500	1

70

部號	部別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
514	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	卮	○	史籀盤(西周中期)《蒼頡篇》以亂替乙	4
515	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	×a	卣方鼎(西周早期)《蒼頡篇》以丙替丙	1
516	卣(丁)	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	卣	×a	作且丁卣(西周早期)《蒼頡篇》以打替丁	1
517	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	×b	同戊(西周中期)《蒼頡篇》以戊替戊	2
518	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	己	×b	作文考日己方尊(西周中期)《蒼頡篇》以紀替己	3
519	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	巴	×ab	台 6469 正	2
520	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	庚	×ab	走簋(西周晚期)	1
521	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛	×b	伯寬父銀(西周晚期)《蒼頡篇》以薛(薛)替辛	6

71

部號	部別	字頭	a 北隸	b 小隸	c 段注	d 小隸	e 大隸	f 大隸	g 大隸	h 大隸	i 大隸	j 大隸	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
522	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	辨	×b	以辨替辨/商周文字無字例	2
523	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	壬	○	湯弔盤(西周晚期)《蒼頡篇》以任替壬	1
524	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	癸	×ab	且癸尊(西周早期)	1
525	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	×ab	大孟鼎(西周早期)《蒼頡篇》以孺替子	15
526	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	了	×a	子之誤字/商周文字「子」字「子」字父乙卣(西周中期)	3
527	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	弄	×a	陶三 226/商周文字「弄」廟辟鼎(西周晚期)	3
528	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	×ab	以疏(疏)替女/商周文字「育」史籀盤(西周中期)《蒼頡篇》以棄替女	3
529	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	○	繁疋(西周中期)《蒼頡篇》以豨替丑	3

72

部號	部別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
530	卣十 卣下	寅														○	元年師旋簋(西周晚期)以寅替寅(蒼頡篇)c11	1
531	卣十 卣下	卯														xab	保卣(西周早期)《蒼頡篇》以卯替卯	1
532	卣十 卣下	辰														xab	散氏盤(西周晚期)《蒼頡篇》以辰替辰	2
533	卣十 卣下	巳														xab	毛公鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以起替巳	2
534	卣十 卣下	午														○	蔡公子壺(西周晚期)《蒼頡篇》以替替午	2
535	卣十 卣下	未														xab	史獸鼎(西周早期)《蒼頡篇》以替替未	1
536	卣十 卣下	申(申)														○	多友鼎(西周晚期)	4
537	卣十 卣下	酉														x	庚壺鼎(西周早期)《蒼頡篇》以替替酉	73

部號	部別	字頭	a 北聲	b 小徐	c 段注	d 小徐	e 大徐	f 大徐	g 大徐	h 大徐	i 大徐	j 大徐	蒼頡篇	秦簡	商尾	分類	備註/a 字形構造 /b 異化	數量
538	卣十 卣下	酋														x	戰國古璽 5268/商周文字「酋」首父癸鼎(商)《蒼頡篇》以替替酋	2
539	卣十 卣下	戌														x	頤鼎(西周晚期)《蒼頡篇》以替替戌	1
540	卣十 卣下	亥														x	天君簋(西周早期)《蒼頡篇》以幼替亥	1

表 2・2・6 五四〇部首の数量順位 百字以上

排行	字號	卷	編號	部首	字數	構形
1	6948	卷十一上	410	水	487	○
2	240	卷一下	12	艸	458	xb
3	3396	卷六上	206	木	432	xb
4	7789	卷十二上	441	手	278	xb
5	6670	卷十下	408	心	276	xb
6	4926	卷八上	287	人	263	xb
7	8473	卷十三上	467	糸	258	xab
8	1470	卷三上	56	言	257	○
9	8069	卷十二下	443	女	245	xb
10	9213	卷十四上	490	金	204	○
11	779	卷二上	22	口	190	○
12	3986	卷六下	229	邑	181	○
13	8741	卷十三上	471	虫	160	xab

排行	字號	卷	編號	部首	字數	構形
14	2854	卷五上	143	竹	149	xb
15	2584	卷四下	135	肉	145	xab
16	8974	卷十三下	480	土	144	○
17	81	卷一上	6	玉	140	○
18	1091	卷二下	33	彳	131	xb
19	6106	卷十上	370	馬	120	○
20	2088	卷四上	99	目	119	○
21	2359	卷四上	119	鳥	119	xa
22	5230	卷八上	300	衣	119	xb
23	6382	卷十上	382	火	118	○
24	7540	卷十一下	424	魚	106	xab
25	4673	卷七下	274	疒	102	xa
26	9465	卷十四上	498	車	102	○

表 2・3・1 重複字の字形表

3848 敖	2504 敖	字頭
卷六下 心部	卷四下 攴部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

6684 愷	3078 愷	字頭
卷十下 心部	卷九上 巛部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

1657 詿	1617 詿	字頭
卷三上 言部	卷三上 言部	卷部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

4907 白	2217 白(皤)	字頭
卷三下 白部	卷四上 白部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

1192 逌	1102 逌	字頭
卷三下 辵部	卷三下 辵部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

1658 誤	1616 誤	字頭
卷三上 言部	卷三上 言部	卷部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

3055 吁	0912 吁	字頭
卷五上 吁部	卷二上 吁部	卷部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

7667 否	0933 否	字頭
卷二上 否部	卷二上 否部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

9012 漚	7386 漚	字頭
卷三下 一 部	卷十一上 水部	卷部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

4652 窮(窮)	3999 窮	字頭
卷五上 六部	卷六下 頁部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

6633 大(𡗗)	6564 大	字頭
卷十下 頁部	卷十下 六部	殺部 𠂔
		a 北師
		J 大徐
		g 大徐
		b 小徐
		c 段注

表 2・3・2 重文の字形表

5816 𦵑(𦵑)	2348 𦵑	字頭
卷九上 火部	卷四上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

3732 𦵑(𦵑)	3479 𦵑	字頭
卷六上 火部	卷六上 木部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

7807 𦵑	1880 𦵑(𦵑)	字頭
卷一三上 火部	卷二下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

2578 𦵑	2037 𦵑(𦵑)	字頭
卷四下 火部	卷三下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

5555 𦵑	0954 𦵑(𦵑)	字頭
卷八下 火部	卷二上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

5459 𦵑(得)	1253 得	字頭
卷八下 火部	卷二下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

6389 𦵑(𦵑)	0474 𦵑	字頭
卷十五 火部	卷二下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

5526 𦵑	0866 𦵑(𦵑)	字頭
卷八下 火部	卷二上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

8927 𦵑(𦵑)	8816 𦵑	字頭
卷一三下 火部	卷一三上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

8225 𦵑	8161 𦵑(𦵑)	字頭
卷一三下 火部	卷一三下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

8903 𦵑(𦵑)	8791 𦵑	字頭
卷一三下 火部	卷一三上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

9540 𦵑	4810 𦵑(𦵑)	字頭
卷十四上 火部	卷七下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

7247 𦵑	6993 𦵑(𦵑)	字頭
卷一三上 火部	卷一三上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

9322 𦵑(𦵑)	3642 𦵑	字頭
卷十四上 火部	卷六上 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注













5816 𦵑	4547 𦵑(𦵑)	字頭
卷一四下 火部	卷七下 火部	殺部 言
𦵑	𦵑	a 正字
𦵑	𦵑	J 大徐
𦵑	𦵑	g 大徐
𦵑	𦵑	b 小徐
𦵑	𦵑	c 段注

表 2・3・3 『蒼頡篇』の「曷」と五種『説文解字』字形表

字號	卷	部首	簡號	字頭	圖示		J大徐	I大徐	d小徐	g大徐	b小徐
1184	卷二下	辵部	14_07	返							
1479	卷三上	言部	27_07	謁							
2460	卷四上	鳥部	68_01	鷓							
2460	卷四上	鳥部	68_02	鷓							
5332	卷八上	衣部	17_08	褐							
6655	卷十下	立部	03_18	竭							

表 2・4・1 陳氏一篆一行本の「行」の字形表

No	a	b	c	d	e
1	珎	玨	玨	行	術
2	珎	玨	玨	街	麤
3	珎		玨	衢	愆
4	珎			衢	
5				衢	
6				衢	
7				衢	
8				行	

No	a  (4)	b  (2)	c  (3)	d  (15)	e  (3)
9				 衛	
10				 衛	
11				 衛	
12				 衛	
13				 靈	
14				 衛	
15				 肸	


























no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
1	0122	卷一上	玉部	珎					
2	0462	卷一下	艸部	莢					
3	0764	卷二上	牛部	犖					
4	1265	卷二下	行部	行					
5	1266	卷二下	行部	術					

表 2・4・2 五種『説文解字』の「行」の字形表

no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
6	1267	卷二下	行部	街					
7	1268	卷二下	行部	衢					
8	1269	卷二下	行部	衢衢					
9	1270	卷二下	行部	衢					
10	1271	卷二下	行部	衢					

no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
11	1272	卷二下	行部	衢					
12	1273	卷二下	行部	衢					
13	1274	卷二下	行部	衢衢					
14	1274	卷二下	行部	衢衢					
15	1275	卷二下	行部	衢					

no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
16	1276	卷二下	行部	衛衛衛					
17	1362	卷二下	足部	躉躉躉					
18	1860	卷三下	彌部	𩚑𩚑𩚑					
19	2629	卷四下	肉部	肱					
20	2832	卷四下	角部	衡輿					

no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
21	6080	卷九下	豚部	𩚑𩚑𩚑					
22	6827	卷十下	心部	愆愆愆					
23	6835	卷十下	心部	愆					
24	7101	卷十一上	水部	衍					
25	7229	卷十一上	水部	衍					

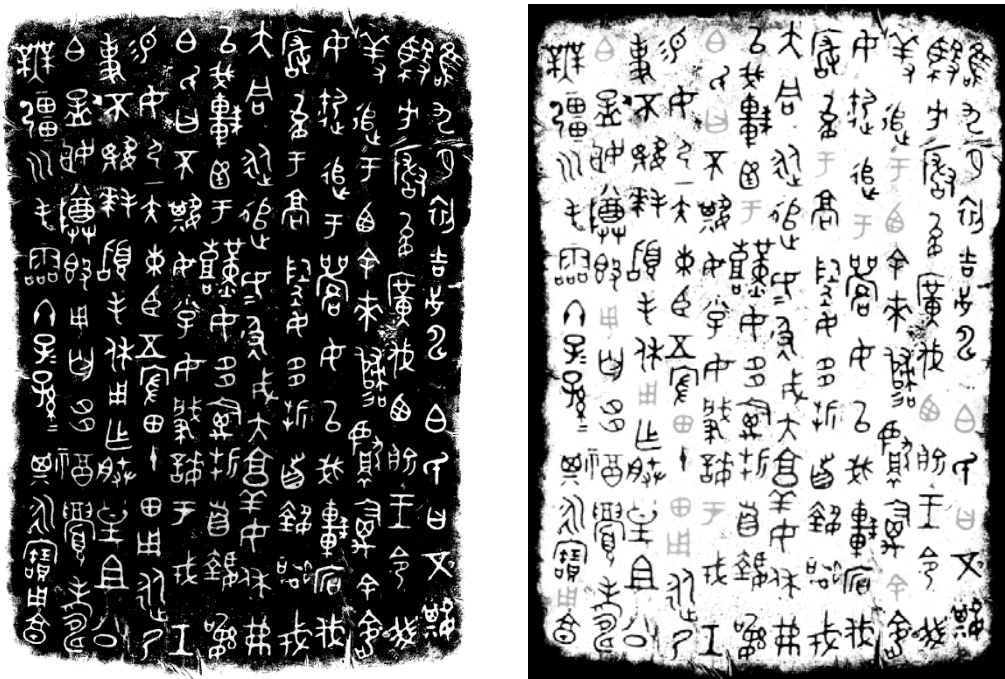
no	字號	卷	部	字頭	a 北師	j 大徐	g 大徐	b 小徐	c 段注
26	9376	卷十四上	金部	銜					
27	9519	卷十四上	車部	衛					

第三章 東周時代の秦文字

第一節 春秋時代の秦文字

まず『不其簋』から考えてみたい。これによって秦文字を見なすことができるからである。器の形と紋飾を見ると、西周晩期の特徴が見られることから、多くの学者は周器と考えた²⁷。そして、『不其簋』の製作年代は、秦荘公の即位前、すなわち、周宣王六年（紀元前八二二年前）数年までにわたる。

『不其簋』の拓片を見ると、文字の行間が自然に交差していて、大きいものもあれば小さいものもある。「白」、「日」、「西」、「于」など比較的小さい文字を浅い色に調節すると、文字の構造の違いから、自然に大きさの変化があり、「**田**」字の真ん中の二つの田の大きさと他字の田の大きさが同じであることがわかる。このようなアレンジは、その後の編集形式の改変により、次第に少なくなっていく。



不其簋（前 822 年）

続いて、春秋時代の秦文字を考えてみる。この時代の器物には、『秦公作寶用鼎』、『秦公壺』、『秦子戈』、『秦子簋蓋』、『元用戈』、『伯喪戈』、『秦公及王姬罍鐘』、『秦景公石磬』、『秦公簋』と、『石鼓文』などがある。

春秋早期の『秦公作寶用鼎』（前七七七～前七六六）は、学者たちは秦公器群の持ち主が秦襄公と秦文公の二人であると見なしている²⁸。銘文の「**秦**」を「秦」字とみなして、文字編集などの著作は場合によつて、字の頭部を「**籀**」と隸定する。もし、単に秦の一字で見るとすれば、この形状が早い時期の書き方を示していると言えるが、「秦」字の中の「午」と「秝」との間に「臼」形があるか否かだけでは時期の早晩を特定できない。例えば、商の『秦史鬲』は**秦**に作り、西周中期の『洹秦簋』は**秦**に作り、西周中期の『師酉簋』は**秦**に作っているからである。



秦公作寶用鼎（前 777 年～前 766 年）









春秋早期の『秦公壺』（秦文公・前七六五～前七一六）の銘文は「秦公作鑄尊壺」である。商の『秦史鬲』は**秦**に作り、西周中期の『洹秦簋』は**秦**に作り、春秋早期の『秦公鼎』は**秦**を作る。また、『秦公鼎』は**秦**に作り、『秦公壺』は**秦**に作り、戦国晚期の『卅八年上郡守慶戈』は**秦**に作り、秦印は**秦**、**秦**に作り、秦簡は**秦**に作る。『秦公壺』の秦字の形状には「臼」形は

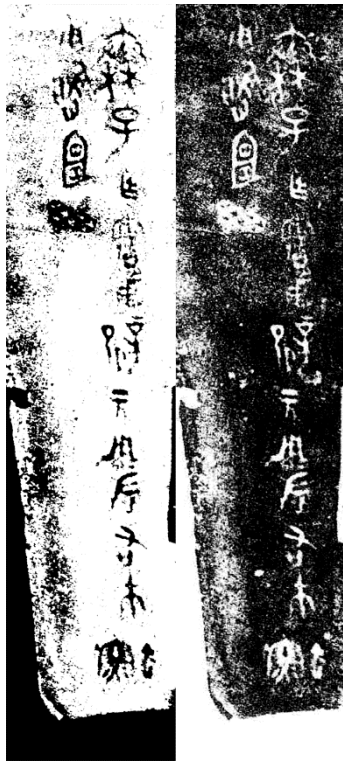
ない。そのため、ある学者は「臼」形の有無から、「秦公壺」が比較的晩期なものと推定している²⁹⁾。しかし、秦字の「臼」形の有無に拘らず、商周時代から秦字の字例があることから、この字によって、時代を判断することはできないはずである。ただし戦国時代の晩期には、秦字の「臼」形はすっかり消えている。




秦公壺（前 765 年～前 716 年）

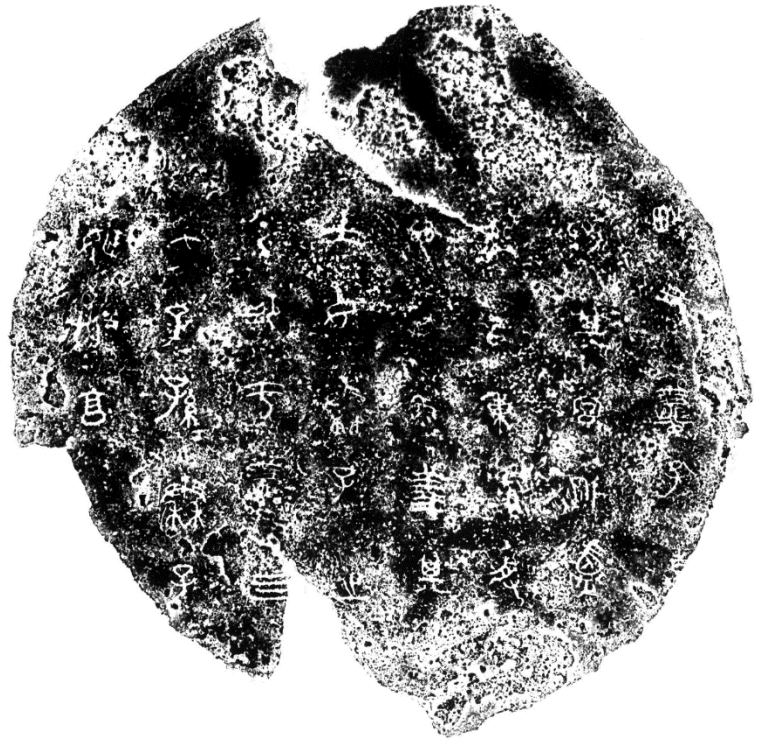
春秋早期の『秦子戈』（前七〇三～前六九八年）の銘文は「秦子作造、中辟元用、左右市鮒、用逸宜」である。字数が多くなか、欠損やかすれがあるが、早期の秦字の参考にすることができる。

例えば、「宜」は、商の『作冊班甗』はに作り、西周早期の『貉子卣』はに作り、春秋早期の『秦子戈』はに作り、春秋中晩期『秦公簋』はに作り、秦簡はに作る。戦国の『宜安戈』はに作り、『説文』はに作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作る。よって、『説文』小篆の形状が錯誤したものであると考えている。



秦子戈（前 703～698 年）

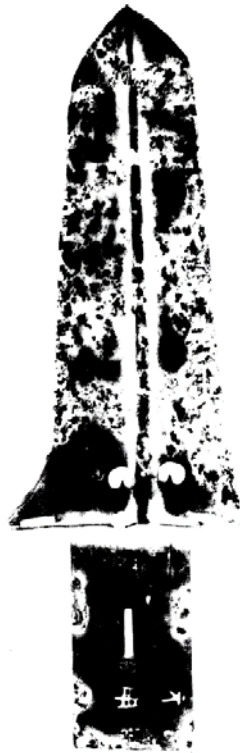
春秋早期の『秦子簋蓋』（秦靜公或いは憲公・下限前七〇三年）では、秦はに作る。前述した「臼」形の有無について、この銘文にその例が確認できる。



秦子簋蓋（下限前 703 年）

春秋早期の『元用戈』（前七一五年～六九五年）の銘文は「元戈」
元 **用**）である。西周早期の『狼作父戊卣』は、元は **元** に
 作り、西周中期の『習鼎』は **元** に作り、西周中期の『曆方鼎』

は **元** に作り、秦簡は **元**、**元** に作る。西周晩期の『頌鼎』は、
 用は **用** に作り、春秋早期の『秦公簋』は **用** に作り、『石鼓文』
 は **用** に作り、秦簡は **用**、**用** に作る。『説文』は、元は **元** に作
 り、用は **用** に作る。「元」字は、秦簡牘の形状と春秋またはもつ
 と早い時期の秦字と同形であり、『説文』においてすでに規整化の
 形跡が見られる。



元用戈（前 715 年～695 年）

春秋早期の『伯喪戈』（前七一五年～六九五年）の銘文は「秦
 政伯喪、戮政西方、作造元戈喬黃、肇撫東方、師旅用逸宜」で
 ある。そのうち、秦、宜の二字「**秦**」、「**宜**」の形状につい

ては、すべて前述の論述を裏付けることができる。



伯喪戈（前 715 年～695 年）

春秋早期の『秦公及王姬罇鐘』の（秦文公・前六九七～前六九八年）は、字数と制作過程ともに特別な計画やアレンジがなされている。一行に五文字、左右の間隔も詳細に配置され調節されている。明確には言えないが、文字を一定の範囲内に収めるように調節しているようである。



秦公及王姬罇鐘（前 697 年～前 678 年）

『秦公罇』は、明は、に作る。「明、明」形の前身であることから、戦国時代晚期『睡虎地秦簡』の形状とはつきり分かる。よって、明字の左側の「囧」形が「目」形に変遷した過程が

次のように図に示すことができる。



春秋中期の『秦景公石磬』は、現時点で把握できる年代がもつとも古い秦石刻であり、学者らは銘文の彫刻時期は紀元前前五七三年八月初二または三日で、秦景公四年の祖先、天を祀るものと推定している³⁰。石磬石でつくった平板の打楽器の破片で、しかも、刻まれた字数も少ない。拓本の筆跡がはっきりと映っているため、文字形状の研究の上で非常に役立つ。一例として、**夙**、**神**、**福**、**夏**、**夏**、**平**、**高**、**高**、**即**、**秦**、**秦**などの形状がはっきりしていて、識別可能である。



秦景公石磬 (前 573 年)

春秋時代晩期の『秦公簋』は、秦景公の即位早々に作られたものと思われ、紀元前五七六年以後間もない頃と推定される。『秦公簋』の「雖」は**雖**に作り、戦国晩期の『新鄭虎符』は**雖**に作り、秦簡は**雖**、**雖**に作り、『説文』は**雖**に作る。よって、『説文』

「虫」の小篆の形状に錯誤があると考えられる。

西周中晩期の『戎生編鐘』では、「責」は **𠄎** に作り、『秦公

簋』は **𠄎** に作り、秦簡は **責**、**責** に作り、『説文』は **責** に

作る。戦国中期の『商鞅方升』では、「積」は **積** に作り、秦簡は

積、**積** に作る。北大藏前漢竹書『蒼頡篇』、「𠄎」は **𠄎** に作る。

責という文字にある「束」形の変遷は、次図を参照されたい。

(束束束束束)

稿者の意見として、『説文』の形状や前後の時期とも同じでないため、錯誤の可能性が極めて高い。よって、『説文』のうち「責」部に関わる字はすべて間違った形状の可能性はある。それは、噴

(噴)、讀(讀)、蹟(蹟)、𠄎(𠄎)、𠄎(𠄎)、𠄎(𠄎)、𠄎(𠄎)、

責(責)、積(積)、積(積)、積(積)、積(積)、積(積)、積(積)、積

(積)、積(積)、積(積)などの十四字である。

























秦公簋 (前 576 年～前 537 年)










秦公簋蓋 (前 576 年～前 537 年)

春秋中期の『石鼓文』がおおよそ秦景公五年（紀元前五七二年）後の数年内、または景公景三十二年（紀元前五四五年）後の数年内に製作された。銘文が四百字余あり、この膨大な字数が秦文字変遷の考察にかなり役立つ。そのうち、「庶」、「邇」、「皮」の字は検討する価値がある。

西周晩期の『毛公鼎』は、「庶」はに作り、『石鼓文』はに作り、戦国中期の『秦封宗邑瓦書』は、に作り、秦簡は、に作る。北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は、「遮」はに作る。『説文』の中の「庶」に関する字例の、庶（）、嘘（）、遮（）、蹠（）、鷓（）、樵（）、庶（）、摭（）、蹠（）などは、すべて間違った形状と考えられる。

西周晩期の『蠡季鼎』は、「蠡」はに作り、西周晩期の『師寰簋』はに作る。『石鼓文』は、「邇」はに作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。精確なデジタル摹本の文字例に基づくと、『説文』の「蠡」の形状は間違っている。



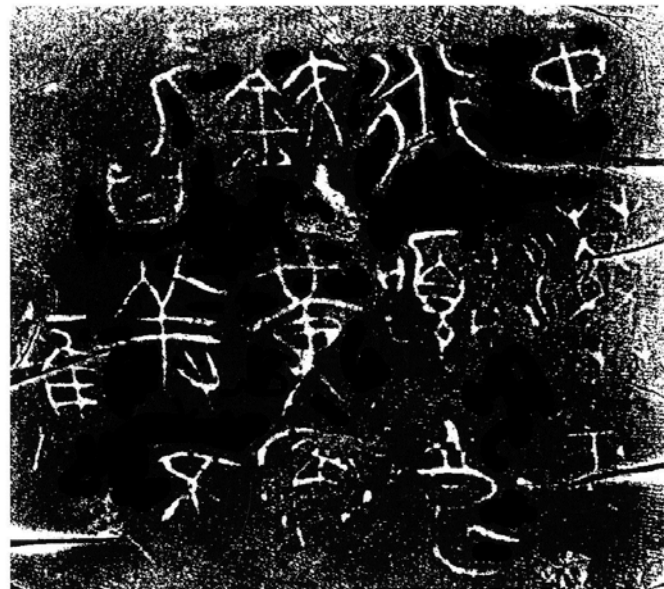
西周中期の『九年衛鼎』は、「皮」はに作り、『石鼓文』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。北大藏前漢竹書『蒼頡篇』、「波」はに作る。「陂」はに作り、「頗」はに作る。以上に取り上げた字例のすべての正確性が、秦簡と『蒼頡篇』との形状の対照によって裏付けられる。

西周中期の『五祀衛鼎』は、「裘（求）」はに作り、西周中期の『裘衛盃』はに作り、西周晩期の『番生簋蓋』はに作り、春秋早期の『侯母壺』はに作り、春秋の『鑄侯求鐘』はに作る。『石鼓文』は、「求」はに作り、秦簡は、に作る。『説文』の「裘（求）」は、篆文はに作り、古文はに作る。北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は、「求」はに作り、「救」は







新に作り、「裘」は裘に作る。よって、『説文』小篆の「求」の形
 状には錯誤があると考えられる。



石鼓文（前 572 年或は前 545 年）



仲滋鼎（下限前 475 年）

春秋晩期の『仲滋鼎』（紀元前四七五年ごろ）の銘文は「仲滋正
 術、鬻良鉄黄。盛旨羞不□□」である。「羞」は再考の価値があ
 る。商の『羞方鼎』はに作り、西周中期の『羞鼎』はに
 作り、西周晩期の『不眞簋蓋』はに作り、春秋晩期の『仲滋
 鼎』はに作り、秦印はに作り、秦簡はに作り、『説文』

は**𠄎**に作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』は**𠄎**に作る。商時代、戦国時代から前漢時代まですべて「羊」と「又」の組合せになつており、『説文』の「羞（𠄎）」が間違つた形状であることを実証できる。

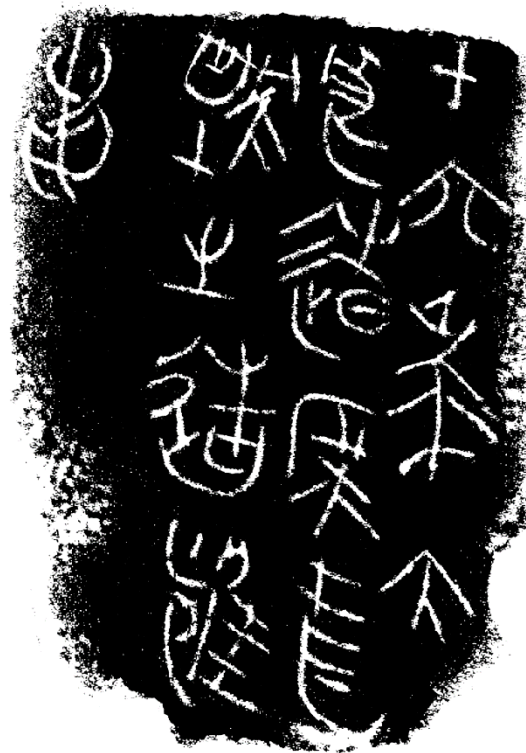
第二節 戦国時代の秦文字

一、商鞅三器 (BC346~343)

前節において、春秋時代の秦文字を解析した。本節では、いわゆる「商鞅三器」、すなわち『十六年大良造庶長鞅鍤』、『商鞅方升』、『十九年大良造鞅爰罇』について、順を追って解析する。

戦国中期の『十六年大良造庶長鞅鍤』（秦孝公十六年、紀元前三四六年）の銘文は「十六年大良造庶長鞅之造、雍籠」である。銘文の「大、造」は**𠄎**、**𠄎**に作り、『秦封宗邑瓦書』は**𠄎**、**𠄎**に作り、秦簡は**𠄎**、**𠄎**に作る。文字の材質は、それぞれ銅器、

瓦、簡牘と異なる材質だが、文字の形状は同じである。総合的に対照すると、同時代の製作方法の違いと材質の異なりから、文字の表出形体の結果が見られる字例である。

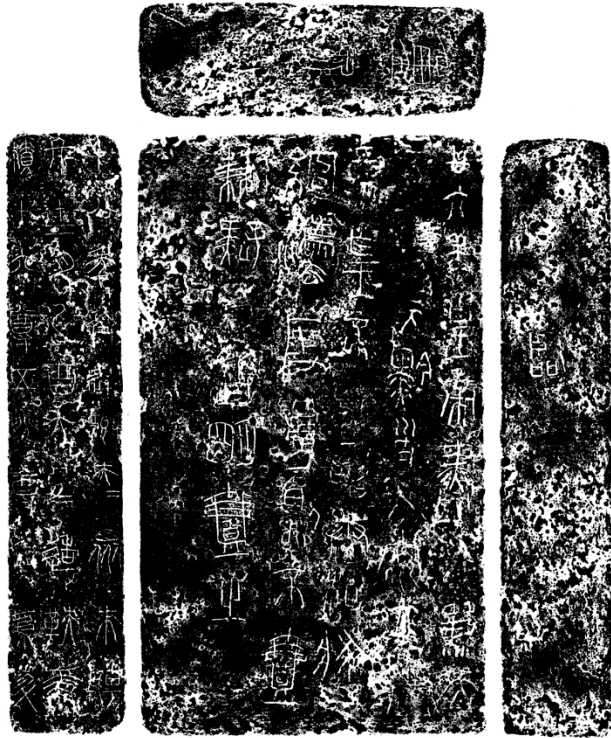


十六年大良造庶長鞅鍤（前346年）





戦国中期の『商鞅方升』（秦孝公十八年、紀元前三四四年）の銘文は「十八年、齊遣卿大夫眾來聘、冬十二月乙酉、大良造鞅爰積十六尊（寸）五分尊（寸）壹為升、臨、重泉。廿六年、皇帝盡并兼天下諸侯、黔首大安、立號為皇帝。乃詔丞相狀綰灋（法）度量剗

(則) 不壹、歎疑者皆明(明) 壹之」である。

稿者が選択した拓本のうち、一面の文字およそ二十八個の文字を、突き合わせるために、秦漢文字と同じサイズに編集した上、逆相の拓本と並記して表した。「積」(積、積)の形状が異なるほかは、すべての文字が同形である。



商鞅方升 (前 344 年)

戦国中期の『十九年大良造鞅爰罽』(秦孝公十九年、紀元前三四三年)の銘文は「十九年、大良造庶長鞅之造爰。釐鄭」である。銘文の「爰、鄭」は、、に作り、秦印は、に作り、秦簡は爰、爰、鞅、鄭、鄭に作る。銘刻の材質が簡牘と異なるものの、書き方や書き順など文字によって形成する共通条件から、時代の近いものは、文字の形跡が類似する可能性があることがわかる。



商鞅方升局部 (前 344 年)



十九年
 大良造
 鞅
 受
 鑄

十九年大良造鞅受鑄（前 343 年）



十九年大良造鞅受鑄（前 343 年）

11、封宗邑瓦書 (BC334)

1. 前言

『封宗邑瓦書』は、長さ二十四センチ、幅六・五センチ、厚さ一〇・五センチ、青灰色の陶質で、正面に六行、反面に三行、合計一百二十一字の文字がある。先に白地に文字を刻してから焼いており、筆画には朱が埋められている。比率的には、外観は木簡の外形に類似する。製作年代はおおよそ戦国中期（秦惠王前元四年、即ち紀元前三三四年）である。多くの字例が、戦国時代の秦文字に関する研究上、実質的な役割を果たしている。

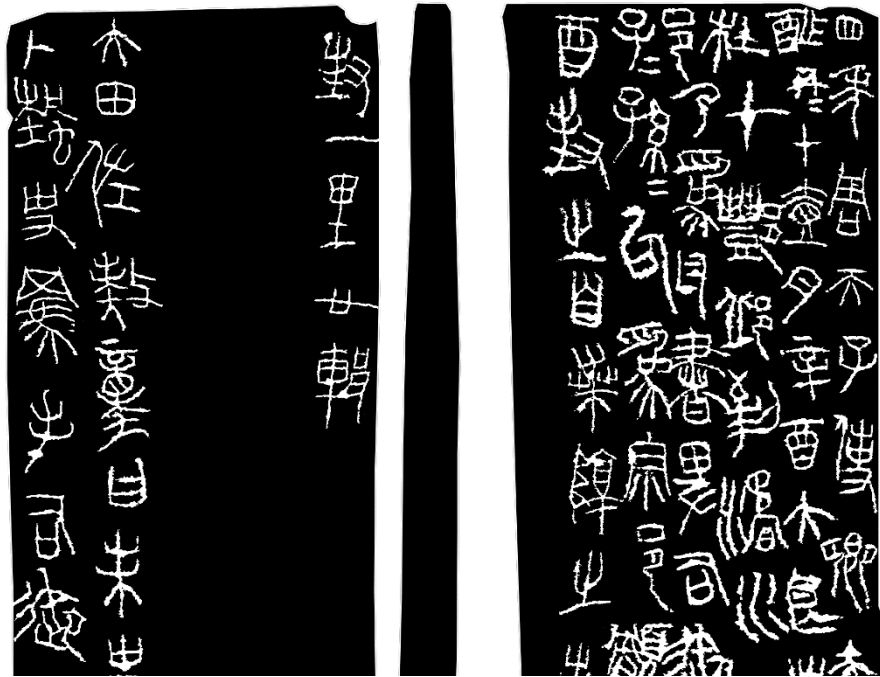
陳直氏の考察によると、一九四八年に鄠縣で出土し、西安の段氏の収蔵である。また、秦国政府冊封宗邑の正式文書であり、官吏を派遣して宗邑の場所にする文章であり、儀式で使われた後、封疆の地下に埋められ、後世の土地の証明となっている³¹。陳直氏、郭子直氏、李学勤氏³²等の学者が次々と異なる方向から研究

分析を行っている。稿者は、瓦書の文字の形状に重きを置き、前後の時代の文字との対照して、秦簡文字の形状とその他の文字の共通点や相違点などを検証する。

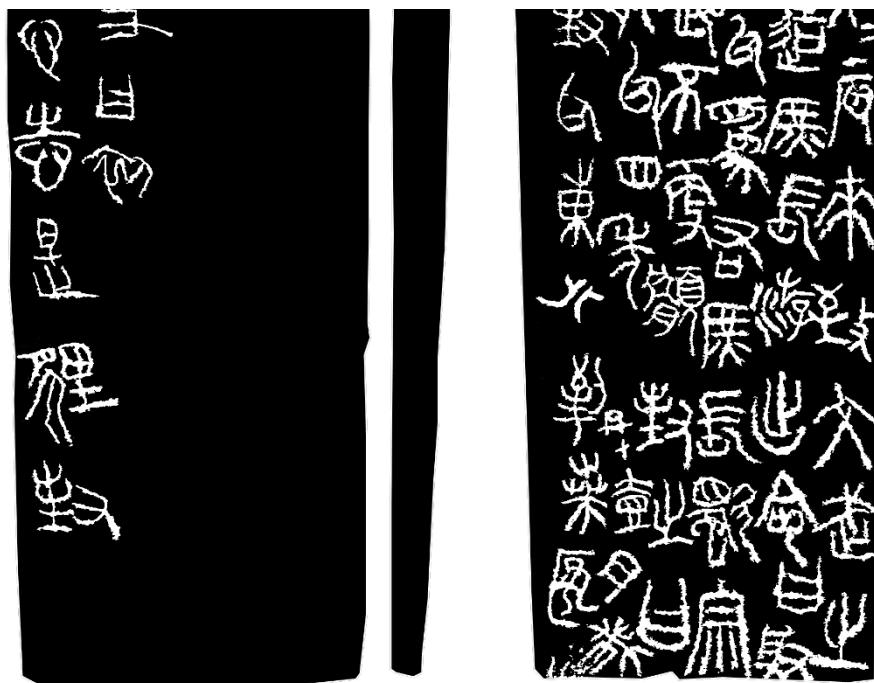
『封宗邑瓦書』は、重複する字を除くと、八十二字ある。

釈文は以下の通りである。

四年、周天子使卿夫（大夫）辰來致文武之酢（胙）、冬十壺（壹）月辛酉、大良造庶長游出命曰『取杜才（在）鄠邱到于（合書）瀟水、以為右庶長（觸）宗邑。』乃為瓦書。卑（俾）司御不更（顛）顛封之曰『子孫（子子孫孫）以為宗邑。』顛以四年冬十壺（壹）月癸酉封之、自桑障（墩）之封以東北到于（合文）桑障（堰）之封、一里廿（二十）輯。〔中空三行〕大田佐、敖（豪）童（僅）曰未。史曰初、卜蟄（藝）、史羈手、司御心、志是狸（埋）封。



封宗邑瓦書（前 334 年）



2. 瓦書文字の形状分析

凡例

・字例を基に文字編に関連するものと文物材料中から前後の時代の字形を選び出して対照する。西周から春秋戦国までの青銅器銘文、璽印、封泥、玉片、簡帛墨跡等の各種材質の文字材料を含む。

・「西周文字」と「春秋戦国文字」の表では、「西周」と「春秋戦国」と略称する。春秋文字は侯馬盟書、温縣盟書等の墨跡文字も含み、戦国文字には楚簡文字を含まない。「秦封宗邑瓦書」は「瓦書」と略称し（表中の「瓦書」の後ろに文字番号をつける）、『説文解字』陳昌治本を「説文」と略称する。

・「秦簡」は『青川木牘』及び戦国時代晩期の『睡虎地秦簡』、『嶽麓書院藏秦簡』、『里耶秦簡』等の秦代簡牘を含む。

・対照できる字例がない場合は、関連する文字或いは部分の近い

字例で代用する。

・積文は各文字にそれぞれ番号を1から12¹まで設定し、対照の検索に利用する。

・明瞭且つ正確に「秦簡」の形状を対照するために、「瓦書」文字の図版を反転処理する。







瓦書を中心に各時代の文字と詳細な比較をし、秦簡を基に『説文』小篆の形状との差異をA、B、C、Dの四種類に分けた。その違いは、A 説文と瓦書の形状の一致、B 説文と瓦書の形状の不一致、C 秦簡と瓦書の形状の不一致、D 篆書の文字の筆跡が伝承される中で現れる小さな差異、である。




積文の番号1から12¹は、重複する文字を除くと実際の文字数は82字である。A類は58箇所39字、B類は35箇所22字、C類は2箇所2字、D類は26箇所19字である。



以下の字形表は、積文の順番に従って解析する。









A 説文と瓦書の形状の一致










説文の形状と瓦書が一致したものは全部で 58 箇所あり、実際は 39 字あった。例えば、「四、天、子、大、來、文、武、之、十、辛、造、命、取、杜、邱、水、右、宗、邑、乃、司、不、更、封、自、桑、東、北、一、里、廿、田、佐、未、史、卜、志、是、狸」など。以下は摘録した部分の文字の解説をする。残りの字形表は最後に付してある。(表 3・2・1)







「四」字は二例あり、番号 1 と 72 である。西周晩期の『史牆盤』は  に作り、『瓦書』は 、 に作り、秦簡は 、 に作り、『説文』は  に作る。そのことから春秋戦国後の「四」字の形状は基本的に明らかな変化はない事がわかる。






「天」字は一例あり、番号は 4 である。西周晩期の『頌鼎』は  に作り、春秋中晩期の『秦公簋』は  に作り、『瓦書』は  に作り、







に作り、秦簡は  に作り、『説文』は  に作る。周代金文、瓦書、秦簡両者の形状も同じで違いがない。

「子」字は全部で三例あり、番号は編號 5、62、63 だが、実際は 62 と 63 は同じ形状であり、子々孫々の重文である。西周晩期の『頌壺』は  に作り、春秋晩期の『詹弔之仲子平鐘』は  に作り、瓦書は 、 に作り、秦簡は 、、 に作り、『説文』は  に作る。厳密に言えば、『説文』「子」の形は間違っている。














「大夫」字は全部で一例あり、番号は 8、9 で、実際は「大夫」が合わさった文字、合文である。その他に「大」字は二例あり、番号は 23、100 である。「大」は、西周晩期の『頌簋』は  に作り、春秋早期の『秦公罇』は  に作り、『瓦書』は 、、 に作り、秦簡は 、、 に作り、『説文』は  に作る。『瓦書』、『説文』両者の形状も同じで違いがない。ただ、『説文』の形状は規整化の現象である。








「来」字は全部で一例あり、番号は11である。西周晩期の『史牆盤』はに作り、春秋中期の『子犯編鐘』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印はに作る。秦簡の形状は違いはなく、仮にこの秦印の「来」字が篆書なら、秦簡もそのように呼ぶべきである。








「文」字は全部で一例あり、番号は13である。西周晩期の『此簋』はに作り、春秋早期の『秦公鐘』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。周代金文、『瓦書』、秦簡両者の形状も同じで違いがない。






「武」字は全部で一例あり、番号は14である。西周晩期の『散氏盤』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印はに作る。表中の秦簡等の他の字例と形状が共通している。

「之」字は全部で五例あり、番号は15、60、81、85、94である。西周中期の『縣改簋』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』

はに作り、『瓦書』は、、、、、に作り、秦簡は、、、、に作り、『説文』はに作る。秦簡の字例は、異なる筆順により発生した字の姿であるが、全体的な形状はやはり前後の時代の文字と異なることは無い。

「十」字は全部で二例あり、番号は18、75である。西周晩期『鄭號仲簋』はに作り、春秋晩期の『乙鼎』はに作り、『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。表中の字例は秦簡と説文などの形状と共通している。

「辛」字は全部で一例あり、番号は21である。西周晩期の『伯寛父盥』はに作り、春秋の『神公彭宇匱』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印は、及び説文の形状と同じである。

「造」字は全部で一例あり、番号は25である。西周中期の『史造父癸鼎』はに作り、春秋晩期の『簠大史申鼎』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに

作る。秦印は、「」に作る。基本的には『瓦書』、秦簡、説文などの字例の形状と共通している。

「命」字は全部で一例あり、番号は30である。西周晩期の『小克鼎』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。各字例は基本的に形状が同じで、秦簡の右下の「卩」の形の曲がり方に違いがあるのみである。

「取」字は全部で一例あり、番号は32である。西周中晩期の『戎生編鐘』はに作り、春秋の『取膚匱』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印はに作る。基本的に『瓦書』、秦簡、秦印、説文などの字例の形状と共通している。他の字は、秦印の「叢」はに作り、秦印、の「最」はに作り、秦印の「取」は、に作る。さらに形状に誤りがないか検証する必要がある。

「杜」字は全部で一例あり、番号は33である。西周晩期の『杜

伯盥』はに作り、戦国晩期の『杜虎符』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作り、秦印は、に作る。『瓦書』、秦簡及び説文などの字例の形状と共通している。

「邱」字は全部で一例あり、番号は36である。春秋早期の『商丘弔匱』はに作り、春秋晩期の『闕丘虞鵬造戈』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡、「丘」はに作り、秦印は、に作る。『説文』はに作る。「丘」は、『瓦書』及び説文の形状と同じである。








「水」字は全部で一例あり、番号は40である。西周中期の『同簋蓋』はに作り、春秋早期の『石鼓文』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作り、秦印は、、に作る。その形状は『瓦書』、秦簡等の字例と共通しており、この形状を以て秦簡文字は「隸書」であると言うのは理解を得難く、秦簡は同時代の他の材質の文字と同じく篆









書の形体に等しい。これは一つの確証となるだろう。







B 説文と瓦書の形状の違い

『説文』の形状が『瓦書』と違うものが全部で38箇所あり、実際は24字ある。「卿、夫、辰、致、酢、冬、壺、月、酉、長、才、于、滴、以、為、歎、瓦、卑、御、顛、孫、障、蟄、羅」である。



以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表3・2・2)






「卿」字は全部で一例あり、番号は7である。西周晩期の『毛公鼎』はに作り、春秋の『曾伯陔壺』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。「卿」字の中間にある「邑」形は「台」から「台」に変わり、西周、『瓦書』、秦簡等の例は皆同じであり、『説文』のみと違っている。戦国中期の「商鞅方升」はに作っている。これにより秦簡の形状の信頼性が説文小篆よりも高いことが証明される。








「夫」字は全部で●例あり、番号は●である。西周晩期『散氏盤』はに作り、春秋晩期の『龜公華鐘』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。表中の「大」と「夫」の両字の形状を比較すると、「大」字は各時代の形状に違いはなく、「夫」字のみ説文との違いがある。夫字は、秦印は、「」に作り、漢封泥はに作る。「秦簡」と「説文」を比較したところ、稿者は秦簡の形状が比較的正確なものであると考える。





「辰」字は全部で一例あり、番号は10である。西周早期の『大孟鼎』はに作り、西周晩期の『散氏盤』はに作り、春秋晩期の『龜公桴鐘』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。字例に基づくと「辰」字の変遷の軌跡を看取でき、次のように変遷を推測できる。












a、bの形は西周時期、c、dの形は東周時期、eの形は戦国晩期から秦漢である。漢印は「酉」 或いは「酉」 に作る。これらから、『説文』の形状とは違いがあることが見て取れ、秦簡初期の形状とは異なることがわかる。








「致」字は全部で一例あり、番号は12である。西周晩期の『饒匱』は に作り、秦陶文は に作り、『瓦書』は に作り、秦簡は に作り、『説文』は に作る。『瓦書』、秦簡と説文三者の形状には微かな違いがある。

「酢(酢)」字は全部で一例あり、番号は16であり、柞を以て酢に変えている。西周晩期の『柞鐘』は に作り、春秋晩期の『邾王義楚釐』は に作り、『瓦書』は に作り、秦簡は に作り、『説文』は に作る。「醫」は、秦印は、 に作る。「醜」









は、秦印は、、 に作る。よって、「酉」字は「酉」に作る。これは正確な形で、反対に「酉」 の形は問題がある可能性がある。







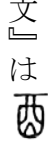




「冬」字は全部で二例あり、番号は17、74である。「終」は、西周晩期の『頌簋蓋』は に作り、戦国中期の『秦駟玉牘』は に作り、『瓦書』は、、 に作り、秦簡は、 に作り、



『説文』は に作り、秦印は に作る。秦印、秦簡は正確な形で、反対に『説文』の形は問題がある可能性がある。










「壺(壺)」字は全部で二例あり、番号は19、76である。西周晩期の『鄧孟壺蓋』は に作り、春秋早期の『陳侯壺』は に作り、『瓦書』は、 に作り、秦簡は、 に作り、『説文』は に作り、『瓦書』及び秦簡の形状と共通している。反対に説文の形状は下部の皿の形が「壺」になっており、やはり相違がある。







「月」字は全部で二例あり、番号は20、77である。西周晩期の








『伊簋』はに作り、春秋早期の『曾伯霽卣』はに作り、『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。説文の形状は、『瓦書』や秦簡の形と明らかに異なることがわかる。月字の秦印はに作り、秦簡の形状と共通し、僅かに角度のみ違いがある。

「酉」字は全部で二例あり、番号は 22、79 である。西周中期の『師酉簋』はに作り、春秋晚期の『簠弔之仲子平鐘』はに作り、『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。鄭字の秦印は、に作り、尊字の漢印はに作り、酒字の漢印はに作る。酉が偏旁になった場合、秦簡と印に関わらずどちらも「酉」に作る。よって、前の字例の「酢(𩇛)」を、酉字の秦小篆の形状を比較すると、「酉」或いは「酉」の形が正確であると判断した。

「長」字は全部で二例あり、番号は 27、45 である。西周晚期の『四十二年逯鼎乙』はに作り、戦国の『長鄧戈』はに作り、

『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。秦印は、、に作る。『瓦書』、秦簡との形状に差はなく、反対に『説文』と大きな違いがある。秦漢間にそれと似通った字例は見受けられない。隋の『郭達墓誌』が最も近い形状()となっている。それから推測すると、おそらく最初の『説文』小篆の形状ではないであろう。

「才(在)」字は全部で一例あり、番号は 34 である。西周中晩期の『斨狄鐘』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。戦国晩期の『新鄴虎符』は「」に作り、『瓦書』、秦簡の形状と共通しているが、『説文』とは異なる。

「到于」は合文である。全部で二箇所あり、番号は 37、38、90、91 である。西周晩期の『弔妣簋』はに作り、春秋晩期の『臺于公戈』はに作り、『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。『瓦書』、秦簡は正確な形で、反対

に『説文』の形は問題がある可能性がある。

到字は、各時期の字例の形状と基本的に共通しており、『説文』の形状においては他の字例と異なる。秦印は「」、「」、「」等に作り、秦簡と共通している。関連する字例と多くの字例を対照し考察した結果、稿者は二つの横画の中間にある縦画は、突き抜けているものが正確な形状であると考ええる。

「溈」字は全部で一例あり、番号は39である。西周中晩期の『伯戣父簋』はに作り、戦国の『須矛生鼎蓋』はに作り、『瓦書』はに作り、務が溈に変わっている、秦簡はに作る。『説文』はに作る。

この字は非常に字例が少ない事から、偏旁、部分から再度考察した。橘字の秦封泥印は、、に作り、旁の「矛」の形をはっきりと見る事ができる。また「矛」の形は、例えば矛字の秦簡はに作り、枚字の秦印は、、等につくる。務字の秦印はに作り、茅字の秦印は、、等に作る。さらに多くの

字例と偏旁、部分を考察すると、正確な「矛」形はおそらく『瓦書』の溈字或いは秦簡の矛、務等の字と共通しており、『説文』の「矛」の形状は却って相対的に誤っている事がわかる。

「以」字は全部で四例あり、番号は41、66、71、87である。

西周晩期の『散氏盤』はに作り、春秋早期の『秦公鐘』はに作り、『石鼓文』はに作り、『瓦書』は、、に作り、『説文』はに作り、秦簡は、、に作り、漢金文『内清鏡』は、に作る。秦印はに作り、『説文』はに作り、『瓦書』と共通しているが、秦簡は左半分に僅な違いがあり、『説文』の形状とは大きく異なっている。

「為」字は全部で三例あり、番号は42、50、67である。西周中期の『六年琯生簋』はに作り、春秋晩期の『罍所獻盃』はに作り、『瓦書』は、、に作り、秦簡は、、に作り、『説文』はに作る。

字例に基づく次のような変遷をたどると考えられる。



a から f まで全部で六種類の字例があり、西周中期から戦国に至る。b、e の二つの形に関しては稿者が推測したもので、他は全て実例がある。d は『瓦書』で、f は秦簡である。一見すると秦簡の形状は『瓦書』と大きな差があるように見えるが、実際はそうではなく、解析後に推測できる。

「為」字を四つの部分に分けて見ると、上部の爪形は「𠂔」↓「𠂔」、中間の人形は「𠂔」↓「𠂔」、続いて口形「𠂔」↓「𠂔」、最後は彡形「彡」↓「彡」となっている。



対照すると、秦簡と『瓦書』は書写が変化する伝承関係にあるが、『説文』の形状は『瓦書』と全く異なっている。

C 秦簡と瓦書の形状の相違

秦簡文の形状で『瓦書』と異なるものは全部で二箇所あり、実際は酆、癸の二字である。「酆」字は全部で一例あり番号は 35 である。西周早期の『臣宅簋』は  に作り、秦印は  に作り、『瓦書』は  に作る。體（體）を以って酆に変えており、秦簡は  に作る。醴は 、醴に作り、『説文』は  に作る。酆字のパーツの「豊」は「豊」であり、秦印の禮字は  に作る。豊字は、『北大藏和竹書・蒼頡篇』は「豊」に作り、次の図は上から下に向かって『瓦書』、秦印、秦簡、秦簡及び蒼頡篇等の字例で、少し

の差はあるが、文字の変化の合理的な範囲内に収まっている。



78 癸	鄂 35	No.
		西周
		春秋戰國
		瓦書
		秦簡
		說文

「癸」字は全部で一例あり、番号は78である。西周晩期の『此簋』はに作り、春秋早期の『鮒公子簋』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作り、秦印は、に作る。この形状はみな秦簡と共通している。『瓦書』

や『説文』の形状は比較的古いとしか言いようがなく、戦国晩期の秦簡はすでに今見ることのできる形状になっている。稿者は字例に基づいて以下のような変遷の過程を推測した。



a から f の六段階のうち、中間の四つの字例の変化は前後の字形に基づいて推測したものである。前後の字例はおそらく数百年の差がある。



D 篆文筆跡の伝承における小異






「篆文筆跡の伝承における小異」というのは、文字が出来て以来、一字につき多くの形がある事はすでに普遍的な現象であるが、文字が変遷する際、異なる執筆者がいる状況で、同じ字に異なる姿が現れることを言う。前後の時期の文字に基づいて分析したと

ころ、字形に微かな違いはあるが、やはり同一の文字であると認定した。よって分類は『瓦書』と『説文』との比較結果を現す。




『説文』の形状と、『瓦書』の筆跡の伝承とに小異がある字は全部で23箇所あり、実際は17字ある。「年、周、使、良、庶、游、出、日、到、書、匱、輯、敖、董、初、手、心」である。



以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表3・2・3)


「年」字は二例あり、違いは番号2と73である。西周晩期の『兮仲簋』はに作り、春秋中期の『秦景公石磬』はに作り、





『瓦書』は、に作り、秦簡は、に作り、『説文』はに作る。秦簡「年」字の下部の「千」形は湾曲に差があり、

『瓦書』と比較すると、『説文』は却って横画が一画多く、秦簡と『説文』の基本的な形状は、西周や東周文字とほとんど差はない。



「周」字は一例あり、番号は3である。西周晩期の『史頌鼎』はに作り、春秋早期の『周王孫戈』はに作り、『瓦書』はに作り、








に作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。表から文字は時代が古いものから新しくなるにつれ形状が共通する事がわかる。上の横画の長短の差異のみである。

「使」字は全部で一例あり、番号は6である。史を以つて使に替えている。西周晩期の『頌簋蓋』はに作り、戦国晩期の『十

三茶壺』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。「使」字の右上の「使」、「使」、「使」に

「由」の三種類の差異から見ると、秦簡は『説文』の形状より更に『瓦書』に近い。



「良」字は全部で一例あり、番号は24である。西周晩期の『史季良父壺』はに作り、春秋の『湯鼎』はに作り、『瓦書』






はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印、良はに作る。郎はに作り、琅は、に作る。以上の


字例をまとめると、「良」字の形状は西周文字を伝承しており、『瓦書』と秦簡どちらも共通している事がわかる。『説文』に小さな差

異があるが、小異を伝承している範疇である。



「庶」字は全部で二例あり、番号は 26、44 である。西周晩期の

『毛公鼎』は  に作り、春秋晩期の『龜公華鐘』は  に作り、

『瓦書』は 、 に作り、秦簡は 、 に作り、『説文』は  に作る。

新莽官印は  に作る。『瓦書』、秦簡の形状は共通しており、漢印及び『説文』とは一面の横画に差がある。



「游」字は全部で一例あり、番号は 28 である。西周中期の『旂

鼎』は  に作り、春秋早期の『曾仲旂父方壺』は  に作り、

『瓦書』は  に作り、秦簡は  に作り、『説文』は  に作る。




秦封泥は  に作り、秦印は 、 に作る。秦簡の形状と共通している。『瓦書』とは僅かに偏の水形に違いがある。

「出」字は全部で一例あり、番号は 29 である。西周晩期の『毛

公鼎』は  に作り、春秋の『拍敦』は  に作り、春秋早期の『石



鼓文』は  に作り、『瓦書』は  に作り、秦簡は  に作り、『説



文』は  に作る。「出」の形を部分として字例を探すと、詛字の



秦印は 、 に作り、詛字は 、 に作る。以上の多


くの字例から各時期の形状は似通っており、明らかな差はない。


「日」字は全部で四例あり、番号は 31、61、105、108 である。



西周晩期の『逆鐘』は  に作り、春秋早期の『秦公鐘』は  に

作り、『瓦書』は 、、、 に作り、秦簡は 、、

 に作り、『説文』は  に作る。西周と春秋戦国金文の多


くはやはり「」の形を主としており、中間に縦画がない少数






の例えば春秋晩期の『哀成弔鼎』は  に作っており、春秋晩期


の『龜公華鐘』は  に作っている。戦国の『陳純斧』は  に

作っており、これらの字は『説文』の形状と共通している。

「到于」は合文で、全部で二箇所あり、番号は 37、38、90、91。


至を以って到字を代替する。西周晩期の『多友鼎』は  に作り、

秦印は  に作り、『瓦書』は 、 に作り、秦簡は 、 に作り、

『説文』は  に作る。説文と『瓦書』の右上の刀形の上



部に微かな差異があり、これは小異の伝承と言えよう。




「輯」字は、一例、番号は99である。軫を以て輯に替えている。

西周晩期の『番生簋蓋』はに作り、輅を以て輯に替えている。

春秋中期の『子犯編鐘』はに作り、『瓦書』はに作る。𡗗



(𡗗)を以て輯に替えている。秦簡はに作り、『説文』はに作る。

「耳」は、秦簡はに作り、取はに作る。「揖」は、






秦印はに作る。「俎」はに作り、「茸」はに作る。『説文』

に小さな差異があるが、小異を伝承している範疇である。





「童」字は全部で一例あり、番号は104である。西周晩期の『毛

公鼎』はに作り、春秋の『童麗君匠』はに作り、

『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作

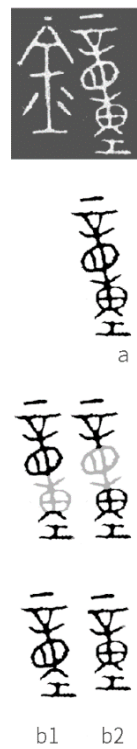
る。秦印は、、に作る。董、秦印は、に

作る。春秋早期の『秦公鐘』を見ると鐘字はに作っている。こ



れらから、稿者は、童形は「」から「」「」へ、或いは「」

に変化したと推測する。『瓦書』は前者に属し、秦簡或いは『説文』


は後者に属する。詳細を下図に示す。



「初」字は全部で一例あり、番号は109である。西周晩期の『融攸

比鼎』はに作り、春秋中期の『子犯編鐘』はに作り、『瓦

書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。西

周から戦国まで刀形は一貫して「」形に作っているが、『説文』

は「」の形に作っている。秦印の利字は「、、、

」或いは「」「」に作っている。「規整化」の現象に

属すると考えている前者の四種を a 類、後者を b 類とする。稿者

は古文字の結構が基本的に共通している下で、画面の配置やレイ






アウトの為に、字形を新たに調整する必要があり、そういった改







変は全て「規整化」の現象であり、このように同時期の文字に些






細な差異が出るのは個別の現象と言える。文字を書く際に文字が


















演変の影響を受ける状況とは異なる。



「手」字は全部で一例あり、番号は11⁴である。西周中期の『卯簋蓋』はに作り、拍を以って手に替えている。春秋の『拍敦』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。手を部分として、秦印中の他の字を考察する。

秦印の擇字は、に作り、拾字は、に作る。挿字は、に作り、揖「揖」に作る。援字はに作り、搏字はに作る。よって、手形「、、」等は、どれも同一の形状であると考ええる。『説文』と『瓦書』の差異は小異の伝承の性質に部類する。

「心」字は全部で一例あり、番号は11⁷である。西周晩期の『散氏盤』はに作り、春秋早期の『秦公罇』はに作り、『瓦書』はに作り、秦簡はに作り、『説文』はに作る。秦印の

心字は、、に作り、思は、に作り、志は、に作り、息はに作り、息はに作る。心形は大体以下
の形状に分けられる。「、、、、、」などで、『説文』は「」に作る。上部の「」の形が余分であり、基本の形状は『瓦書』及び秦簡等の字例と共通しているが、すでに規整化の現象が明らかである。

3. 小結

分類	字例	説明
A	39	説文と瓦書の形状の一致
B	24	説文と瓦書形状の違い
C	2	秦簡と瓦書の形状の相違
D	17	篆文筆跡の伝承における小異

「秦封宗邑瓦書」の形状の分析をめぐって、分類を通して次のような結論を導き出した。

文物自体を検討すると、『瓦書』が作られ、これに関連する儀式が行われた後、地下に埋められるが、製作者と儀式の参加者がこれを見る以外は、出土するまで他の人が見る機会はない。この状況は多くの出土した青銅器や文物と同じである。

「簡牘」はこれと大きく異なり、当時の基本的な文字記録の媒体としての各種文書等が、政府や民間で応用され、その流布による影響力は他の材質により製作された文字よりも絶大である。なぜ、字例を考察した時、『瓦書』と秦簡の形状の多くが共通一致したのか。その理由は、簡帛、簡牘が一貫して古文字を受け持つ主体であるからであり、その形状と前後の時代が共通する或いは類似する事は当然の事だからである。

『瓦書』は秦国が六国を統一する以前の文字で、この研究でも統一前後の秦文字の差異はごく僅かであると証明することができ

る。『瓦書』、秦簡文字の前後の時代の文字の詳細な字形の比較、解析を通して、秦簡文字は後代に伝わった『説文』に比べ、より文字の伝承の形状が遺っており、その形状の信憑性は比較的高いと言える事が『瓦書』からも証明できた。

三、青川木牘 (BC309)

戦国時代中期の『青川木牘』（紀元前三〇九年）は、一九八〇年に四川省青川県郝家坪の戦国墓より発掘された。長さ四十六センチ、幅二・五センチ、厚み〇・四センチ。内容は田律である。この文物は、秦文字で最も早い筆跡文字であり、内容は官庁が頒布した法律条文であり、秦時代の文字形体の変遷の研究価値が極めて高いものである。

1. 『青川木牘』訳文

『青川木牘』表面が計一一九字、裏面は筆跡が不鮮明なため識

別不能のため、再現できた単独字は七十七文字である。訳文は「二
年十一月己酉朔朔日、王命丞相戊（茂）、内史區氏臂更脩（修）為

『田律』田廣一步、表八則、為畛。晦（畝）二畛、一畝（陌）道。
百晦（畝）為頃、一千（阡）道、道廣三步。封高四尺、大稱其高。

青川木牘

掙（埒）高尺、下厚二尺。以秋八月、脩（修）封、掙（埒）、正疆
畔、及發千（阡）百（陌）之大草。九月、大除道及阪險。十月為
橋、脩（修）波堤、利津梁（梁）鮮草。雖非除道之時、而有陷敗
不可行、輒為之。章手。」である。

『青川木牘』文字の一部の筆跡がはっきりしないため、稿者は
より完全なデジタル模本の作製を試みた。字例について形状分析
するため、『張家山漢簡、二年律令、田律』の三枚の簡牘（以下『張
家山漢簡』と言う）と字形の照合分析を試みた。二種は内容に大
差はなく、しかも同じ官庁の法文書である。年代がおよそ百二十
八年離れていて、秦国と漢帝国にまたがっている。これらを照合
すると、いわゆる秦国が六国を滅ぼした後、文字を統一した実態

を明確に把握できる。



2. 『張家山漢簡・二年律令・田律』について

『張家山漢簡、二年律令』は、合計五百二十六枚あり、呂后二
年に施行された法律で、内容には漢律の主な部分を含んでおり、
範囲は幅広く、前漢の社会、政治、軍事、経済、地理などの分野
を網羅している。

二年律令のうち、「田律」三枚の簡牘を比較対象にした。訳文は
「田廣一步、表二冊步、為畛、畝二畛、一畝（陌）道、百畝為頃、

十頃一千（阡）道、道廣二丈。恒以秋七月除千（阡）佰（陌）之大草、九月大除道□阪險、十月為橋、脩波（陂）堤、利津梁。雖非除道之時而有陷敗不可行、輒為之。鄉部主邑中道、田主田道。道有陷敗不可行者、罰其嗇夫、吏主者黃金各二兩。□□□□及□土、罰金二兩。」である。

『青川木牘』と『張家山漢簡・二年律令・田律』両者の内容が、同一または近似する箇所を網掛けで示した。


『青川木牘』

二年十一月己酉朔朔日，王命丞相戊（茂）、內史區氏賢更脩（修）為《田律》：田廣一步，表八則，為畛。畝（畝）二畛，一百（陌）道。百畝（畝）為頃，一千（阡）道，道廣三步。封高四尺，大稱其高。埽（埽）高尺，下厚二尺。以秋八月，脩（修）封、埽（埽），正疆畔，及發千（阡）百（陌）之大草。九月，大除道及阪險。十月為橋，脩（修）波堤，利津梁（梁）鮮草。雖非除道之時，而有陷敗不可行，輒為之。章手。

『張家山漢簡・二年律令・田律』



田廣一步，表二卅步，為畛，畝二畛，一佰（陌）道；百畝為頃，十頃一千（阡）道，道廣二丈。恒以秋七月除千（阡）佰（陌）之大草；九月大除道□阪險；十月為橋，脩波（陂）堤，利津梁。雖非除道之時而有陷敗不可行，輒為之。鄉部主邑中道，田主田道。道有陷敗不可行者，罰其嗇夫、吏主者黃金各二兩。□□□□及□土，罰金二兩。


3. 文字の形状分析


『張家山漢簡』二年律令』札番号二四六号・二四八号の簡牘について、重複する字、欠損する字は考察の対象から外した（例えば、二四七号の第一文字「道」）の筆跡は完全に識別できない。

字形の変遷について考察するため、『青川木牘』と『張家山漢簡』二年律令』と同じ内容を並べた比較図を示す。








卷二下行部「行」字、『説文』はに作り、『青川木牘』は

に作り、『張家山漢簡』は行、行に作り、『杜虎符』はに作り、

秦簡は、行に作る。『張家山漢簡』の右側が「丁」形を表示し、隸書化の形跡が伺える。戦国時代晩期の『睡虎地秦簡』の字例からその手がかりが得られる。はじめに上方の「八」形の屈折が消え、次に右下コーナー部「く」形が「丁」形に変わり、最後に右半分の「く」形が「イ」に変わる。篆書から楷書へ、ほぼこのような発展プロセスを示している「六六行行行行」。

卷三下爪部「為」では、『説文』はに作り、『青川木牘』は、、、、に作り、『張家山漢簡』は、、、

に作る。西周中期の『六年琯生簋』はに作り、秦簡は、に作り、『禮器碑』はに作る。このように、『張家山漢簡』の形状はもはや篆書ではなく、隸書の様相に近い。一方、『張家山漢簡・奏讞書』において、「為」という字がであることから、同じ場所で発掘されたものであっても、書き方と、抄本の内容が異なれば、字形が大きく変わる可能性がある。一例として、

左図の「為」字を挙げる。Aからfへの字形の変遷過程中、『青川木牘』では、ほぼ「e」の間の位置にある。



卷六上木部「橋」字、『説文』は橋橋に作り、『青川木牘』は橋橋に作り、『張家山漢簡』は橋橋に作る。両者は右側の「喬」形の部分の差が明らか、ここでは関連の文字サンプルを考察する。秦印の橋字は橋橋、橋橋、橋橋、橋橋に作り、秦簡は橋橋に作る。秦印の橋字は橋橋、橋橋、橋橋に作り、秦簡は橋橋に作る。戦国璽印の橋字は橋橋に作る。秦簡の橋は橋橋、橋橋に作る。秦簡の橋字は橋橋に作る。

更に、戦国時期以前の字例を探すと、「喬」、西周中期の『伯喬父簋』は喬喬に作り、春秋晩期の『邵巖鐘』は喬喬に作り、春秋晩期の『喬君鉦鉞』は喬喬に作る。「矯」、西周晩期の『多友鼎』

は喬喬に作り、西周晩期の『伯公父匜』は喬喬に作る。「趨」、春秋早期の『齊趨父鬲』は趨趨に作る。もともと「喬」の構造形「又高」がはっきりしている。

前記した「喬、橋、矯、矯、矯、趨」の字例から、「喬」に「高」、「高」、「高」、「高」などの構造が残っているが、ただし、「高」（又與高）このように、比較的古い書き方は、春秋時代以降の例は少なく、あまり見かけない。

卷十一下非部「非」字、『説文』は非非に作り、『青川木牘』は非非に作り、『張家山漢簡』は非非に作り、西周中期の『班簋』は非非に作り、西周晩期の『毛公鼎』は非非に作り、秦簡は非非に作る。此の字形はこの文前後の章節すでに考察しており、ここで再び『説文』構造の錯誤が裏付けられている。

4. 小結

ここでは、時代が約百年余の隔たりがある、性質と内容の近い

法律文書より共通の文字を選択して、字形の変遷を考察した。

一部の文字は昔から今日まで、ほとんど改変していないため、文字変遷の字例として提供することが出来ない。二(𠄎)、田(𠄎)、廣(廣)、十(十)などの字がそうである。

一方、稿者が選択した字例、(𠄎)、為(𠄎)、橋(橋)、非(非)などの字は、変遷過程を推察した。(表3・2・5)

四、秦虎符 (BC337～221)

「虎符」とは、文字通り虎の形につくったもので、参戦する将軍が徴兵する時の証明として、帝王から与えられた割符である。虎符の背中には二つに分けて銘文が刻まれ、右半分は朝廷に残し、左半分を地方の官吏や兵将を統率する者に発給した。朝廷の官吏は兵を動かす時、二つの符を合わせて検証しなければならない。二つの符がぴったり合ってから兵を動かすことができた。この制度は戦国から秦、漢、隋代まで普及し、唐代から魚符の使用を開

始した。

よく知られた秦虎符は、『杜虎符』、『新鄴虎符』、『陽陵虎符』、『櫟陽虎符』の四件あり、多くは戦国の中期と後期のものであった。まず、虎符を釈読してから字形を分析する。



杜虎符 (前 337 年～前 325 年)



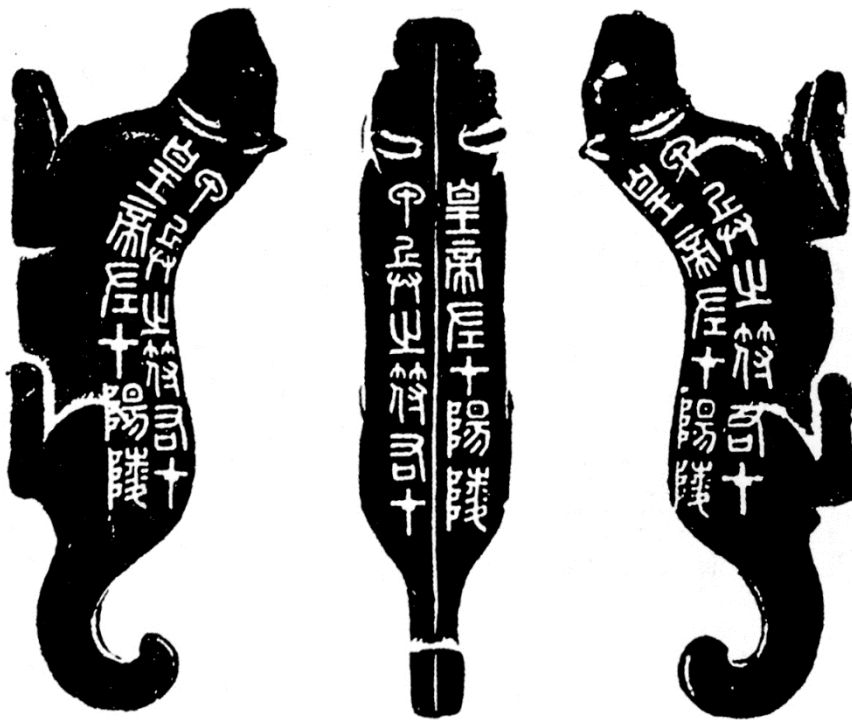
新鄴虎符（約前 251 年～前 221 年）

1. 秦虎符の内容

『杜虎符』、秦惠文君元の十三年の間（前三三七～前三二五）で、銘文四十字がある。積文は「兵甲之符、右在君、左在杜。凡興士被甲、用兵五十人以上、必會君符、乃敢行之。燔燧之事、雖毋會符、行毆」である。（この文物は、拓本に関する刊行物が見つからず、写真図版を文字の出処とすると、一部の文字がレンズ角度による歪みが生じるため考察しない。）

『新鄴虎符』は銘文が四十字ある。積文は「甲兵之符、右在王、左在新鄴。凡興士被甲、用兵五十人以上、「必」會王符、乃敢行之。

燔燧事、雖毋會符、行毆（也）。である。



陽陵虎符（前 221 年～前 206 年）（摹本）

『陽陵虎符』の釈文は「甲兵之符、右在皇帝、左在陽陵」である。摹本は十二字あり、文字構造がはっきりしていて、識別可能である。



櫟陽虎符摹本（約前 221 年～206 年）

『櫟陽虎符』の虎背には錯金の銘文十二字のうち、現存六字がある。釈文は「甲兵之符、右在皇帝、左在櫟陽」。この虎符は拓本がなく、六字の摹本しか見つからないため、分析しない。

2. 字例比較分類

『新鄴虎符』は拓本も銘文も完全であるため、頭文字の底本とし、重複する文字を差し引き、「甲、兵、之、符、右、才（在）、王、左、才（在）、新、鄴、凡、興、士、被（披）、甲、用、兵、五、十、人、以、上、必、會、王、符、乃、敢、行、之、燔、隊（陵）、事、雖、母（毋）、會、符、行、毆（也）」などの計三十一字を検討する。また『杜虎符』の文字例「杜、君」二字、『陽陵虎符』の文字例「皇、帝、陽、陵」四字も検討する。前述の通り『櫟陽虎符』は、摹本のため検討しない。









三種類の虎符から計三十七字を取得した。以下、字例を「規整化の篆書体」と「原始の篆書体」に分けて検討を行う。









a. 原始の篆書体（二十九例）

原始の篆書体の字例は、「符、右、才（在）、王、左、凡、興、









士、被(披)、用、五、十、人、以、必、敢、行、燔、隊(墜)、事、雖、母(毋)、毆(也)、杜、君、皇、帝、陽、陵」など二十九字ある。








以下に、摘録した字例を解析する。残りの字例は、本章の最後に付してある。(表3・2・1)








卷六上才部「才」字、『説文』はに作り、西周中期の『班簋』はに作り、西周中晚期『鞞狄鐘』はに作り、春秋中晚期の『秦公簋』はに作り、春秋中晚期の『秦公簋』はに作り、『新鄆虎符』はに作り、秦簡はに作り、『魯峻碑』はに作る。虎符、秦簡などの字例の全ては、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷五上上左部「左」字、『説文』はに作り、西周晚期の『師寰簋』はに作り、春秋早期の『秦公鐘』はに作り、『杜虎符』作はに作り、『新鄆虎符』はに作り、『陽陵虎符』はに作り、秦簡はに作り、『禮器碑』はに作る。虎符、秦簡な


どの字例の全ては、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷十三下二部「凡」字、『説文』はに作り、西周早期の『凡尊』はに作り、西周晚期の『散氏盤』はに作り、春秋晚期の『怡父鼎』はに作り、『新鄆虎符』はに作り、秦簡は、に作り、『史晨後碑』はに作る。以上の字例の全ては、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷三上阜部「興」字、『説文』はに作り、西周晚期の『鬲弔興父盃』はに作り、春秋晚期の『侯馬盟書』はに作り、『杜虎符』はに作り、『新鄆虎符』はに作り、秦簡はに作り、『乙瑛碑』はに作る。よって、虎符と秦簡には篆形の間違いはないと考えている。


卷八上衣部「被」字、『説文』はに作る。「皮」、西周中期の『九年衛鼎』はに作り、『石鼓文』はに作る。「被」、『杜虎符』はに作り、『新鄆虎符』はに作り、秦簡はに作り、『小子殘碑』はに作る。よって、虎符は規整化の現象がないと考

える。

卷三下用部「用」字、『説文』はに作り、西周晩期の『頌鼎』




はに作り、春秋早期の『秦公簋』はに作り、『石鼓文』



はに作り、『新鄴虎符』はに作り、秦簡はに作り、『華山


廟碑』はに作る。よって、虎符と秦簡には篆形の間違いはないと考える。

卷八上人部「人」字、『説文』はに作り、西周晩期の『毛公




鼎』はに作り、『石鼓文』はに作り、『杜虎符』はに


作り、『新鄴虎符』はに作り、秦簡はに作り、『禮器碑』はに作る。秦簡文字と漢碑の形状は似ているのが、用筆と線質が全

然違うと思われる。秦簡の人は「」に作り、他の字例に、傳（）、



佐（）などがある。よって、『説文』の「人」字には規整化の現象があり、虎符はに規整化の現象がないと思う。







卷二上八部「必」字、『説文』はに作り、西周晩期の『寰盤』

はに作り、『杜虎符』はに作り、秦簡はに作り、『石門

頌』はに作る。虎符、秦簡、『説文』などの字例の形状と共通している。








卷二下行部「行」字、『説文』はに作り、西周中期の『史牆

盤』はに作り、春秋早期の『黃君孟鐘』はに作り、『杜虎

符』は、に作り、『新鄴虎符』は、に作り、秦簡はに作り、『乙瑛碑』はに作る。『説文』は規整化の現象があり、



虎符は規整化の現象がないと考える。

卷三下史部「事」字、『説文』はに作り、西周晩期の『頌簋

蓋』はに作り、春秋早期の『秦公罇』はに作り、『杜虎符』はに作り、『新鄴虎符』はに作り、秦簡は、に作り、『禮器碑』はに作る。虎符、秦簡などの字例の全ては、

規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷十二下女部「母」字、『説文』はに作り、西周早期の『毛

公旅方鼎』はに作り、西周晩期の『虢簋』はに作り、『杜虎符』はに作り、『新鄴虎符』はに作り、秦簡は、『史

晨前碑』は**𠄎**に作る。虎符、秦簡の字例は、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷三下爻部「毆」字、『説文』は**毆**に作り、西周中期の『匭生簋』は**毆**に作り、『石鼓文』は**毆**、**毆**に作り、『杜虎符』は**毆**に作り、『新鄴虎符』は**毆**に作り、秦簡は**毆**に作る。二種の虎符の銘文には規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷六上木部「杜」字、『説文』は**杜**に作り、西周晩期の『杜伯盨』は**杜**に作り、『杜虎符』は**杜**に作り、秦簡は**杜**に作り、秦印は**杜**に作り、『廣武將軍碑』は**杜**に作る。よって、虎符の銘文には規整化の現象がないと考える。







卷二上口部「君」字、『説文』は**君**に作り、西周中期の『天君簋』は**君**に作り、春秋早期の『黃君孟鑑』は**君**に作り、『杜虎符』は**君**に作り、戦国の『王后中官錡』は**君**に作り、秦簡は**君**に作り、『禮器碑』は**君**に作る。虎符、秦簡、『説文』の字例の形状は共通しており、規整化の現象がないと考える。

卷一上王部「皇」字、『説文』は**皇**に作り、西周晩期の『杜伯盨』は**皇**に作り、春秋中晩期の『秦公簋』は**皇**に作り、『陽陵虎符』は**皇**に作り、秦簡は**皇**に作り、『禮器碑』は**皇**に作る。虎符、秦簡の字例の形状は共通しており、規整化の現象がないと考える。

卷一上上部「帝」字、『説文』は**帝**に作り、西周中期の『寡子卣』は**帝**に作り、西周晩期の『仲師父鼎』は**帝**に作り、春秋中期の『秦景公石磬』は**帝**に作り、春秋中晩期の『秦公簋』は**帝**に作り、『陽陵虎符』は**帝**に作り、秦簡は**帝**に作り、『史晨前碑』は**帝**に作る。虎符、秦簡などの字例の全ては、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

卷十四下阜部「陽」字、『説文』は**陽**に作り、西周早期の『師觶鼎』は**陽**に作り、春秋晩期の『匭戈』は**陽**に作り、戦国晩期の『四年相邦穆旂戈』は**陽**に作り、『陽陵虎符』は**陽**に作り、秦簡は**陽**に作り、『華山廟碑』は**陽**に作る。『説文』の「阜」形に

は規整化の現象があり、虎符は規整化の現象がないと考える。








卷十四下阜部「陵」字、『説文』は  に作り、西周晩期の『散氏盤』は  に作り、戦国晩期の『長陵盃』は  に作り、『陽陵虎符』は  に作り、秦簡は  に作り、『禮器碑』は  に作る。よって、『説文』の「阜」形には規整化の現象があり、虎符は規整化の現象がないと考える。









b. 規整化の篆書体（八例）




規整化の現象がある字例は、「甲、兵、之、新、邾、上、會、乃」などである。以下、文字の解析を摘録する。

卷十四下甲部「甲」字、『説文』は  に作り、西周中期の『豸方鼎』は  に作り、春秋中期の『叔師父壺』は  に作り、春秋晩期の『侯馬盟書』は  に作り、『杜虎符』は  に作り、『新邾虎符』は  に作り、『陽陵虎符』は  に作り、秦簡は  に作り、『乙瑛碑』は  に作る。『説文』と虎符には規整化の現象

がある。

卷三上収部「兵」字、『説文』は  に作り、西周中期の『輔伯戈』は  に作り、『杜虎符』は  に作り、『新邾虎符』は  に作り、『陽陵虎符』は  に作り、秦簡は  に作り、『孔宙碑』は  に作る。兵字の上部「斤」から見ると、『説文』と虎符には規整化の現象がある。

卷六下之部「之」字、『説文』は  に作り、西周晩期の『異孟姜匜』は  に作り、『石鼓文』は  に作り、『杜虎符』は  に作り、『新邾虎符』は  に作り、『陽陵虎符』は  に作り、秦簡は  に作り、『乙瑛碑』は  に作る。「之」は一般の篆形であり、規整化の現象がなく、「之」は規整化の現象がある。よって、『説文』、『新邾虎符』、『陽陵虎符』には規整化の現象があり、『杜虎符』には規整化の現象がないと考える。

卷十四上斤部「新」字、『説文』は  に作り、西周晩期の『頌壺』は  に作り、西周晩期の『頌鼎』は  に作り、春秋晩期『邵

大叔斧』は**新**に作り、春秋晩期の『侯馬盟書』は**新**に作り、『新鄭虎符』は**新**に作り、秦簡は**新**、**新**に作り、『張遷碑』は**新**に作る。「斤」から見ると、『説文』と虎符には規整化の現象がある。

卷六下邑部「鄴」字、『説文』は**鄴**に作る。「邑」、西周晩期の『散氏盤』は**鄴**に作り、春秋晩期の『陳豕邑戈』は**鄴**に作り、戦国晩期の『安邑下官壺』は**鄴**に作り、秦簡は**鄴**に作る。

「鄴」、「新鄭虎符』は**鄴**に作り、秦簡は**鄴**に作るので、「邑」形には規整化の現象がある。「邑」字形は、秦印、「郎」は**郎**に作り、「郭」は**郭**に作ることから、規整化を証明できる。

卷一上上部「上」字、『説文』は**上**に作り、西周晩期の『毛公鼎』は**上**に作り、春秋早期の『秦公鐘』は**上**に作り、『新鄭虎符』は**上**に作り、秦印は**上**に作り、秦簡は**上**に作り、『禮器碑』は**上**に作る。『説文』と虎符の「上」形は規整化の現象であると考えられる。

卷五下會部「會」字、『説文』は**會**に作り、西周晩期の『會嬪

鼎』は**會**に作り、春秋の『蔡子匱』は**會**、「杜虎符』は**會**、**會**に作り、『新鄭虎符』は**會**、**會**に作り、秦印は**會**、**會**に作り、秦簡は**會**、**會**に作り、史晨後碑』は**會**に作る。「澮」、春秋の『揚子仲瀕而匱』は**會**に作る。「鎗」、戦国『鎗頃戈』は**會**に作る。上記から見れば、会字篆書体は基本的に「人、田、日」と三種類の構成の組み合わせであることが分かった。更に、隸書もそのようである。虎符のような「田」という構成が多少あるが、規整化の現象であると考えられている。

卷五上乃部「乃」字、『説文』は**乃**に作り、西周中期の『豆閉簋』は**乃**に作り、西周晩期の『不嬰簋蓋』は**乃**に作り、春秋晩期の『吳王光鑑』は**乃**に作り、『新鄭虎符』は**乃**に作り、秦簡は**乃**に作り、『禮器碑』は**乃**に作る。『説文』と虎符の「乃」形は規整化の現象であると考えられている。






以上は『杜虎符』、『新鄭虎符』、『陽陵虎符』と二つの虎符の銘文を採用して字形の分析・比較を行った内容である。それ以







外の解析をしていない字例は、「商周」（商周文字）、「秦簡」、「説文」などの欄を作った字形表で、以下にまとめる。

第三節 戦国時代の秦簡墨跡の篆書体考察










『睡虎地秦簡』、『嶽麓書院藏秦簡』、『里耶秦簡』などの秦簡と、前漢初期の漢簡を考察の対象とし、「奪」、「奮」、「安」、「北」、「獲」、「水」などの字例を通じて、秦簡文字の多くが篆書形の形状を裏付けるとともに、例えば、「帝、下、皇、分、咸、登、遠、道、徳、後、御、建、行……」など六十九字。（第四章第一節、三、秦代刻石秦簡文字を参照）

1. 「奪」字

西周早期の『奪作父丁卣』はに作り、西周中期の『奪作寶簋』はに作り、西周晩期の『多友鼎』はに作り、睡虎地秦簡』はに作り、『嶽麓書院藏秦簡』はに作り、『馬王



堆簡帛』は、に作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、『説文』はに作り、後漢晩期『北海相景君碑』はに作る。『説文』と秦簡文字の形状「奪」を見ると、秦簡の形状が篆書形に一致していることが分かる。

2. 「奮」字

西周早期の『令鼎』はに作り、秦印はに作り、『睡虎地秦簡』はに作り、『馬王堆簡帛』は、に作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、『説文』はに作る。秦簡文字形状との違いは、「奮」によって、秦簡と前漢初期の漢簡とも篆書形に一致していることが分かる。



3. 「安」字



西周早期の『安父簋』はに作り、西周中期の『公貿鼎』はに作り、春秋中期の『石鼓文』はに作り、春秋晩期の『侯馬盟

書』はに作り、春秋晩期の『哀成弔鼎』はに作り、戦国

の『宜安戈』はに作り、『睡虎地秦簡』はに作り、秦印は



、に作り、『里耶秦簡』はに作り、『馬王堆簡帛』は

に作り、『説文』はに作る。「按」は、北大藏前漢竹書『蒼

頡篇』はに作る。後漢晩期の『禮器碑』はに作る。

『説文』以外の秦簡などの字例の全ては、規整化の現象がなく、原始の篆書体である。

4. 「北」字

西周中期の『同簋』はに作り、春秋中期の『石鼓文』は




に作り、戦国中期の『秦封宗邑瓦書』はに作り、戦国の『北鏃』

はに作り、『睡虎地秦簡』はに作り、北大藏前漢竹書『蒼頡


篇』はに作り、『説文』はに作り、後漢晩期の『禮器碑』は


に作る。よって、秦簡の北字が篆書形体の事実をはっきり見える。

5. 「獲」字

西周早期の『柞伯簋』はに作り、秦印は、に

作り、『睡虎地秦簡』は、に作り、『嶽麓書院藏秦簡』

は、に作り、『里耶秦簡』はに作り、『説文』はに

作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、『馬王堆簡帛』は

、、に作る。「獲」字の艸と佳との間の「田」形

の有無、または上部艸形の有無は重要でない。重要なのは、下部の「又」形「尹」が、「ヨ」より古い構造であることである。

これらの秦漢簡の筆跡や字例が「獲」より古いのである。次図の配列により、はっきり看取できる。











戦国晩期

秦

漢



6. 「水」字

西周早期の『啓作且丁尊』はに作り、西周中期の『同簋蓋』はに作り、春秋中期の『石鼓文』はに作り、戦国中期の『秦封宗邑瓦書』はに作り、『睡虎地秦簡』はに作り、秦印は、に作り、北大藏前漢竹書『蒼頡篇』はに作り、『説文』はに作り、後漢晩期の『禮器碑』はに作る。以上から、秦簡が篆書形であることは確かであろう。

7. 小結

前節で述べた、『瓦書』と秦簡の形状の多くが一致するその要因は、簡帛、簡牘が一貫して古文字を受け持つ主体であるからであり、その形状と前後の時代が一致する或いは類似するのは、当然の事である。秦簡文字が小篆書体に一致する字例は、この他にもたくさんある。

前の時期は秦簡であり、後の時期は小篆である。

以下に摘録した字例、「初(初・初)、在(在・在)、杜(杜・杜)、東(東・東)、于(于・于)、來(來・來)、夫(夫・夫)、心(心・心)、壺(壺・壺)、自(自・自)」など。

以上、多くの字例を考察した結果から、戦国時代から秦時代の秦系簡牘の筆跡文字が篆書形に一致していることは、疑いのない事実であろう。

表 3・2・1 説文と瓦書の形状の一致の字形表

33 杜	32 取	30 命	25 造	21 辛	75 十	18 十	94 之	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

49 乃	69 邑	48 邑	68 宗	47 宗	43 右	40 水	36 邱	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

23 大	8 大	63 子	62 子	5 子	4 天	72 四	1 四	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

85 之	81 之	60 之	15 之	14 武	13 文	11 來	100 大	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

119 是	118 是	110 卜	112 史	107 史	106 未	102 生	101 田	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

120 里	No.
	西周
	春秋戦国
	瓦書
	秦簡
	説文

121 封	86 封	80 封	59 封	57 更	56 不	115 司	54 司	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

98 里	97 里	96 一	89 北	88 東	92 桑	83 桑	82 目	No.
								西周
								春秋戦国
								瓦書
								秦簡
								説文

表 3・2・2 説文と瓦書の形状の違いの字形表

42 為	87 以	71 以	66 以	41 以	39 滿	91 于	38 于	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

58 觀	116 御	55 御	53 御	51 瓦	46 歌	67 為	50 為	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

19 壺	74 冬	17 冬	16 爵	12 斝	10 斝	9 夫	7 卿	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

34 才	45 長	27 長	79 酉	22 酉	77 月	20 月	76 壺	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

110 觀	111 觀	89 觀	65 觀	64 觀	70 觀	No.
						西周
						春秋戰國
						瓦書
						秦簡
						説文

表 3・2・3 説文筆跡の伝承における小異の字形表

117 心	114 半	109 初	104 度	103 放	99 囑	93 匣	No.
							西周
							春秋戰國
							瓦書
							秦簡
							説文

28 游	44 度	26 度	24 良	6 便	3 周	73 年	2 年	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

52 書	90 別	37 別	108 日	105 日	61 日	31 日	29 出	No.
								西周
								春秋戰國
								瓦書
								秦簡
								説文

表 3・2・4 『青川木牘』と『張家山漢簡』の字形表

摹本	張家山	説文	秦簡	青川	商周	草
						卷一下艸部 0679

摹本	張家山	説文	秦簡	青川	商周	道
						卷一下辵部 1204

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	行
行						卷二下 行部 1265
行						

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	千
千						卷三十 千部 1461
千						

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	為
						卷二下 爪部 1874

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	敗
						卷三十三部 2033

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	百
						卷四上白部 2223

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	其
						卷五上箕部 3003

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	可
						卷五上可部 3041










摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	橋
					☒	卷六上木部 3767

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	之
						卷六下之部 3843

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	時
					☒	卷七上日部 4172

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	有
						卷七上宀部 4301

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	秋
						卷七上禾部 4430
						

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	頃
						卷八上冫部 5197
						

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	裘
						卷八上衣部 5252

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	廣
						卷九下广部 5909
						

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	而
						卷九下部 6045

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	大
						卷十下大部 5564

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	非
						卷十一下非部 7556

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	不
						卷十二上不部 7566

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	二
						卷十三上二部 8968

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	田
						卷十三上田部 9125

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	畝
						卷十三上田部 9134

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	眇
			☒		☒	卷十三下田部 9143

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	輒
					☒	卷十四上車部 9488

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	陷
					☒	卷十四下阜部 9595

摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	除
					☒	卷十四下阜部 9643








摹本	張家山	說文	秦簡	青川	商周	以
						卷十四下口部 9749
						

図 3・2・1 青川木牘 デジタル模本

二季十一月之百朔日王命
 之道：廣三歩封高四尺
 六除道多阪險十月參橋

參田律田廣一歩愈八更參
 一尺以秋八月修封高五疆畔
 維非除道出時而音陷

相戊丙史區民辭更修月
 六稱某高封高尺下厚二尺
 管取隄利津際鮮草維

參二畝一百道百畝參更一
 多登子百出六草九月
 敗不可分朝參土


表 3・2・5 虎符の字形表

才(在)	右	符	之	兵	甲	
						商周
						秦簡
						説文
						杜虎符
						新鄠虎符
						陽陵虎符







興	凡	鄠	新	左	王	
						商周
						秦簡
						説文
						杜虎符
						新鄠虎符
						陽陵虎符

人	十	五	用	被(披)	士	
						商周
						秦簡
						說文
						杜虎符
						新郢虎符
						陽陵虎符

敢	乃	會	必	上	以	
						商周
						秦簡
						說文
						杜虎符
						新郢虎符
						陽陵虎符

母(毋)	雖	事	隊(隸)	燔	行	
	☒		☒	☒		商周
			☒			秦簡
						說文
	☒			☒		杜虎符
						新郢虎符
☒	☒	☒	☒	☒	☒	陽陵虎符

陽	帝	皇	君	杜	毆(也)	
						商周
						秦簡
						說文
☒	☒	☒				杜虎符
☒	☒	☒	☒	☒		新郢虎符
			☒	☒	☒	陽陵虎符

陵	
	商周
	秦簡
	說文
	杜虎符
	新郢虎符
	陽陵虎符

第四章 秦文字の篆書体考察

第一節 功績を称賛する秦代刻石篆書

一、秦代の刻石と拓本

容庚氏は『秦始皇刻石攷』にいう。

始皇刻石之文、載於『史記』者凡六、今石之傳者惟一「琅邪臺」。「泰山」所存十字、疑是覆刻。「之罘」、「碣石」、「會稽」皆屬仿寫。『東觀』獨不傳。今傳「嶧山之文、又為『史記』所不載³³。(

始皇刻石の文は『史記』に載っているもので全て六つである。現在の石で伝来するものは唯一「瑯邪台」である。「泰山」は十文字が残されているが、重刻であ

る事が疑わしい。「之罘」、「碣石」、「會稽」はどれも写し書きされたものである。『東觀』のみ伝わっていない。今日伝っている「嶧山」の文は、『史記』には記載されていない。」

叙述の都合上、秦刻石の資料もここで一緒に紹介することにする。

『嶧山刻石・長安本』乃宋鄭文寶據徐鉉所授摹本刊石於長安者。碑明代中斷、以磚嵌之。今存陝西西安碑林。文十五行、行十五字³⁴。（『嶧山刻石・長安本』は宋の鄭文寶が徐鉉の長安で刻された拓本を基にして模写されたものである。碑は明代で割れてしまったが、磚をはめ込んでいる。現在は陝西省西安碑林に保存されている。文は十五行で、行に十五文字ある。）

成田年樹氏は「長安本は、宋の淳化四年（九九三）徐鉉藏の唐拓をもとに、鄭文宝が模刻して得たものである。」³⁵という。

容庚氏は『秦始皇刻石攷』にいう。

『泰山刻石・安国本』明安国舊藏、今由藝苑真賞社印行。合殘泐之字計之、得一百六十五字、視『秦篆譜』為多。取『絳帖』本校之、其多於『絳帖』者、大抵皆半泐之字³⁶。

（『泰山刻石・安国本』は明の安国の旧藏で、現在は芸苑真賞社が印行している。残存または磨滅した文字を含めると、合計百六十五字で、『秦篆譜』より字數が多く見える。『絳帖』の版本を元に校正し、この版本の文字は『絳帖』に比べ、多く字が大体の文字はどれも

半分破損している。）

また、『秦始皇刻石攷』にいう。

『琅邪臺刻石・原石本』清初所傳拓本、祇二世詔十二行、凡八十四字。阮元遣書佐至其地、剔秦篆於榛莽中、拓之多得首行「五夫」二字、凡十三行、八十六字³⁷。（『琅邪臺刻石・原石本』は清初に伝えられた拓本で二世詔十二行のみで、全部で八十四文字ある。阮元は書佐をその地に派遣し、秦篆を厳選し、乱雑した内容を整理させた。拓本を取った時に行頭に「五夫」の二文字が多くなっている。全てで十三行、八十六字である。）

成田年樹氏は「清代の初めに伝えられた拓本は、二世詔書十二行八十四字であったが、阮元が精拓し、始皇詔

の一行を加えて十三行八十六字を得たという（1原石本）。屋漏痕の如き直裂などにより全体は模糊としたものだが、文勛本や嚴可均写本にはない原石の味が感得できる。現在、北京の中国革命歴史博物館に安置されている。³⁸という。

容庚氏は『秦始皇刻石攷』にいう。

『會稽刻石・申屠駟本』元至正元年、以家藏舊本摹勒置於會稽鬻舍、與『嶧山』表裏一石。清康熙中、為石工磨去。今所見『秦金石刻辭』本及真賞社影印明安国藏本、以安国本為初拓、皆無申屠氏跋。其跋載於『金薤琳琅』、而『兩浙金石志』亦從仁和趙魏家藏舊本補錄。³⁹

（『會稽刻石 申屠駟本』は元の至正元年に、民間で收藏され旧本は模写され会稽の鬻舍に安置された。『嶧山』と表裏一石になっている。清の康熙期に、石工職

人によつて磨かれた。今日見ることができるのは、『秦金石刻辭』本及び真賞社影印明安国藏本であり、安国本を初拓としているが申屠氏による跋は皆無である。その跋は『金薤琳琅』に記載されており、『兩浙金石志』も仁和趙魏家收藏旧本により補録されている。」と述べている。）

吳福助氏は『秦始皇刻石考』で「會稽刻石の後世に伝わった拓本の中で、申屠駟本を最も重要とする。」⁴⁰と

いいう。富谷至氏は「統一秦以後に刻された秦刻石、それは始皇帝が統一を完成したのを記して各地に立てた石碑だが、わずかに跡を留める残石の文字、伝世の拓本は、篆書体に分類される書体であり、統一された度量衡の上に押された印面の書体もやはりこの篆書であつた。」⁴¹という。

稲葉一郎氏『秦始皇の巡狩と刻石』は「刻石文の叙述形式は、個々の碑文で小異はあるが、大体をいえば、某年に皇帝が某地を訪れて国見し、そこで自らの事業を回顧し、或いはいわゆる統一政策の理念を説明する。」⁴²という。

秦刻石は多くの臣下が秦王の徳行と功績を称える為に製作した石刻文字で、秦宰相李斯の撰文したものが、全部で七ヶ所有ると伝えられ、秦代の原刻は「泰山」と「琅邪」の刻石の残石のみ有る。これは学界で普遍的に認められている秦篆の実体で有る。研究の参考資料が揃っていない事や、後人の翻刻の問題などが有るものの、少なからず秦代文字の原始の結構を反映させており、稿者は全般の各時期の文字と『説文』、秦漢文字との比較分析をする事で、『説文』の字形の錯誤原因と秦文字の形状の問題を解明できると考える。

二、秦代刻石文字書体の考察

ここでは秦刻石、『説文』、秦簡文字の三つの図版を並列させ、近年大量に出土している秦漢墨跡文字を補助資料とし、『説文』の字形と秦刻石文字の共通点と相違点の原因を解析する。表の整理に、いくつかの親字の字形を用いて分析を行った。

- ① 『泰山刻石』（安国本）
- ② 『嶧山刻石（復刻）』（長安本）
- ③ 『会稽刻石（復刻）』（申屠駟本）
- ④ 『琅邪臺刻石』

容庚などの学者の考えに拠り、稿者は良い拓本を対照し、秦篆の字形を探究するために、『秦篆書刻石四種解析字帖』を考案した⁴³。文字の結構との対比を精確に行う為に、秦刻石の図版は修復の版本を採用し、各刻石の親

字の数量は次のようになった。『泰山刻石』原拓修整本百六十五字、『嶧山刻石復刻』原拓修整本二百二十二字（その他九字）、『会稽刻石（復刻）』原拓修整本二百八十八字（その他10字）、『琅邪臺刻石』全文書き直しのある文字を補い五百七十二字、四種石刻の字数と合わせると千二百二十六字である。

秦刻石の図版の右側に字例と数量の注釈を記した。表の親字は『説文』の順番に従って配列した。合計で三十字の字例が無く（二例は説文に字例がない）、その他唯一、一字で「七八〇〇」の字例があり、秦印の図録を用いて列挙した。

表中の「秦簡」は『睡虎地秦簡』、『閑沮秦簡』、『龍崗秦簡』、『放馬灘秦簡』、『嶽麓秦簡』、『里耶秦簡』等の簡牘文字を主として採用した。仮に字例がない場合や不足する場合、前漢早期の簡牘を使う事にする、例えば『馬

王堆漢簡』、『張家山漢簡』、『銀雀山漢簡』等である。図例は収録している簡牘文字の親字の後ろに「*」を記した。

四種の石刻の訳文と重複しない親字は合計478字、216種の部首を含んでいる。稿者は「8740率」と「1275衛」、「9711辭」と「9712辭」を、どちらも同一の文字とみなし、『説文』で見ることができない「傲」、「熒」の2字、半、虎、寢、見、豕部五種の部首の中の「判」「虐」等の字を除き、簡牘文字の字例の無いものをさらに取り除くと、考察したのは二百二十一種の部首になる。

次に『説文』小篆は陳昌治本説文小篆の形体を主とする。同時に三種類の『説文』版本、北師大説文、宋本（續古逸本）、日本早稲田大学収蔵の文政九年本を使用する。五百四十部首を分析し、小篆の形の微妙な変化を照合した。考察の結果、同じ版本だとしても、前後の部首の形

状にも大きな差異が現れていることがわかった。例えば多字は文政九年本の本文前後で「𠂔」、「𠂔」、「𠂔」となっており、陳昌治本の泉字は前後で「泉」、「泉」となっている。字形を引用する際は慎重にならなければならぬ。三種の『説文』の版本、北師大説文は小篆の整理で、全ての資料はすでに「引得市」の説文の項目中に収録されており⁴⁴、考察の比率から見ると、二割に満たない比率で、部首のある形状に差異が現れており、多くの形状は基本的には同じである。僅かに7種と6種の形状の字例の図版を下に表した。

説文部首比較表

部首編號	部首字類	北師大			陳昌治本		宋本(續古逸本)		日本文政九年本	
		小篆	本文前	後	本文前	後	本文前	後	本文前	後
036	趾	趾	趾	趾	趾	趾	趾	趾	趾	趾
039	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙	牙
120	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥
244	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
321	飲(飲)	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲	飲
上5列為7種 / 下6列為6種構形										
308	履(履)	履	履	履	履	履	履	履	履	履
366	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸	豸
381	𧢲(熊)	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲	𧢲
436	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽	鹽
453	我	我	我	我	我	我	我	我	我	我
472	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧	𧈧

形状の比較は、稿者は過去の考察の経験及びある絶対的な分類の方式を用いた同じ形状の物は例えば、牛「𠂔」

と「𠂔」の違いはなく、共（𠂔）、鼻（𠂔）などの字の下部は長く伸ばし曲がるのが許される。水形は「𠂔」、「𠂔」と「𠂔」は同じものである。その他の字例は次の図に表した。

秦簡構形比較表 1

音音	余余	音音	各各
言	余	音	各
𠂔𠂔	𠂔𠂔	雨雨	寅寅
久	𠂔	雨	寅

臣臣	𠂔𠂔	止止	冊冊
臣	𠂔	止	冊
𠂔𠂔	𠂔𠂔		
水	水		

秦簡構形比較表 2

𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔
𠂔	行	𠂔	皮	羽	𠂔	刀	乃
𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔
乃	于	血	矢	高	𠂔	𠂔	𠂔
𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔
同	白	白	欠	𠂔	卯	能	泉
𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔
𠂔	𠂔	虫	力	金	斤	𠂔	𠂔
𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔
𠂔	走	走	𠂔	𠂔	竹	𠂔	𠂔
𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	𠂔𠂔	
人	手	四	巳	至	産	木	

この他に、古文字の形状中に文字を書く上で不必要な筆画や湾曲がある場合、商周文字などの変遷履歴を参考にした後、異なる形状のものを判断する必要がある。例えば、戈字の右上の屈折は不必要なものであり、刀、斤の上部の湾曲も不必要なものである。字例を前表に表した。(説文と秦簡構形比較表 2)

稿者の厳密な分類の下、比較後、同じ形状の割合が一定の数量あり、秦簡文字は学界で伝わってきた多くの間違った変遷の結果ではなく、その形状に古い形状が残っている割合も更に深く研究する価値がある。三種の文字の材質と製作年代が共通していないが、一定した字例の数量の対比と部分ごと、偏旁の分析の後に、『説文解字』の字形の識別及び、秦簡文字の変遷の研究のどちらにも大きな効果が生まれる事を期待したい。これは五章において論述する。

詳しくは本章最後に付した「4・1・1 秦刻石と『説文』、商周、春秋戦国、秦漢文字比較表」を参照されたい。秦簡帛文字は二一―二個の図版を収録し、字例の無いものを除いて、平均して各親字は約四個の字例があり、最後にその中から二、三の字例を選び表に入れ参照とした。

劉釗氏・葉玉英氏は『林義光及其『文源』』にいう。

伝統的な「説文学」が研究を進め辛く、新発見を見出す事が難しい理由として最も根本的な原因は二つあり、一つは許の思想を崇め過ぎるあまり、終始許慎の束縛から離れる事が出来ない。二つ目は古文字材料を有効活用出来ていない、特に清代の金文材料は既に豊富な状況下にもかかわらず、依然として金文が古文字研究に及ぼす意義に気づけていない⁴⁵⁰。

現在我々が見ることが出来るある時代の古文字は、ど

れも何千年の膨大な体系の中のひとかけらでしかなく、字と字との間の関係と過度の解釈による影響を避ける事に必ず注意を払わなければならないのである。

裘錫圭氏は『裘錫圭學術文集』にいう。

ある人は古文字が資料にある実際に使用されていた状況を無視したり、古文字の字形の本当の変遷の歴史に目を向けずに、只々字を論じ孤立し静止した古文字の研究をしている。∴その結論は信憑性にかける⁴⁶。











稿者の研究の方式は先に収録し、大量の古文字の材料を整理し、徹底的に文字変遷の過程を理解した後に、更に文字は各時代でどのような差異があるのか分析する。





近年出土している墨跡文字の多くは公文書または典籍であり、これらの書は既に当時の人々によって芸術表現の一環として認められていたのか、個別の詳細な考察、実証が必要となるだろう、しかしその「実用」の性質は



絶対に疑う事を許さず、文字を書く事は昔から速度が重視されており、実用の性質を備える文字は更に効率を求められる。多く人が知っている「隸書」は実は既に後漢中期から後期までであるが、当時の人々が皆石刻上の文字のように完璧にかけたわけではなく、真相を追求するにはやはり原点の出土した墨跡文字に戻る事であり、それこそが人々の元々の文字の様子である。図中に列举した後漢中晩期の碑刻の字例は非墨跡文字であり、これらの非墨跡文字によって文字の変遷過程を解析する事は決して出来ない。墨跡の字例がない際、注として説明に使うしかない。



後漢の後の多くの人々は既に篆書を読む事が出来なくなっており、字形に対する誤認識を産んだ。よって、許慎等が文字の整理、解釈を行った、しかし、我々が今見ている『説文解字』（宋刻本）は、果たして「原版」とど

ここまで差があるのか、詳細な考察、分析等が必要となつてくる。



『説文解字』の中では秦刻石に言及する、「及」「攸」「夕」「也」「強」五字がある。「及」は  (説文小篆) に作り、秦簡文字は  (睡虎地秦簡) に作る。「攸」は  (説文小篆) に作り、秦簡文字は  (馬王堆簡帛) に作る。「夕」は  (説文小篆) に作り、「死」は  (睡虎地秦簡) に作る。「也」は  (説文小篆) に作り、秦簡文字は  (睡虎地秦簡) に作る。「強」は  (説文小篆) に作り、秦簡文字は  (睡虎地秦簡) に作る。以上のお問題を有する五つの資料があることがわかる。

及  逮也从又从人 徐鍇曰及前人也巨立切  古文及秦刻石及如此  亦古文及  亦古文及

攸  行水也从攴从人水省 徐鍇曰攴入水所杖也以周切  秦刻石攸山文攸字如此

夕  𠂔骨之殘也从半凡夕之屬皆从夕讀若𠂔岸之 徐鍇曰凡剔肉置骨也夕殘骨也故从半凡臣斲鉞等曰義不應有中一秦刻石文有之五割切  古文夕

也  女陰也象形 羊者切  秦刻石也字

強  𧈧也从虫弘聲 徐鍇曰弘與強聲不相近秦刻石文从口疑从籀文省巨良切  籀文強从虫从疆 說文十三上 虫部 大

個人的には字と字句の内容上の誤解はおそらく「字形」から来るものは少なく、現在の『説文解字』中の「字形」は許慎が著録した篆字で、さらには所謂「篆書」である

という事は実際疑わしい。

文字を二つの字体（篆又は隸）に区別し、文字の変遷の分析上、先に墨跡文字を時間に従って細かく配列する事で、文字の変遷の真実の姿が浮かび上がる。仮に秦漢の各種文字を間違はなく一通り考察する事で、「臼田」が変遷して「曲」の形になるので、「農」の篆字はどのよう
に「書く」のか、自然とわかるようになる。絶対に「楷」から押し戻す事はできない。「篆書」はその様だと思っ
ていたとしたら、例えば、「願」字はもし「原」と「頁」の篆形だとしたら大きな間違いである。

秦漢時代、「臼田」の様な字は他にも「要」、「爨」、「爨」等の字があり、当時の元々の形態はなぜ結果的に違う形
体に変わってしまったのか、これは文字変遷において
様々な可能性がある。これを理解しようとするならば着
実に一文字一文字の考察が必要である。例えば、「章」字

の「十」は「音」を突き抜いているか、また、「徳」（徳）
字の「心」の上には「一」が有るのか、これらの問題は
この後に解答している。










本節の研究の内容は四種の秦刻石の积文「具、與、鬼、
于、平、戎、并、制、達（達）、邊、章、審、貴、遺、熹、
徳、農、専（専）、惠、數、受、無、量、臨」の二十二字
と『説文』、甲骨、金文、秦漢等の墨跡文字等から字形の
比較分析をすることである。出来るだけ、詳細に編集さ
れた図版の字例で、文字の本意と構成から秦刻石と『説
文』文字の字形の考察を試み、臨時的に文字の材料から
文字が生まれる差異等の書の問題の検討と、文字の基本
的な構成に重きを置き、そこから、『説文』秦刻石の字形
の信頼度を検討判断するのである。



古文字の声系及び造字はもともと『戦国古文字典』ま
たは『古文字譜系疏證』の二書を参考にし、一一注はつ

けていない。字例は番号に基づいて以下に叙述した。(説文1は北師大、説文2は陳昌治本)

説文1	秦簡	
		
説文2	泰山	嶧山
		
95 / 1764	會稽	琅邪臺
具		





(一)「具」字

具の甲骨文字は  (合 22153) に作り、西周金文は  (辭攸比鼎) に作り、春秋早期金文は  (孫弔師父壺) に作る。『石鼓文』は  に作る。貝と収とに従う。両手をもって貝を奉ずる形。収亦是声。『説文』「具、共置也。从収、从貝省。古以貝為貨。」商晚甲骨から春秋等の字から見ると、上半部の貝形は明瞭に「」↓「」↓「」の様な変遷の関係を表しており、下半部は「」↓「」

↓「」↓「」のよう表している。

季旭昇は『説文新證』にいう。

「具」字はおそらく井持鼎に従い、「食べ物準備し、客に供給する」の意であり、西周中晩期以後或いは誤って「貝」に従い、後にまた誤って「目」に従う。甲金文の早期に至っては井持貝に従う字で、「具」字ではない可能性もある⁴⁷。

文字の変遷について考察する前に、まず先に基本的な概念を持つべきである。最古の許慎の『説文解字』は必然的に簡帛の材質を用いて、この様な材質の上に書かれている文字を「簡帛文字」と言う。許慎と時代の近い、『五一廣場後漢簡』の「具」字には次の様な字例がある。
「」「」これらはこの時代の「具」字で、「目」と「井」形の筆画は既に重なりあっている状況がある(具)。よって、稿者はと形は当時区別できなかったと考えてい

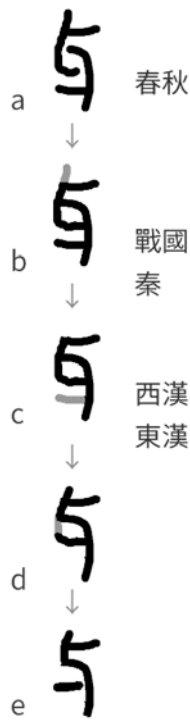
る。

『説文』を編纂する時、秦代と三百年ほどの開きがあり、大量の資料等を集めるなどの煩雑な作業であったことは言うまでもなく、更に篆、隸の二種の字体に分別することも要された。それを確実に達成する事ができたかどうか、稿者は疑わしいと考える。現代最も効率が良い、正確な考察の仕方の観点から言うと、先に各地で出土した秦漢の文字資料を収集整理した後、時間の順序に従い配列し検索可能なデータベースを制作する。このようなスピーディーな検索機能を使用する事で、はじめて詳細な対比が可能になり、前後の文字の差異を見分ける事ができる。千年以上前の許慎がこの様なレベルに到達する事ができたかと言うと、それは考え難い。表中の刻石文字の例と『説文』及春秋時期の金文の形体に近いが、稿者は表中の「秦漢」はやはり元々の『説文』の版本の




姿に近いと考える。

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
97 / 1744	會稽	琅邪臺
與		 2

(二)「與」字





「與」牙形の変遷



與の金文は  (漳伯簋) に作り、鼻に従い、牙は音符を重ねる。春秋金文は  に作る。字間の牙の部分とに作る。『説文』「與、黨與也。从鼻从与。」最も古く
の墨跡文字『侯馬盟書』では  に作る。下方の卍形の漢

鬼の甲骨文字は (甲骨文字合集第137片)に作る。


人、凶に従い、人が亡くなった後に魂が泉門から出てくる、の意味である。『爾雅・釋言』「鬼之為言歸也。」『禮記・郊特牲』「魂氣歸於天、形魂歸於地。」

西周金文は (鬼は父丙壺に作る)に作る。戦国文

字は両周金文を踏襲している。『嶽麓書院藏秦簡』は

に作り、『馬王堆漢簡』はに作り、『銀雀山漢簡』は

に作る。どれも戦国晩期の『六年上郡守間戈』の形体と

等しい。後漢中期『五一廣場後漢簡』はに作り、字形

も改変されていた。『説文』は「鬼、人所歸為鬼。从人、

象鬼頭。鬼陰气賊害、从ム。」である。「ム」の形は我々

が関心を寄せる焦点である。

杜忠誥氏は『説文篆文訛形釋例』にいう。

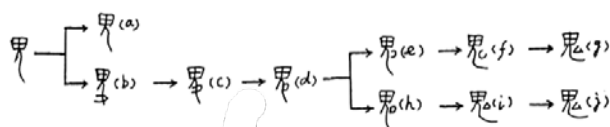
「鬼」字の偏旁は、やはり「ム」形の下に「文」形が

付けられており、次第に誤変してきた事から考えると、

「背公為ム」の「ム」は形態が偶然に近いだけであって、

音と意味は一切関係がない⁴⁸。

この見解は参考にする価値がある。




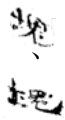











杜忠誥氏『説文篆文訛形釋例』



「鬼」字の右側「ム」形の変遷は、上図「鬼、鬼、鬼、鬼」に示している。もともと右側の最後の一筆は上から下に



向けて時計回りに覆っており、最後から二画目は元々上下垂直の筆勢から中段の右方向に水平に変化して、次の筆勢が先に上に行き下に向けて逆時計回りの三角形を形成した。三角形になった後、完全に覆っていない欠けた部分が徐々に「ム」の形を形成した。後漢の『曹全碑』（A. C. 185）鬼字「鬼」の形をしており、右側は完全な三角形の形をしていると言えるだろう。

更に鬼部首の使われている文字の範囲を拡大する。例えば愧、塊、媿（愧）、嵬、巍（魏）（壘）、廐、槐、瑰、痍、魄、菟、蕘、褭、醜（醜）、隗、瓌、醜、魑、魍、魍、魍などの三十四文字がある。詳細な字例は以下に列挙した。



愧、漢印は  に作り、『肩水金關漢簡』は  に作る。
塊、戦国璽印は  に作る。『居延舊簡』は  に作る。



媿（愧）、戦国璽印は  に作り、『包山楚簡』は  に作り、『郭店楚簡』は  に作り、『三国呉簡』は  に作る。嵬、漢陶文は  に作る。巍（魏）（壘）、秦簡は  に作り、秦印は  に作り、『居延新簡』は  に作り、 に作り、『肩水金關漢簡』

は  に作る。愧、『馬王堆簡帛』は  に作る。槐、

秦金文は  に作り、『里耶秦簡』は  に作る。痍、

秦印は  に作り、漢印は  に作り、 に作り、 に作り。醜、『馬

王堆簡帛』は  に作る。『銀雀山漢簡』は  に作る。


菟、『侯馬盟書』は  に作り、『睡虎地秦簡』は  に

作り、『居延舊簡』は  に作る。褭、戦国璽印は  に作

り、秦印は  に作り、 に作り、 に作り、漢印は  に作る。







醜（醜）、『侯馬盟書』は  に作り、 に作り、 に作り、『睡








虎地秦簡』はに作り、秦印は、、に作り、漢印はに作る。魏秦印は、に作り、漢印は、、、に作る。魏、『睡虎地秦簡』はに作り、『張家山漢簡』はに作る。魏、『大駟銅權』はに作る。魁、『馬王堆簡帛』は、に作る。漢印は、に作る。魁、漢印はに作る。魁、秦印は、に作る。『馬王堆簡帛』はに作る。『北大漢竹書』はに作る。魏、『北大漢竹書』はに作る。魁、『里耶秦簡』はに作る。『馬王堆簡帛』はに作る。魏、『肩水金關漢簡』はに作る。魏、『睡虎地秦簡』はに作る。魏、『嶽麓書院藏秦簡』はに作る。魁、『里耶秦簡』は、に作る。魏、『侯馬盟書』は、に作る。











る。魏、後漢中期『五一廣場後漢簡』はに作る。以上が鬼及びその部首に関連する字である。いわゆる鬼頭「由」形は、商周から唐宋に至るまでは全て「田」形で表されている。例えば『説文』「鬼」または秦刻石「鬼」は中間を貫いて「由」の形で書かれているが、ほとんど例が無い。字例の考察から、鬼の右側の「ム」の形（欠けている口の三角形）が形成されたのは後漢中晚期である。よって、稿者は『説文』と『琅邪臺刻石』の形状はどちらも間違っていると考えている。









説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
166 / 3052	會稽	琅邪臺
于		 4




(四)「于」字

于の甲骨文字は (合 27142) に作り、形状は不明である。西周金文は (大簋) に作る。春秋戦国文字は文字の形状を踏襲しており、『鞆于公戈』は に作る。『中山王譽壺』は に作る。『石鼓文』は最終画を少し右に曲がり左に払っている形で、 に作り、『詛楚文』は に作る。秦金文はコピーなどの異なる湾曲の型態を取っている。

『説文』「于、気の舒ろに亏る象る。亏に従ひ、一に従ふ。一とは、その気の平らかなるなり」という。「」に作る。春秋晚期墨跡文字『侯馬盟書』は、 に作る。『包山楚簡』は に作る。于字は一度湾曲してから左に払う例は多くなく、むしろ偏旁の字例が多くある。例えば『包山楚簡』の筴は に作り、『上博簡』は、、








 に作る。秦印は、 に作る。『睡虎地秦簡』は、 につくり、『馬王堆簡帛』は、、 に作る。細かく注目したいのは後の二例であるが、形状は「」に近く、一度屈折してから左払いをしている。「于」字は季旭昇『説文新證』三九五頁に収載される。ただ、『説文』「」形の特別な説明をしていない。

殷周から秦にかけての字例から見ると、多くの形状は左払いが二本の横線を貫通している。「于」部に近い字例は、おそらく戦国斉陶文の孛字のみであり、、、、 など。縦画の湾曲部に関しては、戦国から秦まで多くの例がこの特質を持っており、墨跡方面は『居延舊簡』「、」または『居延新簡』「」などの字例がある。石刻は一部の漢碑の字例がある。例えば、『西狭頌』は に作る。よって、『説文』の「于」字は二本の横線を貫いていないことから、その形状は間違っている。その


他の三種類の秦石刻は、、に作り、形状は比較的問題はない。

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
167 / 3056	會稽	琅邪臺
平	 3	 2

(五)「平」字

平の金文は（都公平侯鼎）に作り、形状は不明である。『侯馬盟書』は、に作り、『包山楚簡』は（坪）に作る。『睡虎地秦簡』はに作り、『張家山漢簡』はに作り、『額濟納漢簡』はに作り、後漢中期『五一廣場後

漢簡』は、などに作る。

『説文』「語、平らかに舒ぶるなり。亏に従ひ、八に従ふ。八は分なり」とあり、「爰礼の説なり」という。「各時代の字例から見ると、「于」字は一般的に「丿」の縦画は二本の横画を貫いており、『説文』のような（兀+亏）完全に貫いてない書き方は、唐代『謙卦碑』にのみ見ることが出来る。よって、稿者は『説文』と『泰山刻石』、『會稽刻石』、『琅邪臺刻石』の「平」の字形は問題があると考える。もし、「平」の字形に間違いがあるとしたら、考察の範囲を押し広げ『説文』の「平」に係のある「坪、平、枰、枰、泮、秤、苹、萍、颯、𪛗、𪛘」以上の11字も詳しく検討する必要がある。

説文 1	秦簡	
甲 命		
説文 2	泰山	嶧山
甲 命		
461 / 9692	會稽	琅邪臺
甲		

説文 1	秦簡	
戎		
説文 2	泰山	嶧山
戎		
395 / 8334	會稽	琅邪臺
戎*		

(六)「戎」字

「戎」字について述べる前に、「甲」字について述べることにする、甲は甲骨文字で (合 7838) に作り、形

状は不明で、七字と同形である。西周金文は (甲簋)

又は (甲盃)「田」の形になった。春秋戦国文字はこ

の形状を受け継いでおり、『侯馬盟書』は に作り、『詛

楚文』は に作り、「田」の形になる。『説文』「甲は東

方の孟なり。易(陽)气萌動す。木の孚甲(若芽)を戴

くの象に従ふ」とするが、全く字形に合わぬ説である。」

甲に作る。『大墓殘磬』は に作り、『杜虎符』 に作る。

戦国楚簡には、甲字の外側の囲いは左下から右上に向か

って旋回して十の字を覆うような書き方をしている。左









側は (望山楚簡)、右側は (曾侯乙楚簡) その他に


(包山楚簡) の例がある。

秦文字は戦国晚期『睡虎地秦簡』は に作り、秦代『嶽






麓書院藏秦簡』は に作り、前漢早期『銀雀山漢簡』




は に作り、中晩期の『居延新簡』は に作る。数千年


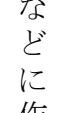

後の現在、甲の形状はほとんど変化がない。考察中に、秦漢の間の璽印または簡帛石刻文字はほとんど十字に重なっている形状をしており、僅かに魏の『正始石經』はのように作り比較的特殊な例であり、この形状は『説文』のと最も近い形をしている。しかし、この字例は許慎の後のものである。三国の璽印の中にも（左甲僕射）に作っている。その他の漢印は次のように作っている。（王甲私印）、（段甲私璽）、（新成甲）どれも上部は十字「」の形をしており、「」の形ではない。




仮に秦代にの字形があったら、許慎は多く見かける字例を採用せず、却って特殊な形体を用いており、更にこの字は現存する字跡を転写したものは無く、このような二つの字例が同時に存在することは確率的に低い

であろう。以上の字例から分かる通り、秦楚文字、青銅、簡帛等の各種材質、方形または円弧、はどれも十字を包囲する形をしており、これは甲字の必要条件である。これらの考察を総合すると、『説文』と『會稽刻石』の形状はどれも間違いであると考えられる。続けて戎字の考察に移る。

戎、甲骨文字は（合 27997）に作り、戈と干に従う。干は盾。攻防の武器を合せて、兵器・軍事を示す。西周金文は（班簋）に作り、春秋戦国文字は西周金文を踏襲しており、もともとは肉厚な（甲）の十形である。例えば、『龜伯御戎鼎』はに作り、『七年邦司寇矛』はに作る。








『説文』は「戎（戍）、兵なり。戈甲に従ふ」とするが、卜文・金文の字形と異なる。秦印はに作り、『關沮周家台秦簡』はに作り、『銀雀山漢簡』はに作り、






後漢中期『五一廣場後漢簡』は 、、などに作る。

殷周甲骨金文又は秦印から、秦漢簡帛文字はどれも『説文』のような小篆の  (甲) の書き方をしているものはない。『嶧山刻石』は  に作り、変遷の規律に合致している。許慎が生存する前後の戎字は「从戈从 」のよ
うな形体は出現しておらず、僅かに近代、清代の一部の書法名家の中に見ることができ。戎字の『説文』の字形は間違っており、『嶧山刻石』は正確である事が分かるだろう。

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
278 / 5204	會稽	琅邪臺
并		

(七)「并」字

并、甲骨文字は  (合 33570)、从从 || 並列を意味する。または  に作る。西周金文は  (并伯甗) に作り、戦国文字は形状を受け継いでいる。『中山王鼎』は  に作り、戦国燕系璽印は  (并懷) に作り、斉系璽印は  (朱并信璽) に作る。『望山楚簡』は  に作る。『説文』は「并、相從也。从从干聲。一曰从持二為并。」


戦国晚期『睡虎地秦簡』は  に作り、秦代『嶽麓書院藏秦簡』は  に作り、『銀雀山漢簡』は  に作る。前漢中晩期『居延新簡』は  に作る。後漢中期『五一廣場後漢簡』は  に作る。并字の形体に於いて強い関心を抱く重要な点は文字の中心にある二本の横画は果たして途中で切れているのかという事である。

『秦漢金文彙編』に『013 廿六年詔十六斤權』は  に

の書法名家の作品中にのみ見る事ができるものである。

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
	 2	
154 / 2784	會稽	琅邪臺
制*		




(八)「制」字


甲骨文の「制」字はあまり見る事ができない。刀、木に従い、刀で木を断つ意である。(析の形状と一致する)
 (N007)⁵¹に作る。『淮南子・主術訓』「巧工之制木也。」



季旭昇は『説文新證』にいう。

戦国以後の「木」の形は複雑化し「未」の形になり、秦文字は木が折れる意味を強調しており、「未」字を二つから三つに分けている。『老子甲後』の形はまた切断された「未」の下部を全体の字の真下に配置している。よって、より「巾」字のように見える。このように、衣折に従う「褱」字と非常に近い、更に「折」、「制」はどちらも祭部で、声調は近く、韻は同じである、よって『睡虎地秦墓竹簡・為吏之道』「吏有五失」中の三失は「擅褱割」で、この組み合わせについて注に「褱字は事実上は製字である。」と記されており、案、装、制の二字の音と意味はどちらも近いが、文字の起源からいうと、二者はやはり異なる文字である。前漢馬王堆『十問』は「巾」の旁を「衣」旁に変えている。これにより、一つの「制」、「褱」が合併した字になっている。积文は「製(制)」に作るのは理にかなっている。

(裘錫圭『說字小記・制』王莽時の新鈞權、後漢禮器碑の「制」字の左旁はやはり元々の分断された形が残っており、当時の人の「制」字に対する認識を伺うことができる。⁵²)

『説文』「制、未は物の成りて滋味あるもの、裁断すべし」というが、その枝葉を切りそろえる意。『里耶秦簡』は、に作り、『馬王堆漢簡』はに作り、一部の物の下半を「巾」の形に分離させて作るものもある。




例えば『張家山漢簡』はに作る。

「未十刀」の形体は秦漢簡中にはっきりと見分ける事ができ、また秦の權量銘及びその他の秦刻石と、『説文』の小篆とが共通している事が分かる。あらゆる材質の文字形状を比較した後に、左半分の形状に間違いは無く、右半分の刀はに作り、稿者が認めている刀の形()では無い。よって、『説文』及び秦刻石のこの字は正確な

字形に近いと言うことしか出来ず、厳しく区分すると、誤字の範囲に分類する事ができる。前漢中晚期以降、左側「未」上半部の起筆が徐々に「牛」の様な形体に変化しており、更に後の後漢碑刻の中にも改変後の形体の字例を見る事ができる。

(九)「達」字

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
49 / 1162	會稽	琅邪臺
達		

達(達)、金文は (史牆盤)に作り、声符は牽。『説文』「達、行きて相遇はざるなり。」秦印はに作り、『睡虎地秦簡』はに作り、右側はどれも「辛」の様

に書くが、『嶽麓書院藏秦簡』は「𠂔」に作る。𠂔形の下部は羊または羊に作る。秦、前漢早期の二種の書き方がどちらも存在する。約前漢中晩期後の上半部は「𠂔」から「𠂔」に変化し「大または土」に近い形になっている。許慎の時代は、後漢中期『五一廣場後漢簡』は達、達、達などに作る。

筆順の原理に従って、変遷を次の様に推測した。
 「𠂔¹𠂔²𠂔³↓𠂔¹𠂔²」。「个」形の三つの線は先に中間の縦画を書き、その後左右の方向にそれぞれ払う。2、3と連続して右上から弧を描く様に書き、その勢いで上から下に向かい、すぐに右に引いて二画目が完成する。「土」の様な書き方である。

稿者は、これは、縦画を下に向かって引いた後にそのまま右に向かって引き、スピーディに勢いに乗って書いて












た結果であると考えている。同じような変遷で「遠」字の右上は「火」の様な形から「土」の形に変化した。「火土土」。




考察の結果、達字は、『説文』と泰山刻石の字例中の書き方は比較的後の時代の書き方をしており、秦の時期の形体ではない。



(十)「邊」字













説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
58 / 1208	會稽	琅邪臺
邊		

旁は、甲骨文字は𠂔(合 6666)に作り、𠂔に从い方の声。また𠂔(英 634)に作り、音を凡で読む、横画の

両端に身近な縦画を加えて  の形に作った。西周金文は  (周免旁父丁尊) に作り、春秋金文は  (秦政伯喪戈) に作り、戦国金文は  (梁十九年王智鼎) に作り、 の形に近い。墨跡では『楚帛書』は  に作り、『睡虎地秦簡』は 、 に作り、『嶽麓書院藏秦簡(伍)』は 、 に作る。『説文』は  に作る。『説文』「旁、溥きなり。二に従ふ。闕。方聲。」「爾雅・釈詁」に「垂なり」、『広雅・釈詁』に「方なり」とあって、辺境・辺陲をいう。

鼻字は自に従い、丙の聲。邊の初期の書き方。『玉篇』「邊、辺境・辺陲をいう。」邊は、甲骨文は  (合28058) に作り、金文は  (大孟鼎) に作り、『詛楚文』は  に作る。『説文』「邊、垂崖を行くなり。」「邊」の字例は決して多くなく、仮に「鼻、鼻」の形を更に深く考察すると、「鄴」字を参照すると、春秋晚期、戦国中期

の『鄴子萑塋鼎』、『越王差徐戈』等の字例がある。しかし筆跡がはっきりしていない。楚簡の邊字は「鄴」に作り、邑に従う。『上博簡』の『曹沫之陳』、『鄭子家喪甲』、『鄭子家喪乙』等を参照する必要がある。「邊、帝」の二字は直接的な関係は無いが、『九店楚簡』の  (帝) と『上博簡』  邊字の右下の角の形状が似通っている。










邊は、『詛楚文』は  または  に作り、鼻の形は  である。許容範囲を広げ、仮に a1、a2 の形状だとしたら、現在の『詛楚文』の姿に書く事が出来るが、『説文』の  の形に書くのは容易では無い。『嶽麓書院藏秦簡』は  に作り、『馬王堆簡帛』は  に作る。秦漢、前漢早期漢簡から見ると、「邊」字の右半分の「鼻、鼻」の形は大きく分けて三種類に分ける事ができる。a と b の差異は上部の「」と「」の形で、a と c の差異は下部の「」の形で、b と c の差異は上部の「」、「」と「」の


形である。以降の字例から見ると、おおよそ、b類が変遷の主流をなしている。

旁、鼻、邊の字形の考察の結果、『説文』の形状に近いものは『説性亭銘』^{5.3}と『邊達碑』(下の図表に記す)だけであるが、『邊達碑』は偽刻であり、参考にすることは出来ない^{5.4}。まとめると、邊の字は『説文』と『會稽刻石』の形状は間違いである、もしくは秦漢時代の形状には合致しないと言う事ができる。

説文1	秦簡	
		
説文2	泰山	嶧山
		
90 / 1735	會稽	琅邪臺
章		

(十二)「章」字

章は、商代金文は (亞嚳作且丁簋) に作る。西周金文は (裘衛盃) に作る。春秋晚期『侯馬盟書』は に作る。春秋戦国文字は中央の縦画または斜画上に円点を加え、横画を飾りにしている。例えば、 または。漢金文は または に作る。後漢中期『五一廣場後漢簡』は、 などに作る。

商から漢代の各種材料の文字では、形体の差異の有無に関わらず、基本的に辛、田に合致する。『説文』「章、樂の竟るを一章と爲す。音と十に従ふ。十は數の終なり。」形は に作り下部の十字は突き抜けているわけではない。

考察の結果、章字は唐以前、下部の「十」形の縦画はど

れも突き抜けている。このような形状は偏旁に「章」が含まれる文字の中に反映されている。例えば、秦印「鄣」(𡗗)、秦簡の「鄣(障)」(𡗗)、贛(𡗗)等の字がある。よって『説文』、『會稽刻石』の章字の字形を検討する価値があると考ええる。

(十二)「審」字

説文1	秦簡	
説文2	泰山	嶧山
25 / 0721	會稽	琅邪臺
審		

采字は、甲骨文は (合 18346)、 (合 35246)






に作る。又に従う(または丑)、少に従う(沙字は初文)

があり、沙の中を手探りで識別するの意。商金文は、 采は父乙酉に作る)、西周金文は (井弔采鐘)に作る。『説文』「采、辨別するなり」とし、「讀みて耕の若くす」という。

番、田に従う、采声。西周金文は (番匊生壺)に作り、春秋戦国文字は文字の形状を踏襲し、『番君召匡蓋』は に作る。戦国璽印は または に作る。『上博簡』は 、 に作る。『説文』「番、獸足これを番と謂ふ。采に従ふ。田はその掌に象る」という。『馬王堆簡帛』は に作り、後漢中期『五一廣場後漢簡』は 、 などに作る。




悉は、采、心に従い、考えを詳細に識別するの意。『説文』「悉、詳盡なり。」戦国璽印は に作り、『詛楚文』は に作り、秦簡は に作り、『馬王堆簡帛』は ま




たは **審** に作る。

審、甲骨文字は  (合 10678) に作り、西周金文  (五祀衛鼎) に作る。宀、米に従い。下の「口」は裝飾であり、中心または裝飾である。春秋戦国以降、下部は日形になり、例えば、戦国璽印は  に作り、秦印は  に作る。秦簡は  に作る。『説文』「采、悉すなり。知ること寒諦（つまびらか）なるなり」とし、宀采の会意とする。采を悉の意とするものであるが、采には悉の意を含まない。『説文』「審、篆文は審に作り、番に従う字とする。」

審字について検討できる部分が二箇所あり、「米\采」と「日\田」この二つの部位が変化したタイミングである。審字は、秦簡または前漢早期の『銀雀山漢簡』と『張家山漢簡』等簡牘文字では、どれも「宀+米+日」の形体をしており、その後の前漢中晚期『居延漢簡』に至るま

で下部の「日」形は「田」形に作っている。なお、後漢中期『五一廣場後漢簡』は 、 などに作る。

漢印中にも「日」、「田」形が並存している、その例が、『審奉徳印』、『審逢時印』 で、『光和七年洗』は  に作る。審字下部の「田」形が形成されたのは前漢中期または更にその後であり、秦以前はおそらく形成されていなかったことがわかる。「米\采」形の改変が起きたのは更に後の時期である。

しかし、「番」字は比較的早くから起筆が湾曲している形状であり、西周早期『番匊生壺』の上部の米形は  のように湾曲している。戦国璽印はどれも  である。「悉」字『詛楚文』の上部は  の形に作り、これも湾曲している。これらは審字以外で、比較的早期の変化に関連する字例である。これらの改変は、段階の影響も大きく

なく、傾向の形成もない、例えば、『馬王堆簡帛』は審審に作り、後漢中期『五一廣場後漢簡』は審審、香香などに作り、また、漢金文『常宜子孫鏡』はやはり審審に作り、上部は「米」形を形成している。

審字の変遷に関して、趙平安は次のようにいう。

「『侯馬盟書』^{16・3}中、一つの字は審審に作り、隸は審審に

作る。この字は思に従い来声であると理解する必要があり、審の異体字である。これは、小篆の「審」の出現により、二つの道を辿った、一つは日を改め、田にし、一つは審審中の心を省いている。しかし、どのような道を辿ったとしても、どちらも同化される過程を経ている。⁵⁵」この意見は参考にすることができる。『上博簡』の審は審審に作り、これらの「米」形の湾曲は、なぜ楚系の簡牘文字中に比較的良好に見えるのか、また、秦系

墨跡文字には少ないのか。文字中に十字形がある時、楚簡は多く「米」に作る。例えば、審審（新蔡葛陵楚簡）、審審（新蔡葛陵楚簡）、審審（嶽麓書院藏秦簡）、審審（睡虎地秦簡）、審審（龍崗秦簡）である。

数十年の秦楚簡牘の臨模創作の経験と出土文字の考察から次のように判断した。楚筆は細く尖った比較的弾力のある筆で書いている。楚文の書写方式の多くは振り回す、弧を描くような運筆で、上下の縦画の起筆は筆先が12時の方向を向き、線を引いた後、瞬時に筆を旋回させる書き方である。秦筆の筆先は尖っておらず、縦画の用筆は、筆頭を6時の方向に向け、線を引き、筆を更に回す動作はない。

審字の「米」形は唐宋の間、左払いの一画が多い差異を

始めて目にする、『五一廣場後漢簡』の字例によれば、後漢中晩期の許慎でさえ実際に目にすることができなかつた事がわかる。番字の湾曲の形状は早くからあるが、文字間のある部分には近い形の物があるものの、変遷の形または速度は必ずしも同時ではない。よって、「審」字は、現在の『説文』または『會稽刻石』の字形はおそらくどちらも間違いである。

(十三)「貴、遺」字

説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
211 / 3975	會稽	琅邪臺
貴		

説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
50 / 1173	會稽	琅邪臺
遺		

a, e 変遷	
a 筆順	
d 筆順	

申（貴）、西周金文『孟貴鼎』はに作る。貝を両手で攜える形で、貴重なものを言う。「遺贈」遺の初文。『廣韻・至韻』に「遺は以酔の切、贈なり。」とある。春秋中期金文は（揚子仲瀨兒盤）に作り、貝、井に従わな。戦国文字は（鳥書箴銘帶鉤）に作る。『説文』「貴、物賤からざるなり」とし、貝と與とに従う字で、與は賁、

すなわち草器であるとするが、貝を草器で荷なうことはない。許慎は𦉑を蕒の古文と考えいるが、実際は假借である。『信陽楚簡』は𦉑に作り、『睡虎地秦簡』は𦉑に作る。秦印は𦉑に作る。秦漢金文の貴字の上端は「𦉑」(𦉑、𦉑、𦉑、𦉑)のように多種の形状がある。例えば、『富貴方壺』は𦉑に作り、『富貴昌宜侯王洗十』は𦉑に作り、『富貴昌宜侯王傳子洗』は𦉑に作る。

遺、西周金文は𦉑(旂鼎)に作り、春秋晚期(王孫遺者鐘)は𦉑に作る。声符は貴。貴は貝貨を両手でもち、人に遺贈する形の字である。金文は𦉑に従う。『説文』「遺、亡なり」と亡失の義に解するが、遺贈が字の本義である。食をおくるときには饋という。秦印は𦉑または𦉑に作り、漢印は𦉑または𦉑に作る。秦簡間は、墨跡文字、非墨跡文字に関わらず、形状は皆同じである。

後漢中期『五一廣場後漢簡』は𦉑、𦉑、𦉑、𦉑など

に作り、「貴」、「遺」の二字を深く考察する必要のあるのは、秦簡の字形に基づき、稿者は推測して a / e の変遷図に示した。「貴」字の上部の「𦉑」形の下部はもともと八の字に開く二点で書かれている。その後は一筆で書かれ、U形と横画が重なり、cの状態の時にはすでに「U」形の筆順で書いておらず、bの状態にはすでに横画と分離し、筆順が変化し、それに連れて字形も一緒に変化した。「e類」の段階ではすでに楷書のような筆順で「中」、「一」の様に書いていることがわかる。類似のもので、U形と下方の横画の重なりが、最後に切り離された後の変遷の字例があり、「高」、「京」などは五章六節に詳細に説明する。

貴字の上半部と『説文』小篆と泰山、会稽刻石の形状にやや近く、『銀雀山漢簡』は𦉑に作り、筆順は次の











様に推測できる。「𠄎」↓「𠄎」↓「𠄎」↓「𠄎」↓「𠄎」。この考察の結果から見ると、「貴」字の上部「𠄎」は多くはやはり上の表の a 類が主をなしており、更に下表の多くの秦印の「遺」字から見ると、秦漢簡の「𠄎」の形に近く、『説文』等の秦刻石にあるような「𠄎」の形は、もしかすると字を書く際に、筆順の前後の順番の認識における差異が引き起こした結果なのかもしれない。







(十四)「𠄎、德」

説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
		2
59 / 1223	會稽	琅邪臺
德	2	6

𠄎 (𠄎)、金文は (寄嬴惠盤) で、直と心とに従う。『説文』「𠄎、外には人に得、内には己に得るなり」という。『中山王響壺』は に作り、「德行」と読む。『詩・大雅・抑』に「有覺德行。」とある。戦国晚期『郭店楚簡』は または に作り、多数の字例は に作るが、僅かに残された部分の字例は の形を保っている。秦漢簡では、秦漢の字例は未だ見られない。『馬王堆簡帛』は に作り、『銀雀山漢簡』は に作り、どれも一画多い形ではなく、「𠄎 + 𠄎」の組み合わせである。

德は、金文は (嬴肅德鼎) に作り、『説文』「德、升るなり。」と省と心とに従う。篆文の字形は𠄎に従い、𠄎の声。すなわち德は「道德」の德を借用し、実際は𠄎に作らなければならない。『詛楚文』は または に作る。「德賜」、恩德を賜る。『管子・四時』「德賜布施。」秦








印はに作り、『里耶秦簡』はに作り、『馬王堆簡帛』はに作る。秦權量銘は（大駮權）、（大駮權）に作る。『肩水金閔漢簡』はに作り、後漢中期『五一廣場後漢簡』は、、などに作り、『三国呉簡』はに作る。徳字は秦漢の時期では、一画多い書き方はまだない事がわかり、後漢の後、一部の石刻は「徳」形に作るが、大多数は「徳」の様に一画がない書き方である。唐代までこの様な書き方が主流である。




よって、泰山等の石刻の形状は正確であるが、『説文』は却ってに作っている。「、」の間に一画多く、確実に秦代の書き方ではない。『説文』中に含まれる「」部の三つの字「徳、聽、」等の字形はおそらくどれも修正されている。ここで、稿者が整理して表にした「」、
「徳」の各種字例は、考察の際あらゆる可能性があり、












文字の変遷の脈略を整理すると、このような方法でも実証を得られる事を実証している。

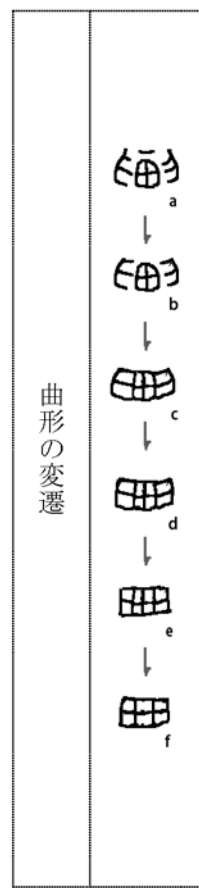
(十五)「農」字

説文 1	秦簡	
 	 	
説文 2	泰山	嶧山
   		
99 / 1779	會稽	琅邪臺
農		



農、甲骨文は（合 583 反）に作り、林、辰に従う（の初文）、卜文に艸に従うものがあり、草萊（草はら）を辟く意を示すものであろう。西周金文は（史牆盤）
または（散氏盤）に作り、辰上部の形はになる、
また「」の形にもある。例えば「」（泐其鐘）




は、戦国晚期楚漢は「𦉳」に作る。 (上博楚簡)は、楚漢は多く「戎」を農字に用いている、例えば『郭店楚簡・成之聞之』に「戎(農)夫、食に務め、強いて耕やさざれば」、『説文』に「農は、耕す人なり」とあり、 または に作る。

秦文字に関しては『睡虎地秦簡』は に作り、『關沮秦簡』中の字例は少なくなき、例えば 等に作る。辰の上部は「」に作る。『馬王堆簡帛』は に作り、『張家山漢簡』は または に作る。『張家山漢簡』には上部の形を「」に作る字例はあるが、前漢早期時の農字の形状の差異は大きくない。前漢中晚期以後、この様に書かれる字例はあまり見られなくなった。なお、後漢中期『五一廣場後漢簡』は, , ,  などに作る。




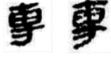




曲形の変遷

秦漢の字例の中から、なぜ「」の形から「」の形に変遷したのかを理解することができる。もともと楕円の中心にある交差は、すでに「田」の形を成し、字を書く際の斜度または筆順が、左右の爪形と田形とが接近したためと考えられる。古人は1センチにも満たない範囲の中に文字を書いており、筆画に良く重なりが発生する。字を書く際は「筆順」から逃げる事はできないが、筆順は「絶対な規則」があるわけではない、人それぞれ字形の理解に基づき、自らその字にふさわしい筆順を導き出して、後の字形を生んだ。必ずやある書き方は多くの人の習慣である事を示し、多くの人が字を見、書く上での理解につながっている。

考察結果を整理すると、農字の上部は「曲」形であり、漢印中に以下の様な約六種の形状がある「𠩺、𠩻、𠩼、𠩽、𠩾、𠩿」。その他の秦漢の金文中には「𠩺」(大司農平斛)、、 (永平平合)、 (建武平合) 等があり、これらの形状を含んでいる。しかし、これらの非墨跡文字の字例の中から、本当の文字の変遷の軌跡を見る事は不可能であり、「墨跡文字」によって始めて実際の変遷の状況を知ることができる。

上述の考察と解釈から、『説文』の農字の形状は正確であり信用できると判断するが、『琅邪臺刻石』の形状は秦漢の字例に見る事は出来ず、議論の余地がある。稿者は字形の考察の過程で、「訛変」という文字を使うことは少ない。主要要因としては、「標準の字形」を定義する事が非常に難しからである。「定義」出来ないのであれば、「標準の字形」というものは根本的になく、「訛誤変易」

や「誤り」には常に比較対象があるわけで、その対象が何が標準なのかである。例えば、「農」字の下方「辰」形は、二つの払いから形成される「人」から「一」の形になるが、これを「訛誤変易」と解釈すると問題がある。稿者は、上述してきたように、「筆順」が文字の変遷の重要な鍵であると考えている。

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
114 / 1977	會稽	琅邪臺
專*		

(十六)「專(專)」字

專は、甲骨文字は (合 19488)、 (合 3750)に

作り、又と吏に従う。手で紡專を回す意。吏亦声。搏の初文。『説文』「專、六寸の簿なり」とあって、メモ用の手版の意とし、また二に曰く、專は紡專なり」という。この字を探求する上で重要なのは秦刻石と『説文』小篆の「**專**」形の問題である。『古璽彙編』編号 228と 229 『專(傳)室之璽』⁵⁶は、この二つの円形の印章の中に戦国時代の姿を示している。

『説文新證』⁵⁷では、「**專**」形を特に説明していない。專字は、秦簡の字例を見る事ができなかったので、上の表の字頭に「*」の注を付けた。前漢早期の漢簡(馬王堆簡帛)を秦簡の代わりに使った。戦国から前漢、三国時代を跨いで許慎前後の時代まで、「**專**」形の字例はなかった。よって、稿者は戦国以後の專字「**田**」形の下は、すでに「ム」形では無くなっていたと判断した。

石刻が偽刻であるかどうか、また原石がすでに破壊さ

れているかどうかは、後人の翻刻、彫り直し等、どれも引用する材料を考察する際に注意する点である。⁵⁸ 例え**ば**『孔子廟堂碑』は宋の重刻本であり、唐代に実際に使われた字の状況を表すには不適切である。よって、偽刻もしくは再刻である場合は、どちらもその時代の文字を代表する事は出来ない。

北魏時期の『司馬顯姿墓誌』に「**專**」の字例が現れ、隋唐時期の碑刻にもいくつかの字例がある。しかし、実際に普遍的に使われたのは宋代以後である。よって、「專」字は、『説文』小篆、『會稽刻石』、『琅邪臺刻石』の字形には間違いがある。考察対照をさらに拡大して、『説文』の「專」の部首「傳、剽、團、媯、專、搏、溥、搏、簞、縛、媯、專、轉、媯、媯」など15の字形はどれも研究の価値がある。

(十七)「惠」字

説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
136 / 2495	會稽	琅邪臺
惠*		

恵は、甲骨文字は (合 34103) に作り、紡専の形。西周金文は (史牆盤) に作る。『四十二年逯鼎乙作』は に作る。春秋金文は (哀成弔鼎) に作り、『王孫遺蠡鐘』は (恵) に作り『郭店楚簡』は に作る。秦陶は または に作り、残念ながら形状は不鮮明である。また秦簡以後は他の字例がなく、比較することができなかつた。


『説文新證』⁵⁹。「甲」形は特に説明がない。恵、西周



金文は (裘衛盃) に作り、心と恵に従い、篤仁の意である。春秋金文は (龜大宰匠) に作り、戦国文字は西周金文を踏襲しており、 (王孫遺者鐘) または (中山方壺) に作り、田形の下部は「ム」形の字例は少なくなっていく傾向がある。墨跡文字にはほとんど例がなく、例えば『楚帛書』は に作り、『郭店楚簡』は に作り、『睡虎地秦簡』は に作る。後漢中期『五一廣場後漢簡』は に作る。戦国晚期から、後漢中期の墨跡文字はどれも「恵」で書いており、漢印もこれと同じである。例えば、『惠子私印』、『鼎子惠』 等。『説文』「恵、仁なり。」小篆は 作る。『嶧山刻石』は に作り、『會稽刻石』は に作り、どれも「ム」の形に作っている。恵字以外、秦漢時代の各種材質の文字の中に、ほとんど「甲」の様な字例は現れておらず、





また前の𠂔字と專字の考察から、稿者は『説文』と秦刻石の形状も間違いであり、「𠂔」の書き方で「ム」形が無いものが正確であると判断した。

(十八)「𠂔」字

総文 1	秦簡	
		
総文 2	泰山	嶧山
		
116 / 2003	會稽	琅邪臺
𠂔		

婁は、女𠂔声に従い、甲骨文字は𠂔(後下二一・五)に作る。𠂔は牛、白、角に従い、 (乙 4062) にも作る。両手で牛の角を引きずる意で、角はまた声符である。『公羊傳・昭公二十五年』「夫牛馬維婁」注に「繫馬曰維、繫牛曰婁。」とある。『説文』「𠂔、曳き聚むるなり」とあ

って、たぐりよせることをいう。西周金文は (伯婁簋) または (是婁簋) に作り、𠂔の下部は女に従う。意味は不明である。

『説文』「婁、空なり。𠂔に従ひ、中女に従ふ。婁空の意なり」とするが、どうして婁空の象となるかを、説くことがない。婁空とは、髪を巻き重ねて、軽く透かしている意である。『繫伝』に「一に曰く、婁務は愚なり」とあり、疊韻の連語。紛乱の意より、愚昧の義となる。小篆の形は𠂔に作る。戦国晚期『睡虎地秦簡』は または に作る。前者の字例は比較的早期の書き方で、「𠂔」を書く際の筆順を残しており、後者は縦画のあと、左右の二点を分けて「𠂔」の形で書いている。細かな違いは「数字の変遷の過程図」参考に婁の e、f の状態の筆順を示している。この種の書き方は前漢早期に見ることができ、例えば (馬王堆簡帛) び、 (飲雀山漢簡)

などがある。漢印はまたはに作る。『三国呉簡』はに作り「中安」の形で構成し、またはその間に一画横画の多いの書き方で表している。

考察の結果を変遷表に示す。角形が変遷して口形になる時、例えば次の図の様に、角形から分離してでた人形と臼形が結合してのようになる。b、c、dの段階には実際の字例がなかったが、筆順と形状の規律から、この字を補う事が可能であり、「婁」字の変遷の過程を表すことが出来る。

続けて、数字について、『詛楚文』はに作り、戦国晚期『中山王響鼎』は（）に作る。『説文』「數、計るなり」として婁声とするが、婁に数の声はない。『睡虎地秦簡』はに作り、秦印はに作り、「」の婁形から見ると、比較的早期の書き方を残している。

『關沮秦簡』はに作り、隸定するとになる。數は秦漢簡牘文字の字例が比較的多く、書き方も多様である、例えば『張家山漢簡』は、、に作り、の様に女偏がない字例もある。また『銀雀山漢簡』は、、に作る。多くの書き方があるため、更に後の時代になると各種の字形が派生する、例えば前漢中晚期『居延新簡』は、などに作る。後漢中期『五一廣場後漢簡』は、、、、などに作る。

数字の左下の「角」の書き方は「用」形の最終形の「田」形を残している。稿者は a、f 合計六段階の変遷の過程を次図に示した。

まだ識別できる。例えば『秦公簋』は



に作る。

季旭昇氏は『説文新證』にいう。

甲骨文の舟、凡の二字の使い方は嚴格で、混同することは少ない。甲骨文の「受」字は舟に従い、凡には従わないことは明らかである。もともと「受」字は舟に乗る際に手を授け、人が舟に乗るときは重心が不安定であるため、他の人が手を差し伸べ体を支える意味であつたが、後に物品の授受の意味に派生した。


仮にこの説が成立するならば、この字は舟、受に従い、舟声である。秦から前漢にかけて、「受」字は「舟」の部分を用いて、少なくとも二本の横画で書いており、王莽の時代の『武威儀禮』で始めて『説文』小篆の様な「𠂔」形に従う「受」字が出現した。よって、『説文』の小篆の「受」字の字形はおそらく後漢の誤った字体から影響を受けて生まれた字で標準の秦篆の「受」字ではない。⁶⁰

考察すると、後漢時期には「𠂔」のような字形はなく、季氏の言葉は正しくないと考える。




『説文』「受、相付なり。受に従ひ、舟の省聲」とするが、舟は盤であるから、その声を用いるはずはない。戦国晩期から秦の簡牘の字例を見ると、上部は「爪」の様な形ではなく、比較的、円弧形の様な「日」形をしている。更に上部、中部の間を繋げて「目」形を成しているものもある。類似の「爪」形は「日」形で表しており、同時期の「爭」字も同じである。例えば「𠂔」、「𠂔」がある。

受字は「𠂔」+「又」の組み合わせで比較的画数が少ないが、基本的に上の字形の構成はやはり上下爪形「𠂔」、「𠂔」と「又」で中間に器形がある、例えば「𠂔」または「𠂔」。また前漢早期の漢簡から観察すると、「受」字の上部は「日」形と「爪（𠂔）」形で既にはつきりと差が出ている、『居

延漢簡』、『武威漢簡』、『敦煌漢簡』などの字例は更にわかりやすく変遷過程を見る事ができ、例えば上部の「𠂔」形は「𠂔」形になり、元々の「日」形はすでに字例にな





後漢中期『五一廣場後漢簡』は  に作

り、後漢晩期の石刻文字は上部の「𠂔」形で、すでに大きな変化は無くなり、「𠂔」形も既に定形となって、下部の「一」、「又」形のみ変遷途中である。最後に、唐代の字例では、「一」と「又」形が既に合併して、「又」形となっている。


考察の結果から、受字の「爪形」の変遷は 、
 ↓  となる事がわかり、中間の「器形」の変遷は「𠂔」、
 ↓  となる。表に表した『琅邪臺刻石』及び『説文』小篆の形状と実際の秦代の文字とでは極端な差異があり、後漢晩期以後の字形の形状構あると考える。

籀文 1	秦簡	
		
籀文 2	泰山	嶧山
		
200 / 3831	會稽	琅邪臺
無	 4	 2

(二十) 「無」字






無は、甲骨文字は「𠂔」(合 15996) に作り、人が舞具を用いて踊っている様子の形。舞の初文。『説文』「舞、樂しむなり。足を用て相背く」とし、無声の字とするが、舞は無の繁文である。周金文は「𠂔」(小克鼎)に作る。春秋戦国文字は西周金文を踏襲し、春秋晩期の『侯馬盟書』は  に作り、戦国早期の『曾侯乙楚簡』は  に作り、晩期の『新蔡葛陵楚簡』は  または  に作る。この事から春秋戦国以後は上部を「𠂔」の形に作る字は

なく、徐々に二本が平行の横画で書くようになる。

『説文』「無、豊なり」と訓し、字を林に従う形とするが、爽、或いは説ふ、規模の字なり。大冊に従ふは、數の積なり。林なるものは木の多きなり」という。戦国晚期以後、秦、楚簡の字例の多くは「𠄎」形が無い。秦簡文字は特に顕著であり、多くの秦刻石と『説文』の中心はどちらも「𠄎」形がある。秦漢の間を考察すると、一部の璽印文字はこの様な形状を残しているものがある事がわかった。よって、『小篆』と秦簡文字の形状とは異なるが、許容の範囲内と言える。

稿者は材料と実際に字を書いた経験などを通して、「無」の秦簡文字の筆順を推測し、a、f、gの「無」字の七段階の変遷表を作成した。a類とb類の改変の差異は元々の5、6画目と11、12画目の四筆が一画になり、b類とc類の改変は3、4画目の元々のU形が下方の横画に接近

した。この様な線の重なりはb類が顕著であり、書き手はすでにU形の書き方を使わなくなり、四筆の縦画へ変わった。下方はもともと「𠄎」形であり、既に「𠄎」の六点に変わっている。E段階はまだ一本横画が多い。例えば「𠄎」は、この後の段階では三本の横画の状態に戻っており、下部はもともと六点で、後に四点「𠄎」に変わったと考えられる。

後漢中期『五一廣場後漢簡』は、、、、に作る。「無」字の変遷の最後はg段階で、起筆の際に先に下に筆圧をかけてから右に移動し、着地点は元々の中心の一から少し右に移動したところである。後漢晚期になると、字形の結構は今日使われている「無」字とほとんど差がなくなっている。

(二十一)「量」字

説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
281 / 5221	會稽	琅邪臺
量		

量は、甲骨文は (合 18504) に作る。東に従う、易声。量は易声の準声である。易と東は一面縦画を借用する。東は囊橐の形に近く、重りの付いている量りの意。西周金文は (量侯簋) に作り、下に「土」を加えて複雑化させている。戦国文字は西周金文を踏襲し、『廿七年大邾司寇鼎』は に作る。

『説文』「量、軽重を稱るなり。重の省に従ひ、𧰨の省聲」とするが、重の形に従うものはのちの形であり、また𧰨の字とは何の関係もない。 に作る。戦国楚簡は

または に作る。『睡虎地秦簡』は に作り、形状

は同じである。『琅邪臺刻石』は に作る。量字は『説

文』と秦刻石のどちらも正確で間違いがない事がわかり、十分信用できる。

(二十二)「臨」字












説文 1	秦簡	
説文 2	泰山	嶧山
282 / 5224	會稽	琅邪臺
臨		2

臨は、甲骨文字は (合 4299) に作り、金文は








(獄簋蓋) に作る、見に従い、参声。臨と参はどちらも侵部に属し、臨は参の準声首をなす。『毛公鼎』は に

作る。

『説文』「臨、監臨するなり。臥に従ひ、品聲」とする。

秦封泥は (臨菑丞印) に作り、秦簡は (睡虎地秦簡) に作る。基本的な形状は、稿者は秦封泥と秦簡は同じであると考えており、違いは璽印の製作で、文字を粘土で型を取り、鑄造などの工法によって文字が生まれる。直接、簡牘上に文字を素早く書くのとは異なり、ある一定の範囲に固定される。枠の中に文字を配置し、「人」は「」の形で配置している、又、漢印の臨は「」(臨邛長印)、 (臨胸右尉)、 (臨沅令印) に作り、後者の形状は実は秦簡「」と差が無い。どの様にして「」と「」の形の差異を見分けられるのか。臨字の臣形は非墨跡文字では、多くがに作っている、それに対して多くの墨跡文字は縦画が「」を貫いて、二段に分けて二筆で書いていない。これは文

字を素早く書く為に形成された結果であると考えている。

0.5センチにも満たない範囲の中で、縦画を頑なに二段に分けて書くのは効率と論理から考えて合致しない。この様な形体から、秦漢墨跡の文字は皆この様な姿であるということがわかる。例えば前漢晩期の『銀雀山漢簡』はに作り、『居延漢簡』はに作り、後漢中期『五一廣場後漢簡』は、、に作り、更に後漢晩期の石刻文字は「」の形で表している、僅かに縦画が貫いていない例が数例ある。例えば、 (史晨前碑) 等である。まとめると臨字は『説文』と秦刻石の形状は問題がない。

三、秦代刻石と秦簡文字

秦刻石と『説文』、商周、春秋戦国、秦漢文字を、比較表を用いて分析を行った(表4.1.1)。考察の字例は、「帝、下、皇、

分、咸、登、遠、道、德、後、御、建、行、嗣、甘、言、詔、奉、
丞、具、為、及、書、臣、相、者、於、死、利、初、刻、制、其、
日、可、于、盡、去、既、矣、久、無、之、因、日、昧、明、年、
稱、窺、疾、作、從、山、石、長、夫、立、思、不、始、也、義、
經、金、斯、六、成、辭(辭)など六十九字。(嗣、奉、制、既、
昧、立、思、始、經、斯など十字。一部は前漢簡牘文字に替わる。
窺は、秦簡の字例はない。)

帝、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎、𠄎に作る。

下、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎、𠄎に作る。

皇、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎、𠄎に作る。

分、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

咸、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

登、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

遠、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

道、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎、𠄎に作る。

德、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎、𠄎に作る。

後、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

御、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦
簡は𠄎に作る。

建、『泰山刻石』は𠄎に作り、『嶧山刻石』は𠄎に作り、秦

簡は**律**に作る。

行、『泰山刻石』は**行**に作り、秦簡は**行、分**に作る。

嗣、『泰山刻石』は**嗣**に作り、『嶧山刻石』は**嗣**に作り、

『銀雀山漢簡』は**嗣**に作る。

廿、『泰山刻石』は**廿**に作り、『嶧山刻石』は**廿**に作り、秦

簡**廿**はに作る。

言、『泰山刻石』は**言**に作り、『嶧山刻石』は**言**に作り、秦

簡**言**はに作る。

詔、『泰山刻石』は**詔**に作り、『嶧山刻石』は**詔**に作り、秦

簡は**詔**に作る。

奉、『泰山刻石』は**奉**に作り、『嶧山刻石』は**奉**に作り、『張

家山漢簡』は**奉**に作る。

丞、『泰山刻石』は**丞**に作り、『嶧山刻石』は**丞**に作り、秦

簡は**丞**に作る。

具、『泰山刻石』は**具**に作り、『嶧山刻石』は**具**に作り、秦

簡は**具**に作る。

為、『泰山刻石』は**為**に作り、『嶧山刻石』は**為**に作り、秦

簡は**為、為**に作る。

及、『泰山刻石』は**及**に作り、『嶧山刻石』は**及**に作り、秦

簡は**及**に作る。

書、『泰山刻石』は**書**に作り、『嶧山刻石』は**書**に作り、秦

簡は**書、書**に作る。

臣、『泰山刻石』は**臣**に作り、『嶧山刻石』は**臣**に作り、秦

簡は**臣**に作る。

相、『泰山刻石』は**相**に作り、『嶧山刻石』は**相**に作り、秦

簡は**相**に作る。

者、『泰山刻石』は**者**に作り、『嶧山刻石』は**者**に作り、秦

簡は**者**に作る。

於、『泰山刻石』は**於**に作り、『嶧山刻石』は**於**に作り、秦

簡は **物** に作る。

死、『泰山刻石』は **死** に作り、『嶧山刻石』は **死** に作り、秦

簡は **が、取** に作る。

利、『泰山刻石』は **利** に作り、『嶧山刻石』は **利** に作り、秦

簡は **利** に作る。

初、『泰山刻石』は **初** に作り、『嶧山刻石』は **初** に作り、秦

簡は **初** に作る。

刻、『泰山刻石』は **刻** に作り、『嶧山刻石』は **刻** に作り、秦

簡は **初** に作る。

制、『泰山刻石』は **制** に作り、『嶧山刻石』は **制** に作り、『里

耶秦簡』は **制** に作り、『馬王堆簡帛』は **制** に作る。

其、『泰山刻石』は **其** に作り、『嶧山刻石』は **其** に作り、秦

簡は **其** に作る。

曰、『泰山刻石』は **曰** に作り、『嶧山刻石』は **曰** に作り、秦

簡は **曰** に作る。

可、『泰山刻石』は **可** に作り、『嶧山刻石』は **可** に作り、秦

簡は **可** に作る。

于、『泰山刻石』は **于** に作り、『嶧山刻石』は **于** に作り、秦

簡は **于** に作る。

盡、『泰山刻石』は **盡** に作り、『嶧山刻石』は **盡** に作り、秦

簡は **盡** に作る。

去、『泰山刻石』は **去** に作り、『嶧山刻石』は **去** に作り、秦

簡は **去** に作る。

既、『泰山刻石』は **既** に作り、『嶧山刻石』は **既** に作り、秦

簡は **既** に作り、『馬王堆簡帛』は **既** に作る。

矣、『泰山刻石』は **矣** に作り、『嶧山刻石』は **矣** に作り、秦

簡は **矣** に作る。

久、『泰山刻石』は **久** に作り、『嶧山刻石』は **久** に作り、秦

簡は **久** に作る。

無、『泰山刻石』は **無** に作り、『嶧山刻石』は **無** に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

之、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

因、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

日、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

昧、『泰山刻石』は**昧**に作り、『嶧山刻石』は**昧**に作り、『里

耶秦簡』は**昧**に作り、『馬王堆簡帛』は**昧**に作る。

明、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡**明**はに作る。

年、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**、**𠄎**に作る。

稱、『泰山刻石』は**稱**に作り、『嶧山刻石』は**稱**に作り、秦

簡は**稱**に作る。

親、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡の字例はない。

疾、『泰山刻石』は**疾**に作り、『嶧山刻石』は**疾**に作り、秦

簡は**疾**に作る。

作、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**作**、**𠄎**に作る。

從、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**從**に作る。

山、『泰山刻石』は**山**に作り、『嶧山刻石』は**山**に作り、秦

簡は**山**に作る。

石、『泰山刻石』は**石**に作り、『嶧山刻石』は**石**に作り、秦

簡は**石**に作る。

長、『泰山刻石』は**長**に作り、『嶧山刻石』は**長**に作り、秦

簡は**長**、**𠄎**に作る。

夫、『泰山刻石』は**夫**に作り、『嶧山刻石』は**夫**に作り、秦

簡は**夫**に作る。

立、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**五**に作る。

思、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡**甲**はに作る。

不、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**下**に作る。

始、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

也、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

義、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**、**𠄎**に作る。

經、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作り、『馬王堆簡帛』は**𠄎**に作る。

金、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

斯、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

六、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**に作る。

成、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作り、秦

簡は**𠄎**、**𠄎**に作る。

辭（辭）、『泰山刻石』は**𠄎**に作り、『嶧山刻石』は**𠄎**に作

り、秦簡は**𠄎**、**𠄎**に作る。

『泰山刻石』、『嶧山刻石』、秦簡文字を比較することにより、

秦系簡牘の筆跡文字が篆書形に一致していることを証明できる。

第二節 秦代墨跡文字篆書体の比較検証

以上の分析を通じて、篆隸字体間における「隸変」が、秦代刻石（宋刻本の『説文』小篆でもない）から直接「飛び越え」て後漢の漢隸（「通称」八分）の字形になったわけではないことがわかる。「隸変」は、墨跡文字の転写が繰り返される際に、文字の基礎が改変されている事を意に留めることなく発生した文字の変化である。その鍵となるのは、文字を書く時の「筆画の順序」である。ある筆画の前後の改変が字の形状に影響を及ぼしている、墨跡文字以外で「誕生」し「製造」される文字は、常に「筆順」が無いか分かりづらい事が多い。

例えば、「無」字の隸書または楷書中の下部の四点は、火形であるが、実は二つの木形が重なっているものが変化してきており、中には二本の木（林形）に変化したものもあり、下部の六点は最後に四点に変わった。篆、

隸、楷の変遷は数千年の時間を経ており、異なる字体の間には伝承と密接な関係があり、はっきりと「どの時代」または「何年」から始まったのかというように分けることはできない。そのため、今回の考察の結果を整理し「表4・1・1 秦刻石と『説文』、商周、春秋戦国、秦漢文字比較表」を作成した。

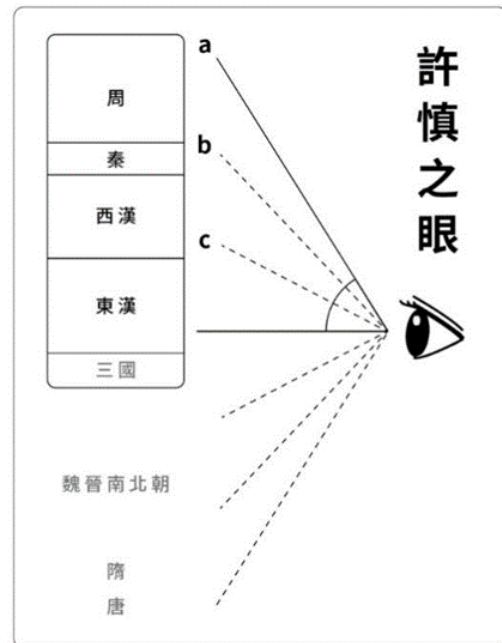
『説文』に全部で一五字の間違いがあり、完全に正確なものとは六字ある。しかし、このデータは実際の『説文』の誤字の比率を代表するものではなく、この数字は今回の考察の結果に過ぎない。『説文』と刻石両方が完全に正確なのは具、制、臨の三文字があった。間違いがあるものは一五の字例があり、これらの字頭と宋代石刻との比較を再度行う。これはもう一度形状を論証するわけではなく、その中から宋人のある篆字に対する理解が正確であるという事を見分けることが目的である。「表4・2・

1 『説文』と宋代石刻比較表」を本章の最後に付した。

許慎の視野⁶¹

許慎の生きた時代、漢人はすでに篆書を読むことができなかった、特に文字の結構の理解において認識できなかった。よって許慎は『説文』を事実の訂正の意味で編纂した。

後漢中晩期の許慎の生活や、伝わってきた文字や身近に見る事ができた文字はどの様な姿をしていたのかを想像してみるが、実際にどの様なものだったのか想像がつかない。しかし、近年出土した各時代の墨跡文字は、左図「許慎之眼」に表した「角度の高低」に拠り、許慎の古文字の認識の深さと資料収集の広さを知る事ができる。これが彼の「眼界角度」である。



秦簡		
𠄎	𠄎	𠄎
説文2		
𠄎	𠄎	𠄎
後漢簡		
𠄎	𠄎	𠄎
後漢碑		
𠄎	𠄎	𠄎

現在の『説文解字』の版本から、我々は a または b または c のどの角度なのか、どの線に関わらず、必ず水平

線以下になる事はない。

後漢文字の参考文献は『長沙五一廣場後漢簡牘選釋』、『長沙五一廣場後漢簡牘(壹)』⁶²、『長沙五一廣場後漢簡牘(貳)』である。後漢中期は『五一廣場後漢簡』の字形を表してある。徳は^德、^徳、^徳などに作り、受は^受に作り、平は^平に作り、番は^番に作り、恵は^恵に作り、達は^達に作る(以上字例は本章第一節を参照)。なお、習は^習に作り、在は^在、^在などに作り、留は^留に作り、劉は^劉、^劉などに作る。

啓功氏は『古代字體論稿』にいう。

「古代から今日までの各種の字体の変遷の過程と各時代の流派の変化は、字体史と書法史との範囲である」⁶³、「殷代の書は甲骨文字の刻契体と、金文の裝飾体があるが、これとは別に甲骨や玉に筆写された文字がある」⁶⁴、「殷代の文字から見ると、甲骨・玉片

・陶片上に朱或いは墨を用いて書かれた字は、全て同じ状況を有している。即ち筆画は弾力性を備えており、起筆部分と終筆部分はより尖っていて、中間の前寄りの部分は少し太く、毛筆書写の特徴を表している」⁶⁵

また横田恭三氏は『中国古代簡牘のすべて』にいう。

「中国古代における文字を記す材料には、金石・甲骨・竹木・縑帛・紙など複数の種類があり、それらは用途によって使い分けられていた。金石や甲骨は主として特別な内容を記す場合に用いられた材料であり、縑帛は高価なため、これらは日常の書写材料としては不向きであったと考えられる」⁶⁶

さらに杉村邦彦氏は『書學叢考』にいう。

「書法は、言うまでもなく中国で生まれ、悠久な歴史の中で育まれてきた独特の芸術である。その流れは日本や朝鮮など東アジアの漢字文化圏にも波及し、そ

それぞれの地域・民族において独自の発達を遂げてきた。これは世界の他の地域にはほとんど例を見ないことで、漢字文化圏に特有の重要な文化の一つであると言ってもよい。」⁶⁷

ある字は一つの書き方だけではなく、たとえ同じ時期のものでも様々な書き方があり、偏と旁も規則などはなく並行して進行している。果たして『説文』が収録している字例は唐宋または近代の常用字とどのくらい差異があるのか。やはり『説文』の内容に基づく必要がある、出土した墨跡文献と一字一字対比し考察しなければならぬ。所謂「対比」とは過去の研究者が『説文』の篆字とその他の字例を集めて、前後の変遷過程を分析したそれとは異なる。なぜなら『説文』は決して後漢の許慎の原跡の版本（仮に本当にこの資料があっても、保留する必要がある、全て信用できない、後漢と秦代の差は百年

余りあるからである）ではないからである。『説文』は完全に秦代の篆字を表しているわけではなく、「字形」の問題に留まらない。

林漢氏はかつて『古文字研究簡論』に、「今本当に危険なのは古文字を研究するものの知識が少ないと言うことではなく、古文字研究に道理の通らない方法を用いたりその博学をひけらかす事で、研究の手段や方法の根本的な間違いと古文字学そのものに対する極端な無知を引き起こし、古文字研究が大衆をあつと言わせて感心を買おうとしたり、人を脅かすための曲芸に変わってしまう。」⁶⁸ことであると述べている。

先人の論述と古人の文献の分析を除いて、もっとも根本となる基礎研究の内容を基礎とし、「引得市」の索引の便利性を通して、戦国から後漢の間の文字の変遷の過程を整理し演繹する必要がある。

稿者はかつて「夢」、「書」、「愛」、「前」、「季（年）」、「受」、「無」、「洞」、「衣」、「被」、「行」^{6,9}の字を用いて変遷過程の説明の字例とした。仮に「筆順」が文字変遷の論述の基礎にならないとしたら、上述の文字はどれも当てはまらない、よって、筆順が合致するかどうかを時代に基づいて配列すれば、必ず文字変遷の過程を得ることができる。この点は問題がないだろう。

「古文字変遷」の研究範囲と字例は、秦漢が主であり、前後七百年の墨跡文字を主とする。前の甲骨文字の時代には遡らず、南北朝の後の石刻文字にも下らない。実際にこの期間の文字を用い、どの字もこの方法で分類配列すれば、少なくとも秦漢の間の「漢字変遷史」が明瞭化するだろう。

第三節 識字書『蒼頡篇』の考察

一、前言

許慎『説文・叙』に「秦の始皇帝が初めて天下を統一すると、丞相李斯はそこでこれらを同じようにしようと奏上し、文字が秦のものに合致しないものを廃止した。李斯は『蒼頡篇』を作り、中車府令趙高は『爰歴篇』を作り、大史令胡毋敬は『博学篇』を作った。それらはみな史籀の大篆から取り、かなり省略改定したものである。」とある。

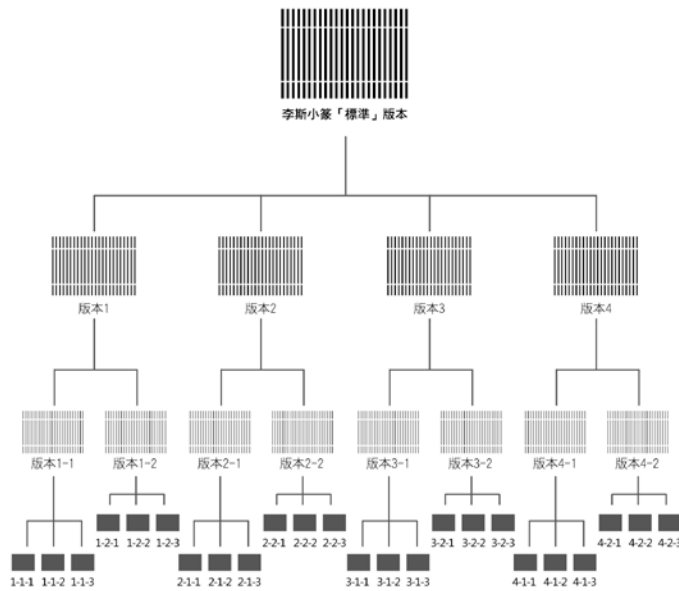
李斯が整理した『蒼頡篇』は「小篆」を使って書かれたもので、識字教授のテキストであり、当然文字を書く材質は当時入手しやすい「簡牘」を用いた。

現在、北京大学収蔵の前漢竹書『蒼頡篇』は、字例は鮮明で数量も最も多い漢代の教育の識字書である。時代は前漢早期で、北京大学出土文献研究所編、二〇一五年に公開出版された。簡牘整

理番号は79までで、各簡の字数は二十一字に至っている。『張家山漢簡』、『銀雀山漢簡』などの簡と同一時期であるが、学者は『張家山漢簡』より比較的後だと考えている。一部の字形は隸化の現象が見られ、よって考察の際は戦国文字と合わせて参照する必要がある。

稿者は、一般的に墨跡文字の相対する時期を考察する際、その字例の前後五十年を用いて判読する。よって字例は百年から二百年の寛容期となっている。『蒼頡篇』中の「無」、「歩」などの鍵となる字例を用いて字形を考察すると、確かに相応する時期がある。

今のところまだ秦代最古の版本『蒼頡篇』を見る事は出来ないが、この版本の『蒼頡篇』と秦代の差は五十年に満たない。字例の数量は膨大であり、秦漢文字の変遷と『説文解字』の篆形に関する考察は、極めて高い研究の参考価値を備えている。



識字書の傳抄



唐・說文木部殘卷

二、デジタル模本の応用

『蒼頡篇』と同時期の漢簡文字には明白な差異がある。或いはその目的は教育用の識字のテキストとしてなのか、識別度と合致性が求められる。よって稿者は、これはきつと何かの目的を以って設計、配置された文字の書き方（印面の配置に似ている）であると考えている。多くの文字が幅〇・九センチ、高さ約〇・七七センチの中に収められており、扁平な字塊を現している。秦漢簡牘の卒意性のある自然な書きぶりの特色には欠けてはいるが、慎重で沈穆な落ち着きのある風貌を残している。

本研究では、簡牘の図版を使用した以外に、「デジタル模本」を字形の結構の参考補助に使用した。模本作成方法は次のようにした。稿者が、六〇〇ppiの図を二〇〇%に拡大し、スクリーン上の視覚の比率については、元々の〇・九センチ幅の簡牘を十五センチ近くの大きさに拡大した。透明のトレーシングペーパーを用いて直接書籍の上から図版を模写する事ができ、正確さは高くな

いかも知れないが、字跡の筆順や文字を実際に書くときの効果を保つ事が出来る。パソコン上で模写した字跡は、直接様々な用途に使う事が出来る。例えば、五〇％に縮小して原寸の大きさに戻したり、拡大して六から九センチの幅にして毛筆書写用の手本とすることもできる。

古代の簡牘は狭く小さいため、墨跡文字の線の間が不鮮明であり、現代科学の赤外線の写真版であっても識別し難い場合があるが、「デジタル模本」のようなパソコンソフトであれば、正確に模写した後の結構を拡大する事ができ、補助参考に用いる事ができる。これも研究者が経験に基づいて判断した後の一つの研究成果であると言える。よって、「デジタル模本」は今後の古文字研究の補助としての価値と重要性が益々高まる可能性がある。



三、『蒼頡篇』の釈文

『北大藏前漢竹書蒼頡篇』の略称は『蒼頡篇』である。『蒼頡篇』の重複する字を除くと、実際の字数は一三〇一字で、釈文は以下の通りである。一枚簡牘の字数は二から二十二字の間、簡號は一から七十九まで、最多字数の簡牘番号は七十二号。

『蒼頡篇』の訳文中では、『説文』未收字は二十五字あり、『説文』未收字を除くと、実際の字数は一二七七字、で二百九十六種部首を含む。

部首順番は、木、艸、女、水、糸、言、貝、疒、宀、皀、人、犬、竹、邑、火、辵、心、手、土、鳥、門、頁、广、黑、金、肉、目、衣、走、支、白、隹、穴、虫、力、十、角、食、日、禾、巾、尸、馬、鹿、牛、口、欠、豸、雨、車…などである。

部首の数量の順番は、木部（68）、艸部（62）で、トップ五十では、数量は六十八から八までの間。（表4. 3. 3）釈文は以下の通りである。

簡號	釋文
1	祿 寬惠（惠）善志。桀紂迷惑，宗幽不識。取（最）（取）□ 肆宜（宜），□□獲得。
2	賔（賓）勦向尚，馮奕青北。係孫褒俗。猘鬻吉忌。瘳瘳癰 瘳。
3	疾痛遯（速）欬，毒（毒）藥醫工，抑（抑）按啟久。嬰但宿 援，何竭負戴。
4	谿谷阪險，丘陵故舊。長緩肆延，渙奂若思。勇猛剛毅。
5	便走巧亟（亟）。景桓昭穆，豐（豐）盈爨熾。嬾荅蝸黑 （黑），媿媿款餌。
6	戲叢奢掩，顛顛（願）重該。悉起臣僕，發傳約載。趣遽觀望 （望），
7	行步駕服。逋逃隱匿，往來眇眇。百五十二
8	漢 漢兼天下，海內并劇。胡舞（無）噍類，苴藍離異。戎翟 給寶，
9	兼 百越貢織。飭端脩（修）灋（法），變大制裁。男女蕃殖， 六畜逐字。
10	顛觥觥羸，飢隸左右。勢悍驕裾，誅罰貨耐。丹勝誤亂，

簡號	釋文
11	圉奪侵試。胡貉離絕，豕鬻（郭）棺柩。巴蜀筴竹，筐篋箴筍。
12	闕 闕錯蹇（蹇）葆，遑據趨等。祝虺隄闕，鈴鏘閏悝。騁虧劾柳，
13	錯 譎津（津）（斛）邱鄙。祁紉鐔幅，芒隰偏有。泫泫孃姪，鬚涕經泉。
14	鳴（鵬）（雕）煦宵閣，冷竊遏包。穗（穗）稍苦媵，挾貯施衷。狄署賦寶，
15	狃驚駭警。贛害輟感，甄穀燔窠。秬稊（秬）麻荅（荅），藝藜鞠□。
16	猜常袞土，橘蘇萸苞。塵埃襲（粟）（粟）風，髻鬢窈擾（擾）。婆歎媵媵，
17	爛爛范廐。帔屐裘褐，辭履幣袍。鷓決丹（冉）愁，雋讎□□。
18	饋媵鬪齶，齧繞黜勳。弄蔽（數）券契，筆研筭籌。鞠窳訐箭，
19	艦（陸）籥隘沙，遮遮沓詢。鑄（羣）鍵藁（藁）總，納輶戀（響）藁，葬（葬）（葵）墳鬚獫，
20	飶猷然稀，丈表牒膠。竊鮒鱗鱗，鱣鮪鯉鮓。慘犸瑜□，

簡號	釋文
21	扮羣狩羔。寃暑暖通，聖（坐）（聖）嚳（嚳）譴求。夢閭堪況，燎灼煎炮。
22	銳樹掇，營謨翮聊。
23	馨。級絢筮紆，
24	莎荔羣蔓，蓬蒿兼葭。微薛（薛）莪蔓，藟藜薊荼。齊芥萊菘，
25	茱與蓼蘇。果蔬茄蓮，栗栗瓠瓜。堅穀極繁，饒飽糞（糞）餘。
26	臍齋尼皖，餽餓餽舖。百廿八
27	幣 幣帛羞獻，請謁任辜。禮節揖讓，送客興居。雜離馱（馱）離，
28	帛 雉兔烏烏。雞雛芸卵，赫（赫）葦菘苳。貌獺颯殼，豨鮑颯狐。
29	蛟龍虫蛇，電鼉鼉魚。陷阱鋸釣，罾笱罟罟。毛鱗殼鱗，
30	收繳綦紆。汁泊流敗，蠹臭腑胆。貪欲資貨，菜溢歧輿。

簡號	釋文
31	頑柘槭師，鰥寡特孤。百廿八
32	悝 頽勃醉酤。越文窳突，差費飲（飲）酺。細小貧窶，气凶貫塗。
33	歎潘閒簡，鞞鼓（鼓）歌醪。盪娶裹嫫，鄭舞炊竽。嬰捐媿燼，
34	柳櫟檀柘，枉橈枝扶。瓦蓋焚櫂，晉溉輓杆。端直準繩，
35	媯噲菁華。姣窳娃娃，啜啗黎檀。粉臙脂膏，鏡籥比疏。
36	鬣髻鬚滅，須得髮膚。瘡熱疥厲，瘕瘳癩疽。旃翳笠笠，
37	羽扇轟譽。樗梗移棘，條篲樂禱。百一十二
38	獯廩。庶歎朕半，
39	密（崇）普（普）諫（諫）敦，讀飾柰（奈）璽。瘡斷痼痼，膩偽繁繁。淺汗盱復。
40	媯毘警媯，蠻馘趁恚。魁侈媯（姊）再，纂墨頓解。媯婢點媯，

簡號	釋文
41	瞽嬰媯媯，頽壤蠓虺，慮序茂謫。癘效媯臥，滌能媯趙。
42	齋 齋購件妖，兼樞杪柴。箬涎綺給，勸怖檇桂。某柘早蠶，
43	購 窳椅媯媯。戾弇焉宛，郤簞埒哇。伯媯謙榮，蠶繅展庫。
44	謁域邸造，殽穀朔耆。候（候）騎淳沮，決議篇稽。媯（媯）欺蒙期，
45	未旬隸（隸）（隸）（隸）氏。百冊（冊）四
46	顛 顛頊祝融，招搖奮光。顛豫（預）錄恢，徇隋愷襄。鄴鄧析鄴，
47	頊 宛鄂鄂鄴。閱鸞竈趨，滕先登慶。陳蔡宋衛，吳邗許莊。
48	建武牴觸，軍役嘉臧。貿易買販，市旅賈商。鯁展賁達，
49	游敖周章。黠廩黠黠，黠黠黠黠。黠黠赫赫，儼赤白黃。
50	殽棄臞瘦，兒孺早殤。恐懼懷歸，趨走病狂。疵疢禿瘦，

簡號	釋文
51	齟齬瘼傷。毆伐痼痼，朕朕曹盲。執囚束縛，論訊既詳。
52	卜筮卦占，崇在社場。寇賊盜殺，捕獄問諒。百卅六
53	室 室宇邑里，縣鄙封疆。徑路衝（衝）術，街巷垣牆。開閉門閭，
54	宇 闕廷廟郎。殿層屋內，窓（窗）牖戶房。桴楫棹櫂，柱枅橋梁。
55	屏囿廬廡，亭庑陸堂。庫府廡廡，囷窖廩倉。桶概參斗，
56	犀犛豺狼。貍狸麋豸，麤臯麇麇。鳴（鴻）鶴舅（勳）（晃）鴈，鳩鴉鴛鴦（鴛）。
57	陂沱（池）溝洫，淵泉隄防。江漢滄汾，河洑忍漳。伊雒涇渭，
58	維楫舩（船）方。百四
59	雲 雲雨霽零，霧露霏（雪）霜。朔時日月，星晨紀綱。冬寒夏（夏）暑，
60	兩 玄氣陰陽。杲旭宿尾，奎婁軫亢。弘競（競）翦眉，霸暨傅庚。

簡號	釋文
61	崑巒岑崩，阮嵬陀阮。阿尉駁瑣，漆鹵氐羌。贅拾鈇鎔，
62	鑄冶容鑲。顛祝歎豎，偃暈運糧。攻穿襜魯，壘鄣墜京。
63	□輪 畊（耕）畚貯箱。松柏樞械，桐梓杜楊。鬱（鬱）（鬱）棣桃李，棗杏榆棠（桑）。
64	藿葦菅葭（蒹），莞蒲蘭蔣。崑末根本，榮葉莠英。麋鹿熊羆，
65	□堯舜（舜），禹湯顓卨。趨蟹□□，
66	狗獮麕麋。媼齏媪……
67	鞏媼媼。魁鉅圓臚，與瀕庾請。百五十二
68	鴟 鴟鴞牝牡，雄雌俱鳴。屈寵趨（躍）急，邁徙覺驚。狎渫倭隸，
69	錐 頗科樹莖。禋禘姪娣，段藉合冥。蹀企瘞散（散），賴狃播耕。
70	鬻頤姿纖，媼媼眇靖。姑紫媼媼，訐斐竄斃。罪蟲訟卻，

路(路)、跛(跛)、疵(疵)、企(企)、露(露)、隄(隄)、疏(疏)の十二字。「止」に関する字例は、踝(踝)、趨(趨)、賦(賦)、武(武)の四字。「止」に関する字例は、疑(疑)の一字。

よって、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

て、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

て、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

て、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

て、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

て、戦国晩期の秦簡は、すでに今見ることのできる形体になっ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

る。訊(訊)、詳(詳)、諒(諒)、訐(訐)、訟(訟)の二十七字あ

から言うと、印刷が出来ない、金石文字のない拓本の時代では、簡牘上に書かれた識字書が教本文字であった、よってそれは時代の「標準」的性質を備えており、古代文字と書法変遷発展の中心母体である。⁷⁰と述べている。

すなわち、「識字書」は秦以来、古代の学童が識字する為の教科書であり、「実用」を考慮している為、使用された文字は必ず比較的頻繁に使われていた字例を使用している。もしこの観点に基づくならば、秦漢の間の数十万字の簡牘の中から、標準となる字形を見つけだせるかもしれない。













3 文字の形状に多くの変化

『蒼頡篇』の重要性は、最も完成された漢代の教育の識字書である以外に、戦国晩期から前漢前期までの文字の形状に多くの













変化が現れた事である。例えば、「崑」「婁」「力」などの字例がある。








『蒼頡篇』の「崑」に関する字例は、崑(崑)、顛(顛、顛)、端(端、端)、端(端)の四例。崑の形状の差異を「崑」と「崑」二種類に分けた。(表 4・3・4 『蒼頡篇』の「崑」と五種『説文解字』字形表を参照)










「崑」は、春秋晩期の『邾王牙又罈』はに作り、「義楚罈」はに作る。「端」は、戦国璽印はに作り、秦印はに作り、秦簡は、、、などに作り、『馬王堆簡帛』はに作り、『銀雀山漢簡』はに作り、『蒼頡篇』はに作る。「端」は、戦国璽印はに作る。「端」は、陶文はに作る。「端」は、秦簡は、に作る。「端」は、秦簡はに作り、『馬王堆簡帛』はに作る。「端」は『馬王堆簡帛』はに作る。以上の字例を見ると、戦国晩期から前漢早期まで、「崑」はに作り、『蒼頡篇』の「崑」と「崑」は「規整化」の現象である。






















「駕」は、春秋晩期の『石鼓文』はに作り、春秋晩期の『侯馬盟書』はに作り、秦簡は、、、、に作り、『馬王堆簡帛』はに作り、『銀雀山漢簡』は、、に作り、『蒼頡篇』はに作る。








「黝」は、戦国璽印は、に作り、『蒼頡篇』はに作る。

「男」は、西周早期の『矢令方彝』はに作り、春秋早期の『都公簠蓋』は作り、春秋中期の『郭公典盤』はに作り、春秋中期の『墜子鼎』はに作り、春秋晩期の『弔男父匜』はに作り、秦簡は、、、、に作り、『銀雀山漢簡』はに作り、『蒼頡篇』はに作る。

「勸」は、秦簡は、に作り、『馬王堆簡帛』は、に作り、『銀雀山漢簡』は、に作り、『蒼頡篇』はに作る。




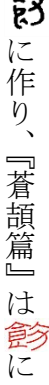

「勝」は、秦印は、、、に作り、秦簡は、に作り、『銀雀山漢簡』は、に作り、『蒼頡篇』はに作る。










「斲（徹）」は、戦国璽印は、に作り、『睡虎地秦簡』は、、、、、に作り、『關沮秦簡』は、、、、に作り、『馬王堆簡帛』は、、に作り、『銀雀山漢簡』はに作り、『張家山漢簡』は、、に作り、『蒼頡篇』はに作る。よって、多くの秦簡の斲（徹）は、「斲」と「徹」の二種類の形状であり、両者の差異は右下の「ㄣ」形だけである。

「勗」は、戦国璽印はに作り、『蒼頡篇』はに作る。「勢」は、秦簡は、に作り、『馬王堆簡帛』は、に作り、『蒼頡篇』はに作る。

「勇」は、春秋晩期の『中央勇矛』はに作り、秦簡はに作り、『馬王堆簡帛』は、に作り、『銀雀山漢簡』は、に作り、『蒼頡篇』はに作る。

「勃」は、秦印は、、に作り、『蒼頡篇』はに作る。





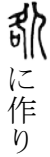



「飭」は、秦印はに作り、秦簡はに作り、『馬王堆簡帛』はに作り、『銀雀山漢簡』はに作り、『蒼頡篇』はに作る。





「効」は、秦簡は、、、、に作り、『蒼頡篇』はに作る。以上の字例を見ると、戦国晩期から前漢早期までは、『蒼頡篇』に力の様々な形状（、、）がはっきり見える。





4. 説文未收字

『蒼頡篇』には、『説文』未收字が三十七ある（12 處未釋字「口」を含む）。字数は二十五字で、「蒼、衰、鞠、鮒、謬、筮、繁、嫖、

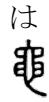










檠、殿、涎、肄、冊、竈、奠、忍、貯、棗、麤、錐、賴、衰、鹽、郝、鄧」である。

「蒼」は、『蒼頡篇』はに作り、秦印は、、に作る。「蒼」と「咎」は同じで、「咎」は、『説文』はに作り、商の『毓且丁貞』はに作り、戦国晩期の『十一年咎咎戈』はに作り、秦簡字はに作る。『蒼頡篇』と秦簡が篆書形体の事実であることがはっきり見える。

「鞠」は、『蒼頡篇』はに作り、秦簡は、、に作る。『睡虎地秦簡』、『嶽麓書院藏秦簡』両者の形状も同じで違くない。

「冊（冊）」は『蒼頡篇』はに作り、西周晩期の『冊三年遯鼎九』はに作り、秦簡字は、に作る。秦簡、『蒼頡篇』などの字例の形状と共通している。

「竈（竈）」は、『蒼頡篇』はに作り、西周中期の『彊伯作井姬鼎』はに作り、『石鼓文』はに作る。「睪」は、『説文』

はに作り、西周晩期の『甗壺蓋』はに作り、秦印はに作り、『西狹頌』はに作る。『蒼頡篇』では、他の字例に、繩、龜、鼃、鼈、鼉、鼈、鼈などがある。よって、『蒼頡篇』の「甗」の形状はまだ篆書である。

五、小結

『蒼頡篇』の重要性は、最も完成された漢代の教育の識字書であること以外に、戦国晩期から前漢前期までの文字の形状に多くの変化が現れた事である。考察した結論は四つある。

1. 戦国晩期から前漢前期までの文字の形状に多くの変化が現れ、篆隸変遷の軌跡を見られる。
2. 一部の字例は規整化する事がある。
3. 『説文解字』未收字がある。
4. 本研究以外の字例の形状は、深く研究する価値があり、さらに論究しなくてはならない。

第四節 「小篆」について

「小篆」というのは、戦国時代に秦で用いられた字体であることから、「秦篆」ともいう。許慎『説文解字』はこの字体に基づいて漢字を分析し解説したものである。

白川静氏は『説文新義 卷十五』にいう。

『説文』述作の目的は、許叙に坊間の字説が孔氏の古文に合わず、字例の條をえないものであるから、「將に以て群類を理し、謬誤を解き、學ぶ者に曉にし、神旨を達する」というにあつた。すなわち古文の正しさを、文字學の體系を通じて證明しようとしたのである⁷¹。許慎『説文・叙』に「秦の始皇帝が初めて天下を統一すると、丞相李斯はそこでこれらを同じようにしようと奏上し、文字が秦のものに合致しないものを廃止した。李斯は『蒼頡篇』を作り、中車府令趙高は

『爰歴篇』を作り、大史令胡毋敬は『博学篇』を作った。それらはみな史籀の大篆から取り、かなり省略改定したものである。所謂小篆というのがそれである」とあり、これに対して「それらはみな史籀の大篆から取り、かなり省略改定したものである」⁷²との見解を示す学者もいる。⁷³

基本的にこの意見を否定するわけではない。また、李斯の整理した『蒼頡篇』は「篆書」を用いて書かれている。識字の為の教科書であり、もちろん書写材料は当時簡単に手に入れる事のできた「簡牘」である。

秦代の字に関して、郭沫若は『古代文字之辯證的發展』にいう。

このような文字の教科書は初期の頃はおそらく篆書によって書かれていたはずで、秦代の小篆を用いていたであろう。⁷⁴

裘錫圭氏は『文字學概要』にいう。

『説文』と三体石経の残石の古文は戦国文字を研究する上で重要な資料である。古文経書はもともとどれも簡冊の上に書かれていた。よって、このような古文は簡帛文字であるが、何度も書き写しされているため、いくつかの間違ひがある事は否めない。⁷⁵

しかし、現在、学者の多くは「小篆」が簡帛上に存在するということを未だ承認していない。承認しないのは、許慎が述べている「李斯は『蒼頡篇』を作り……所謂小篆というのがそれである」を否定するのと同じではないだろうか。しかし、そのような事を論述した文章は未だに見たことがない。

十年余の秦国の時代には、四万枚近くの簡牘『里耶秦簡』⁷⁶が出土しており、これは「小篆」が「簡牘」上に存在する事実を無視している。未だに多くの研究者が「小

篆」が辿った足跡を探している。例えば、連蔚勤『秦漢篆文形體比較研究』の博士論文において次のように述べている。

時代を限定するのは容易だが、小篆を探すのは困難である。小篆は何処に存在するのか、全面的な調査が必要であり、なるべく多くの篆形の収集、対象の十分な分析、前文の三項目が重要な鍵となる。⁷⁷

また、『秦漢篆文形體比較研究』にいう。

古人及び先人の学者達はみな、小篆と言えば、秦の刻石であるとすぐに連想する。この秦の刻石は、一方で、その内容から秦の始皇帝が天下の重要な思想を公表する内容のものであり、もう一方で、小篆が十分に整っているため、「書同文字」のモデルとなったのである。しかし、上述したように、秦小篆は刻石上のみならず、全ての銅器、貨幣、璽印、陶器上に存在するし、秦刻石の篆形が

最も整っているとしても、秦代貨幣の半両錢上の篆形は刻石の文字と非常に似通っている。よって秦篆を述べるには、他の書写材料上の小篆を含めて全体を観察する必要がある。⁷⁸

しかし、さらに探す必要はない、もし、「小篆」が簡牘上に存在する事実を認めなければ、永遠に「小篆」を探し出す事は出来ないだろう。

李均明氏は『古代簡牘』に次のように述べている。

篆書は簡牘でよく見る字体である。篆書は本来秦系統の文字の正体であり、大篆と小篆に分けられる。代表的な大篆は石鼓文であり、小篆は秦統一後の刻石、詔版、虎符等である。『説文』は最も豊富な篆書の資料集であるが、書が完成したのが後漢中期で、ある字形は秦篆と全て一致するわけではない。今日見る事のできる簡牘文字は未だ全篇を見ることができない石鼓文、秦刻石、『説文』

と完全に共通している、多くはただ間架結構が共通しているだけで、用筆の進行方向は平直で、基本的には篆隸の過渡期の字体である。秦簡及び違う年代の漢簡を見ると、篆書から隸書に変わる過渡は一つのしだいに化する過程であり、ある字の変化は速く、ある字は遅い。前漢中晩期以後、単純な篆書は簡牘の中には多く見られなくなつた、しかし、印章、旌幡上には普遍的に使われていた、しかしこの時期の篆書は多かれ少なかれ隸書または草書の結構の影響を受けており、既に秦篆の元の姿から離れ、人々はさらにそれを芸術的な字体に変えていった。⁷⁹

現在発見されている、もつとも古い識字の教科書は、一九七七年に阜陽縣双古堆一号漢墓で『阜陽漢簡』が発掘された際に、発見された。秦の始皇帝と同じ名前を避けるための「飭端修法」の句があり、当時はまだ漢人に

よつて改定される前の冊子である⁸⁰。

李学勤氏は次のように述べている。

一九七七年に出土した安徽阜陽双古堆一号墓竹簡。この墓は汝陰侯夏侯灶墓だと推定されている。彼は漢の文帝十五年（紀元前一六五年）に没した。数十種の書も含んでおり、もつとも重要なのは『詩経』と『蒼頡篇』で、後者の書体は篆書である⁸¹。

李学勤氏はまた次のように述べている。

隸書の流行は特に注目する価値がある。隸書の発生は、その字体の筆勢の様々な特徴をふくんでいる。たしかに戦国時代の秦国文字から探し出す事ができるが、隸書は便利なため、煩雑な政府の事務には普遍的に使用され、政府公認の字体となり、確かに秦代の初めである。秦から漢初の書籍も隸書によつて書き写されており、既に廃止された古文字を書く事に困難を要する篆書に取つて代

わった 820。

もし、「篆書」のように書くことが難しいのならなぜ先に発明して後に廃止し、改良して「隸書」に取って代わったのか。これは道理に合わない。漢代早期の『阜陽漢簡・蒼頡篇』は「篆書」である。そうすると、それより更に古い簡牘文字も篆書という事になる。しかし、『里耶秦簡』、『雲夢龍崗秦簡』、『睡虎地秦簡』、更に戦国中期『青川木牘』等の秦文字は「古隸」と呼ばれている。もし、秦から漢初にかけて、既に学者が書くことが難しいとしている「篆書」が廃止されたのなら、なぜ秦代四十年余の時間と離れているのか。またなぜ「篆書」を用いた識字の教科書が使われたのか。

戦国時代から秦漢の間に出土した簡牘文字の資料を整理する上で、鍵となる字形を挙げて比較を行い、筆で書いた「簡牘墨跡文字」は字形があつて初めて歴史が伝承さ

れた」の論点を証明した。それだけではなく、『阜陽漢簡・蒼頡篇』の中から、「門」、「閉」、「開」、「戸」、「房」、「橋」、「黄」、「当」、「実」の九字を選んで字例の参照を行った。(表 4・4・1 『阜陽漢簡・蒼頡篇』門、閉、開などの字例表を参照) ⁸²¹このような字例表の整理は『秦小篆・蒼頡篇』が「どの様な形をしているのか」については言うまでもない。

林進忠氏は『古代文字書法製作背景的综合研究例』に次のように述べている。

筆書文字は当時の文字の母体の真の姿であり、金石文字の骨組みと筆書文字が書かれた時と同じで、その時の文字の「用途」である。金石文字の骨組みは筆で文字が書かれた時と同じであり、その整理され装飾化された字の容貌の原因は、特定の目的で文字造形の芸術理念によ

つて金石の工芸製作時に表現された。それはその時期の文字の「変」である。筆墨書と金石刻鑄の二種の文字の本質は本来違うものであり、感慨深いものである。∴「文字」を語る時にあらゆる文字資料を一緒くたにして語ることができない。「書法」についてのみを語るときは、簡牘帛紙の毛筆書法と金石単刀刻書の硬筆書法の両方を含むことができる。しかし、筆書文字は文字と書法変遷の唯一の中心母体の事実の下、「毛筆書法」、「字体変遷」を語る時、筆で書いた文字から離れた実証、論述の結果は、信憑性に欠けることが多い。 84

墨跡文字（甲類）

- ・ 文字の「変遷伝承」の特性を備えている
- ・ 本当の当時の文字の字形または、字相を表している。
- ・ 広範囲に広まり次第に認められ自然に発生した字体。
- ・ 筆により書かれた文字。

非墨跡文字（乙類）

- ・ 文字の「変遷伝承」の特性を備えているとは限らない。
- ・ 本当の当時の文字の字形または、字相を表すことはできない。
- ・ 一定の規則と造形の無い字体。
- ・ 鑿、刻劃、鑄造等の方法によつて形成された文字。



魯孝王刻石



萊子侯刻石

現存する最古の隸書の石刻は前漢宣帝五鳳二年の『魯

孝王刻石』(B. C 56)及び新莽三年の『萊子侯刻石』(A. D 16)

である。この類の文字は本文の分類の「乙²⁻¹類」に属し、この類の文字を時代の前後の順番に配列したが、そこから正確な文字の変化の過程を得ることはできない。なぜなら、この類の文字の発展には一定の規則がなく、墨跡文字と同じように書写の伝承の要素からその文字を制限していないからである。製作者が使用した文字は自由に發揮する事ができ、当時の人々が使った文字である必要がなく、例えば前漢の『群臣上齶刻石』(B. C 158)の字体は篆書で、碑刻のこれらの文字と我々が知っている古文字伝承の発展は直接関係があるわけでは無く、文字芸術の発展の一つとして捉える事しかできず、この類の文字を用いて「篆書」の変遷を分析するのは好ましくは無い。



群臣上齶刻石

林進忠氏は『漢簡識字書在文字與書法史上的重要意義—秦簡文字為秦篆說』で

「横式波磔を持つ八分隸書は、前漢中期の成熟し普及し始める時期である事に気づく事ができた。前漢末期に書者はみな既に安定した典型的な八分隸書を書く事ができ、後漢碑刻の隸書の字体と同じであり、二者の間には約二百年の差がある。現物は史実であり、八分隸書は誰かが「造った」わけではなく、長期の変遷により広範に広まったもので、文字と書法発展の事実

は簡牘にあり、金石の碑版にあるわけでは無い。」⁸⁵ 研究者は居延、武威漢簡の造形が扁平で左右横に向かつて伸び、曲線が多いのは「隸書」を参照しているからで、それは職人が碑石上に設計し規整化した文字が原因であり、元々の字の容貌を見ておらず、既に変化した設計文字は「元々の」字の形から離れている。それは現代の文字と書法界の共通の間違った認識である。

林進忠氏は『楚系簡帛墨跡文字的書法探析』に次のように述べている。

筆を用いて書いた墨跡である漢初の漢帛を、秦代刻石等の規整化された金石刻鑄文字と比較すると、筆意に伝承性が備わっていないのは必然であるが、もし『青川木牘』（B. C 309年）と筆跡が相似する所があると考えて、それを「秦隸」と呼ぶならば、『包山楚簡』（約 B. C 323 ~ B. C 292

年）にも類似する所があり、また隸意もあると認めらば、殷商、西周の筆を用いて書いた墨跡をすべて隸書と呼んでもおかしくは無い。もしそうであるならば、隸法の原則についての制限がなくなり、古代「毛筆書写」の文字は篆書でないものが形成されたことになるので、篆書の時代の文字が筆で書く以外にどのように存在し伝達されたのかを問いたくなる。⁸⁶

銭存訓氏は『書於竹帛——中國古代的文字記錄』に次のように述べている

古簡上の字体の違いは、その書かれた時代及びその重要性を見て違いがわかる。蔡邕は『独断』において、重要な文章は篆書で竹簡に書かれ、次に重要なものは隸書で木牘に書かれた。三世紀末、楷書は既に流行していたが、六世紀の政府の冊はやはり篆書で書くように命じら

れていた。このように伝統の字体を用いて重要な文書を書く習慣は、古今東西を問わず歴史上おおよそ同じであり、長い期間使われていた。孔安国古文『尚書』序説によれば、古文『尚書』は隸書によって古文を竹簡に写し書きされた。例えば漢代の六経は当時流行した隸書により写し書きされたとされ、大きな差はない。ここから発見した古簡の書写字体から観察すると楚簡はみな篆書で書かれており、秦簡は隸書主体である。漢簡は既に篆、隸を兼ねているが、隸字が多い、これは古代書体の変遷の過程の一部分だといえよう。⁸⁷

蔡邕（132—192）は許慎（58—147）の後、後漢中晩期まで活躍した。許慎の生きた時代は、漢人はどうに篆書を読むことができなかった、特に文字の結構の理解において認識できなかった。よって許慎は『説文解字』を事実の訂正の意味で編纂した。その当時「篆」と「隸」を識

別する事のできない社会背景の中で、蔡邕はその論の正確性について存疑せざるを得なかった。文字の変遷の単一的な発展、秦漢簡牘文字から見ると、秦と先秦以前の筆で書かれた文字、簡牘上に書かれた文字はやはり篆書であり、秦の時代は短く、文字の伝承、変遷もまたゆっくりとして次第に変化する状況の中で、前漢中期の文字にも篆書の余韻が残っている。これも理にかなった現象である。

「筆」で書かれた文字は、実際に当時使用された文字の状況を反映することができ、これらの筆跡簡帛の媒体は「書籍」の性質を備え、識字教育、法律、政令の公布、思想伝達等の効用を備えている。そのほかに、鑿、鋳などの方法で作られた金石器物文字の用途は、占いや、記事、徳行と功績を褒め称える等の目的で使われる事が多い。この二種類の文字は実用と応用の違いである。

秦代刻石文字及び秦詔の刻鑄文字は、篆法の基本文字資料の研究の参考であり、同時に漢代の碑碣刻石の数は少なくなく、現存する状態のいい貴重な文字資料の一つである。碑文および碑額で最も重要なのは篆書および隸書であり、文字結構、筆勢は篆隸のどちらにもあり、「隸化」の発展の中から、漢代の風貌が、自然と発生した。書法の風韻もまた先秦の文字と差が出てきた。

両漢の時代に日常的に応用された文書では、既に篆書は用いられなかったが、碑額等には普遍的に装飾として使われていた。漢代の応用的な篆文は、既に毛筆による書写用筆の制限がなく、多種多様な文字の造形芸術を表現するように変わっていった。漢代の碑刻の篆隸文字は東周の鳥蟲篆のような美しくモダンなもの比べると、それほどではないが、東周及び秦代の一般的によく見ることのできる均整化された金石篆文は、いかに綺麗に整っ

ているかが良いとされ、漢碑文字は線質と体勢の多い方、風味奇殊などにより、却って人の目を奪い、鑑賞研究の興味をそそるものである。⋮

とはいえ、秦簡墨跡文字は秦筆書法の真の姿であり、戦国晩期の秦文字は一種のみであり、異なる材質の文字の間で文字の結構上二種の字体の差異は構成されておらず、文字の使用上の観点から言えば、二種の字体は別々に独立せず、並行して使用された。事実上、筆写墨跡の秦文字はその当時、唯一使用された字体である、「秦篆」は書写の真実の姿であり、それは漢初の「古隸」の母体となった。秦代刻石文字は規整化された装飾性を備えた秦篆文字であり、春秋戦国時代の列国金文の一部分は規整化された装飾性を備えた文字の例であり、古代文字芸術発展の一種の美術文字である。⋮

稿者は、秦簡出土の簡牘墨跡文字と向き合う時、研究者

は再度「小篆」、「篆書」の本当の姿はどのようなものなのかを考える必要があると考えている。

今まで学界で「隸変」を討論する上で、研究者は『説文』小篆の外形と後漢の碑刻文字のみを用いて比較し、前後の時代の墨跡文字を用いて論証を行ってこなかった。これは非常に残念な事である。本節はこの不足部分を補い、更に最古の甲骨金文の字例を用いて文字の本義の解析を行った。

戦国時代から後漢、魏晋南北朝までの残されてきた墨跡文字から、字形の改変は緩慢かつ一定の条理があり、その中には文字を書く者が故意に「特別」の字形を書いたことがわかった。しかし、その他は文字を書く（転写）者が故意に書いてはいない。「特別」または「故意」に書かれた字形、字体は常に文字の海に埋もれてしまい、文字が伝承されるとは限らない。なぜ「繰り返し返しの転写」

が、文字改変の重要な原因となるのか。それはすでに多くの字例を用いて実証して来た。稿者は、厳格かつ詳細な対比、考察、修正の後に、『説文解字』の存在価値と学界で使用される意義が明瞭になると考えている。

表 4・1・1 秦刻石と『説文』、商周、春秋戦国、秦漢文字比較表

no	字號	字頭	説文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戦国	商周文字
1	0003	天						
2	0006	上						
3	0007	帝						
4	0009	下						
5	0020	福						
6	0025	神						
7	0067	禍					X	X
8	0071	禁					X	X
9	0077	三						
10	0078	王						

1

no	字號	字頭	説文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戦国	商周文字
11	0080	皇						
12	0147	理					X	X
13	0198	琅					X	
14	0226	士						
15	0231	中						
16	0241	莊						X
17	0527	茲						
18	0547	荒					X	X
19	0586	蓋						X

2

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
20	0649	蒙	蒙	蒙蒙蒙			X	X
21	0701	莫	莫	莫莫莫				
22	0707	八	八	八八八				
23	0708	分	分	分分分				
24	0717	必	必	必必必				
25	0721	審	審	審審審				X
26	0726	叛	叛				X	X
27	0727	牛	牛	牛牛牛				
28	0770	物	物	物物物			X	

3

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
29	0835	名	名	名名名			X	
30	0839	命	命	命命命				
31	0845	和	和	和和和				X
32	0871	咸	咸	咸咸咸				
33	0876	周	周	周周周				
34	0932	各	各	各各各				
35	0933	否*	否	否				
36	1016	起	起	起起起				X
37	1029	趙	趙	趙趙趙				
38	1063	止	止	止止止				

4

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
39	1068	前	𠂔	𠂔 𠂔 𠂔			X	
40	1078	登	登 登	登 登 登	登	登		
41	1082	此	此	此 此 此		此		
42	1088	是	是 是	是 是 是				
43	1092	迹(跡)	迹 迹 迹	迹 迹 迹	迹		X	
44	1107	遵	遵		遵		X	X
45	1109	過	過	過 過 過			X	
46	1123	逆	逆	逆 逆 逆		逆		
47	1133	通	通	通 通 通				
48	1137	運*	運	運 運	運		X	X

5

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
49	1162	達	達 達	達 達 達	達		X	
50	1173	遺	遺	遺 遺 遺	遺			
51	1174	遂	遂 遂	遂 遂				
52	1175	逃*	逃	逃 逃 逃			X	X
53	1176	追	追	追 追 追		追 ₂		
54	1179	近	近 近	近 近 近	近		X	X
55	1183	邇	邇 邇				X	X
56	1197	遠	遠 遠	遠 遠 遠	遠 ₃	遠 ₂		
57	1204	道	道 道	道 道 道	道	道		
58	1208	邊	邊	邊 邊 邊			X	

6

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
59	1223	德	德	德德德	德	德 ₂		
60	1225	復	復	復復復	/	復		
61	1249	後	後德	後復後	後 ₂	後		
62	1253	得	得彙	得得得	得	/		
63	1257	御	御駟	御御御	御	御		
64	1262	建	建	建建建	建	建		
65	1265	行	行	行行行	行	/		
66	1340	踰*	踰	踰	/	/	X	X
67	1429	嗣*	嗣嗣	嗣	嗣 ₂	嗣 ₂		

7

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
68	1436	器	器	器器器	/	/		
69	1457	古	古殿	古古	/	古		
70	1461	千	千	千千千	/	/	X	
71	1466	廿	廿	廿廿廿	廿	廿		
72	1468	卅	卅	卅卅卅	/	/		
73	1469	世*	世	世世	/	世 ₄		
74	1470	言	言	言言言	言	言		
75	1478	請	請	請請請	請 ₂	請 ₂	X	X
76	1484	諸	諸	諸請諸	/	/	X	
77	1488	誦*	誦	誦誦	/	誦	X	X

8

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
78	1491	訓	訓				X	
79	1503	謀	謀	謀 謀 謀			X	X
80	1508	議	議	議 議 議				X
81	1519	信	信	信 信 信				
82	1521	誠	誠	誠 誠 誠			X	X
83	1526	詔	詔	詔 詔 詔				X
84	1558	設	設	設 設			X	X
85	1614	悖(諱)	悖				X	
86	1665	詐*	詐	詐 詐 詐			X	X
87	1705	誅*	誅	誅 誅 誅			X	

9

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
88	1706	討	討				X	X
89	1728	善	善	善 善 善				
90	1735	章	章	章 章 章				
91	1742	業*	業	業 業 業				
92	1749	奉*	奉	奉 奉 奉				
93	1750	丞	丞	丞 丞 丞				
94	1761	兵	兵	兵 兵 兵				
95	1764	貝	貝	貝 貝 貝				
96	1770	異	異	異 異 異				

10

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
97	1774	與						
98	1775	興						
99	1779	農					X	
100	1783	革					X	
101	1874	為						
102	1900	父						
103	1910	及						
104	1911	秉*						

11

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
105	1922	度					X	
106	1924	卑*						
107	1925	史						
108	1926	事						
109	1931	肅*						
110	1935	書						
111	1936	畫					X	
112	1945	臣						
113	1968	殺						

12

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
114	1977	專*					X	
115	1997	故						
116	2003	數						X
117	2026	攸*						
118	2031	敦						X
119	2035	寇						
120	2064	教*						
121	2069	貞						
122	2074	用						
123	2154	相						

13

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
124	2211	省					X	
125	2215	白						
126	2217	白						
127	2218	皆						
128	2220	者						
129	2222	智						
130	2231	習*						
131	2285	離						
132	2315	舊*						
133	2343	羣(羣)						X

14

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
134	2478	於						X
135	2482	畢						
136	2495	惠*						
137	2509	受						
138	2511	爭					X	
139	2514	敢						
140	2524	歿*					X	X
141	2540	殃					X	X
142	2541	殘*					X	X
143	2542	殄*					X	X

15

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
144	2549	殖*					X	X
145	2552	死						
146	2557	別(剛)					X	
147	2577	體(體)*					X	X
148	2675	脩						X
149	2740	利						
150	2742	初						
151	2744	則						
152	2753	刻					X	
153	2760	列					X	

16

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
154	2784	制*	制	制制制	制 ₂	制		
155	2789	刑	刑	刑刑刑				
156	2839	解	解	解解解				
157	2865	節	節	節節節				X
158	2916	箸*	箸	箸箸箸	箸	箸	X	X
159	3003	其	其 其 其 其	其其其	其	其		
160	3015	式	式	式式式			X	X
161	3027	日	日	日日日	日 ₂	日 ₂		
162	3034	乃	乃	乃乃乃		乃 ₂		

17

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
163	3039	寧	寧	寧寧寧				
164	3041	可	可	可可可	可	可		
165	3051	號	號	號號號		號 ₂		
166	3052	于	于	于于于	于	于		
167	3056	平	平	平平平	平			X
168	3066	嘉	嘉	嘉嘉嘉				
169	3099	虐	虐				X	
170	3125	盛	盛	盛盛盛		盛		
171	3141	盡	盡	盡盡盡	盡	盡		

18

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
172	3149	去	去	去去去				
173	3152	血	血	血血血				
174	3182	既*	既	既既既				
175	3254	合	合	合合合				
176	3257	今	今	今今今				
177	3259	會	會	會會會				
178	3265	內	內	內內內				
179	3296	侯(侯)	侯	侯侯侯				
180	3300	知*	知	知知知				
181	3301	矣	矣	矣矣矣				X

19

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
182	3303	高	高	高高高				
183	3324	良	良	良良良				
184	3331	來	來	來來來				
185	3350	致	致	致致致				
186	3351	憂	憂	憂憂憂			X	
187	3356	夏	夏	夏夏夏				
188	3392	久	久	久久久				X
189	3408	李	李	李李李				

20

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
190	3495	楊	楊	𣎵 楊 楊				
191	3544	本	本	𣎵 本 本			X	X
192	3549	末	末	末 末 末				X
193	3573	樛	樛	樛 樛				X
194	3609	極*	極	極 極 極				X
195	3745	樂	樂	樂 樂 樂				
196	3799	休	休	休 休 休				
197	3801	械	械				X	X
198	3828	東	東	東 東 東				
199	3830	林*	林	林 林 林				

21

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
200	3831	無	無	無 無 無				
201	3843	之	之	之 之 之				
202	3857	南	南	南 南 南				
203	3860	產	產	產 產 產				X
204	3873	稽	稽	稽 稽 稽			X	
205	3899	國*	國	國 國 國				
206	3906	因	因	因 因 因				
207	3928	賁*	賁	賁 賁 賁				X
208	3947	負	負	負 負 負			X	X
209	3963	賤	賤	賤 賤 賤				X

22

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
210	3965	貪*	貪	貪貪貪			X	
211	3975	貴	貴	貴貴貴	賈			X
212	3987	邦	邦	邦邦邦		邦		
213	3988	郡	郡	郡郡郡				X
214	4130	邪(那)	邪	邪邪邪				X
215	4168	鄉	鄉	鄉鄉鄉				
216	4170	日	日	日日日	日	日		
217	4172	時	時	時時時		時		X
218	4175	昧*	昧	昧昧昧	昧 ₂	昧		
219	4178	昭*	昭	昭昭昭	昭		X	X

23

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
220	4218	昌	昌	昌昌昌				
221	4231	昔	昔	昔昔昔		昔		
222	4235	昆*	昆	昆昆昆	昆			
223	4237	普	普				X	X
224	4260	朝	朝	朝朝朝				
225	4291	月	月	月月月				
226	4301	有	有	有有有		有		
227	4304	明	明	明明明	明 ₄	明 ₂		
228	4308	夕	夕	夕夕夕				
229	4309	夜	夜	夜夜夜	夜			

24

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
230	4314	外	外外	𠂇𠂇𠂇	𠂇			
231	4315	夙	夙夙	夙夙	夙			
232	4334	齊	齊	齊齊				
233	4409	康*	康	康康		康		
234	4421	年	年	年年	年	年		
235	4431	秦	秦	秦秦				
236	4432	稱	稱	稱稱	稱 ₂	稱 ₃		
237	4434	程	程	程程				X
238	4443	兼	兼	兼兼				
239	4450	黎*	黎	黎黎	黎			X

25

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
240	4535	家	家	家家		家		
241	4538	宣*	宣	宣宣	宣			
242	4545	宇	宇	宇宇				
243	4555	定	定	定定		定		
244	4557	安	安	安安				
245	4562	察*	察	察察			X	X
246	4563	親	親		親	親	X	
247	4565	富	富	富富				X
248	4566	實	實	實實				
249	4568	容	容	容容				X

26

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
250	4575	守	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎				
251	4578	宜	宜 𠄎 𠄎	宜 宜 宜				
252	4589	寄	寄	寄 寄 寄			X	X
253	4594	害	害	害 害 害				
254	4602	宗	宗	宗 宗 宗				
255	4611	躬*	躬 躬	躬				
256	4652	窮	窮	窮 窮 窮				X
257	4665	寐	寐				X	
258	4674	疾	疾 疾 疾	疾 疾 疾				

27

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
259	4780	同	同	同 同 同				
260	4847	常	常 常	常 常 常				X
261	4876	飾*	飾	飾 飾 飾			X	X
262	4926	人	人	人 人 人				
263	4928	保	保 保 保	保 保 保				
264	4929	仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁				X
265	4943	伯*	伯	伯 伯				
266	5014	倫*	倫	倫			X	X
267	5030	傾	傾				X	X

28

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
268	5051	作	𠄎	𠄎𠄎𠄎	𠄎	𠄎		
269	5052	假	假	𠄎𠄎𠄎			X	X
270	5054	侵*	侵	𠄎𠄎				
271	5064	任	任	任任任				
272	5072	俗	俗	俗俗俗				
273	5076	使	使	使使使				
274	5091	倍	倍	倍倍倍			X	X
275	5142	伐	伐	伐伐伐		伐		
276	5192	化*	化	化化化	化			

29

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
277	5203	從	從	從從從	從	從		
278	5204	并	并	并并并	并			
279	5207	北	北	北北北				
280	5213	眾(衆)	眾	眾眾眾				
281	5221	量	量	量量量				
282	5224	臨	臨	臨臨臨	臨			
283	5226	身	身	身身身				
284	5236	表	表	表表表			X	X
285	5248	襲	襲	襲襲襲		襲	X	

30

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
286	5299	被*	解					X
287	5336	卒	宀					
288	5359	考	耂					
289	5360	孝	耂					
290	5412	舟*	舟					
291	5428	方	方					
292	5460	覽	覽				X	X
293	5510	欣	欣					
294	5558	次	次					
295	5560	欺*	欺					X

31

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
296	5624	順*	順					
297	5662	顯	顯					
298	5673	首	首					
299	5677	縣	縣					
300	5695	文	文					
301	5749	令	令					
302	5767	卿	卿					
303	5768	辟	辟					
304	5790	敬	敬					

32

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
305	5791	鬼	鬼魂					
306	5819	山	山					
307	5824	嶧	嶧				X	X
308	5844	密	密					
309	5909	廣	廣					
310	5918	廉	廉				X	X
311	5935	廟	廟				X	
312	5980	石	石					
313	6038	長	長					

33

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
314	6045	而	而					
315	6055	猥	猥				X	
316	6103	易	易					
317	6106	馬	馬					
318	6142	驕*	驕					X
319	6144	驩*	驩					X
320	6145	驗	驗				X	X
321	6172	馮	馮					X
322	6228	薦	薦					
323	6229	法	法					

34

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
324	6311	猛*	猛	猛 猛 猛			X	X
325	6322	戾*	戾	戾 戾 戾			X	X
326	6332	獻	獻	獻 獻 獻				
327	6341	猶*	猶	猶 猶 猶				
328	6379	能	能	能 能 能				
329	6393	烈	烈				X	
330	6419	熄	熄				X	X
331	6464	照	照				X	
332	6477	光*	光 光 光	光 光 光				
333	6528	黔	黔	黔 黔 黔				X

35

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
334	6564	大	大	大 大 大				
335	6609	壹	壹	壹 壹 壹				X
336	6624	暴	暴	暴 暴 暴			X	
337	6641	夫	夫	夫 夫 夫				
338	6644	立*	立	立 立 立				
339	6647	端	6647	端 端 端				X
340	6663	並*	並	並 並 並				
341	6668	思*	思	思 思 思				X
342	6670	心	心	心 心 心				

36

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
343	6672	情*	情				X	X
344	6674	志	志					X
345	6675	意	意					X
346	6678	應	應					
347	6679	慎	慎					
348	6680	忠	忠					X
349	6686	念*	念					
350	6765	恤	恤					X

37

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
351	6803	怠*	怠					X
352	6812	恣	恣				X	X
353	6948	水	水					
354	7036	淨	淨				X	X
355	7053	治	治					X
356	7096	海*	海					
357	7165	清*	清					X
358	7185	澤*	澤					X
359	7186	淫*	淫				X	X
360	7188	洑	洑				X	X

38

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
361	7201	沙						
362	7383	濯*						X
363	7390	泰						X
364	7404	滅(威)*						
365	7436	流*						X
366	7437	涉*						
367	7456	原						
368	7658	靡						X
369	7666	不						

39

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
370	7668	至						
371	7674	西						
372	7682	戶						
373	7716	開*						X
374	7722	問(閒)						
375	7763	聖						
376	7765	聽						
377	7767	職*						X
378	7800	揖*					X	X

40

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
379	7859	擇	擇	擇 擇 擇				
380	7874	承*	承	承 承 承				
381	7882	撫*	撫	撫 撫			X	X
382	7919	舉	舉	舉 舉 舉				X
383	7988	搏	搏				X	X
384	8069	女	女	女 女 女				
385	8085	嫁	嫁	嫁 嫁			X	X
386	8089	妻	妻	妻 妻 妻				
387	8099	母	母	母 母 母				

41

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
388	8105	威*	威	威 威 威				
389	8142	始*	始	始 始 始				
390	8203	如	如	如 如 如				
391	8219	嬰	嬰	嬰 嬰 嬰				X
392	8306	姦*	姦	姦 姦 姦			X	
393	8314	毋	毋	毋 毋 毋				
394	8325	也	也	也 也 也				
395	8334	戎*	戎	戎 戎 戎				
396	8339	賊	賊	賊 賊 賊				
397	8341	戰	戰	戰 戰 戰				X

42

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
398	8344	域	或域					
399	8344	或	或	或或或				
400	8354	武	巷	武武武				
401	8361	義	義義	義義義				
402	8369	直	直	直直直				
403	8370	亡	亡	亡亡亡				
404	8385	匡*	匡	匡匡匡				
405	8448	疆*	疆	疆疆疆				
406	8488	經*	經	經經經				
407	8498	紀*	紀	紀紀紀				X

43

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
408	8517	紉	紉	紉紉紉			X	X
409	8546	終	終	終終終				
410	8576	綰	綰	綰綰綰				
411	8660	維*	維	維維維				
412	8664	繫*	繫	繫				
413	8711	繫	繫	繫繫繫			X	X
414	8740 1275	率(衛)	率	率率率				
415	8781	強	強	強強強				X
416	8932	風	風	風風風			X	
417	8970	恆	恆	恆恆恆				

44

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
418	8974	土	土	之土土	/	土 ₂		
419	8975	地*	地陸	地地地	/	/		
420	9021	在	在	左左左	/	在	在	在
421	9029	封	封圭杜	封封封	/	/	封	封
422	9036	城	城城城	城城城	/	/	城	城
423	9122	里	里	里里里	/	/	里	里
424	9124	野	野野野	野野野	/	野	野	野
425	9145	略*	略	略略略	/	略	X	X
426	9146	當	當	當當當	/	/	當	X
427	9162	男	男	男男男	男	/	男	男

45

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
428	9165	力	力	力力力	/	/	力	力
429	9167	功*	功	功功功	功	功 ₂	X	X
430	9172	務	務	務務務	/	/	X	X
431	9178	勉*	勉	勉勉勉	/	/	勉	X
432	9186	動*	動	動動動	/	動	X	動
433	9189	勞	勞	勞勞勞	/	/	勞	勞
434	9195	勤*	勤	勤	/	/	X	勤
435	9202	飭*	飭	飭飭飭	/	/	X	X
436	9213	金	金	金金金	金 ₃	金 ₃	金	金
437	9281	錯*	錯	錯錯錯	/	/	錯	X

46

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
438	9411	銘	銘					X
439	9435	所	所	𠄎𠄎𠄎				X
440	9436	斯*	斯	斯斯斯				
441	9478	輿*	輿	輿輿輿				X
442	9489	軌	軌				X	X
443	9521	載	載	載載載				X
444	9534	軌*	軌	軌				X
445	9571	陵	陵	陵陵陵				
446	9574	陰	陰	陰陰陰				
447	9586	隗	隗	隗				X

47

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
448	9600	降*	降	降降降				
449	9603	陲(陀)	陲	陲陲陲			X	
450	9609	防	防					X
451	9618	隔*	隔	隔			X	X
452	9620	隱*	隱	隱隱隱				X
453	9639	陳	陳	陳陳陳				
454	9643	除	除	除除除				X
455	9656	陞*	陞	陞			X	X
456	9671	四	四	四四四				
457	9678	五	五	五五五				

48

no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
458	9679	六						
459	9680	七						
460	9686	萬						
461	9692	甲						
462	9695	亂*						
463	9699	戊						
464	9700	成						
465	9708	臯					X	X
466	9711	辭						
	9712							

49


















no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
467	9717	子						
468	9720	字						
469	9729	存					X	X
470	9731	疑						
471	9748	巳					X	X
472	9749	以						
473	9752	未						
474	9831	尊*						
475	9833	亥						
476	x	傲	X					

50












no	字號	字頭	說文	秦簡	泰山刻石	嶧山刻石	春秋戰國	商周文字
477	x	燭	X				X	X

表 4.2.1 『說文』と宋代石刻比較表

no	字頭	說文	宋代石刻					
1	與							
2	鬼							
3	于							
4	平							
5	戒							
6	并							

no	字頭	說文	宋代石刻				
7	達	 宋徐夔元碑（即大）題誌 銘	 夢英篆書千字文				
8	邊	 謝性字銘					
9	章	 文宣王贊碑	 回山王母宮頌	 夢英篆書千字文	 穆氏先登表	 穆暹墓表	 五藏刻石
10	審	 夢英篆書千字文					
11	德	 文宣王贊碑	 文宣王贊碑	 陳孔碩碑字銘	 陳孔碩碑字銘	 五藏刻石	 勃興頌
12	專						

2

no	字頭	說文	宋代石刻				
13	惠		 野史亭詩刻	 夢英篆書千字文	 廣惠行祠記	 擬惠休上人詩	
14	數	 勃興頌	 陰符經刻石				
15	受		 回山王母宮頌	 勃興頌	 夢英篆書千字文		

3

表 4.3.1 北京大学收藏の『蒼頡篇』（七〇％に縮小）

1	祿	寬	惠(惠)	善	志	桀	紂	迷	惑	宗	幽
	祿	寬	惠	善	志	桀	紂	迷	惑	宗	幽
2	賔	賔	勛	向	尚	馮	奕	青	北	係	孫
	賔	賔	勛	向	尚	馮	奕	青	北	係	孫
3	疾	痛	速	速	效	毒	毒	藥	醫	工	抑
	疾	痛	速	速	效	毒	毒	藥	醫	工	抑
4	谿	谷	阪	險	丘	陵	故	舊	長	緩	
	谿	谷	阪	險	丘	陵	故	舊	長	緩	

不	識	取	最
不	識	取	最
肆	宜	宜	
肆	宜	宜	
獲	得		
獲	得		
不	識	取	最
不	識	取	最
肆	宜	宜	
肆	宜	宜	
獲	得		
獲	得		

便 走 巧 馭(馭) 景 桓 昭 穆 豐(豐) 盈

便 走 巧 馭 景 桓 昭 穆 豐 盈

戲 叢 奢 掩 顛 顛(顛) 重 該 悉 起

戲 叢 奢 掩 顛 顛 重 該 悉 起

行 步 駕 服 逋 逃 隱 匿 往 來

行 步 駕 服 逋 逃 隱 匿 往 來

漢 兼 天 下 海 內 并 廁 胡 蕞

漢 兼 天 下 海 內 并 廁 胡 蕞

爨 熾 嬾 蒼 娟 黑 媿 媿 款 餌

爨 熾 嬾 蒼 娟 黑 媿 媿 款 餌

臣 僕 發 傳 約 載 趣 遽 觀 望(望)

臣 僕 發 傳 約 載 趣 遽 觀 望

眇 眇 百 五 十 二

眇 眇 百 五 十 二

噍 類 渣 鹽 離 異 戎 翟 給 賈

噍 類 渣 鹽 離 異 戎 翟 給 賈

兼 兼
百 百
越 越
貢 貢
織 織
飭 飭
端 端
脩(修) 脩(修)
灋(法) 灋(法)
變 變
大 大

兼 百 越 貢 織 飭 端 脩 灋 變 大

顛 顛
觭 觭
觭 觭
贏 贏
馱 馱
斐 斐
左 左
右 右
務 務
悍 悍

顛 觭 觭 贏 馱 斐 左 右 務 悍

圍 圍
奪 奪
侵 侵
試 試
胡 胡
貉 貉
離 離
絕 絕
豕 豕
豈(郭) 豈(郭)

圍 奪 侵 試 胡 貉 離 絕 豕 豈

闊 闊
闊 闊
錯 錯
蹇(蹇) 蹇(蹇)
葆 葆
定 定
據 據
越 越
等 等
稅 稅
尫 尫

闊 錯 蹇 葆 定 據 越 等 稅 尫

制 制
裁 裁
男 男
女 女
蕃 蕃
殖 殖
六 六
畜 畜
逐 逐
字 字

制 裁 男 女 蕃 殖 六 畜 逐 字

驕 驕
裾 裾
誅 誅
罰 罰
賞 賞
耐 耐
丹 丹
勝 勝
誤 誤
亂 亂

驕 裾 誅 罰 賞 耐 丹 勝 誤 亂

棺 棺
樞 樞
巴 巴
蜀 蜀
荼 荼
竹 竹
筐 筐
篋 篋
籛 籛
筍 筍

棺 樞 巴 蜀 荼 竹 筐 篋 籛 筍

隲 隲
闔 闔
鈐 鈐
鑄 鑄
閏 閏
隄 隄
騁 騁
虧 虧
効 効
柳 柳

隲 闔 鈐 鑄 閏 隄 騁 虧 効 柳

錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯

錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯
錯 錯

14 鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴

鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴
鳴 鳴

15 狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃

狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃
狃 狃

16 猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜

猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜
猜 猜

偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏

偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏
偏 偏

苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦

苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦
苦 苦

燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔

燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔
燔 燔

興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興

興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興
興 興

媚 媚
嫺 嫺
范 范
塵 塵
幟 幟
棧 棧
裘 裘
褐 褐
齟 齟
躩 躩

媚
嫺
范
塵
幟
棧
裘
褐
齟
躩

龔 龔
媵 媵
齟 齟
齧 齧
齧 齧
黜 黜
黜 黜
勦 勦
弄 弄
斃 斃
(斃數)

龔
媵
齟
齧
齧
黜
黜
勦
弄
斃
(斃數)

嗟 嗟
簫 簫
陞 陞
沙 沙
遮 遮
泄 泄
沓 沓
詢 詢
鐸 鐸
牽 牽
鍵 鍵

嗟
簫
陞
沙
遮
泄
沓
詢
鐸
牽
鍵

飶 飶
飶 飶
然 然
稀 稀
丈 丈
表 表
牒 牒
膠 膠
竊 竊
鮒 鮒

飶
飶
然
稀
丈
表
牒
膠
竊
鮒

幣 幣
袍 袍
鵠 鵠
決 決
丹 丹
(丹) 愁
雋 雋
讎 讎

幣
袍
鵠
決
丹
(丹) 愁
雋
讎

幣
袍
鵠
決
丹
(丹) 愁
雋
讎

券 券
契 契
筆 筆
研 研
筭 筭
籌 籌
鞠 鞠
竅 竅
訐 訐
箭 箭

券
契
筆
研
筭
籌
鞠
竅
訐
箭

券
契
筆
研
筭
籌
鞠
竅
訐
箭

藝 藝
紕 紕
納 納
輶 輶
戀 戀
(戀) 囊
葬 葬
墳 墳
彙 彙
獫 獫

藝
紕
納
輶
戀
(戀) 囊
葬
墳
彙
獫

藝
紕
納
輶
戀
(戀) 囊
葬
墳
彙
獫

鯽 鯽
鱗 鱗
鱣 鱣
鮪 鮪
鯉 鯉
鮪 鮪
慘 慘
柎 柎
輸 輸
口 口

鯽
鱗
鱣
鮪
鯉
鮪
慘
柎
輸
口

鯽
鱗
鱣
鮪
鯉
鮪
慘
柎
輸
口

粉 粉
 擎 擎
 矜 矜
 羔 羔
 寃 寃
 譽 譽
 暖 暖
 通 通
 聖(坐) 聖(坐)
 嬰(卷) 嬰(卷)

說 說
 斟 斟
 掇 掇

說 說
 斟 斟
 掇 掇

莎 莎
 荔 荔
 草 草
 蔓 蔓
 蓬 蓬
 蒿 蒿
 蒹 蒹
 葭 葭
 薇 薇
 薛(薛) 薛(薛)

護 護
 求 求
 寥 寥
 閭 閭
 堪 堪
 況 況
 燎 燎
 灼 灼
 煎 煎
 炮 炮

營 營
 讓 讓
 翮 翮
 聊 聊

馨 馨
 級 級
 紉 紉
 筮 筮
 緝 緝

莪 莪
 萋 萋
 藎 藎
 藜 藜
 薊 薊
 荼 荼
 薺 薺
 芥 芥
 萊 萊
 荏 荏

25

菜 與 蓼 蘇 果 菰 茄 蓮 菜 栗

菜 申 蕪 蕪 果 茄 蓮 菜 栗

26

肝 齋 尼 皖 餛 餛 餛 餅

肝 齋 尼 皖 餛 餛 餛 餅

27

幣 幣 帛 羞 獻 請 謁 任 辜 禮 節

幣 幣 帛 羞 獻 請 謁 任 辜 禮 節

28

帛 雄 兔 鳥 烏 雞 雞 芸 卯 赫(赫) 董

帛 雄 兔 鳥 烏 雞 雞 芸 卯 赫(赫) 董

瓠 瓜 堅 穀 極 繁 饒 飽 糞(糞) 餘

瓠 瓜 堅 穀 極 繁 饒 飽 糞(糞) 餘

瓠 瓜 堅 穀 極 繁 饒 飽 糞(糞) 餘

百廿八

百廿八

百廿八

揖 讓 送 客 興 居 雜 誰 駭(爲) 誰

揖 讓 送 客 興 居 雜 誰 駭(爲) 誰

揖 讓 送 客 興 居 雜 誰 駭(爲) 誰

莖 菹 獮 獮 颯 穀 豸 鮑 韶 狐

莖 菹 獮 獮 颯 穀 豸 鮑 韶 狐

莖 菹 獮 獮 颯 穀 豸 鮑 韶 狐

29

蛟 龍 虫 蛇 龜 鼈 魚 陷 阱

蛟 龍 虫 蛇 龜 鼈 魚 陷 阱

30

收 繳 縈 紆 汁 洎 流 敗 蠹 臭

收 繳 縈 紆 汁 洎 流 敗 蠹 臭

31

頑 頑 械 師 鰥 寡 特 孤

頑 頑 械 師 鰥 寡 特 孤

32

惛 頽 頽 勃 醉 酤 越 文 窳 窳 差 費

惛 頽 頽 勃 醉 酤 越 文 窳 窳 差 費

錯 鈞 罽 筍 罽 罽 罽 罽 罽 罽

錯 鈞 罽 筍 罽 罽 罽 罽 罽 罽

錯 鈞 罽 筍 罽 罽 罽 罽 罽 罽

腑 胆 貪 欲 資 貨 兼 溢 歧 輿

腑 胆 貪 欲 資 貨 兼 溢 歧 輿

腑 胆 貪 欲 資 貨 兼 溢 歧 輿

百廿八

百廿八

百廿八

飲 飲 醜 細 小 貧 婁 乞 貫 揅

飲 飲 醜 細 小 貧 婁 乞 貫 揅

飲 飲 醜 細 小 貧 婁 乞 貫 揅

歌 潘 閒 簡 聲 鼓 歌 醞 盪 娶

柳 櫟 檀 柘 枉 橈 枝 扶 瓦 蓋

柳 櫟 檀 柘 枉 橈 枝 扶 瓦 蓋

媯 噲 菁 華 姣 窈 娃 媿 暇 啗

媯 噲 菁 華 姣 窈 娃 媿 暇 啗

髤 髤 鬪 搷 須 髻 膚 瘰 熱

髤 髤 鬪 搷 須 髻 膚 瘰 熱

裏 嫫 鄭 舞 炊 竿 嬰 捐 媿 媿

裏 嫫 鄭 舞 炊 竿 嬰 捐 媿 媿

焚 榜 晉 漑 輓 杆 端 直 準 纒

焚 榜 晉 漑 輓 杆 端 直 準 纒

黎 檀 粉 臙 脂 膏 鏡 籥 比 疏

黎 檀 粉 臙 脂 膏 鏡 籥 比 疏

疥 厲 瘕 瘕 癰 疽 疥 翳 笠 笠

疥 厲 瘕 瘕 癰 疽 疥 翳 笠 笠

疥 厲 瘕 瘕 癰 疽 疥 翳 笠 笠

羽	扇	轟	譽	榑	梗	移	棘	條	篲
羽	扇	轟	譽	榑	梗	移	棘	條	篲
羽	扇	轟	譽	榑	梗	移	棘	條	篲

獯	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩
獯	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩
獯	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩	麩

窳	普	諫	敦	讀	飾	柰	奈	壘	瘡	斷
窳	普	諫	敦	讀	飾	柰	奈	壘	瘡	斷
窳	普	諫	敦	讀	飾	柰	奈	壘	瘡	斷

姤	般	轡	姝	蠻	鹹	趁	恚	魁	侈
姤	般	轡	姝	蠻	鹹	趁	恚	魁	侈
姤	般	轡	姝	蠻	鹹	趁	恚	魁	侈

纒	禪	百	一	十	二
纒	禪	百	一	十	二
纒	禪	百	一	十	二

瘡	痲	臧	偽	檠	檠	淺	汗	肝	復
瘡	痲	臧	偽	檠	檠	淺	汗	肝	復
瘡	痲	臧	偽	檠	檠	淺	汗	肝	復

媯	再	輦	輦	輦	解	媯	媯	媯	媯
媯	再	輦	輦	輦	解	媯	媯	媯	媯
媯	再	輦	輦	輦	解	媯	媯	媯	媯

45

未 旬 繇 氏

未 旬 繇 氏

未 旬 繇 氏

百 卅 卅 四

百 卅 卅 四

百 卅 卅 四

46

顛 顛 頊 祝 融 招 搖 奮 光 頹 豫

顛 顛 頊 祝 融 招 搖 奮 光 頹 豫

顛 顛 頊 祝 融 招 搖 奮 光 頹 豫

錄 恢 徇 隋 愷 襄 鄴 鄧 析 鄺

錄 恢 徇 隋 愷 襄 鄴 鄧 析 鄺

錄 恢 徇 隋 愷 襄 鄴 鄧 析 鄺

47

頊 宛 鄂 鄂 鄴 閱 擲 竈 趨 滕 先

頊 宛 鄂 鄂 鄴 閱 擲 竈 趨 滕 先

頊 宛 鄂 鄂 鄴 閱 擲 竈 趨 滕 先

登 慶 陳 蔡 宋 衛 吳 邗 許 莊

登 慶 陳 蔡 宋 衛 吳 邗 許 莊

登 慶 陳 蔡 宋 衛 吳 邗 許 莊

48

建 武 抵 觸 軍 役 嘉 臧 貿 易

建 武 抵 觸 軍 役 嘉 臧 貿 易

建 武 抵 觸 軍 役 嘉 臧 貿 易

買 販 市 旅 賈 商 鯁 展 賁 達

買 販 市 旅 賈 商 鯁 展 賁 達

買 販 市 旅 賈 商 鯁 展 賁 達

游 游 游
敖 敖 敖
周 周 周
章 章 章
黠 黠 黠
麤 麤 麤
黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠

游 敖 周 章 黠 麤 黠 黠 黠

殓 殓 殓
棄 棄 棄
臞 臞 臞
瘦 瘦 瘦
兒 兒 兒
孺 孺 孺
早 早 早
殤 殤 殤
恐 恐 恐
懼 懼 懼

殓 棄 臞 瘦 兒 孺 早 殤 恐 懼

齟 齟 齟
齟 齟 齟
瘳 瘳 瘳
瘳 瘳 瘳
毆 毆 毆
伐 伐 伐
痕 痕 痕
瘡 瘡 瘡
疥 疥 疥
疥 疥 疥
疥 疥 疥

齟 瘳 瘳 瘳 瘳 瘳 瘳 瘳 瘳 瘳

卜 卜 卜
筮 筮 筮
卦 卦 卦
占 占 占
崇 崇 崇
在 在 在
社 社 社
場 場 場
寇 寇 寇
賊 賊 賊

卜 筮 卦 占 崇 在 社 場 寇 賊

黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠
黠 黠 黠
儻 儻 儻
赤 赤 赤
白 白 白
黃 黃 黃

黠 黠 黠 黠 黠 黠 黠 黠 儻 赤 白 黃

懷 懷 懷
歸 歸 歸
趨 趨 趨
走 走 走
病 病 病
狂 狂 狂
疵 疵 疵
疖 疖 疖
疔 疔 疔
疔 疔 疔
瘰 瘰 瘰

懷 歸 趨 走 病 狂 疵 疖 疔 瘰

瞽 瞽 瞽
瞽 瞽 瞽
執 執 執
囚 囚 囚
束 束 束
縛 縛 縛
論 論 論
訊 訊 訊
訊 訊 訊
訊 訊 訊

瞽 執 囚 束 縛 論 訊 訊 訊 訊

盜 盜 盜
殺 殺 殺
捕 捕 捕
獄 獄 獄
問 問 問
諒 諒 諒
百 百 百
卅 卅 卅
六 六 六

盜 殺 捕 獄 問 諒 百 卅 六

53

室 室 宇 邑 里 縣 鄙 封 疆 徑 路

室 室 宇 邑 里 縣 鄙 封 疆 徑 路

54

宇 闕 廷 廟 郎 殿 層 屋 內 窓(窗) 牖

宇 闕 廷 廟 郎 殿 層 屋 內 窓(窗) 牖

55

屏 園 廬 廡 亭 庀 陞 堂 庫 府

屏 園 廬 廡 亭 庀 陞 堂 庫 府

56

犀 犛 豺 狼 豸 狸 狸 麋 麋 豸 麋 麋

犀 犛 豺 狼 豸 狸 狸 麋 麋 豸 麋 麋

53

衝(衝) 術 街 巷 垣 牆 闕 閉 門 閭

衝 術 街 巷 垣 牆 闕 閉 門 閭

54

戶 房 桴 楫 棹 楫 柱 枅 橋 梁

戶 房 桴 楫 棹 楫 柱 枅 橋 梁

55

廡 廡 困 窖 廩 倉 桶 概 參 斗

廡 廡 困 窖 廩 倉 桶 概 參 斗

56

鷹 鷹 鳴 鷓 鷓 鷹 鷓 鷓 鷓 鷓 鷓

鷹 鷹 鳴 鷓 鷓 鷹 鷓 鷓 鷓 鷓 鷓

57

陂 沱池溝
漚 漚
淵 淵
泉 泉
隄 隄
防 防
江 江
漢 漢

陂 沱池溝
漚 漚
淵 淵
泉 泉
隄 隄
防 防
江 江
漢 漢

58

維 楫
維 楫
舩(船) 舩
方 方

維 楫
維 楫
舩(船) 舩
方 方

59

雲 雲
雨 雨
實 實
零 零
霰 霰
露 露
露 露
霜 霜
朔 朔
時 時

雲 雲
雨 雨
實 實
零 零
霰 霰
露 露
露 露
霜 霜
朔 朔
時 時

60

雨 玄
氣 氣
陰 陰
陽 陽
杲 杲
旭 旭
宿 宿
尾 尾
奎 奎
婁 婁

雨 玄
氣 氣
陰 陰
陽 陽
杲 杲
旭 旭
宿 宿
尾 尾
奎 奎
婁 婁

61

澮 澮
汾 汾
河 河
沛 沛
忍 忍
漳 漳
伊 伊
維 維
涇 涇
渭 渭

澮 澮
汾 汾
河 河
沛 沛
忍 忍
漳 漳
伊 伊
維 維
涇 涇
渭 渭

62

百 四
百 四
百 四

百 四
百 四
百 四

63

日 日
月 月
星 星
晨 晨
紀 紀
綱 綱
冬 冬
寒 寒
憂(夏) 憂(夏)
暑 暑

日 日
月 月
星 星
晨 晨
紀 紀
綱 綱
冬 冬
寒 寒
憂(夏) 憂(夏)
暑 暑

64

軫 軫
亢 亢
弘 弘
競(競) 競(競)
翦 翦
眉 眉
霸 霸
暨 暨
傳 傳
庚 庚

軫 軫
亢 亢
弘 弘
競(競) 競(競)
翦 翦
眉 眉
霸 霸
暨 暨
傳 傳
庚 庚

惟 頤 科 樹 莖 裡 裡 精 姪 娣 段 藉
 惟 頤 科 樹 莖 裡 裡 精 姪 娣 段 藉
 惟 頤 科 樹 莖 裡 裡 精 姪 娣 段 藉

娶 頤 娑 嬖 媼 媵 媵 媵 媵 媵 媵 媵
 娶 頤 娑 嬖 媼 媵 媵 媵 媵 媵 媵 媵
 娶 頤 娑 嬖 媼 媵 媵 媵 媵 媵 媵 媵

曹 疑 醋 圍 袞 緜 糾 緝 律 丸
 曹 疑 醋 圍 袞 緜 糾 緝 律 丸
 曹 疑 醋 圍 袞 緜 糾 緝 律 丸

蕪 火 燭 熒 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼
 蕪 火 燭 熒 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼
 蕪 火 燭 熒 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼

合 冥 踝 企 瘡 散 賴 狃 播 耕
 合 冥 踝 企 瘡 散 賴 狃 播 耕
 合 冥 踝 企 瘡 散 賴 狃 播 耕

媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼
 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼
 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼 媼

亢 戍 闔 踐 蠹 杙 截 絞 熱 楸
 亢 戍 闔 踐 蠹 杙 截 絞 熱 楸
 亢 戍 闔 踐 蠹 杙 截 絞 熱 楸

姪 樊 厥 媼 秩 秩 私 鹽 救 醒 百 廿
 姪 樊 厥 媼 秩 秩 私 鹽 救 醒 百 廿
 姪 樊 厥 媼 秩 秩 私 鹽 救 醒 百 廿

76



郡
邊

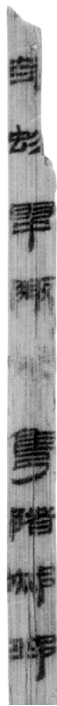
75



陝
郵
□

74

73



隼
階
邨
鄧



院
關
關
局
增
增
專
斯

79



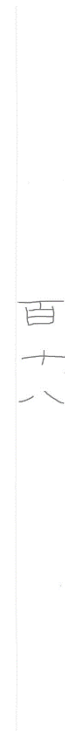
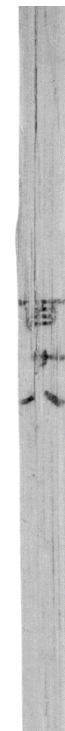
□
□
益 (鬱)

78

77



□
奕 奕
寗 寗
司 司
責 責
責



百
十
八



□
渠 渠
波 波
水 水

表 4・3・2 『蒼頡篇』の『説文』未收字

蒼頡篇		秦系文字	商周文字	簡號	字例	No.
	蒼		☒	05_14	蒼	1.
	衷	☒	☒	14_16	衷	2.
	鞫		☒	18_17	鞫	3.
	鮒	☒	☒	20_16	鮒	4.
	嬰	☒	☒	22_05	嬰	5.

蒼頡篇		秦系文字	商周文字	簡號	字例	No.
	筮	☒	☒	23_04	筮	6.
	縿	☒	☒	25_16	縿	7.
	嫫	☒	☒	33_12	嫫	8.
	檠	☒	☒	39_16	檠	9.
	𪔐	☒	☒	40_02	𪔐	10.

蒼頡篇		秦系文字	商周文字	簡號	字例	No.
		☒	☒	42_11	涎	11.
		☒	☒	44_05	肄	12.
				45_06	卅 (卅)	13.
				47_08	竈 (竈)	14.
				56_10	奠	15.

蒼頡篇		秦系文字	商周文字	簡號	字例	No.
		☒	☒	57_15	忍	16.
		☒	☒	63_04	杼	17.
		☒	☒	63_15	杼	18.
		☒	☒	66_03	麤	19.
		☒	☒	68_03 69_01	隼	20.

排行	部首	數量	字例
19	480 土	17	土、埃、塹(塹)、墳、壘(坐)(聖)、堪、壘、壤、埤、在、場、封、垣、堂、壘、墜、增
20	119 鳥	16	鵠、駮(鸞)、鳥、雉、鴛、鳩(鴻)、鴿、鴈、鳩、鴉、鴛、鴉(鴛)、鴉、鴉、鳴、雉
21	438 門	16	闕、闕、闕、闕、闕、闕、闕、闕、門、闕、闕、闕、闕、闕、闕、闕
22	324 頁	15	顛、顛(顛)、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛、顛
23	353 广	15	廟、腑、慮、序、茂、庫、廟、廬、廡、庑、庫、府、庑、庑、庑
24	384 黑	15	黑(黑)、黠、臘、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠、黠
25	490 金	15	錯、鈐、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯、錯
26	135 肉	14	胡、脩(修)、胡、膠、胆、脂、膏、膚、膩、陶、臘、肤、肤、散(散)
27	099 目	13	眇、眇、眇(眇)(眇)、眇、眇、眇、眇、眇、眇、眇、眇、眇、眇、眇
28	300 衣	13	袞、裁、裾、袞、袞、袞、袞、袞、袞、袞、袞、袞、袞、袞
29	026 走	12	起、趣、越、越、越、越、越、越、越、越、越、越
30	092 支	12	啟、故、變、駮(數)、收、敗、鼓(鼓)、教、效、寇、攻、救

排行	部首	數量	字例
31	104 白	12	百、百、百、百、百、百、百、百、魯、百、百、百
32	109 隹	12	隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹、隹
33	272 穴	11	窳、窳、窳、窳、窳、窳、窳、窳、窳、窳、窳
34	471 虫	11	蝸、蜀、虺、蠃、蛟、虫、蠻、蠃、蠃、蠃
35	488 力	10	勦、勇、飭、勦、勝、勦、勦、勦、勦、勦
36	054 十	9	十、丈、肸、廿、廿、十、十、廿、十
37	142 角	9	觥、觥、觥、觥、觥、觥、觥、觥、觥
38	180 食	9	飮、餽、餽、餽、餽、餽、餽、餽、餽
39	231 日	9	景、昭、晉(善)、早、早、時、日、暑、旭
40	253 禾	9	穆、穗(穗)、稂、秬、秬(秬)、稀、科、秩、私
41	281 巾	9	幅、常、帛、帛、幣、幣、幣、幣、飾
42	305 尸	9	尼、居、展、展、展、屋、屏、眉、屈
43	370 馬	9	馮、駕、驕、驕、駮、駮、駮、駮、駮
44	372 鹿	9	鹿、麋、麋、麋、麋、麋、麋、麋、麋

排行	部首	數量	字例
45	019牛	8	慘、犛、特、牴、犀、犖、牝、牡
46	022口	8	吉、噍、右、嗜、啜、啗、局、問
47	320欠	8	欸、欸、欲、歎、歌、歎、欺、歎
48	366豸	8	貉、貔、貙(貂)、獬、豺、貔、狸、豺
49	422雨	8	雨、質、零、霰、露、霖(雪)、霜、雨
50	498車	8	載、輟、輦、墨、輶、軍、軫、輪

字號	卷	部首	簡號	字類	圖示	j大徐	l大徐	d小徐	g大徐	b小徐
4518	卷七下	尚部	64_09	崑						
5627	卷九上	頁部	46_01	顛						
5627	卷九上	頁部	46_02	顛						
6647	卷十下	立部	09_07	端						
6647	卷十下	立部	34_17	端						
9158	卷十三下	黃部	66_06	黠						







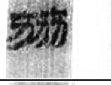






















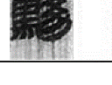





表 4・3・4 『蒼頡篇』の「崑」と五種『説文解字』字形表

表 4・3・5 『蒼頡篇』の「婁」と五種『説文解字』字形表

字號	卷	部首	簡號	字頭	蒼頡篇		J大徐	g大徐	i大徐	d小徐	b小徐
0377	卷一下	艸部	24_12	婁							
2003	卷三下	支部	18_10	𦍋 (數)							
2917	卷五上	竹部	43_11	篋							
4591	卷七下	宀部	32_17	婁							
4704	卷七下	疒部	50_20	癩							

字號	卷	部首	簡號	字頭	蒼頡篇		J大徐	g大徐	i大徐	d小徐	b小徐
5146	卷八上	人部	68_20	𠄎							
5407	卷八下	履部	17_10	屨							
8281	卷十二 下	女部	60_11	婁							

表 4・3・6 『蒼頡篇』の「力」と五種『説文解字』字形表

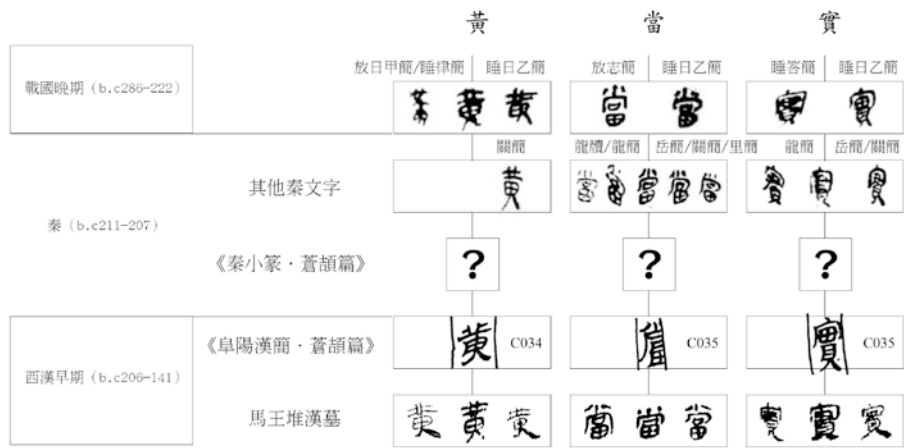
字號	卷	部首	簡號	字頭	圖示	j大徐	i大徐	d小徐	g大徐	b小徐
0432	卷一下	艸部	25_07	茄	 					
0648	卷一下	艸部	24_02	荔	 					
1972	卷三下	儿部	56_15	勇 (勳) (兇)	 					
3066	卷五上	豆部	48_07	嘉	 					
6157	卷五上	馬部	07_03	駕	 					
6519	卷五上	馬部	49_10	駟	 					

字號	卷	部首	簡號	字頭	圖示	j大徐	i大徐	d小徐	g大徐	b小徐
9162	卷十三下	男部	09_14	男	 					
9181	卷十三下	力部	42_14	勸	 					
9182	卷十三下	力部	10_18	勝	 					
9183	卷十三下	力部	47_07	勸(徹)	 					
9184	卷十三下	力部	18_08	勸	 					
9193	卷十三下	力部	02_02	勸	 					

字號	卷	部首	簡號	字類	圖示	j 大徐	i 大徐	d 小徐	g 大徐	b 小徐
9197	卷十三下	力部	10_09	莠						
9198	卷十三下	力部	04_17	勇						
9199	卷十三下	力部	32_03	勃						
9202	卷十三下	力部	09_06	飭						
9203	卷十三下	力部	12_20	効						

		戶		房		橋	
		睡封簡	睡日乙簡	睡封簡	睡日乙簡	睡為簡	青牘※
戰國晚期 (b. c.286-222)							
	其他秦文字						
秦 (b. c.211-207)							
	《秦小篆·蒼頡篇》	?		?		?	
西漢早期 (b. c.206-141)	《阜陽漢簡·蒼頡篇》		C029		C029		C029
	馬王堆漢墓						

表 4. 4. 1 『阜陽漢簡·蒼頡篇』門、閉、開などの字例表



第五章 秦漢文字の変遷考察

第一節 文字変遷の原因と基礎

一、古文字の種類と数量

稿者は「古文字変遷の研究」をする上で、文字の「外形」のみを分析考察の基準にしてはならないと考えている。以下の二つの点を参考にする必要がある。

文字は、「墨跡」と「非墨跡」の二種類に分けることができ、非墨跡文字は所謂「金石文字」がその多くを占める。金石に関しては呉鎮烽氏の『商周青銅器銘文暨図像集成』によると、商周器物は大きく六つに分類できる。⁹⁰

一、食器（五八〇四）、二、酒器（六五八一）、三、水器（六三四）、四、楽器（七一一）、五、兵器（二二二五）、六、用器（三五五六）、付録（五二七）、合計一六七三八。

そのほかに孫慰祖、徐谷富『秦漢金文匯編』⁹¹を編集しており、総収録数五八五件で、食器、酒器、水器、楽器、度量衡、雑器等に分かれる。書中の付録『秦漢金文字匯』と検字表は稿者のデータ処理がなされており、字例は七九三字あり、秦漢の青銅器は六〇〇件に上る。

石刻文字に関しては葉程義『漢魏石刻文學考釋』によると、石刻は十二種類⁹²に分けられ、一、雜記類（八七）、二、碑誌類（三六七）、三、頌贊類（二二二）、四、哀祭類（二三）、五、箴銘類（五一）、六、伝状類（一）、七、詔令類（二四）、八、序跋類（三）、九、奏議類（一六）、十、辭賦類（一）、十一、詩歌類（五）、一二、論辨類（五）、総計六〇五例ある。朝代の比例は、前漢：後漢：蜀漢：曹漢：東吳、21：495：12：61：16になる。以上が「非墨跡文字」の概略と分類整理である。

「墨跡文字」に関しては、張顯成『簡帛文献学通論』⁹³

によると、簡牘の内容は「書籍」と「文書」の二つに大きく分けることができる。書籍は四種に分けることができ、一、経書、二、史書、三、子書、四、文学書である。「文書」は、李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』を参考にすると、書檄、律令、簿籍、録課、符券、検牒の六種に分けられる⁹⁴。

初師賓氏は『簡牘學百年的思考－代序』にいう。

春秋晩期に、簡牘文書は主導的な地位を占め、誦習や著述、收藏、整理は既に見慣れてしまい珍しく無くなっていた。出土した簡牘で今日見ることが出来る最も古いものは戦国早期のものである。魏晋に至るまで、紙は既に出現し使用されていたが、簡牘はやはり普遍的であった。一九九六年長沙走馬楼で一度に三国呉簡が九万枚余出土し、その数は驚くべき数であり、確かな証拠である。それは紙が高価なものであったからである、また中央、

地方では別の原因があった。よって、簡牘時代は上から三代魏晋まで、二千年もの長い間継続した。簡牘時代早期では甲骨文、金文と陶、石、玉、帛の書は、多くが禱祭、紀功、典儀などの専用で、特例は決して媒体の主流になっっていたはずはなく、典籍文献の全貌では無い。その中で、春秋晋の盟書、戦国及び秦漢以降の帛書、石経、碑碣等は明らかに皆簡牘形式の模倣もしくは形を変えたもので、どちらも簡牘の原稿があると考えられる。よって、更に古い春秋時代、ひいては商周時代の木簡牘が見つかるとは、時間、好機、技術の問題かもしれない。そうでなければ、文明が栄えていた昔の時代を考えると、却って道理に反して不思議である。⁹⁵

この様な見方は同意するに値し、金石文字（非墨跡文字）の「応用の層」、「種類」または「数量」を単独で見ると、もしくは、全てを合計して比較すると、「墨跡文字」

には敵わない。よって、分析研究をするのは数量の多い字種を採用することは当然で、そうして整理して出した結果が「通例」と言うことができる。

過去の研究者はよく簡帛文字と金石文字を対比し分析する場合、金石文字は一見重厚感があり、正式な場面のみ使われる文字であると考えられていた。一方で簡帛文字は「速く」書くことで形成された文字であり、比較的適当に書いた物だと考えられていた。実際に速く書くことは、簡牘を書く上で基本的に要求されることだが、研究者達は、簡帛は「適当」と「草率」の「原罪」であるとみなしてしまった。

青銅器上の「金文」から見て、李松儒氏は『戦国簡帛字跡研究』にいう。

金文の鑄造類の銘文字跡の特徴は、筆画の連結している部分に尖った角の痕跡を残していない。それは鑄型の

中を水が流動するためである。鑄造の銘文は多くが墨書の痕跡を反映させているが、その字跡の掘られた部分よりも補刀の部分の方が多い。字跡の補刀の部分は既に書者の技能を反映していないだけでなく、書写習慣も反映していない。それは書者の主観的な要素と書を書く際の客観的な要素が、書を書く過程の妨害となって字跡に影響を与えた事からきている。鑄造銘文は往々にして書者の主観意識が加えられるため、装飾性が字跡を変形していく際に影響を与えている。目的性のある改変された文字は、書者が実際の書写技能と習慣をごまかすことになる。例えば金文は双鉤の方法で鑄型などを刻した。鑄造などの銘文は鑄造の型を作っているため、一般的には一つの銘文の中に異なる書者の字跡がある事はなく、銘文修正などの痕跡が見られることはない。⁹⁶

文字が生まれる方式に注目すると、「物理の特性」を用

いて客観的に分析、考察する。既に最近の論文では、この様な文字が生まれる方式の差異を見分ける事ができ、「物理」が文字の形状の見方または観点に影響を与えるのは完全に後者である。李松儒は『戦国簡帛字跡研究』にいう。

金文の刻劃の字跡に刻（劃）する際に使われる傳承された材料は、甲骨よりも更に硬く滑らかなものを使っており、刻す際の反作用が更に大きくなり、書を書く際の正常な動きに障害をきたす。書写工具と傳承されてきた物との間の摩擦の程度が異なり、字跡に対する影響も異なる。刻劃文字が字跡に対する障害は主に文字の書き方の条件の変化により、書者がそれに対応しきれない事で生まれる。⁹⁷

稿者もかつて『秦漢墨跡文字演變的考察研究』⁹⁸に於いて、「フィードバック」の語を用いてこの現象の解釈を

行った。文字の製作時に「フィードバック」が影響を及ぼす問題について、材質が刻者に障害（抵抗力）を与え、この障害が一般人の自然に対処しきれない程大きくなる、製作方法を変えなくてはならなくなるのである。

李均明・劉軍『簡牘文書学』にいう。

簡牘文書の字体が草率になるかどうかは、模写者の書写習慣だけで決まるだけでなく、草稿もそれに関連しているのかもしれない。草稿は正式に出すことのできない物であるから、修正の余地があった。草稿を書いた者及び修正に参与した者が読む事が出来れば良く、素早く時間を節約することを求められたため、その字体を整える際に正式な本文との僅かな差が生じた。もちろん草稿にも元から整っている者もあるため、書者の習慣によって決まる。⁹⁹

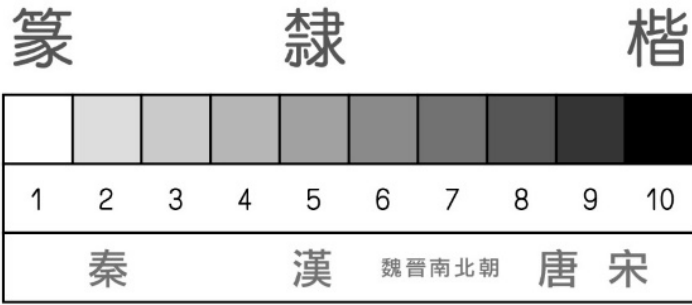
簡帛の文字はかならず「適當」または「草率」である

と言う様な論説がある。それはもしかすると研究者が実際に同じサイズのものに簡帛文字を書いた事が無いからなのかもしれない。○・八センチまたは更に狭い竹簡の範囲の中に、各文字を軽快にスピーディに書く必要があり、遅すぎると筆画が重なって潰れてしまう。書くにはそれなりの熟練した技術が必要で、長期の訓練がない、もしくは文字の筆順を正確に把握していなければ到底一つの文章を書くことはできないだろう。

よって、書を書く「技術」の観点からいうと、このような簡帛文字は、「草率」であったとしても絶対に「適当」に書いたわけではない。それから書写の内容と用途から考えると、どれも政府の通行文書であり、法律の条文または書籍などである。いわゆる青銅石刻文字が政府で使っていたとは限らず、またその他の簡帛もまた一般のみで使われていたとも限らない。よって、研究者または一

般民衆に関わらず、簡帛文字の特性及び秦漢の間の文字が使用された状況はどの様なものだったのかを明瞭に認識する必要がある。

稿者は白から黒にかけて10段階のグレースケールを用いて、篆、隸、楷の変遷過程の作成を試み、隸書が篆と楷の間に位置している事が見て取れ、数字が5、6、1と10の間のとこに落ちても関係はなく、1は篆書で、10は楷書を示しており、篆書から楷書への変遷の過程である。数字の下には時間すなわち「朝代」を加えた。この図表の重要な用途は文字の変遷順序が図表中の数字と同じになる事であり、過ぎた数字は後退せずに1、2、3、4、5、6、7、8、9、10の順序を崩さず、数字が勝手に飛ぶことは無い。



グレースケールを用いて篆、隸、楷の変遷の過程

疑問に思うのは同じ古文字がなぜ、「墨跡文字」は規則性のある変遷ができ、「非墨跡文字」にはそれが無いのか。その原因はどこにあるのか。それを解く鍵は、材質に「直接書いた墨跡文字」に、しかも直感的にスピーディーに

書いた事にある。

そのほかに非常に重要な点としては、芸術上の篆書、隸書の創作習慣と経験は我々が研究しようとしている古文字の変遷の中に入れてはならないし、文字考察の研究と芸術創作は切り離して考える必要がある。

以上の考察をまとめると、次のことを再度強調したい。研究する字形は、少数の特例を用いて通例として使つてはいけないことである。例えば『石鼓文』を「秦篆」の最も古い代表とし、却つて時代の近い数千枚の『睡虎地秦簡』等の墨跡文字を見落とすことである。ただ、先秦以前の墨跡文字の資料が不足している。その他の篆隸字体の変遷研究については、一つの標準を用いるべきで、多すぎる標準を用いるべきでは無い。もし文字の変遷が緩慢で、短い時間の中で二つの字形の距離が離れ過ぎた文字の場合、詳細な分析、考察が必要になり、文字の材

質の原因もしくは他に問題があるかどうか、簡単に「文字の誤変」と片付けるわけにはいかないからである。

何琳儀氏は『戦国文字通論訂補』

戦国文字の使用時期は、一般的には戦国時代と相応すると言われている。しかし、異なる時代の古文字の分類は決して歴史の図表のように綺麗に振り分けることはできない。形体も時代が変わるごとに突如として変わるわけではない。文字の変異は常に字形の変遷の法則に基づいて発展変化するものである。¹⁰⁰

確かに、「文字字形の変遷」は時代が変わる事で文字も新たに入れ替わると言うような大きな違いはない。また、文字を書く習慣は長い時間をかけて形成されて来たものである。秦王朝は国民の文字を書く習慣を変えさせたが、これはもちろん簡単な事ではない。¹⁰¹

学界では「篆、隸」間の文字の変化を「隸変」と呼んでいる。これは「漢字が篆書から隸書へ移り変わる際に生まれた変化」の事を指す。

二、篆変と隸変の字形進化

『史記・秦始皇本紀』に「…大禹の祭りを行ない、南の海を遠く望み、石刻を建ててた。」唐・張守節の註に「この二頌は三句で韻を踏む。碑は会稽山上にある。文と書はともに李斯で、字は四寸、小指で画くようで、円く刻む。今文字の整頓したものが、小篆字である。」¹⁰²とある。

ここでは、「其字四寸」と述べている。もし、漢の制定した一つの文字が、およそ九・二センチとするならば、一般的には文字のサイズは当時の簡帛の媒体となり、文字を書く道具と相応しておらず、直接書こうとするならば難しい。記憶に頼って、文字を直接刻むのはもつての

ほかである。慎重に作るためには職人が製作前に草稿のようなものを用意しているはずである。その文字の媒体は簡牘もしくはそれに近い素材のものである。もしその文字を李斯自身が選んでいたとしたら、それも可能性はある。それが、同じサイズの字形の「篆書」に対応するなら、それは道理に合わない。(縮小したとしても、道理に合わない。)

一九九三年江蘇省連雲港市尹灣村で出土した、前漢晚期「尹灣漢墓」簡牘字数は四万字余あり、M6号墓「東海郡吏員簿」編号 YM62D2 の木牘長さは、約二十二・五から二十三センチの間である。¹⁰³裏表合わせて約三四〇〇文字が書かれている。裏側の二十五行の一行の文字幅は〇・二センチしかない。ここから古人がこのような小さな文字を書くことは決して不可能な事ではなく、むしろ必要なものであり、小さな文字を書く能力があったこと

がわかる。同じような大きさの範囲の中で同じように「篆書」を書けたかというところそれはまた別の問題である。



YM62D2 反 局部

第二節 字形変遷の考察

本節では、「歩、徙、跡(迹)、高、京、景、亭」の七字と『説文』、甲骨、金文、秦漢の墨跡文字から字形の比較分析をする。

一、「歩」字の考察

	商・徒貞
	商・徒觚
	商・徒簋
	僕父己禾盃

「歩」は、甲骨文はに作り、商の『子且辛歩尊』はに作り、西周早期の『僕父己禾盃』はに作り、西周晩期の『晉侯穌鐘』はに作る。




右表中の『徒觚』、『徒貞』の銘文は、董蓮池は『新金文編』に、「歩字は彳を加えて複雑化し、『歩觚』の歩と同じく、均しく歩族の歩を用いている。」¹⁰⁴とする。現在見ることができ殷周墨跡文字の資料が不足している中、戦国晩期後の墨跡文字の字例から考えたい。




歩	青川木牘
	睡虎地秦簡



中 表 右

の『青川木牘』と『睡虎地秦簡』の字例から見ると、両者の書写には百年余りの差があり、字形は互いに踏襲している趣を持つ。これは墨跡文字にのみ見られる特徴である。これに対して、非墨跡文字には、字形上まれに前のものを踏襲していることがあるが、時代を隔てている時間は短くはなく、むしろ長い。例えば、戦国璽印0906歩字は「」に作り、上下ともに止の形で表しており、西周時期の金文と近い。稿者は「非墨跡文字」の場合、これは偶々字形が似ただけで、この両者の間に必然の關係もしくは変遷の影響があるとしたら、僅かにこれらの証拠がなく、明らかに証拠が足りないと考える。「墨

跡文字」ならば、両者の時期が近い場合は字形も近く、両者には変遷の伝承関係が有ると判断でき、説得力がある。

たとえばどうであれ、秦簡または漢初の『張家山漢簡』は「歩」字の字形に多様で豊富な姿がある。特に『銀雀山漢簡』の「」字例の上半は「」で、後述する「徒」字の右上の止形に比較的近いと言える。秦漢初の後、前漢中晩期の『居延漢簡』、『武威漢簡』の歩字の下部は「」（少形）で比較的主流の形をしている。

C	B	A
		
79 例	54 例	5 例

後漢中期『五一廣場後漢簡』は 、 などに作り、

後漢晩期後の碑刻の歩字は「山+少（歩）」の形で表し、上半分の「止」形は「山」形に近い形に変化している。

「歩」の書き方は唐代まで続き、更に遅い時期もこの書き方である。在使われている楷書の「歩」字の字形はおそらく宋代以後である。図に表した『後漢・楊著碑』、『北齊・張景林造像』の字例の碑刻文字は皆問題があり、¹⁰⁵参考として使う事ができない。唐代以後に「山」形の書写筆順から「止」形に変遷すると考えるのは、少し無理がある。必然的な「文字を書くこと以外」の変則的なものが、のちの変化に影響をもたらしたと考える。

以上が、大まかな「歩」字の変遷の過程に関する考察である。「歩」字の秦漢時期の字形の分析をするために、稿者は秦代の『嶽麓書院藏秦簡（貳）』¹⁰⁶の「歩」字の形に基づいて、A、B、Cの三種類に分けた。番号Aに

は5字、Bには54字、Cには79字があり、欠損があつて不鮮明な字跡は74字ある。総合の字例数は212字である。このような調査からは決して有用なデータや発展性のある推論は余り得られないが、この比率の結果からは、これら秦簡の書写者はほとんど番号Aの様な字例を書いていないことがわかる。

A、B、Cの筆順の分類以外に、はっきりとした分析をする為に、「歩」字の上下部を甲、乙、丙の三種類の形に分類した。分類と変遷の推測は決して一直線で表すことのできないものである。なぜならその中の一画の筆順が変わつたら、また別の結果が生まれる可能性があるからである。分類は一種の便宜的な分析方法に過ぎない。上半部の「止」の形は「甲、甲1、甲2、乙、乙2、乙3」の六種あり、下半部は「丙ab、丙1、丙2ab」の三種

ある。組み合わせで、最も多いもので十八種の組み合わせがある。この分類にしたがうと、Aは「甲2+丙」で、Bは「乙+丙1」で、Cは「甲2+丙」で組み合わせるとになる。

鄭日昌氏は『筆跡心理學』にいう。

筆跡は一種の目で見ることでできる図形である、よつて論述に関係のある筆跡の文章は筆跡の視覚を制御する事で完成すると言うことができる。これは識字と字の結構を学ぶという観点から考えたものである。字を作る上で一つの学習の対象となるのは、標準の結構を備えており、学習者が目で見たり、記憶したり、模写する上で、視覚的参与から離れることはない。¹⁰⁷

この様な論述の対象は現代人が研究した結果であるが、「文字を書く過程」から言うと、古人も今人も同じで、全く違う字体であつても、どれも当てはまるであろう。

文字を書く際、いわゆる「標準の筆順」というものは決して存在しないという事を証明する必要がある。同一の書写者が書いたとしても、初学習者から、熟練者まで、同一字は毎回文書く過程で、筆順上調整または改変が起る可能性がある。一人から多数の人に拡大すると、変数が増加し、一つの文字を書く筆順に止まる事は無いのは言うまでもない。表中に並べた順序は、稿者が変遷を解説しやすい方法の一つである。筆順の順番は上から下に、左から右にと、一般的な文字を書く習慣と、長い時間をかけて稿者自身が実際に秦簡文字を書いた経験に基づいて判断している。時に鍵となるのは筆画以外の事があり、前後の順番の変更が字に対して必ず影響が有るとは限らない。

我々が見ている古人の筆跡の多くは、書写者が熟練した後に書いた文字である。特に、秦漢の文字を書く媒体

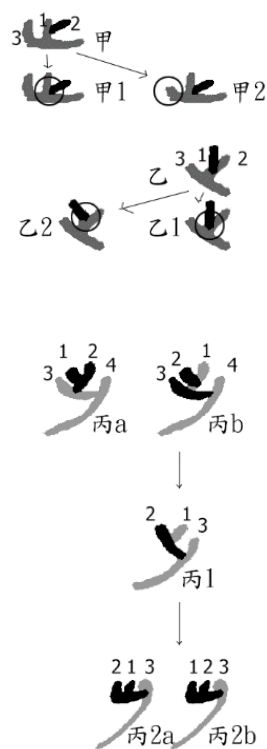
は狭く小さいので、書写者が熟練した技術を有していれば、筆先の弾力を使ってスピーディに書き、連続して内容を見ずに書く事も可能である。

鄭日昌は『筆跡心理學』にいう

最も書写者の個性と心理を体現しているのは筆跡の線（筆画）の力加減や連続性で、字の結構ではない。：文字を書く時の線の力加減と速度は特に規則があるわけではなく、視覚的参与と制御の必要がない。文字を書く際の手の感覚に基づいて、逐一手の能動的な触感を掴んでいる。よって、我々が文字を書くとき必然的に自己の適応性に基づいて、筆跡、線を自分の決まったパターンで書いており、知能と体力の消耗を節約し、文字を書く効率を上げている。¹⁰⁸

よって、字例の中から文字をスピーディに書くと、点や線、接点の差異が文字の形体の変化に影響を及ぼして

いることがわかる。



甲類の解析をしよう。甲1と甲の差異は1、2画の接点の位置にある（1と2画の順序は入れ替わることができる）。甲1の2画目は3画目に繋げることができる。

甲2と甲の差異は三画目の長さであり、起筆時に直角に近い湾曲の有無が確認できる。仮に1、2画目の「V」形は平均で、「L」形3画目の左側の屈折が短い場合、「止」のような形を形成する事になり、「前」字の上部は「止」形から変遷した形になる。このような分類に基づく、一さらに「甲3」の分類があると考え、1、2画目の接点の位置は3画目には繋がらず、3画目の起筆は屈

折がない。これが成立しない理由として、1、2画目の接点が3画目に届かない時、3画目の起筆は殆どが屈折するからである。よって「甲3」の分類をする必要がない。変遷時間の前後関係については、甲は比較的早期の書き方に属し、順番は「甲、甲1、甲2」である。




乙類の解析をしてみよう。乙類が甲類の分類に於いて独立するのは、3画目の「斜度」の変化が原因である。乙1と乙の差異は乙1、2画目の接点が3画目の上に来ることにある。乙2と乙の差異は1画目の「斜度」であり、乙と乙1の1画目は殆どが「垂直」である。乙と乙2は同一時期の書き方である可能性があり、順番は「乙、乙2、乙1」である。

丙類を解析してみよう。比較的早期の字形を見ると、本来「止」形は3画で書くことができ、歩字の下部の止形は返って一画多く、稿者はこれを次の文字を書くため



に変化したことが原因で、勢いに乗って書かれたものであると考える。丙 a と丙 b の字形は基本的には完全に同一であり、1、2 画目の順序の違いである。丙 b の筆順の結果はおそらく形成後の丙 1 である。丙 1 と丙 b の差異は丙 1 が丙 b の 3 画目を省略しており、このようは省略は決して意図的ではなく、スピーディに書いた際に意に留めなかったからで、多くの人が「容易に」見落とす状況下で形成された結果である。始まりの 1 画目を長く書いた場合、丙 b のような形になりやすく、丙 1 の形を形成する。この鍵となるのは 1、2 画目の長さで、この長さは文字を書く際に瞬時に決まる。

丙 2a と丙 1 の差異は 2 画目起筆の屈折の勢いであり、起筆の屈折の勢いをつける事で、横への平行移動から丙 2b のような字形を形成しやすくなる。筆画上の差異から、丙 a にも丙 2b の字形を形成する可能性があり、1 画目を

書く際に屈折し横に移動すると、2 画目は比較的短くなり、その流れで 3 画目を書き丙 2b の形が形成されると判断できる。丙 ab の形はおそらく早期の書き方で、順番は「丙 a、丙 b、丙 1、丙 2a、丙 2b」である。

二、三箇所筆画の接点の差異が時に変遷の過程の字形改変の原因の一つとなり、「筆順」の改変は動的であり、おそらく文字を書く者にも自覚がなく、十分な字例の数と連続する前後の分期が必要であって始めて、このような変遷の過程が理解される。この様な細かな分類を行なっても必ず見落としがあることは稿者もはっきりとわきまえている。例えば、組み合わせによる十八種類の結果も、「」（嶽麓書院藏秦簡）、「」（關沮秦簡）、「」（張家山漢簡）の字例字形を含んでいないからである。

二、「徙」字の考察

「徙」は、『包山楚簡』は  に作り、『新蔡葛陵楚簡』は 

に作る。『睡虎地秦簡』は **𠄎**、**𠄎** に作り、『里耶秦簡』は **𠄎**、**𠄎** に作り、『銀雀山漢簡』は **𠄎**、**𠄎** に作り、『張家山漢簡』は **𠄎**、**𠄎** に作る。

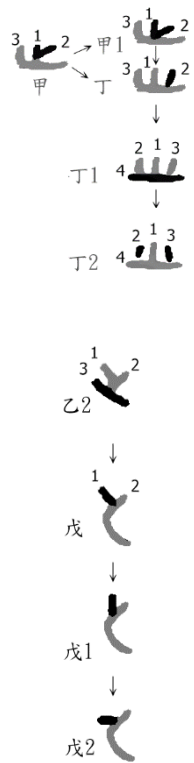
季旭昇氏は『説文新證』にいう。

『望山』楚簡にも「徙」字がある。秦漢文字は彳に徙い(𠄎)。「説文」の小篆体、古文字の形にはそれぞれ変化の文字がある。¹⁰⁹ 徙、声符は止。卜文・金文に𠄎作る。『説文』「徙、遯なり。」戦国晩期の楚系文字「徙」字は「遯」または「遯」に作り、『包山楚簡』、『九店楚簡』、『新蔡葛陵楚簡』、『楚帛書』に字例を見ることができ、璽印文字は『傳遯之鈔』、『傳遯』即ち「傳徙」がある。

戦国晩期から前漢早期までの墨跡の字例を基にすると、「徙」字の右上の「止」の形は「𠄎」(小一)の形体をしており、右上の元々の「𠄎」形はどのように「𠄎」形

に変遷していったのか。徙字の上部の「止」と下部の「彳」の二段に注目し、一つの変遷の過程の作成を試みた。

甲と甲 1 類の筆画の着地点の差異は異なる字形を形成する。(前の「歩」字の研究ですでに解析したのでここでは省略する。)仮に甲類が発端の造形だとしたら、丁 2 類は結果であり、丁と丁 1 類は過程である。図に表したように丁類は前漢初期の『孔家坡漢簡』の「止」字に近いことがわかり、筆順に基づいて元々の形体に押し戻すことについては、試す価値がある。



丁類を解析してみよう。丁類の起源は甲または甲 1 から来た可能性があり、2 画目を書く際に、比較的垂直な縦画が現れた時に丁類が形成された可能性が有るとも言

える。丁 1 と丁類の差異は元々 3 画目が L 形に湾曲していたのを上下の縦面を書いた後に左に向けて移動してから右に行く筆勢に変化した。しかし、この様な筆順はすぐに図中の次の順序に取って代わっており、中心の縦面を先に書き、更に左右、横面と言う順番になった。丁 1 の形体は三つの小さな縦面が平行で、長さも同じになる時、左から右に「一一一」の様に書いてから横面を書いている。このような筆順も可能性が有る。丁 2 と丁 1 の差異は 1 筆目は比較的長くなり、左右両筆はすでに左右両端に向けて表している。例えば、「八」形の斜点。丁 2 の筆順は先に中間を書き左右を書く、または先に左右を書いてから「上」の形を書く、どちらの可能性もある。丁 1 と丁 2 は時代を並行しているが、丁 1 類の形体はやはり徐々に丁 2 に変わっていった。順序は「丁、丁 1、丁 2」である。

戊類を解析してみよう。戊類の起源は乙 2 から来ている可能性があり、もともとの 2、3 画目から左下に曲がってその勢いで一筆で書いている。戊類とその他の戊 1 と戊 2 の差異は起筆の角度にあり、仮に戊 1 が垂直に形成されたら、水平に横に移動し戊 2 を形成する。三者は同時期に同時に並行している可能性があり、前後の時期の関係という可能性もある。順番は「戊 1 || 戊 2」である。

「徙」は、前の甲から戊の分類に従うと、戦国晩期の『睡虎地秦簡』の字例の中に大体「丁 2 + 甲 1」と「丁 2 + 乙 2」の両種の組み合わせがある。秦代の『里耶秦簡』は返って「丁 2 + 乙 2」の組み合わせが主であり、前漢早期の『銀雀山漢簡』と『張家山和簡』は「丁 2 + 戊 2」の組み合わせが多い。

前漢中晩期後の「徙」字の右上「止」の形は「」か






ら「止」の形になり、右下の「止」の形は波磔がはっきりと出ている「止」（之）の形に変わり、この段階の字形


の姿は、後漢晩期の石刻または三国呉簡の墨跡文字に開ならず、どちらも大きな違いはない。「止」の形は唐代まで続き、宋代になって初めて「止」の字例が多くなる。

「歩」字と同じ様に、稿者は徒字の「止」の形は「止」に変わり、「長期の書写変遷」によって達成するわけでは無いと考えていた。「文字を書くこと以外」の変数が有ることで初めて達成する。図に表した様に、北魏の三つの碑刻は「止」の形が形成される時間が合わなかったため、参考としなかった。

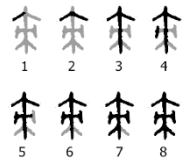
三、「迹(跡)」字の考察

説文 1	秦簡	
		
説文 2	泰山	嶧山
		
43 / 1092	會稽	琅邪臺
迹(跡)		

「迹」は、西周晩期の『五年師旅簋』は 、西周晩期の『師寰簋』は 、に作り、『睡虎地秦簡』は に作り、『嶽麓書院秦簡』は に作る。

『説文』「跡、歩む處なり」とし、亦声の字とするが、亦では声が合わず、また字義をえがたい。に作る。

「速」(迹)は比較的古い字形で西周晩期の『五年師旅簋』と『師寰簋』、その後の『詛楚文』と『泰山刻石』(宋拓本)に字例があるが、字形の信頼性は前の金文に劣る。



「束」形の筆順推測



「亦」形の筆順推測

「速」字の右側の「束」形は筆順に基づく、仮に3画目の縦画「束」を短く「束」の様にし、更に5から7画の筆順「束」を「束」の形にした場合、全体の形は「束」に近い形になり、筆順の改変は非常に重要な鍵となる。これらの条件が同時に備わっていた場合にはじめて推論が成立する。

戦国晩期の『睡虎地秦簡』「迹」は辵+「束」の形に書いている。秦代『嶽麓書院秦簡』の上部は「束」から「束」に変遷の予兆があり、前漢早期『張家山漢簡』、『銀雀山漢簡』の字例も含んでいる。上部の形状が「束」になった時、「束」形の3画目は上部を突き抜けず、微妙に分離

し、「束」の形を形成している。このように推測すると、

前漢中晩期の後、字形の変化は大きいと言え、大まかに

「束」と「束」の二種類の字形に分けられる。




前漢早期、晩期字形 1








前漢早期、晩期字形 2







「束」これは、大きく八段階に分けられ、最初の「束」の形の1、2画は一面で書く様になり、「束」形の時は横画が少し突き出している。五段階目の筆順の改変では、上部「土」形は先に十字を書いてから横画を書いている。六段階目では「束」と上部「土」形が分離しており、その後、二点の筆画が分離し、最後に四個の点が短くなり左右に開いている。その他に「束」は約6段階に分けるとができ、元々の1、2画目の横画が「束」に移動し、

三段階目は分離して「」の形になり、両点が分離し、左右に開き、最後の段階は四点の筆画を短く書いている。変遷の結果とこの時期の媒体は比較的広く、文字が大きいものも多く、字形が扁形の方角に向かう事と大きな関係がある。


後漢晩期の『營陵置社碑』に最も古い「跡」の字例を見ることが出来る。「迹」、「跡」の両字が平行して使われるのはこの時期から始まった可能性がある。その後、北魏、隋、唐にもまたその字例がある。この時から「迹」の字の変遷の過程も既にはっきりとしている。

四、「高(高)、京(京)、景、亭」字の考察

「高」は、西周早期の『師高器』はに作り、西周晚期の『弔高父匜』はに作り、春秋中晩期の『秦公簋』はに作り、『高奴禾石銅權』はに作り、『青川木牘』はに作り、『青川木牘』は

、、に作り、戦国晩期の『睡虎地秦簡』はに作り、前漢早期の『張家山漢簡』はに作り、前漢早期の『銀雀山山漢簡』はに作る。

季旭昇氏は『説文新證』にいう。

「高」字のような造字の方法は「古」、「吉」、「弘」等と相似している。戦国文字の「京」の形は中部の「口」形は誤りで、前漢隸書または「日」の形の誤りである。「高」字の下部の「口」形は、絶対に多くの時期の字形が「口」で作っており、齊陶(△4)のみ誤って「白」形に作っている。「説文」の小篆はの誤った形をしている。小篆の「高」字は全体的に誤変しており、上部はすでに台觀の形を成しておらず、これにより段玉裁の注も誤って築(邸宅、居室)とみなしている。どちらも従うことはできない。¹¹⁰

『説文』「高、崇きなり」と訓し、「臺觀の高き形に象

り、冂・口に従ふ。倉舎と同意なり」と口を建物の形と解するが、卜文・金文の字形は回に従うており、そこで祝禱や盟誓・呪詛を行なう意であることを示している。

高に作る。図例中の『秦公簋』は秦景公即位の為に初めて作られ、紀元前576年（春秋中期）の後、『高奴禾石銅權』は秦昭襄王三年（前304）、『二四年上郡守戟』秦昭襄王二十四年（前281）（戦国中期）に作られた。

『青川木牘』は現在見ることできる最も古い秦国墨跡文字であり、秦武王二年（前309）で、戦国中期である。


その後『睡虎地秦簡』（戦国晩期）の「高」字にははっきりとした変化はない。比較的明瞭なのは、もともと起筆が左右両側下方向に書く書き方が、中心から下に押すときに先に左から横に移動しその後右に移動し、元々の「八」の形に変わって「上」の形に近くなる。そのほか、図に

表した様に、秦系以外の戦国文字は『包山』、『郭店』楚簡、璽印文字はどれも秦系の高字と相異しており、それは「合」形と「𠂔」形の差異であり、この「高」字は戦国晩期以前の状態である。

秦から前漢早期にかけて、高字の起筆が「八」、「上」形の字例はどちらもある。『張家山漢簡』、『銀雀山漢簡』などの字例を参考にした。前漢中晩期の『居延新漢』、『武威漢簡』等の字例中の「高」字の上半部は既に「上」の形である。なお、後漢中期『五一廣場後漢簡』は**高、高**、**高**に作る。

中間部の「𠂔」形は変遷し「𠂔」になり、この形の時期としては、後漢晩期の『蒼山元嘉題記』、『封龍山頌』、『西狹頌』、『石門頌』、『從事馮君碑』等の漢碑に見ることが出来る。

高字の中間は元々「U形」で、起筆は下に向け円弧を上に滑らせ、二つの横線を結び、「H形」に近い書き方に変わった。先に上下の縦画を書き、続けて二本の横画を書き更に縦画を書く。よって、比較的早期に形成した「口」の形はまだ突き出している状態である。例えば

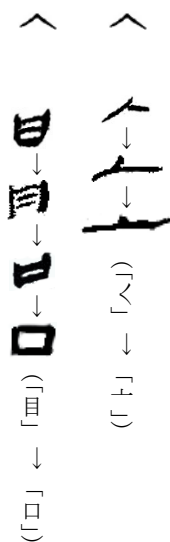


形、更に晩期の「口」形は、文字を書く際の筆順の影響で既に「一」「二」「三」（U形ではない）に変わった。よって、上部は既に筆画が突出した状態では無くなっていく。このような筆順の差異は「高」字「上」、「回」の間が「目」形から「口」形に変わる原因の一つである可能性がある。しかし、「高」と「高」の字形は唐代に至るまでどちらの字例も存在し、文字が取って代わった形跡が見られない。

文字変遷の分析研究は、時間の前後と字形の相異の配列分析だけでは判断できない、その文字が書かれた時の

「筆順の差異」に注目する必要がある、それが字形の改変の原因であるかを検討し、書写筆順の研究の材料も「墨跡文字」である必要がある。しかし、現在、後漢の分析可能な墨跡文字は実際多くない、よって、この時期の字例は「石刻文字」を研究の材料とするしかなく、これは現在の研究材料の限界である。

一方、現在は秦漢の際の墨跡文字の出土が少なくなく、各時代の各種碑刻文字資料を参考にすることができる。そのため、唐宋、明清時代の古人よりも更に鮮明な文字変遷の脈略を見出し、大量の墨跡文字を使用し考察の根拠とする事で、「高」字「目形」と「口形」の時間の前後の差異を分析する事ができる。



合形（「人」「日」）の変遷は、「京」字と共通している。

『説文』「京、人の爲る所の絶だ高き丘なり。高の省に従ふ。一は高き形に象る」と高丘の形とするが、卜文・金文の字形はアーチ状の門の形であり、山丘の形ではない。高や亭などと、相似た字形である。京京に作る。

「京」は、商の『遷篋』は京京に作り、西周早期の『歸虜方鼎』は京京に作り、春秋早期の『内公鬲』は京京に作り、秦の

『嶽麓秦簡』は京京、東東に作る。「京」字は商から春秋早期の金文の字例から見ると、数百年間、その字形はほとんど明らかな改変はなく、璽印文字は囟に表した様であり、戦国晩期の墨跡文字は『。上海博物館藏戦国楚竹書（五）・三徳』に見る事ができる

：上帝弗京（諒）、以祀不享。京讀為「諒」¹¹¹

戦国晩期から前漢早期にかけての「京」字の墨跡字例は見られないが、仮に『睡虎地秦簡』、『馬王堆簡帛』及

び『張家山漢簡』の「就」字¹¹²と数十年後の秦代『嶽麓書院藏秦簡（参）』、『里耶秦簡』、秦印「景」（日+京）形と前漢早期の『銀雀山漢簡』を用い、多くの「京」形に近い字例を対比する事で、戦国晩期の「京」字の字形は後のものとそれほど大きな差は出ていないと推測できる。後漢時期には「京」の字例が非常に少ない、後漢中期『五一廣場後漢簡』は京京に作る。

前漢中晩期の『甘谷漢簡』、『居延漢簡』の「京」字の中間部はやはり「日」形で、後漢中晩期になるとその字例に、両側が突出したものは見られなくなり、「日」形が既に現れている。北魏『鄭黑墓誌』¹¹³は比較的「特殊」な字例で、「口」形で表しているが、この碑は趙超の『漢魏南北朝墓誌彙編』では偽誌（偽と疑わしい物も含む）¹¹⁴として附されており、同時代の多数の字例はやはり「日」形が主である。よって稿者はおそらく唐代に

なつてから、元々の「日」形から「口」形に変遷をしたと考へてゐる。

『説文』「景、光なり」とし、京声とする。光景とは日の光をいう。景に作る。『銀雀山漢簡』に見る前漢早期以前の「景」字の「京」形は、どれも「日」形である。前漢中晩期の『定縣漢簡』と『居延漢簡』では、「上日小」の組み合わせで形成されており、「日」型は既に「日」形になつてゐる。後漢中期『五一廣場後漢簡』は景に作る。

二百年以上後の後漢晩期の碑刻に見られる「景」字の「京形」はどれも「上日小」である。そのあとの隋代は墓誌銘の「京」形にのみ「上日小」の字例がある。これらの事から、秦漢間の時期の「景」字の京形が「上日小」の組み合わせになつてゐるはずがないという事がわかる。よつて現在通行の『説文』中の「景」字は字形に問題があると考へる。

時に字形に一画多いまたは少ないというのは、字を書く者が意に留めてゐなかつたか不注意が原因であり、文字の眞の改変とは言へない。よつて、字例の分析には特に注意を払わなくてはならない。この「景」字は、日と口は一画の差に過ぎないが、そういった字形の数が多い場合、それはただの不注意だけが原因であると言ふ事はできない。

「日」形の変遷についてさらに「亭」字を考察する。『説文』「亭、民所安定也。亭有樓、从高省、丁聲。」『漢書・百官公卿表』「縣道大率十里一亭。亭有長。十亭一郷。郷有三老。有秩嗇夫。」

『説文』の小篆と秦漢の墨跡文字は「日」「口」形の違ひを除いては、戦国晩期から前漢「亭」字下部の「丁」形は『説文』で表現されてゐるような「丁」の様な書き方はない。図例から分かるように『睡虎地秦簡』と多く

の秦印の字例を比較すると、両者の違いは全くなく、学界は前者を「古隸」と呼び、後者を「秦篆」と呼ぶ事に慣れてしまっている。この様な分類をする必要はなく、明らかに共通の字体を二種類に分けて言うのは道理が通っていない。

「亭」字は、前漢早期の『張家山漢簡』の上部はやはり「𠄎」形（下から曲がって上に書くU形）を保っている。もう一度解析すると、秦漢の簡牘文字の字跡は通常一センチ以下で、筆画は重なり合う部分が多い。しかし、稿者は大量の字例から考察し、長期にわたり実際に原寸で文字を書いた経験から判断すると、重なっているかどうかまたはその筆順の順序はあまり大きな問題ではないとみなすことができる。これらの下に圧をかけた後旋回し上に跳ねたU形に書く方法は、文字を速く書く上で有利であり、筆順筆勢により形成された文字の形状は、非

墨跡文字では実感しづらい。前漢中晩期の『居延漢簡』の上部はほとんど「𠄎」形を形成している上に、「𠄎」形や、「𠄎」形も「𠄎」形になっており、文字を書く筆順は異なっていることがわかる。後漢晩期以後の碑刻文字では、やはり「𠄎」形は「𠄎」または「𠄎」の形になっている。

以上の分析から「高」、「京」、「景」、「就」、「亭」の字の変遷の過程は大まかに二つに分けることができる。一つは「𠄎」から「𠄎」（戦国晩期から前漢中晩期まで、前後は約二百余年）へである。もう一つは「𠄎」至「𠄎」形（多分前漢晩期から）。

これらと「京」形に関連する字例に、許慎『説文』では「口」形を用いる字例を為す。これは秦漢の際のものではなく、比較的晩期の字例を採用している。この字例が使われた時期はおそらく後漢晩期（西元168〜220）であ

るが、その時は既に『説文』が編纂された後の時代である。前漢中期以前の字例中に、「𠂔」形の大量の字例が新たに発見されない限り、この「字例」が後漢以後の人によって作られたという推論を排除する事が出来ない。

第三節 「白」字部首の考察

秦刻石の考察を行う前に、稿者は一つの疑問を挙げた。それは今見ることのできる『説文解字』版本における「白」部の親字は本当に「白」なのか。この字の秦漢文字の実際の形状はどのようなものかである。この疑問を解決するには、『説文解字』の親字がある程度、秦漢時期に使われているという文字量への反映を考慮し、稿者は『説文解字』の親字を範囲に加えた。

李家浩氏は『説文』篆文有漢代小學家纂改和虚造的字形』にい

う。

『説文』が収録する篆字の字形は、ある一部は先秦、秦漢文字と一致しない。このような事が起こる原因の一つとしては、許慎が『説文』を編纂した時、彼が収録した文字の形がに漢代の小学者によって改竄されたものであり、物によっては隸書を元に捏造したものである。過去に林義光、王獻唐、裘錫圭先生などは皆この点を指摘している。¹¹⁵。

なお、間違いがある字は、王獻唐は「平」、「于」を挙げ、裘錫圭は「早」、「卓」、「走」、「欠」、「非」を考えている。

稿者は、引得市『説文解字』のデータベースを使用し、「部件検索」(説文専用版)と結合させる事で、親字または部首のスピーディな検索を可能にした。「部件検索」の格式、設計は主に Unicode の字を分解して使用しており、『説文』の形状に基づいて行ったわけではない。余分な親字が表示される可能性があるが、紙本の辞書を用いて

検索するよりも効率が良い。フォーマットは『説文』にある楷書の「白」の部首を表示し、考察、対比を行った後、最後に15⁵字を用いて更に細かく秦漢時期の簡牘文字を比較した。(99字は字例がない)。

「白」に関する字例は、藥、迫、徼、白(𠄎)、百、爽、敷、𠄎、即(即)(𠄎)、既(既)(𠄎)、櫟、柏(栢)、槩(概)、樂、鄉(鄉)、程、宿、癩、帛、錦、伯(伯)、佰(佰)、兜、廐、礫、狍、惶、灤、泊(洎)、泉(泉)、繳(繁)(𠄎)、鼃(鼃)、鑠の三十三字である。

「自」に関する字例は、皇(皇)、慕(慕)、兒(貌)(兒)(兒)の三字である。

「日、曰」に関する字例は、皆、習(習)、既(既)、暨、竅、覈(覈)、皎(皎)、皙(皙)、伯(伯)、偕(偕)、獮(獮)、愿、漑(漑)、原(原)、綿(緜)、繳(繁)(繳)、鼃(鼃)、塹(塹)、錯(錯)、階(階)の二十字である。

「目」に関する字例は、邈(邈)、習(習)、皙(皙)、願(願)、皋(皋)(皋)の五字である。(表5.3.1白、日、目などの字数量表と表5.3.2楷書部件「白」秦漢時期の構形考察表を参照。)

異なる文字が変遷する時、ある一定の時期に他の字の形状に似通って、混同し識別が難しくなる可能性がある。この時期は元々の形が変わる事を余儀なくされる。秦漢以前の金石文字と、現在の『説文』版本との相互対照考察は一つの方法である。その他に、仮に更に時間を後ろに伸ばすと、秦から後漢中晩期ごろにかけての文字と『説文』の対比は、更に許慎が目の当たりにした情形はどのようなのもであったのか再現する事が出来るであろう。

以上が現代の情報によるフォーマットであり、研究の需要に焦点を当てると、膨大な資料の中から、正確に(9833

156字)に選別し、更に字例の中から、形体と論述の中

で整理した研究の実践の過程を分析できる。

書き手により、地域により、時代の推移により、字体の上でも、書風の上でも、また書法の上でも、差異が生じている。一般に点画に肥瘦の差があり、文字の形状少し異なっていると認められる。

なお、楷書「白」部の秦漢時期の構形考察表は、本章の最後に付してある。

表 5・2・1 歩字の字形表

				
甲骨文	商・子且辛步尊	商・步𠂔	商・步𠂔	商・步𠂔
				
西周晚期・晉侯蘇鐘	商・徒𠂔	商・徒𠂔	商・徒𠂔	西周早期・僕父己禾盃
				
青川木牘	睡虎地秦簡	嶽麓書院藏秦簡	關沮秦簡	
				
張家山漢簡	張家山漢簡	張家山漢簡	銀雀山漢簡	

居延漢簡		武威漢簡	
五一廣場東漢簡	東漢・衡方碑	東漢・池陽令張君殘碑	
三國吳簡	南北朝・ 爨龍顏墓碑	南北朝・ 石婉墓誌	南北朝・ 崔敬遜墓誌
	隋・ 真草千字文		
隋・ 龍藏寺碑	唐・ 皇甫誕碑	唐・ 道安禪師碑	唐・ 麻姑仙壇記
			北齊・ 張景林造像
			東漢・ 楊著碑

包山楚簡	九店楚簡	新蔡葛陵楚簡	楚帛書	古璽集編 0203
睡虎地秦簡	里耶秦簡	銀雀山漢簡		
張家山漢簡	肩水金關漢簡	孔家坡漢簡		

表 5・2・2 徒字の字形表

居延漢簡	東漢・永壽元年墓記	東漢・石門頌	東漢・石門關銘	東漢・趙寬碑

三國吳簡	北魏・元診墓誌	北魏・王紹墓誌	北齊・司馬遵業墓誌	隋・潘善利墓誌	唐・薛迅墓誌

唐・李元靖碑	唐・淳于氏墓誌	宋・免井橋詩帖	北齊・暴顯墓誌	北齊・宇文誠墓誌	北齊・趙奉伯妻傅華墓誌

西周晚期・五年郟族簋			西周晚期・郟賈簋		詛楚文		泰山刻石
睡虎地秦簡					嶽麓書院秦簡		龍崗秦簡

張家山漢簡	銀雀山漢簡	居延漢簡				
居延漢簡			居延漢簡			
居延漢簡			肩水金關漢簡			

表 5・2・3 跡字の字形表

					
東漢・孔彪碑	東漢・池陽令張君碑	東漢・西狹頌	東漢・校官潘乾碑	東漢・趙寬碑	
					
東漢・營陵置社碑	三國魏・張君殘碑	北魏・孫秋生等造像記	北魏・元勞墓誌	北魏・元斌墓誌	
					
北魏・鄭文公下碑	隋・王榮及妻墓誌	隋・宋景造像碑	唐・端州石室記	唐・史思禮墓碑	唐・伊闕佛龕碑

			高高高				
秦公簋	高奴禾石銅權	二四年上郡守戟	青川木牘	睡虎地秦簡	郭店楚簡	包山楚簡	壘彙 1128
	高高高						
張家山漢簡	銀雀山漢簡	居延新簡	居延新簡	武威醫簡			
					高高高		
五一廣場東漢簡					三國吳簡		
							
蒼山元嘉題記	封龍山頌	西狹頌	石門頌	從事馮君碑	說文小篆	會稽刻石（復刻）	繹山刻石（復刻）

表 5. 2. 4 高字の字形表

表 5・2・5 京字の字形表

						
商・遷墓	西周早期・ 罍方鼎	春秋早期・ 內公罍	壘 0279	上博簡	里耶秦簡	嶽麓秦簡
						
睡虎地秦簡	馬王堆簡帛	張家山漢簡	張家山漢簡			
						
甘谷漢簡	居延漢簡	居延漢簡	五一廣場東漢簡	東漢・ 華山廟碑	東漢・ 禮器碑	東漢・ 白石神君碑
						
北齊・ 竇泰墓誌	北魏・ 鄭黑墓誌	隋・ 姬威墓誌	唐・ 楊孝恭碑	唐・ 石經九經		

表 5・2・6 景字の字形表




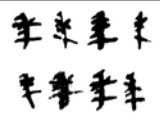

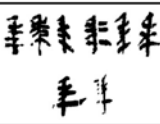
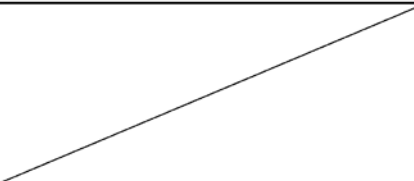



					
秦印	銀雀山	定縣漢簡	居延漢簡	五一廣場東漢簡	
					
東漢・圍合趙君碑	東漢・造土牛碑	三國・王基斷碑	北齊・法觀塔銘	隋・郭王墓誌	唐・李神符碑

表 5・2・7 亭字の字形表

睡虎地秦簡	秦印	張家山漢簡			
居延漢簡					
五一廣場東漢簡	東漢・華山廟碑	東漢・蒼山元嘉題記			
東漢・蒼山元嘉題記	東漢・曹全碑	三國吳簡	晉・臨辟雍碑	唐・劉蔡墓誌	唐・李彥墓誌

表 5・2・8 「年」字の墨跡と非墨跡文字の変遷

朝代 / 分期	西元起迄	非墨跡文字（金文）年	墨跡文字年	備註	
周	西周	B.C ~ 770			
	春秋早期	B.C 770~651			約 120 年
	春秋中期	B.C 651~552			約 100 年
	春秋晚期	B.C 552~475			約 78 年
戰國早期	B.C 475~375			約 101 年	

朝代 / 分期	西元起迄	非墨跡文字 (金文) 年	墨跡文字 年	備註
戰國中期	B.C 375~286			約 90 年
				約 66 年
秦	B.C 221~206			約 16 年
漢	前漢早期			約 67 年
	前漢中期			







朝代 / 分期	西元起迄	非墨跡文字 (金文) 年	墨跡文字 年	備註
前漢晚期	B.C 48~A.D 25			約 73 年
				

表 5・3・2 楷書部件「白」秦漢時期的構形考察表

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
1	0080	皇			○ 		
2	0121	璈	×				
3	0155	璉	×				
4	0184	璊	×				
5	0185	碧	×				
6	0191	璣	×				
7	0381	藐	×				
8	0461	幕			○ 		
9	0499	皃	×				
10	0511	原	×				
11	0562	箔	×				
12	0576	藥		○			
13	0780	噉	×				
14	0794	噉	×				
15	0817	噉	×				
16	0945	噉(噉)(獐)(獐)	×				
17	0946	噉	×				
18	1053	趨	×				

1

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
19	1181	迫		○			
20	1211	徨(徨)	×				
21	1213	邈					○ 
22	1231	徼		○			
23	1427	𨾏	×				
24	1495	諺	×				
25	1544	諧	×				
26	1583	讖(讖)	×				
27	1669	諧	×				
28	1919	簪	×				
29	1965	段	×				
30	1994	岐(岐)	×				
31	2217	白		○			
32	2218	皆				○ 	
33	2221	疇(疇)	×				
34	2223	百		○			
35	2229	𦉳	×				
36	2230	爽		○			

2

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
37	2231	習				習	習
38	2232	翫	x				
39	2258	翱(翱)	x				
40	2426	鷓	x				
41	2505	敷		○			
42	2640	腊	x				
43	2817	鱗		○			
44	2847	簪	x				
45	2876	篁	x				
46	2949	筥	x				
47	3163	盡	x				
48	3180	自	x				
49	3181	卽(即)		卽			
50	3182	既(既)		既		既	
51	3183	官	x				
52	3366	莖	x				
53	3412	楷	x				

3

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
54	3417	楷	x				
55	3513	櫟		○			
56	3532	柏(栢)		○			
57	3683	槩(概)		○			
58	3745	樂		○			
59	3753	檄	x				
60	3824	檣(樟)	x				
61	3869	曄(曄)(燭)	x				
62	4168	鄉(鄉)(曉)		○			
63	4180	的	x				
64	4193	皓	x				
65	4194	皦(皦)(皦)(皦)	x				
66	4257	暨(暨)				暨	
67	4367	穆	x				
68	4411	稽	x				
69	4420	稴		○			
70	4492	粕	x				
71	4581	宿		○			
72	4629	竅				○	

4

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/曰	目
73	4766	爍		○			
74	4830	𦉳(覈)				○ 𦉳	
75	4905	帛		○			
76	4906	錦		○			
77	4908	皎				○ 皎	
78	4909	曉	x				
79	4910	皙				○ 皙 皙	○ 皙
80	4911	蟠	x				
81	4912	睢	x				
82	4913	皚	x				
83	4914	皤	x				
84	4915	皦	x				
85	4917	皤	x				
86	4943	伯		○ 伯		○ 伯	

5

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/曰	目
87	5016	借				○ 借 借	
88	5046	佰		○			
89	5050	倮	x				
90	5427	皐	x				
91	5440	兒(貌)(貞)			○ 兒		
92	5441	兗	x				
93	5443	兜		○			
94	5537	欸	x				
95	5606	願(顯)					○
96	5690	參	x				
97	5783	餽	x				
98	5794	魄	x				
99	5906	廐(廐)(倉)		○			
100	5989	礫		○			
101	6063	獬				○ 獬	

6

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
						𠄎	
102	6134	驪	x				
103	6163	驢	x				
104	6268	獺	x				
105	6346	狛		○			
106	6459	焯	x				
107	6467	熠	x				
108	6471	煌	x				
109	6497	爍	x				
110	6627	皋(阜)					○
111	6636	臭	x				
112	6682	慙	x				
113	6699	愿				○ 𠄎	
114	6764	怕	x				
115	6822	檄(愨)	x				
116	6909	攄					
117	6914	惶		○			
118	6976	惶	x				




7

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/日	目
119	7034	灑		○			
120	7049	漑(漑)				○ 𠄎	
121	7091	泊(泊)		○			
122	7115	漑	x				
123	7151	激	x				
124	7453	泉		○			
125	7454	灑	x				
126	7455	灑(灑)	x				
127	7456	原(原)(源)(源)				○ 原	
128	7583	鯨	x				
129	7607	鯨	x				
130	7613	鮑	x				
131	7851	拍(拍)	x				
132	7903	摺	x				
133	7952	摺	x				
134	8011	擻(擻)	x				
135	8057	擻	x				
136	8127	嫵	x				

8

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/曰	目
137	8464	粥	×				
138	8471	綿(絲)				○  	
139	8481	錯	×				
140	8486	繅	×				
141	8521	縮	×				
142	8580	線	×				
143	8634	線	×				
144	8637	縉	×				
145	8680	繳(繫)		○  		○ 	
146	8822	蝗	×				
147	8964	鼯(鼯)		○		○	
148	8986	墩	×				
149	9015	墮(墮)				○ 	

9

No	說文序/編號	字頭	查詢結果	白	自	日/曰	目
150	9223	錯				○  	
151	9233	鏢		○			
152	9343	鎧	×				
153	9533	轆	×				
154	9644	階(階)				○ 	
155	9654	隍	×				

10

第六章 結論

第一節 研究の総括

本研究の目的は、古文字学と書道学の角度から、秦漢時代の古代文字（主に篆書）の字例を詳細に解析して、その変遷過程の実相を解明することにある。戦国・秦漢時代の墨跡文字（主に簡牘）と非墨跡文字（主に金石）を対照して解析した。

許慎が編集した『説文解字』の引用・参照資料は、漢代のものが最も多いと考えられる。一部は戦国又は秦・漢代の抄本であり、そのうち五文字（及、攸、夕、也、強）の秦刻石しかないが、五文字とも誤った形状成を引用していた。恐らく許慎は、実際の秦刻石を見たことがなく、他人が模造した誤った形状成を引用した可能性がある。（第四章第一節を参照）

許慎の『説文解字』では、知られている「金文」は引用されて

いない。もし引用されているならば、小篆の形状が誤ることはなかっただろう。その上、当時は紙も拓本もなく、それに金文も簡牘文字のように伝わりやすくない、人々に読まれていなかったと推測する。統一された秦文字がどんな書体であったかは明言されていないが、李斯が『蒼頡篇』を作り著した。但し文章の内容を作ったのであって、書家としてではないであろう。抄録や臨書ならば、元内容と全文一致することはないと考える。つまり、古代書法には、「絶対的な標準」ということはない。

秦簡文字の一部分は小篆であると考えられる。一般人も学者たちもきつとそう考えているだろう。そのため、論文ではずっと「篆」を中心として、それぞれのテーマを設け、第二、三、四、五章の各章を構成し、問題を解決してきた。

「篆」への認識は、多くの人は『説文解字』から来ていると考えるであろう。注意すべきなのは、篆書体と隸書体の違いは、「形状（構成）」と「筆法」に基づくということである。勿論両方の資

料を全部揃えなければ、客観的な、正確な判断を下すことができない。

実のところ、我々の「篆」への理解の殆どは宋、明、清代の学者たちの論点から来ていた。従って、それらの学者の篆書体への認識の実態を立証するため、『説文解字』の各版本を分析した。考察した結果、「小徐本」或は「宋本」の『説文解字』では、同一文字が同じ形状で正確であったものを、清代学者の『説文解字』では形状を誤ったことを指摘した。(第二章第三節を参照)

これは何を意味するのか。清代学者は本当の篆書体とは何かを理解していなかったのである。なぜならば、彼らは秦簡文字を見ていないからである。研究資料の不足によって制限されていたのである。

第一章「序論」では、本論文の研究目的・内容・方法、それに関する文献・研究、材質・性状による古代文字の分類方法について記述した。

第二章『説文解字』篆書体の考察」では、許慎から整えられた「小篆」と実際の「篆」とに差があるかを分析するため、十種の『説文解字』版本の部首を考察して分類し、四種類版本の『説文解字』間の前・中・後の字形の違いを比較した。

『説文』五四〇部首全てを逐語的に考察して分類したことは、情報化社会の中にある斯界にとって、必須の研究方法であろう。

その結果、「小篆」の正確な形状は64%であることが判明した。そして、その中の一部の字形には「規整化」の現象がることを指摘した。同じ版本に三つの前・中・後の形状があることから、厳密さを欠くか、或いは三つの形状が同じであると推定した。十種の『説文解字』版本の字形がそれぞれ異なるのは、それぞれの版本の編集著者が形状を変形したためであり、既に許慎の「小篆」の形状構成に 대응することができないことを意味していることを論じた。

第三章「東周時代の秦文字」では、時代の順序に従って春秋か

ら戦国後期までの既知の秦代文字の字形を分析した。それらの分析した字例は、絶対に「隸書」とは言えないことを論じた。

戦国中期の『商鞅三器 (B. C346～343)』の二つ『商鞅方升』を秦簡文字と対照すると、形状が近似すると認められる。「積」字のみ多少違いがあるが、早期から後期までの字形の変遷の違いを見ることができるとも考えられる。

商鞅量 (B. C344) の中で始皇詔の銘文 (B. C221) もあり、両方の字形も極めて似ている。その間百二十余年の時間差があり、戦国から継承してきた秦文字がほとんどそのままの状態であったと認められる。秦代に文字統一を経過したにもかかわらず、この二つの銘文の篆書には差異が認められない。字形のみならず、刻法や線状にいたるまで、極めて似ている。したがって文字統一の実相も理解できる。戦国中期の『封宗邑瓦書 (B. C334)』は秦代の役人から式典のために直接刻まれたもので、まるで現在の土地証明書のように、当時の篆書の代表として絶対に問題はないものであ

る。よって、『説文』、秦簡の形状が篆書体と一致するかどうかを比較して検証する基準となる。考察した結果、その殆どがは一致したことを論じた。

戦国中期の『青川木牘 (B. C309)』は素材が異なるためか、「隸書(或いは古隸)」と呼ばれる。その時代は「虎符」や統一秦の金文(権量銘)より早い。さらに、『青川木牘』から『張家山漢簡 (B. C186)』(法律の内容も同様)までの形状と比較しても、大きい違いはない。文字統一前後の、その間に文字統一による字様の変化が全く認められない。一部の文字の形状は既に「隸化」され、一部はまだ変化中であり、一部は甲骨文からも変わっていない。このように形状を明確に区別できない以上、「篆」と呼んでも「隸」と呼んでも良いことになる。

第四章「秦文字の篆書体考察」では、論争の最も少ない「秦篆」を代表する「秦刻石」を考察の対象として『説文』部首、秦簡、商周文字の形状と比較し分析した。ただし、「秦刻石」のうち

「会稽」と「瑯邪台」は、秦人が実際に制作したのではなく、後世翻刻の疑惑があるため除外した。

戦国時代の秦簡に「隸書」のような感じがするのは、非常に自然なことである。篆書から隸書への進化は母子関係のようであり、更に隸書の風貌が見える唐代の一部の楷書は親族関係のようで、見た目が似ているのは当たり前のことである。従って、引き続き『蒼頡篇』を比較の対象とし、時代的な基準性を持つ教科書とする「識字書」を分析した。これは秦漢篆隸の変遷過程を考察するための非常に重要な研究方法であると考えられるからである。また論文で引用される秦簡『睡虎地秦簡・為吏之道』も使用した。この千語以上ある簡牘は秦人の教科書として当時かなりの影響力があったからである。

考察の結果、『蒼頡篇』の字例の一つ「獲」は戦国後期の篆形が残っていること、隸化現象が明らかにあること、人・齒・言などの部首は「規整化」の現象があること、例えば、「齒」形の隸化は

戦国後期から見えることなどを詳述した。

『蒼頡篇』では、「糸」部の字形から「規整化」が見える。『説文解字』を編著する場合、親字の形状（の書き方）を一つだ選び、更に部首に含まれる字を統一した。しかし、周知のように、一つの文字には一つ以上の書き方がある。それは最も早い金文に見える普遍現象である。

第五章「秦漢文字の変遷考察」では、文字変化の原因とその基礎について考察した。「墨跡文字」と「非墨跡文字」の違いを強調するため、秦漢「墨跡文字」の数が商周金文や刻石よりはるかに多いことを様々なデータで証明した。換言すれば、秦漢簡の重要性を数量と実用性で証明したことになる。

例えば、「歩」、「徙」の字を、特に「筆順」による形状変化の詳しい分析を行った。「筆順」は「墨跡文字」にしか発生しない独特な変化の原因であり、青銅器や石刻のような「非墨跡文字」には発生しないからである。

第五章は、第二、三、四章で言及した様々な議論及び研究結果を字例を論証した総説にあたる。春秋から戦国までの様々な篆書と秦簡を対比した結果、秦簡文字が「篆書（小篆）」である正確性を確認した。従って、篆書の代表の一つとして、「秦簡」には問題はないはずである。即ち、「篆」と「隸」は秦簡と漢簡の文字継承関係にあると言える。

最後に楷書の「白」字の形状を考察し、隸定された色々な「白」部首の字例を発見した。秦簡では、「白」以外に「自」、「日」、
「目」の形状があつた。また、これらの字例を通じて『説文解字』の「偕」字などの形状の誤りも検出した。

研究の最終目的は、「秦漢簡牘文字の字形変遷の原因を整理すること」と、「字形の篆から隸への変化に関する様々な既定を再検証すること」である。書道の分野では、『説文解字』の小篆に対する認識は一般的に清人の学説を主としている。

『説文解字』の版本の比較考察を通じて、秦漢文字の変化と原

因を膨大な字例を用いて解析し、色々な秦篆の字形と比較考察した結果、『説文解字』に「規整化」の現象があつたことを検証した。この結果は斯界に一石を投じることができたと考える。

文字の変遷は緩慢かつ漸進的であるという法則に従うと、二つのも文字を比較して、その形状の差異が大きい場合、次のような事が考えられる。一、年代の差が大きく、二百年以上も離れている。二、文字の材質が異なる。

例えば「墨跡文字」と「非墨跡文字」の差異。連続する秦漢時期の簡牘の字形変遷の考察によつて、一つは、該当の文字は後漢の許慎が見た時にはどのような姿をしていたのか、もう一つは、我々が今日見ている版本はどうかを理解する事が出来る。

文字を書く人的要因を除き、文字の改変には政治権力の介入がある可能性もあるが、この要因は本研究の範囲外である。

幾千年の文字には既に変遷した結果が出ている。その原因は、古人が意図せず書いた字跡が、長い時間の中で伝承されていく内に改変されたと考えることができる。

書は、文字を書く事が「本質」であり、特に「即時の書写」¹¹⁶は瞬時に文字を書くことであるが、変遷とは「直接」的な関係はない。

所謂「字形の変遷過程」とは、文字を故意に改変したわけではなく、「即時に文字を書いた」状況下で、長い時間をかけて積み重なり形成された字形の改変過程である。ある字形は数百年、更には千年の時間をかけて形状が変化する。従って、詳細な字例考察によってその差異を分別する事ができる。

文字を書く人は、その場では、往々にしてどの様な改変が有ったのかに気づく事はない。文字を書く際に、ある文字の一画目の「筆順」が異なる時、字形の改変をも

たらす事になる。仮に誰かが故意に改変する、もしくは書写者の熟練度と習慣によって差異が生まれたとしても、決して文字改変の主要な要素ではない。

考察の結果、「墨跡文字（簡牘）」には三つの特徴があることを明らかにした。

1. 文字の「変遷と伝承」の特性を備えていること。
2. 当時の字形とその形状を表していること。
3. 広範囲に普及し、次第に認められ、自然に発生した字形であること。

第二節 研究の学術的な価値

本研究の中心課題は、『説文解字』と「秦簡文字」に対する全面的な考察であり、精緻な「字例」比較研究である。網羅的に数多く作成した一文字ごとの「字形対照表」に基づく考証である。商周、春秋戦国から秦漢までの各種の字形の変遷過程が、「字形対照

表」あげた「字例」によって概観できる。

本論文では、古代文字の字形（形状）解析と筆順分析とが相互に補完しあうことを実証した。ひいては古文字学と書道学の双方の発展に役立つことと思われる。このことが、本研究の最も重要な学術的意義である。

人文科学の学問領域では、メガデータを用いる研究は今のところまだ多くはない。したがって本研究は、古代文字のメガデータを可視化した先駆的研究成果となっている。その意味においての学術的意義もあろう。

本論文には、誤解や誤記も多々あると思われる。御批正を得て再考し、さらに精進する所存である。

附録 『引得市』の紹介と研究への活用

本稿は、二〇一八年三月九日、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターで開催された『東洋学へのコンピュータ利用第29回研究セミナー』での研究発表原稿をもとに改稿したものである（『同論文集』二七七〜二八九頁所収）。

- 一 はじめに
- 二 「引得市」の発展
- 三 「古文字欠字データベース」
- 四 『引得市』基本的な操作
- 五 おわりに

一 はじめに

稿者は学部生時代、様々な資料を調査して、二〇〇一年、『篆刻

芸術デジタル化教育応用研究』という論文を書き、台湾国家科学委員会より、大学や専門学校の在籍生を対象とする研究賞を受賞しました。これが研究のきっかけとなり、二〇〇四年、中華發展基金管理委員会の研究生として、印学に関する考察を行なうために中国を訪問しました。二〇〇五年、台湾芸術大学造形芸術研究所を修了。二〇〇八年、大東文化大学院文学研究科書道学専攻博士課程後期課程に進学。

「引得市」||インデックスは、「索引」の事である。「引得市」は、稿者が開発した古文字に関する総合的なデータベースです。現在の「引得市」は、さまざまな古文字研究書の索引を一括して検索することができるウェブデータベースです。「引得市」は、英語の index を漢語で言う「引得」から来たもので、「索引」と同じ意味です。二〇一二年七月より公開を開始しました。

当初、このような索引の統合検索システムを制作する計画を持っていたわけではありません。そのきっかけは台湾国立故宮博物

院の五二一種の「百家姓」の字形変遷を作成することでした。この仕事を三ヶ月で仕上げるのは、ほとんど不可能に近かったです。

これは、「百家姓」に出てくる漢字について、甲骨文字、金文、戦国文字、秦漢文字などの字形を並べて、字形の変遷を示すという企画でした。

私の立場から言うと、この仕事を三ヶ月で完成させるというのには無理があり、非常に困りました。しかし、やりがいのある仕事だと考えました。

「百家姓」の字形変遷のデータを作るため、甲骨文字、金文、そしてさまざまな戦国文字などの研究書から、目的の文字が記載されている頁を迅速に探し出す必要が出てきました。このためのデータベースとして「引得市」が始まったのです。苦勞の甲斐があつて、やっとデータベースで文献が探せるようになりました。

二〇一三年末から、引得市は「小學堂」¹¹⁷と交流しました。交流には、さまざまな次元のものがあつて、現在も続いています。た

とえば、技術情報、資料、文献索引の交換に至るまで活発に行っています。

二 「引得市」の発展

当初は「百家姓」の字形変遷に必要な十二種類の研究書の索引からはじめましたが、現在の『引得市』の中では、三百五十三種の文献索引があり、一人の力では到底すべての索引の作成は出来そうにもありませんが、暇さえあればいつも文献索引を作成しています。「無心挿柳柳成蔭」、無心になって柳を植えれば柳は茂って蔭を作ってくれる、という中国の諺がありますから。

文字学の研究において、多くの資料を参照します。それらの索引作成が課題となります。私以外にも、索引のデータ作成を手伝ってくれるボランティアの方が居ます。

また、「引得市」とは独立に作られているデータベースでも、その成果がリユース可能なライセンスで公開されているものについ

でも組み込んでいます。たとえば諸橋『大漢和辭典』のデータは川幡さんのデータを使いました。

最初に説明したように、データベースの内容は文献の索引をもとにして作られました。データベースを構築することにより、研究を進める上で、文献を調べる手間と時間が大幅に省けると考え、稿者は「引得市」データベースを作成したわけです。

三 「古文字欠字データベース」

「索引」は学術書などの書籍や雑誌・新聞などの記事、統計、コンピュータのデータにおいて、特定の項目を素早く参照できるように、「見出し語」を特定の配列に並べ、その所在をまとめたものです。普段使わない、コンピュータ上で容易に入力できない文字はどうしたらよいでしょうか。

「引得市」では、古文字研究に際してコンピュータ上で容易に使うことができない文字の索引として「古文字欠字データベース

ス」¹¹⁸を提供しています。

「古文字欠字データベース」というのは、青銅器・竹簡・璽の、古文字やその異体字などに関する研究書の索引に見える楷書字形のデータベースで、現時点では、一萬六千九百三十字が収録されています。欠字の図像は古文字欠字データベースのサイトで無償配布しています。自由にかつ簡便に閲覧・印刷でき、加工や二次配布もできるライセンスです。

ユニコード(Unicode)にあっても、日常的に使わない漢字は、コンピュータ上で表示するフォントが無く、キャラクターコード(character code)はあっても実際には使えない状況が頻繁にあります。このフォントの不足の問題を解決するものとして、GlyphWikiプロジェクトの成果である「花園フォント(花園明朝)」という自由かつ無償の大規模漢字フォントがあります。

Unicodeの漢字は常に増加しており、最新では九万字近い漢字を収録しています。それでは、Unicode漢字が増え、花園明朝がそれ

を catch up すればこの問題が自然に解決するのでしょうか。

Unicode 10.0 で CJK F が追加されました。稿者が古文字欠字データベースにある漢字を CJK F と比較したところ、CJK F に含まれていたものは一千七百字であり、大半はまだ残っていました。したがって、Unicode 漢字が増えればこの問題が自然に解決するとは考えにくいのが現状です。

『引得市』では、花園フォントに収録されていないような欠字についても GlyphWiki 上でグリフデータを作成して、『引得市』上で表示できるようにしています。なぜ GlyphWiki で作るのかといえば、画像ではなくフォントにしたいという意図があります。

たとえば、台湾の教育部の異体字字典は欠字をすべて画像で提供しています。これは一回だけ画像を引用するような状況ではよいのですが、後から検索しようとするとかなり難いことがあります。ちなみに、GlyphWiki 上で作れば、もし将来同じ形をした文字が Unicode に採録された場合、おそらく私が作ったグリフデータ

は再利用されて花園フォントに組み込まれるであろうことがあります。同じ文字を他人が作らなくてもよいだろうということです。

また、欠字をフォントで提供することによって、ウェブサイトを提供する際に、同時接続数を低減する効果なども期待できます。事前にフォントをダウンロードすることで負荷を減らすというよいなことも、画像のままではできません。

GlyphWiki とは別の、『引得市』特有のデータとしては「構字式」があります。これは欠字を構成する部品を並べて、場合によっては括弧で囲んでグループ化したものです。

「構字式」によって欠字を部品から探すことができます。同じような技術としては、ODP や、IDS などがありますが、私以外のボランティアなども考えたときには、それらで使われている特殊な記号の入力に困難があり、そういう特殊な記号を用いない表記が必要だと考えました。ただし曖昧な検索などを考えた時の syntax については検討中です。

次は、『引得市』で提供する索引情報から、どのように実際の研究書を表示するかについて説明します。

四 『引得市』の基本的な操作

『引得市』は様々な文献の索引を統合していますが、その文献そのものを配布することはできません。そこで、文献のスキャンデータはユーザ自身が用意し、『引得市』はそれに対するアクセスを提供するという仕組みをとっています。

『引得市』の検索結果は Web browser に示されますが、そこからユーザの PC に保存されている PDF にアクセスするために、GoPage というソフトウェアを利用します。

『引得市』の「Gopage」という internet のデータと、ユーザの PC にある local な PDF の間を繋ぐ橋のようなものです。『引得市』と文献索引ファイル両方に、連絡を密に取り合って、一つの目的のためにという事です。二〇一七年六月、稿者の友人が王富

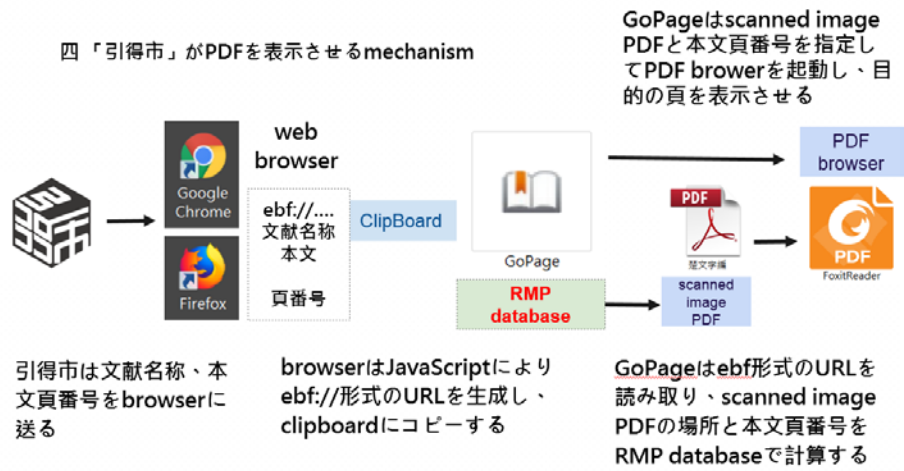
国に制作し、ブログで発表しました。 119

GoPage をインストールしていなければ、『引得市』user には唯ページ番号が示されるだけです。GoPage がインストールされている場合には、クリックすると JavaScript によって clipboard 経由で reference とページの情報が GoPage に渡されます。

ユーザの皆さんが各自で研究書の scan data を作ると、その location が user ごとに違ったり、また front page を scan するかどうかなど、さまざまな違いがあります。これを解消するための data として RMP というファイルを作成します。

これは、PDF の中で本文の page がどこから始まるかの offset number、local PC の中で scanned image PDF がどこに置かれているか、の情報だけを書いた簡単なものです。

PDF file が配置される pathname の前に、「+43@」という情報があります。



から開始する場合、 $1 + 43 = 44$ と計算するoffset numberです。また、RMP fileのfilenameは、『引得市』における文献名称と一致している必要があります。

I 使用の準備

- ①ユーザーのcomputerにGoPageをインストールしておく。
- ②ユーザーのcomputerに、『引得市』が索引を提供する文献のpdfを置く。

- ③『引得市』が指定する文献名称でのRMPデータを作成し、ユーザーが持っているpdfのoffset numberを設定する。

II 実際の検索

- ①検索語を入力し、検索buttonにより検索。
- ②検索結果一覧が表示されるので、閲覧したい文献索引のページ番号をクリックする。
- ③GoPageにより準備されているpdfの当該pageが表示される。

五 おわりに

データベースがすべての研究を行うものではないが、研究の中で本の検索に費やされる大量の時間を削減できるのです。それによつて研究者は検索結果の資料を見ることにより注意を払うことができるのです。

数年来、稿者が最も重視してきたのは、データベースを活用することです。とくに研究経験が豊富な研究者にとつて、データベースを活用することで、これまでのやり方ではかなりの時間と精神的労力を要した研究を、より効率的にすることができないのではないかと考えます。皆様のご協力なくしては、現在の多数のインデックス、『引得市』は完成できなかったでしょう。データベースはいかなる場合にも正確かつ迅速な更新が期待できます。

參考文獻

- 安徽省文物工作隊·阜陽地區博物館·阜陽縣文化局『阜陽雙古堆
前漢汝陽侯墓發掘簡報』《文物》十二—三十一頁、一九七
八年第八期)
- 白川靜『說文新義·卷十五』(五典書院、一九九三年)
- 白川靜『字統』(平凡社、一九九九年)
- 長沙市文物考古研究所·清華大學出土文獻研究與保護中心·中国
文化遺產研究院·湖南大學嶽麓書院『長沙五一廣場後漢簡
牘選釋』(中西書局、二〇一五年)
- 長沙市文物考古研究所·清華大學出土文獻研究與保護中心·中国
文化遺產研究院·湖南大學嶽麓書院『長沙五一廣場後漢簡
牘(貳)』(中西書局、二〇一八年)
- 長沙市文物考古研究所·清華大學出土文獻研究與保護中心·中国
文化遺產研究院·湖南大學嶽麓書院『長沙五一廣場後漢簡
牘(壹)』(中西書局、二〇一八年)
- 陳光田『戰國璽印分域研究』(岳麓書社、二〇〇九年)
- 陳夢家『中国文字學』(中華書局、二〇〇六年)
- 陳松長『馬王堆簡帛文字編』(文物出版社、二〇〇一年)
- 陳昭容『秦系文字研究—從漢字史的角度考察』(中央研究院歷史語
言研究所、二〇〇三年)
- 池田知久『池田知久簡帛研究論集』(中華書局、二〇〇六年)
- 赤井清美『中国書道史』(東京堂、一九七九年)
- 初師賓『簡牘學百年的思考—代序』《中国簡牘集成》標注本第一
冊、圖版選卷上、二〇〇一年)
- 春名好重『書道基本用語詞典』(中教出版株式会社、一九九三年)
- 崔詠雪『中国家具史—坐具篇』(明文書局、一九九四年)
- 大庭脩、徐世虹譯『木簡在世界各国的使用與中国木簡向紙的變化』
《出土文獻研究》一九九八年第四輯)
- 大庭脩『漢簡の基礎的研究』(思文閣、一九九九年)
- 大野裕司『戰國秦漢出土術数文献の基礎的研究』(北海道大学出版

會、二〇一四年)

單曉偉『秦文字字形表』(上海古籍出版社、二〇一七年)

董蓮池『說文解字考正』(作家出版社、二〇〇四年)

董蓮池『新金文編』(作家出版社、二〇一一年)

杜忠誥『說文篆文訛形釋例』(文史哲出版社、二〇〇二年)

富谷至『漢簡語彙考証』(岩波書店、二〇一五年)

富谷至『文書行政の漢帝国』(名古屋大學出版會、二〇一〇年)

富谷 至『木簡・竹簡の語る中国古代書記の文化史』(岩波書店、

二〇〇三年)

宮本徹・大西克也『アジアと漢字文化』(放送大學教育振興會、二

〇〇九年)

顧野王『宋本玉篇』(中國書店、一九八三年)

郭沫若『古代文字之辯證的發展』(『考古』一九七二年三期)

海萌輝『小篆不是漢字形體演變過程中的一個環節』(『鄭州大學學

報』(哲學社會科學版)六〇—六五頁、一九八八年第三期)

漢語大詞典編輯委員會『漢語大詞典』第四卷(漢語大詞典出版社、

一九八九年)

何琳儀『戰國古文字典』(中華書局、一九九八年)

何琳儀『戰國文字通論訂補』(江蘇教育出版社、二〇〇三年)

何雙全『中國簡牘綜述』、『中國簡牘集成』(標注本)第一冊、圖

版選卷上、二〇〇一年)

何學森『書法學概要』(華夏出版社、二〇〇四年)

河北省文物管理委員會·北京歷史博物館『望都漢墓壁畫』、中國

古典藝術出版社、一九五五年)

賀曉朦『嶽麓書院藏秦簡』(貳)文字編』(湖南大學碩士論文、二

〇一三年)

橫田恭三『中國古代簡牘のすべて』(二玄社、二〇一二年)

洪燕梅『說文』未收錄之秦文字研究以『睡虎地秦簡』為例』(文

津出版社、二〇〇六年)

胡平生·韓自強『蒼頡篇』的初步研究』(『文物』三十四—四十頁、

一九八三年第二期)

胡文彥·于淑岩『中国家具文化』(河北美術出版社、二〇〇二年)

湖北省歷史博物館『書寫歷史—戰國秦漢簡牘』(文物出版社、二〇〇七年)

〇七年)

湖南省博物館『湖南省博物館』(文物出版社、一九八三年)

湖南省博物館『湖南省文物圖錄』(湖南人民出版社、一九六四年)

湖南省文物考古研究所·湘西土家族苗族自治州文物處·龍山縣文物管理所『湖南龍山里耶戰國—秦代古城一號井發掘簡報』

『文物』二〇〇三年第一期)

許慎『說文解字』(中華書局、一九六三年)

華東師範大學中国文字研究與應用中心(『中国文字研究』第三輯、

廣西教育出版社、二〇〇二年)

黃德寬『古漢字發展論』(中華書局、二〇一四年)

黃德寬『古文字譜系疏證』(商務印書館、二〇〇七年)

黃德寬『古文字學』(上海古籍出版社、二〇一五年)

黃文傑『秦至漢初簡帛文字研究』(商務印書館、二〇〇八年)

季旭昇『說文新證』(藝文印書館、二〇一四年)

江村治樹『春秋戰國秦漢時代出土文字資料の研究』(汲古書院、二〇〇〇年)

〇〇〇年)

江學旺『西周文字字形表』(上海古籍出版社、二〇一七年)

姜玉梅『秦簡文字形體研究』(南昌大學碩士論文、二〇〇八年)

李均明、劉軍『簡牘文書學』(廣西教育出版社、一九九九年)

李均明『古代簡牘』(文物出版社、二〇〇三年)

李均明『簡牘法制論稿』(廣西師範大學出版社、二〇一一年)

李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』(文物出版社、二〇〇九年)

李零『簡帛古書與學術源流』(生活·讀書·新知·三聯書店、二〇〇四年)

〇四年)

李守奎『楚文字編』(華東師範大學出版社、二〇〇三年)

李守奎·曲冰·孫偉龍『上海博物館藏戰國楚竹書(一一五)文字

編』(作家出版社、二〇〇七年)

李松儒『戰國簡帛字跡研究』（吉林大學博士論文，二〇一二年）

李學勤『古文字學初階』（中華書局，一九八五年）

李學勤『簡帛佚籍與學術史』（江西教育出版社，二〇〇一年）

李學勤『談「張掖都尉榮信」』（《文物》一九七八年第一期，四十二—四十三頁）

連蔚勤『秦漢篆文形體比較研究』（私立東吳大學中國文學系博士論文，二〇一〇年）

連雲港市博物館·東海縣博物館·中國社會科學院簡帛研究中心·

中國文物研究所編『尹灣漢墓簡牘』（中華書局，一九九七年）

梁啓超『中國歷史研究法』（上海古籍出版社，一九九八年）

林師進忠、行政院國科會專題研究計畫成果報告『新出土商周秦漢

墨跡文字的篆隸筆法研究』（計畫編號：

NSC89-2411-H-144-004 執行期間：二〇〇〇年八月一日から

二〇〇一年七月三一日）

林師進忠『曾侯乙墓出土文字的書法研究—附論小篆的真實形相』

（『出土文物與書法學術研討會論文集』，一九九八年，參一

—五十八）

林師進忠『楚系簡帛墨跡文字的書法探析』（『海峽兩岸楚文化學術

研討會論文集』，國立歷史博物館，一二五—一六五頁，二〇〇二年）

林師進忠『傳李斯刻石文字非秦篆書法實相—戰國秦漢篆隸書法演變的考察—』（『藝術學』研究年報第四期，藝術家出版社，

七—八十八頁，一九九〇年）

林師進忠『古代文字書法製作背景的綜合研究例』（『一九九三年書

法論文選集肆』，中國書法教育學會，惠風堂，肆—五十一、一九九三年）

林師進忠『漢簡識字書在文字與書法史上的重要意義—秦簡文字為

秦篆說』（『第三屆金石書畫學術研討會論文集』，國立高雄師

範大學，一—四十三頁，一九九七年）

林師進忠『巧涉丹青古字藝』（『一九九五藝術與生活研討會論文集』，

- 東方工商專美術工藝科、一—二十一頁、一九九五年)
- 林師進忠『青川木牘的秦篆形體析論』(『藝術學報』、国立台灣藝術大學、一九九七年、第六十一期、十七—三十九頁)
- 林素清『春秋戰國美術字體研究』(『歷史語言研究所集刊』第六十本第一分、中央研究院歷史語言研究所、二十九—七十五頁、一九九〇年)
- 林素清『戰國文字研究』(国立臺灣大學中文研究所博士論文、一九八四年)
- 林義光『文源』(中西書局、二〇一二年)
- 林澐『古文字研究簡論』(吉林大學出版社、一九八六年)
- 劉信芳『楚簡帛通假彙釋』(高等教育出版社、二〇一一年)
- 劉又辛·方有国『漢字發展史綱要』(中国大百科全書出版社、二〇〇年)
- 劉釗『古文字構形學(修訂本)』(福建人民出版社、二〇一一年)
- 呂靜·鄭卉『一九〇〇年以前中国境内簡帛出土之考察—以傳世文獻收集整理為中心』(『中国出土資料研究』第13號、中国出土資料學會、六十二—八十二頁、二〇〇九年)
- 崎川隆『甲骨文字の筆跡学的分析—甲骨文字における「書体」分類の意義と方法をめぐって—』(『國際書学研究』2009)書学書道史学会編、萱原書房、二六七—二六八頁、二〇〇九年)
- 啓功『古代字體論稿』(文物出版社、一九六四年)
- 錢存訓『書於竹帛—中国古代的文字記錄』(上海書店出版社、二〇〇四年)
- 邱振中『筆法與章法』(上海書畫出版社、二〇〇三年)
- 裘錫圭『秦漢時代的字體』(『中国書法全集』、秦漢編·秦漢刻石卷一、榮寶齋出版社、三十四—五十頁、一九九三年)
- 裘錫圭『裘錫圭學術文集、第三卷、金文及其他古文字卷』(復旦大學出版社、二〇一二年)
- 裘錫圭『文字學概要(修訂本)』(商務印書館、二〇一三年)
- 裘錫圭『文字學概要』(商務印書館、一九八八年)

- 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、一
二七一―一七一頁、一九三五年）
- 容媛・胡海帆『秦漢石刻題跋輯錄』（上海古籍出版社、二〇〇九年）
- 沙孟海『沙孟海論書叢稿』（上海書畫出版社、一九八七年）
- 山元宜宏『篆書の「篆」についての一考察』（『漢字文化研究年報』、
第一輯、京都大学 21世紀 COE プログラム東アジア世界の人
文情報学研究教育拠点、二〇〇六年）
- 杉村邦彦『書學叢考』（研文出版、二〇〇九年）
- 石塚晴通『漢字字體史研究』（勉誠出版株式会社、二〇一二年）
- 書論編輯室『書論』第二十五号「特集・秦の刻石」（書論研究会、
一九八九年）
- 書学書道史学会（『国際書學研究』、二〇〇〇年）
- 孫慰祖・徐谷富編『秦漢金文彙編』（上海書店出版社、一九九七年）
- 太田辰夫著、蔣紹愚、徐昌華譯『中国語歴史文法』（北京大學出版
社、二〇〇三年）
- 湯淺邦弘『竹簡学—中国古代思想の探究—』（大阪大学出版会、二
〇一四年）
- 唐蘭『中国文字學』（上海古籍出版社、二〇〇五年）
- 陶明君『中国書論詞典』（湖南美術出版社、二〇〇一年）
- 藤田勝久『中国古代国家を社会システム—長江流域出土資料の
研究—』（汲古書院、二〇〇九年）
- 王寧『漢字構形學講座』（三民書局、二〇一三年）
- 王蘊智・吳玉培主編（『許慎文化研究（二）——第二屆許慎文化国
際研討會論文集』、中国社會科學出版社、二〇一五年）
- 王蘊智『甲骨文可釋字形總表（上下冊）』（河南美術出版社、二〇
一七年）
- 王壯為『篆書舉要—東周的墨蹟』（『暢流』半月刊三十九卷期十、
一九六九年）
- 文物局古文獻研究室・阜陽地區博物館・阜陽漢簡整理組『阜陽漢
簡『蒼頡篇』簡介』（『文物』二十四—三十四頁、一九八三

年第二期)

文物局古文獻研究室·阜陽地區博物館·阜陽漢簡整理組『阜陽漢

簡簡介』(『文物』二十一—二十三頁、一九八三年第二期)

吳福助『秦始皇刻石考』(文史哲出版社、一九九四年)

吳国昇『春秋文字字形表』(上海古籍出版社、二〇一七年)

吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』第一卷(上海古籍出版社、

二〇一二年)

蕭毅『楚簡文字研究』(武漢大學出版社、二〇一〇年)

徐中舒『秦漢魏晉篆隸字形表』(四川辭書出版社、一九八五年)

葉程義『漢魏石刻文學考釋』(新文豐出版公司、一九九七年)

永井敏男『書道用語事典』(同朋舍、一九八四年)

魚住和晃『筆跡鑑定ハンドブック』(三省堂、二〇〇七年)

臧克和『漢魏六朝隋唐五代字形表』(南方日報出版社、二〇一一年)

張顯成『簡帛文獻學通論』(中華書局、二〇〇四年)

張秀民『張秀民印刷史論文集』(印刷工業出版社、一九八八年)

張永明『秦篆書刻石四種解析字帖』(新時代出版社、一九九七年)

趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』(天津古籍出版社、一九九二年)

趙平安『說文』小篆研究』(廣西教育出版社、一九九九年)

趙平安『隸變研究』(河北大學出版社、二〇〇九年)

鄭日昌『筆跡心理學』(遼海出版社、二〇〇〇年)

中村未來『戦国秦漢簡牘の思想史的研究』(大阪大學出版會、二〇

一五年)

拙稿『『引得市』的介紹與研究應用』(『第二十屆中區文字學學術研

討會論文集』、台中教育大學語文教育學系、二〇一八年)

拙稿『『引得市』的介紹與研究應用』(『東洋學へのコンピュータ利

用第29回研究セミナー』、京都大學人文科學研究所附屬東

アジア人文情報學研究センター、二〇一八年、二七七一—

八九頁)

拙稿『東周戈劍兵器銘文造形研究』(『藝術論文集刊』第三期、国

立臺灣藝術大學出版編輯委員會、二五—四十七頁、二〇

○四年)

拙稿『秦漢墨跡文字の演進考察―以「步」、「徙」等字為例』(『藝

術研究學報』第九卷第一期、十五―三十八頁、国立臺灣南大

學藝術研究學報編審委員、二〇一六年)

拙稿『秦漢墨跡文字演變的考察研究』(『書畫藝術學刊』第十二期、

二〇五―二七八頁、国立臺灣藝術大學書畫藝術學系、二〇
一二年)

拙稿『文献的索引數位化製作與應用研究―以「引得市」為例』(『書

畫藝術學刊』第十三期、一八五―二二二頁、国立臺灣藝術

大學書畫藝術學系、二〇一二年)

拙稿『以墨跡文字為主的古文字演進研究方式』(『中国美術研究』

第十八輯、八三―九〇頁、東南大學出版社、二〇一六年)

拙稿『印外求印―近現代篆刻創作發展考察研究』(国立臺灣藝術大

學碩士論文、二〇〇五年)

拙稿『印学研究のためのデータベースの構築とその応用方法』(『書

道学論集』、六〇―六八頁、平成二十三年三月三十一日発行)

注記

1 引得市資料分類總覽

(<http://www.mebag.com/index/reference.asp>) INDEX 引得

市資料來源一覽表

(<https://ebag2007.blogspot.tw/2018/03/index.html>)

2 李均明『簡牘法制論稿』（廣西師範大學出版社、二〇一一年）一頁。

3 何雙全『中國簡牘綜述』、『中國簡牘集成』（「標注本」第一冊、圖版選卷上、二〇〇一年）出版說明十三～三十八頁。

4 何琳儀『戰國文字通論訂補』（江蘇教育出版社、二〇〇三年）一頁。

5 李學勤『古文字學初階』（中華書局、一九八五年）八十六頁。

6 何氏は次のように述べている「銅璽、銀璽と玉璽は仮に書の物質材料に従うと金属器と石器に分類され

るが、器物用途に従うと璽印文字に分類することし
かできない。周知のように璽印の材料は金属器（銅
璽、銀璽）が多くを占める他に、石器（石璽、玉璽、
琉璃璽）、骨器（骨璽）、土器（封泥）、木器（木烙
印）等である。陶範を作る際に焼いてできた文字は
璽印文字に属するのか、或いは陶器文字に属するの
か、そこは本来は区分すべきではない。よって、上
述した伝統的な分類はこれまで全て相対的である。」

何琳儀『戰國文字通論訂補』（江蘇教育出版社、二〇〇三年）二十五～二十六頁参照。

7 李零『簡帛古書與學術源流』（生活・讀書・新知、三聯書店、二〇〇四年）五十四～六三頁。

8 李學勤『談「張掖都尉槩信」』（『文物』一九七八年第一期、四十二～四十三頁）四十三頁。

9 陳昭容『秦系文字研究——從漢字史的角度考察』（中央研究院歷史語言研究所、二〇〇三年）一二六頁。

10 林素清『春秋戰國美術字體研究』（『歷史語言研究所

集刊』第六十一本第一分、中央研究院歷史語言研究所、二十九〜七十五頁、一九九〇年）二十九頁。

¹₁ 郭沫若『古代文字之辯證的發展』（『考古』一九七二年三期）七頁。

¹₂ 「墨跡文字」番号を「甲」とし、文末には皆「甲類文字」と記す。「鳥蟲文字」番号は「乙1」とし文末に皆「乙1類文字」と記す。「鑿刻画文字」番号は「乙2-1」とし、文末は皆「乙2-1類文字」と記す。「非鑿刻画文字」番号は「乙2-2」とし、文末には皆「乙2-2類文字」と記す。

¹₃ 魚住和晃『筆跡鑑定ハンドブック』（三省堂、二〇〇七年）一〇頁。

¹₄ 陳夢家『中國文字學』（中華書局、二〇〇六年）二二二〜二二三頁。

¹₅ 唐蘭『中國文字學』（上海古籍出版社、二〇〇五年）九十三頁。

¹₆ 林素清『春秋戰國美術字體研究』（『歷史語言研究所集刊』第六十一本第一分、中央研究院歷史語言研究所、二十九〜七十五頁、一九九〇年）

¹₇ 陳夢家『中國文字學』（中華書局、二〇〇六年）二二三頁。

¹₈ 「反饋」は『漢語大辭典』によると「現代科學技術の基本概念の一つである。無線通信の技術工事、生物研究、社会と技術の發生などの領域に於いて發生する自動調節現象の重要な原理である。反饋は（フィードバック）とはコントロールされる過程が機構をコントロールする時の反作用で、その反作用はこのシステムの實際の過程または結果に影響を与える。反饋（フィードバック）を通すことで概念は各種複雑なシステムの機能と動態メカニズムを深く理解でき、更に一歩進んだ異なる物質運動の形式間の関連性を明らかにする事ができる。

¹₉ データベース「キーワード」の定める標準の詳細は「字表「キーワード」説明」を参照。

²₀ 「*」は万能文字を為す。どんな文字でも代わりとし

て使うことができる。万能文字を活用すれば更にスムーズにデータベースを使用することができる。データベースの朝代の代号のナンと略称についての詳細は、文の後の図表を参照。

²₁ 『青川木牘』 數位摹本、詳細は筆者ブログ「研究生」
『青川木牘』 數位摹本與實務製作』一文を参照、サイト：
https://ebag2007.blogspot.com/2019/04/blog-post_5.html。

二〇一一年九月二十日。

²₂ 白川靜『説文新義・卷十五』（五典書院、一九九三年）四四頁。

²₃ 白川靜『説文新義・卷十五』（五典書院、一九九三年）四五頁。

²₄ 「説文五四〇部首考察データベース」URL

http://www.mebag.com/index/shuowen_bushou_zhengwu/11st.asp

²₅ 林素清『春秋戦国美術字體研究』（『歴史語言研究所集刊』第六十一本第一分、中央研究院歴史語言研究所、二一九一七十七

五頁、一九九〇年）二九頁

²₆ 一六八、一四〇頁、〔元〕楊鉤『增廣鐘鼎篆韻』七卷、『續修四庫全書』〇二三七、經部、小學類。

²₇ 王輝、王偉『秦出土文獻編年訂補』（三秦出版社、二〇一四年）一頁。

²₈ 陳昭容『秦文字研究』（中央研究院歴史語言研究所、二〇〇三年）七頁。

²₉ 王輝、王偉『秦出土文獻編年訂補』（三秦出版社、二〇一四年）四頁。

³₀ 第二章参照、王輝、程學華『秦文字集證』（藝文印書館、一九九年）

³₁ 郭子直『戦国秦封宗邑瓦書銘文新釋』（『古文字研究』第一四輯、中華書局、一七七〜一九六頁、一九八六年六月）。

³₂ 李學勤『李學勤學術文化隨筆』（中國青年出版社、三三三〜三四五頁、一九九一年一月）

³₃ 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、

一二七～一七一頁、一九三五年）一二六頁。

³₄ 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、

一二七～一七一頁、一九三五年）一五〇頁。

³₅ 成田年樹『秦代の文字資料——刻石を中心として——』（『書論』

第二十五号「特集・秦の刻石」、書論研究会、一九八九年、

一一四～一二二頁）一一四頁。

³₆ 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、

一二七～一七一頁、一九三五年）一五三頁。

³₇ 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、

一二七～一七一頁、一九三五年）一五七頁。

³₈ 成田年樹『秦代の文字資料——刻石を中心として——』（『書論』

第二十五号「特集・秦の刻石」、書論研究会、一九八九年、

一一四～一二二頁）一一六頁。

³₉ 容庚『秦始皇刻石攷』（『燕京學報』第十七期、哈佛燕京學社、

一二七～一七一頁、一九三五年）一六〇頁。

⁴₀ 吳福助『秦始皇刻石考』（文史哲出版社、一九九四年）五八頁。

⁴₁ 富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史』（岩波

書店、二〇〇三年）一一一頁。

⁴₂ 稻葉一郎『秦始皇の巡狩と刻石』（『書論』第二十五号「特集

・秦の刻石」、書論研究会、一九八九年、七三～一〇〇頁）

八五頁。

⁴₃ 張永明『秦篆書刻石四種解析字帖』（新時代出版社、一九九七

年）一三二頁。

⁴₄ 『説文解字』五四〇部首各版本篆形比較。URL

http://www.mebag.com/index/shuiwen_540/List.asp

⁴₅ 劉釗・葉玉英『林義光及其『文源』（『文源』中西書局、二〇

一二年、導論一～十二頁）一頁。

⁴₆ 裘錫圭『裘錫圭學術文集、第三卷、金文及其他古文字卷』（復

旦大學出版社、二〇一二年）四七三頁に参照。

⁴₇ 季旭昇『説文新證』（藝文印書館、二〇一四年）一七六頁。

⁴₈ 杜忠誥『説文篆文訛形釋例』（文史哲出版社、二〇〇二年）三

三〇頁に見る。

⁴₉ 詔權は『004 廿六年詔權』『005 廿六年詔權』『006 廿六年詔

權』『007 廿六年詔權』『008 廿六年詔權』『009 廿六年詔

小権』、『010 廿六年詔小権』、『011 廿六年詔八斤権』、『012

廿六年詔八斤権』、『013 廿六年詔十六斤権』、『014 廿六年詔

十六斤権』、『019 兩詔大権』、『020 兩詔権』十三種がある。

⁵⁰ 拙文『印学研究のためのデータベースの構築とその応用方法』

〔書道学論集〕、六〇〜六八頁、平成二十三年三月三十一日発行）六二頁。

⁵¹ 『甲骨文字詁林補編』八八七、六〇九頁参照後、考証解釈の成果。

⁵² 季旭昇『説文新證』（藝文印書館、二〇一四年）三五七頁。

⁵³ 『説性亭銘』北宋淳化二年（九九二）十月二十日刻。石は山東

陽穀に在る。拓本連額通高さ二二七cm、幅六七cm。申革撰并篆書。

⁵⁴ 『秦漢石刻題跋輯録』一五四九頁参照。

⁵⁵ 趙平安『説文』小篆研究』（廣西教育出版社、一九九九年）一八九頁。

⁵⁶ この印について呉振武の釈に「專（傳）之璽、陳光田『戦国璽印分域研究』一四六頁、また「簿室」の解釈があり、この

璽は楚国の國家簿籍を管理する機構で用いられた璽と考えている。

⁵⁷ 季旭昇『説文新證』（藝文印書館、二〇一四年）二二六頁。

⁵⁸ 石刻に関連するデータを下に列挙する。『司馬顯姿墓誌』北魏

正光二年（五二二）二月二十二日葬。河南洛陽出土。『元徽墓誌』北魏太昌元年（五三二）十一月十九日葬。河南洛陽

出土。『孔子廟堂碑』唐武德九年（六二六）十二月二十九日刻。原石已毀。武后重刻本亦毀。此拓為宋王彥超重刻本。『道

因法師碑』唐龍朔三年（六六三）十月十日刻。碑在陝西西安、陝西博物館藏。『泉男生墓誌』唐調露元年（六七九）十

二月二十六葬。民國十一年十一月河南洛陽出土、舊藏河南圖書館。

⁵⁹ 季旭昇『説文新證』（藝文印書館、二〇一四年）三二〇頁。

⁶⁰ 季旭昇『説文新證』（藝文印書館、二〇一四年）三二九頁。

⁶¹ 拙文『引得市』的介紹與研究應用』（第二十屆中區文字學學術研討會論文集）台中教育大學語文教育學系、二〇一八年）

九七頁。

⁶₂ 二〇一九年五月頃、『長沙五一廣場後漢簡牘(壹)』について、

筆者は全面的な訳文デジタル化をした。

<http://www.mebag.com/index/wuyiguangchang/list.asp>

⁶₃ 啓功『古代字體論稿』(文物出版社、一九六四年)四二頁。

⁶₄ 赤井清美『中国書道史』(東京堂、一九七九年)序二四頁。

⁶₅ 啓功『古代字體論稿』(文物出版社、一九六四年)一九頁。

⁶₆ 横田恭三『中国古代簡牘のすべて』(二玄社、二〇一二年)八頁。

⁶₇ 杉村邦彦『書學叢考』(研文出版、二〇〇九年)十頁。

⁶₈ 林澧『古文字研究簡論』(吉林大學出版社、一九八六年)一六五〜一六六頁。

⁶₉ 各篇内容の詳細は、筆者のブログに見る、URL

<https://ebag2007.blogspot.com/>

⁷₀ 林師進忠『漢簡識字書在文字與書法史上的重要意義

—秦簡文字為秦篆說』(『第三屆金石書畫學術研討會

論文集』、國立高雄師範大學、一一四十三頁、一九九

七年)。五頁に参照。

⁷₁ 白川靜『説文新義 卷十五』(五典書院、一九九三年)六一頁。

⁷₂ 関連する文字資料から見ると、籀文は秦国が全中国

を統一する前夜に用いられた文字ではなく、小篆は

春秋戦国時代の秦国文字から次第に変化してきて

成立した文字であり、直接籀文を「省改する」こと

によって、成立したのではなく、『説文解字』叙の

記述は妥当ではない。裘錫圭『文字學概要』(商務

印書館、一九八八年)八十二頁。

⁷₃ 関連する文字資料から見ると、籀文は秦国が全中国

を統一する前夜に用いられた文字ではなく、小篆は

春秋戦国時代の秦国文字から次第に変化してきて

成立した文字であり、直接籀文を「省改する」こと

によって、成立したのではなく、『説文解字』叙の

記述は妥当ではない。裘錫圭『文字學概要』(商務

印書館、一九八八年)八十二頁。

⁷₄ 郭沫若『古代文字之辯證的發展』(『考古』二—十三頁、

一九七二年三期) 十頁。

⁷₅ 裘錫圭『文字學概要』(商務印書館、一九八八年) 七十二頁。

⁷₆

里耶戰国——秦代古城」⁷₆で出土した簡牘は秦時代の
県の一級政府の書類で、内容は政令や、各級政府間
の往来公文書、司法文書、吏員簿、物資(財産没収
を含む)、登記、転運、里程書などを含む。考古の
発掘から、その他の資料の時代と特徴、及び簡文中
の紀年を総合すると、紀年は二十五年から三十七年
と二世元年、二年である。よって、この簡牘は当時、
秦王政(始皇)及び二世の時の遺物である。湖南省文
物考古研究所・湘西土家族苗族自治州文物處・龍山
縣文物管理所『湖南龍山里耶戰国——秦代古城一號井
發掘簡報』(『文物』二〇〇三年第一期)。三十四頁
参照。

⁷₇ 連蔚勤『秦漢篆文形體比較研究』(私立東吳大學中國

文學系博士論文、二〇一〇年) 三頁。

⁷₈ 連蔚勤『秦漢篆文形體比較研究』(私立東吳大學中國

文學系博士論文、二〇一〇年) 二三七頁。

⁷₉

李均明『古代簡牘』(文物出版社、二〇〇三年) 一四
四—一四五頁。

⁸₀

文物局古文獻研究室・阜陽地區博物館・阜陽漢簡整
理組『阜陽漢簡簡介』(『文物』二十一—二十三頁、
一九八三年第二期) 二十一頁を参照。「阜陽漢簡」
ほかについては以下を参照。安徽省文物工作隊・阜
陽地區博物館・阜陽縣文化局『阜陽雙古堆前漢汝陽
侯墓發掘簡報』(『文物』十二—三十一頁、一九七八
年第八期)、文物局古文獻研究室・阜陽地區博物館
・阜陽漢簡整理組『阜陽漢簡『蒼頡篇』簡介』(『文
物』二十四—三十四頁、一九八三年第二期) 胡平生
・韓自強『『蒼頡篇』的初步研究』(『文物』三十四

—四十頁、一九八三年第二期)

^{8 1} 李學勤『古文字學初階』(中華書局、一九八五年)五十八頁。

^{8 2} 李學勤序。陳松長『馬王堆簡帛文字編』(文物出版社、二〇〇一年)三頁。

^{8 3} 簡牘の簡稱以下、「放志簡」は「天水放馬灘秦簡」志怪故事』、「睡日乙簡」は「睡虎地秦簡」日書』乙種、「睡日甲簡」は「睡虎地秦簡」日書』甲種、「放日甲簡」は「天水放馬灘秦簡」日書』甲種、「睡封簡」は「睡虎地秦簡」封診式』、「睡為簡」は「睡虎地秦簡」為吏之道』、「青牘」は「青川木牘」、「岳簡」は「岳麓書院藏秦簡」、「關簡」は「關沮周家臺秦簡」、「里簡」は「里耶秦簡」、「龍簡」は「雲夢龍崗秦簡」、「龍牘」は「雲夢龍崗木牘」、「睡律簡」は「睡虎地秦簡」秦律十八種』、「睡答簡」は「睡虎地秦簡」法律答問』。

^{8 4} 林師進忠『古代文字書法製作背景的綜合研究例』(『一

九九三年書法論文選集肆』、中國書法教育學會、惠風堂、肆一—五十一、一九九三年)肆二十一—二十一頁を参照。

^{8 5} 林師進忠『漢簡識字書在文字與書法史上的重要意義——秦簡文字為秦篆說』(『第三屆金石書畫學術研討會論文集』、國立高雄師範大學、一—四十三頁、一九九七年)。二—十三頁を参照。

^{8 6} 林師進忠『楚系簡帛墨跡文字的書法探析』(『海峽兩岸楚文化學術研討會論文集』、國立歷史博物館、一二五—一六五頁、二〇〇二年)一四九頁。

^{8 7} 錢存訓『書於竹帛——中國古代的文字記錄』(上海書店出版社、二〇〇四年)八五—八六頁。

^{8 8} 拙文『印外求印——近現代篆刻創作發展考察研究』(國立臺灣藝術大學碩士論文、二〇〇五年)一六〇頁。
^{8 9} 林師進忠、行政院國科會專題研究計畫成果報告『新出土商周秦漢墨跡文字的篆隸筆法研究』(計畫編號

・NSC 89-2411-H-144-004 執行期間：二〇〇〇年

八月一日から二〇〇一年七月三十一日）七頁。

⁹⁰ 吳鎮烽『商周青銅器銘文暨圖像集成』第一卷（上海古籍出版社、二〇一二年）總目錄一〜三頁。

⁹¹ 孫慰祖、徐谷富編『秦漢金文匯編』（上海書店出版社、一九九七年）檢字表三六六〜三七四頁。

⁹² 葉程義『漢魏石刻文學考釋』（新文豐出版公司、一九九七年）目錄一〜六頁。

⁹³ 張顯成『簡帛文獻學通論』（中華書局、二〇〇四年）二二六頁。

⁹⁴ 李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』（文物出版社、二〇〇九年）八頁。

⁹⁵ 初師賓『簡牘學百年的思考 - 代序』（『中國簡牘集成』標注本第一冊、圖版選卷上、二〇〇一年）出版説明第六頁。

⁹⁶ 李松儒『戦国簡帛字跡研究』（吉林大學博士論文、二〇

〇一二年）四九頁。

⁹⁷ 李松儒『戦国簡帛字跡研究』五〇頁。

⁹⁸ 拙文『秦漢墨跡文字演變的考察研究』（『書畫藝術學刊』二〇一二年第十二期）二五一頁を参照。

⁹⁹ 李均明、劉軍『簡牘文書學』（廣西教育出版社、一九九九年）一六五頁。

¹⁰⁰ 何琳儀『戦国文字通論訂補』（江蘇教育出版社、二〇〇三年）一頁。

¹⁰¹ 裘錫圭『文字學概要』（商務印書館、一九八八年）六十六頁。

¹⁰² 張守節、唐の人。官は諸王侍讀率府長史。其の學、地理に長ず。著に『史記正義』がある。

¹⁰³ 簡牘尺寸索引（YM62D2 木牘出土時長寬厚各為 23.7、0.3、脱水後各為 22.2、5.9、0.15 公分。）、連雲港市博物館・東海縣博物館・中國社會科學院簡帛研究中心・中國文物研究所編『尹灣漢墓簡牘』（中華書局、一九九七年）一七四頁。

104 董蓮池『新金文編』は『徙簋』の「徙」字を「步」に改め解

釈している。『新金文編』(上中下)、作家出版社、二〇一一年)一五一頁に見る。

105

『後漢・楊著碑』は河南陝州に在ったがすでに消失し、原石拓は伝わっていない、後人によって翻刻されている。また「幹」の字形は明らかに誤字である。南北朝時期以前はおそらく「幹」の形で書かれていたはずである。「年」字の「𠂔」の形状体の出現は早すぎる。『北齊・張景林造像』の「年」字の「𠂔」の形状の出現も早すぎる、「步」は「止+少」形(三例)を為している。「山+少」(步)ではなく、道理に合わない。唐『麻姑仙壇記』の原石は江西南城に在ったがすでに消失している、唐時期の字例ではない可能性があり、字形は信用することができない。

106

賀曉朦『嶽麓書院藏秦簡』(貳)文字編(湖南大學碩士論文、二〇一三年)五三一―六二頁。

107

鄭日昌『筆跡心理學』(遼海出版社、二〇〇〇年)一三二頁。

108

鄭日昌『筆跡心理學』(遼海出版社、二〇〇〇年)、一三三頁。

109

季旭昇『說文新證』(藝文印書館、二〇一四年)一二六頁。

110

季旭昇『說文新證』(藝文印書館、二〇一四年)四四八頁。

111

劉信芳『楚簡帛通假彙釋』(高等教育出版社、二〇一一年)四二九頁に見える。

112

「就」字の「京」形が「日」から「口」形になるのは、唐代碑刻に初めてその字例を見る。そして戦国晚期『睡虎地秦簡』の字例の原本は右側の「犬」或いは「寸」形で、後漢の『西狹頌』は明らかに「尢」の形である。

113

此の碑は『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』第五冊一五六頁に収録されている、しかし文中に記録される天干地支と年月日は一致しないと明記されている。

114

趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』(天津古籍出版社、一九九二年)六一頁。

115

李家浩『說文』篆文有漢代小學家篡改和虛造的字形』(『許慎文化研究』(二)——第二屆許慎文化國際研討會論文集』、中國社會科學出版社、二〇一五年、四九八―五一頁)四九八

〓四九九頁。

¹¹⁶ 筆者の言う「即時の書寫」の定義は文字を書く際にその字体の熟練度に従い遅速の差が出るかもしれないが、文字を書く際は、何にも考えず、ただ単純に文字を書いて完成させるという過程に過ぎない。

¹¹⁷ 「小學堂」は台灣大學中國文學系・中央研究院歷史語言研究所・資訊科學研究所・數位文化中心が共同で開発した、漢字の形音義に関する総合的なデータベースである。URL <http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/>

¹¹⁸ 「古文字欠字データベース」URL <http://www.mebag.com/index/quezi/list.asp>

¹¹⁹ 王富國のブログ「漢字使用環境的建置(四)——開卷篇」URL

<http://fgwang.blogspot.com/2018/12/blog-post.html>